

最近の火山活動に関する報告

雌阿寒岳の火山活動解説資料（令和8年5月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

3月16日以降、噴火は観測されていません。

ポンマチネシリ火口付近では、5月中旬に火山性地震が一時的に増加し、2025年9月中旬を上回る回数の多い状態となりました。2025年9月から観測されていた同火口方向上がりの傾斜変動は、5月9日頃から緩やかな火口方向下がりになっています。ただし、依然として浅部は膨張した状態と考えられ、96-1火口の噴煙活動も引き続き活発な状態です。

火山活動の活発な状態が続いており、ポンマチネシリ火口から約500mの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

ポンマチネシリ火口から約500mの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和7年9月15日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2：火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1、図2-①、図3～6、図8-①②⑤、図9-①③、図11-①～⑥）

3月16日以降、噴火は観測されていません。

ポンマチネシリ96-1火口では、2025年9月12日以降、噴煙の多い状態が続いており、今期間は火口縁上400m以下で経過しました。

その他の各火口の噴気の高さ（いずれも火口縁上の高さ）は、赤沼火口では100m以下、北西斜面06噴気孔列では100m未満、中マチネシリ火口では200m以下で経過し、噴気活動は低調な状態です。

11日に国土交通省北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、2025年9月の噴火後に実施した観測（2025年9月16日）と同様に96-1火口の噴煙の温度が高い状態であることを確認しました。また、同火口の噴煙活動は引き続き活発な状況でした。その他の火口の噴気活動や地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

・ポンマチネシリ96-1火口周辺の全磁力の状況（図9-②④）

全磁力連続観測では、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙が増加した2025年9月12日以降、96-1火口付近の地下の熱活動の高まりを示唆する全磁力値の減少がみられ、その後も緩やかな減少傾向が続いていました。4月下旬から減少傾向に鈍化がみられ、5月は概ね停滞して推移しました。

4月下旬以降、熱活動の高まる傾向が鈍化していると考えられます。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び機動的な調査観測・解析グループのデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図10mメッシュ（火山標高）』、『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年6月分）は令和8年7月8日に発表する予定です。

・地震及び微動の発生状況（図2-④⑤、図7、図8-④⑦、図11-⑦⑧）

ポンマチネシリ火口付近の火山性地震は、2025年9月中旬に増加して以降は次第に減少し、2月中旬以降は概ね少ない状態で経過していましたが、10日頃から次第に増加し、2025年9月中旬を上回る多い状態となりました。14日以降は次第に減少して概ね少ない状態となっています。

火山性微動は観測されませんでした。

震源はポンマチネシリ火口付近の深さ0 km付近のほか、中マチネシリ火口付近の深さ1 km付近に分布しました。

・地殻変動の状況（図2-③⑥、図8-③⑥⑧、図10、図12）

ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2観測点では、2025年9月12日以降、火口方向が上がる傾向の緩やかな変動が継続しましたが、9日頃から緩やかな火口方向下がりへ転じています。ただし、同火口付近の浅部は依然として膨張した状態と考えられます。

GNSS連続観測では、主に東側山麓の観測点で2025年8月末頃から山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長傾向が認められています。

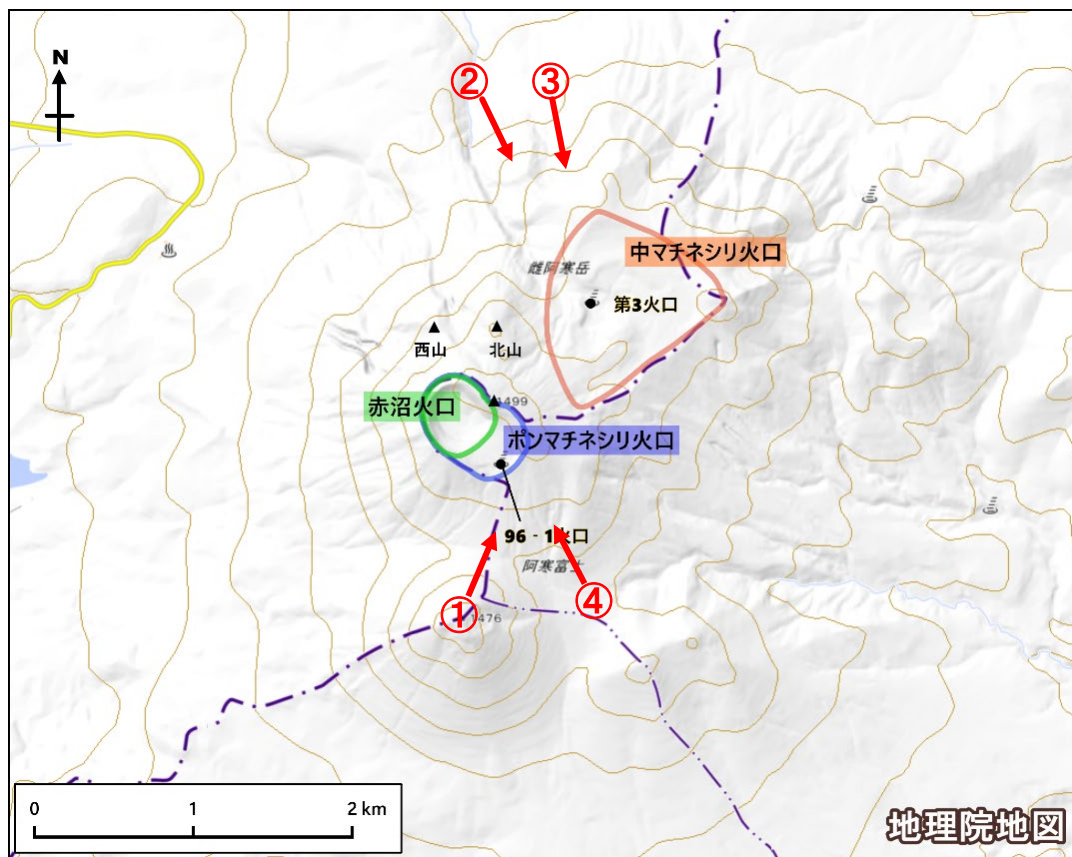


図1 雌阿寒岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）と火口周辺図

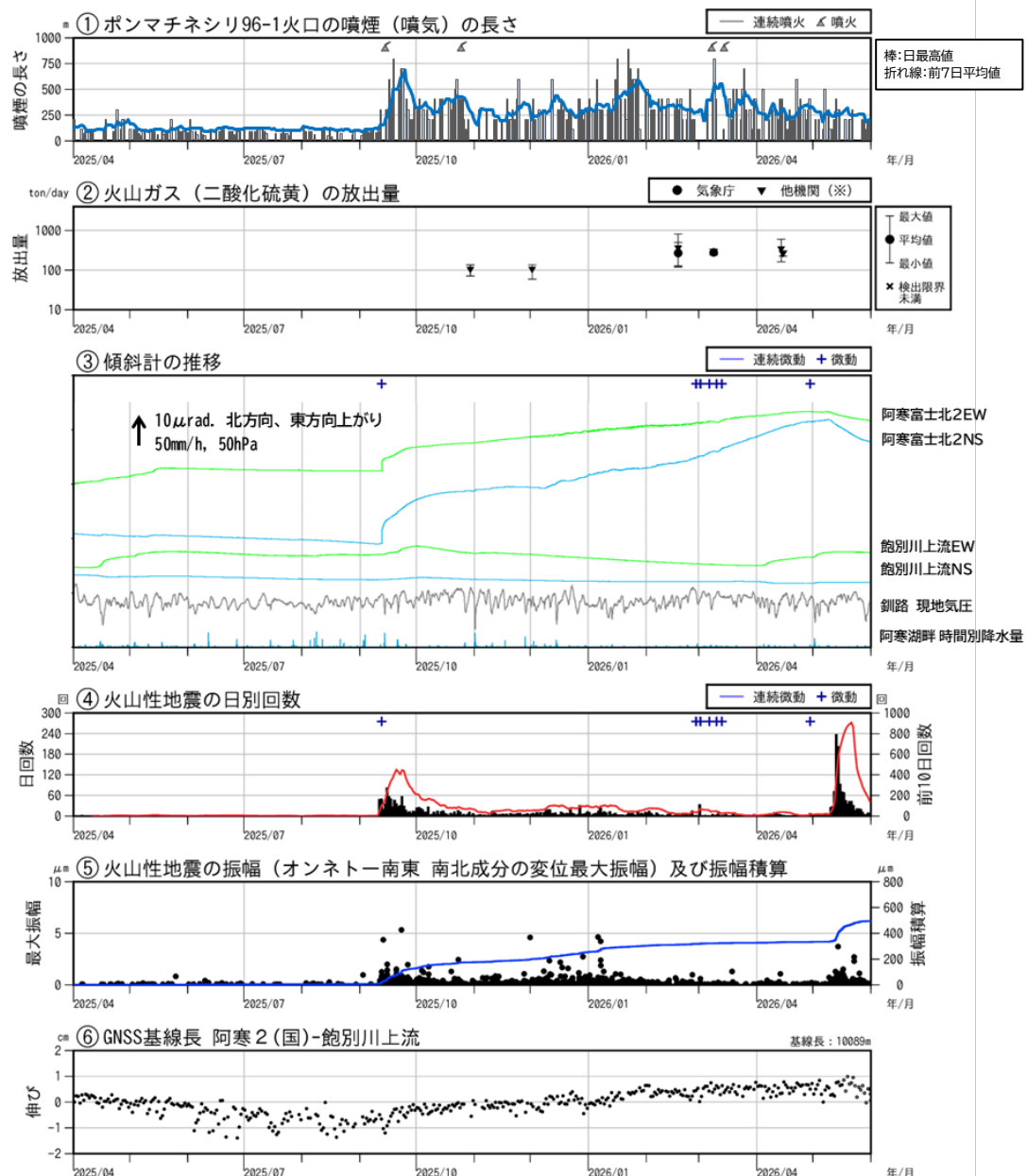


図2 雌阿寒岳 短期の火山活動経過図（2025年4月～2026年5月）

- ・①の噴気の長さについては図9の説明図を参照ください。
- ・②他機関（※）は北海道大学及び機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・防災科学技術研究所）の観測を示します。
- ・③の傾斜計データは降水や気圧変動の影響と考えられる変動が含まれています。
- ・2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・期間内に発生した火山性地震はポンマチネシリ火口付近の浅部で発生したものが多数を占めています（図7参照）。
- ・グラフ⑥は、GNSS連続観測の基線図（図12）基線⑨に対応しています。
- ・3月16日以降、噴火は観測されていません。
- ・2025年9月12日の火山性微動に伴い阿寒富士北2観測点でポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が観測され、以降、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙活動は活発です。10月頃以降も火口方向上がりの傾斜変動が続きましたが、5月9日頃から火口方向下がりの変動に転じています。
- ・火山性地震は、2025年9月中旬に増加して以降次第に減少し、2月中旬以降は概ね少ない状態で経過していましたが、5月中旬に2025年9月中旬を上回る増加が認められました。14日以降は次第に減少し、概ね少ない状態となっています。
- ・東側山麓の観測点によるGNSS基線では、2025年8月末以降、伸長傾向が認められています。

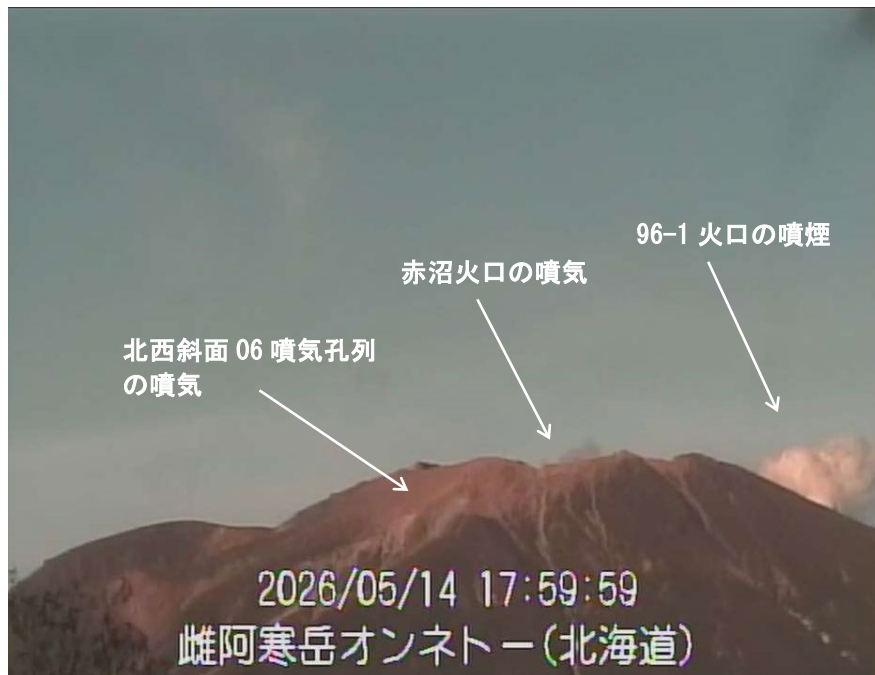


図3 雌阿寒岳 各火口、噴気孔の噴気（噴煙）の状況

かみてしべつ

上：上徹別監視カメラによる（雌阿寒岳の南東側から）

下：オンネトー展望台（道）監視カメラによる（雌阿寒岳の西側から）

- ・ 96-1火口の噴煙は、2025年9月12日以降増加し、その後も活発な状態が続いています。



図4 雌阿寒岳 ポンマチネシリ 96-1 火口周辺の状況

南側上空（図1の①）から撮影

- ・ ポンマチネシリ 96-1 火口では、引き続き活発な噴煙活動が認められました。

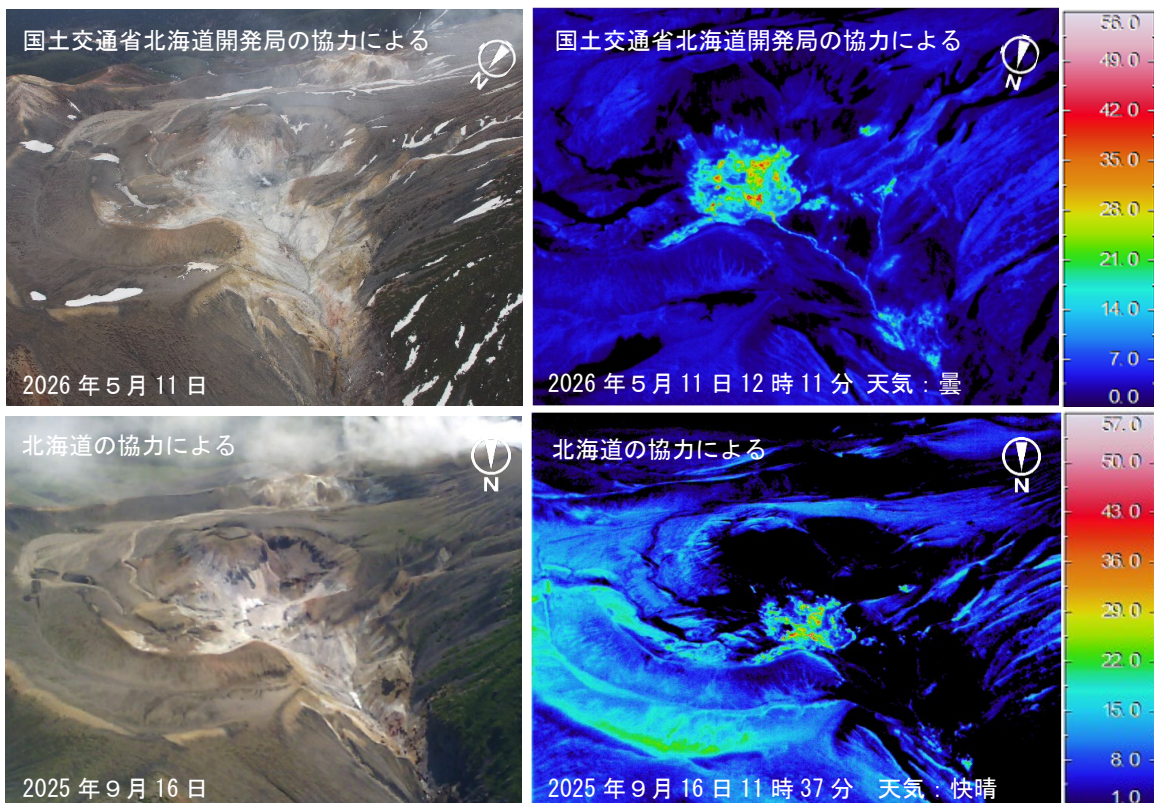


図5 雌阿寒岳 中マチネシリ火口の地表面温度分布

上図：北西側（図1の②）から撮影 下図：北側（図1の③）から撮影

- ・ 火口内及びその周辺に熱活動の活発化を示すような特段の変化は認められませんでした。

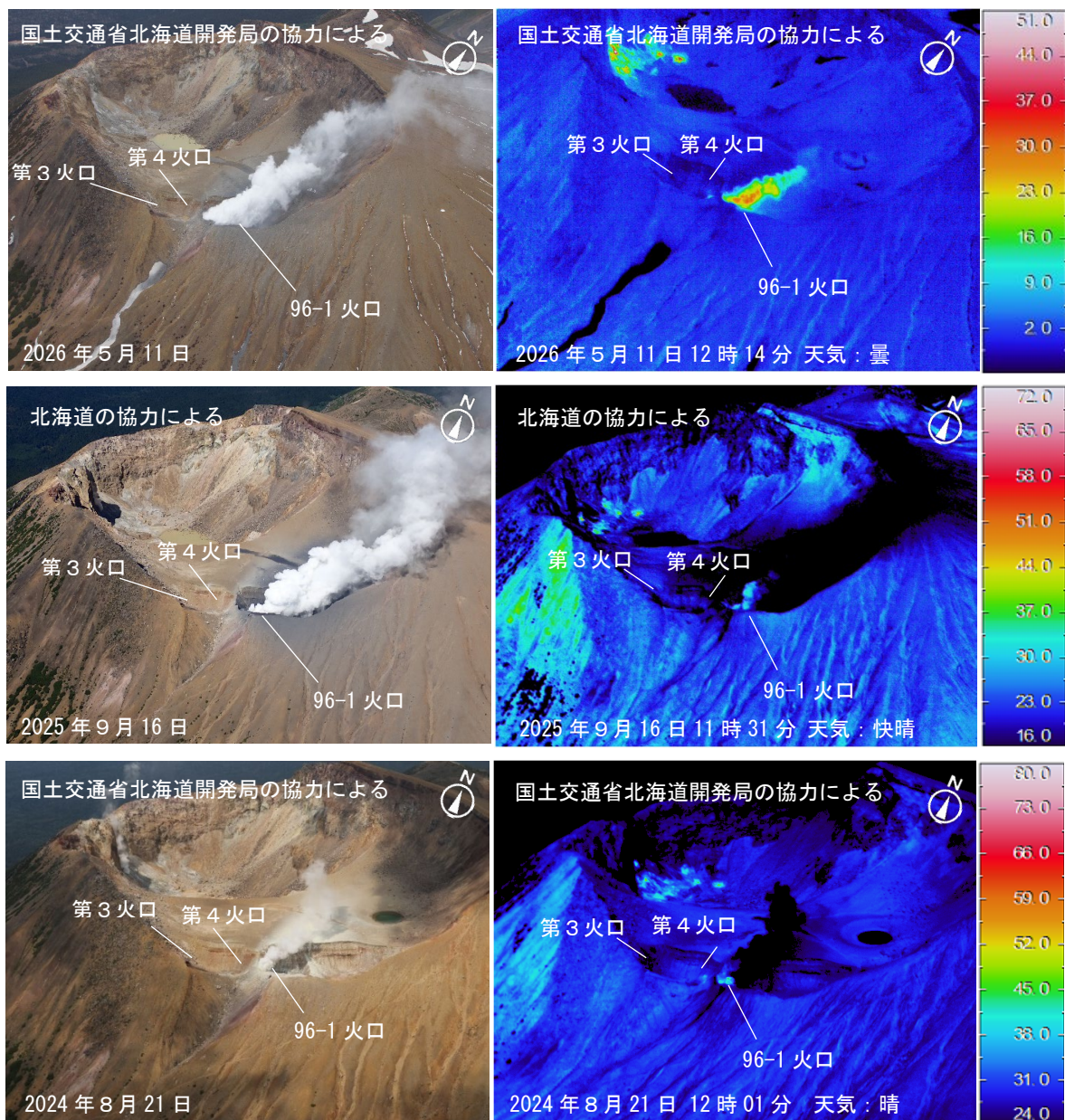


図6 雌阿寒岳 赤外熱映像装置によるポンマチネシリ 96-1、第3、第4火口の地表面温度分布
南東側上空（図1の④）から撮影

- ・ 前回の観測（2025年9月16日）と同様にポンマチネシリ 96-1火口の噴煙の温度が高い状態であることを確認しました。
- ・ ポンマチネシリ第4火口内では、引き続きわずかな地熱域が認められました。

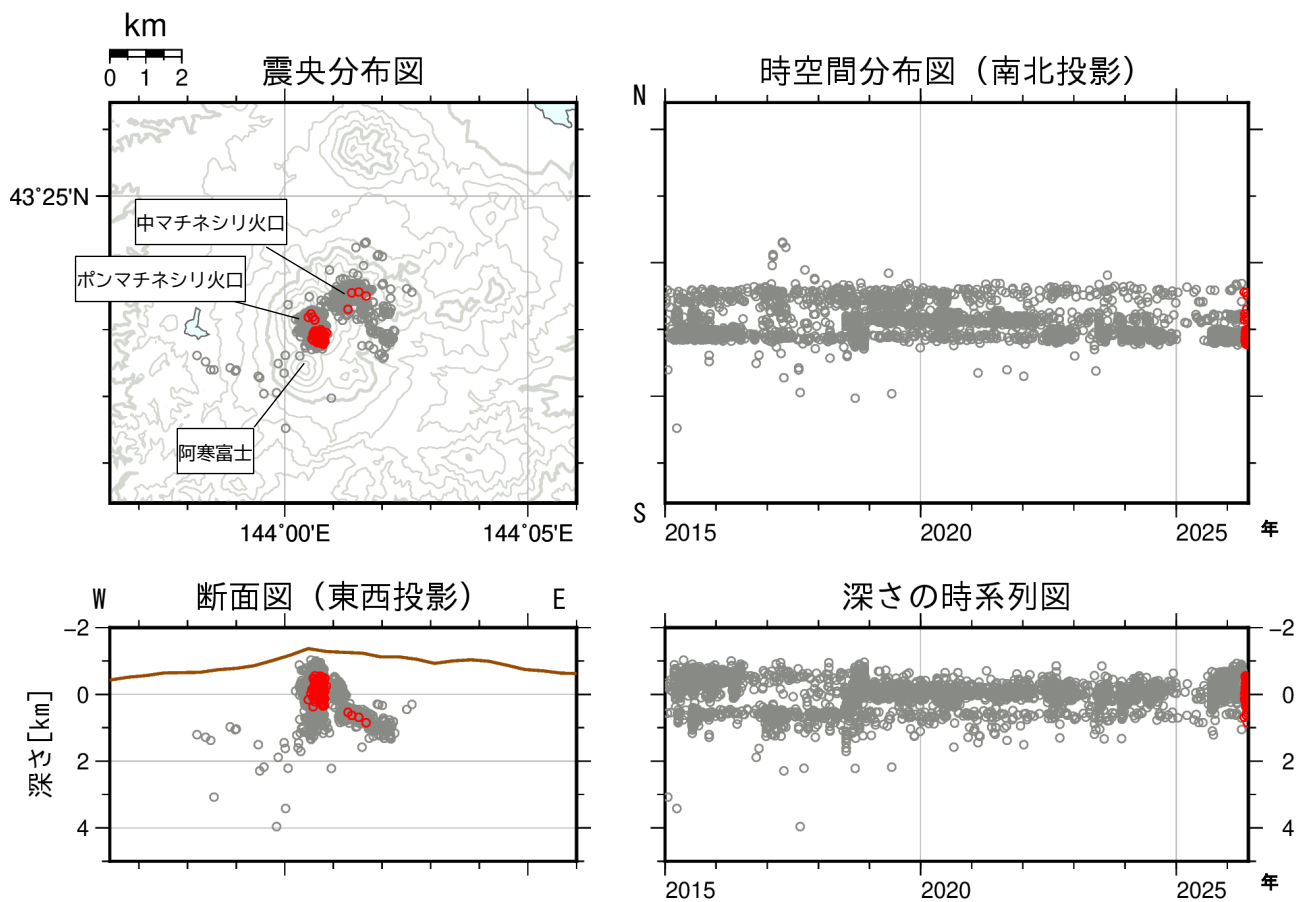


図7 雌阿寒岳 火山性地震の震源分布（2015年1月～2026年5月）

○：2015年1月～2026年4月の震源 ○：2026年5月の震源

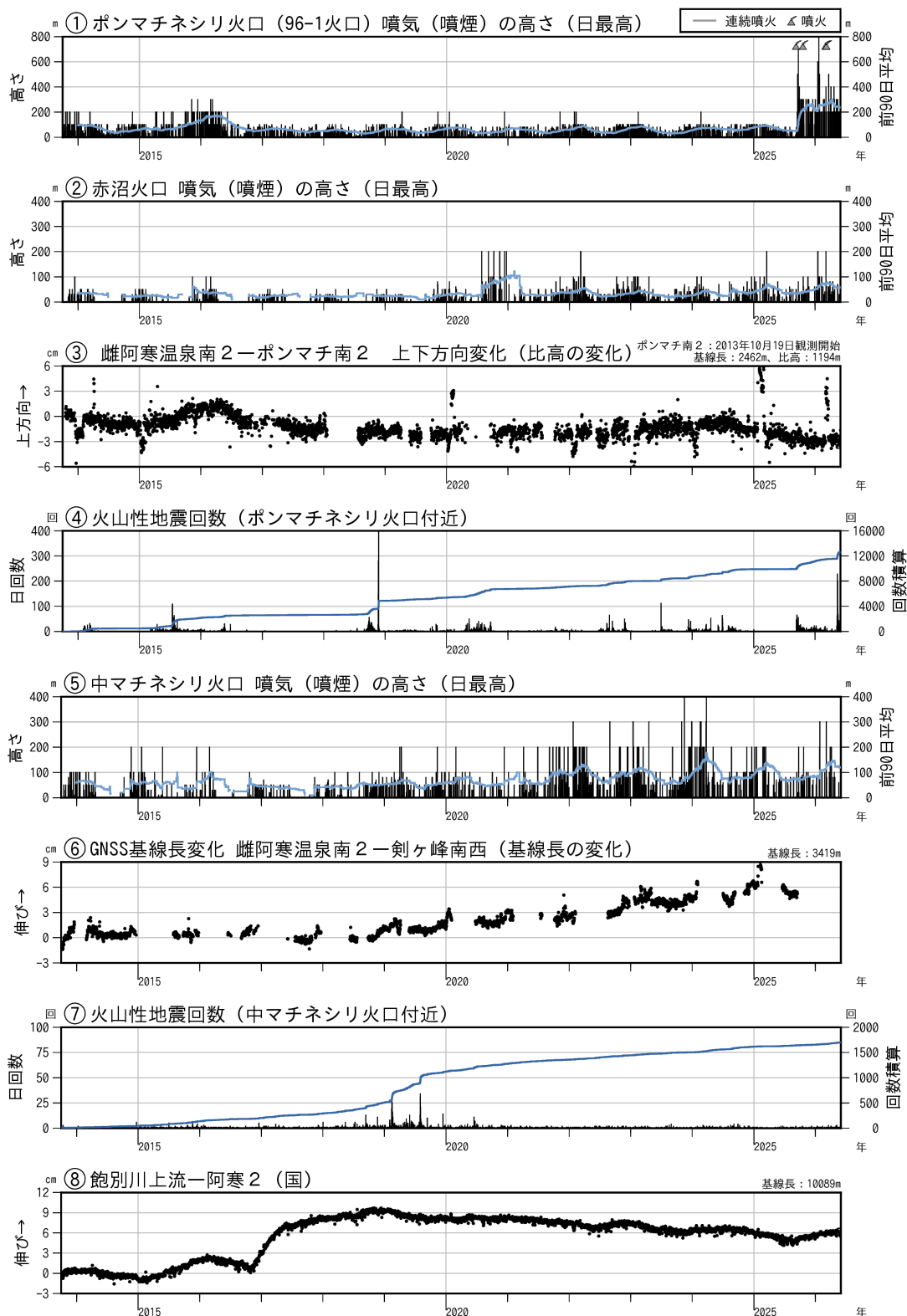


図8 雌阿寒岳 火口別の活動経過図（2013年10月～2026年5月）

- ・各火口の位置は図1を参照してください。
- ・グラフ③、⑥、⑧は、それぞれGNSS連続観測の基線図（図12）基線④、⑦、⑨に対応しています。
- ・グラフ④、⑦の回数は、雌阿寒岳付近で発生したと計数した地震のうち、発生領域が明瞭に識別出来たもののみを計数しています。
- ・ポンマチネシリ火口付近の地震は、2025年9月中旬に増加して以降、特段の増加は認められていませんでしたが、5月中旬に2025年9月中旬を上回る増加が認められました。
- ・中マチネシリ火口付近の活動状況を示唆する観測データに特段の変化は認められていません。

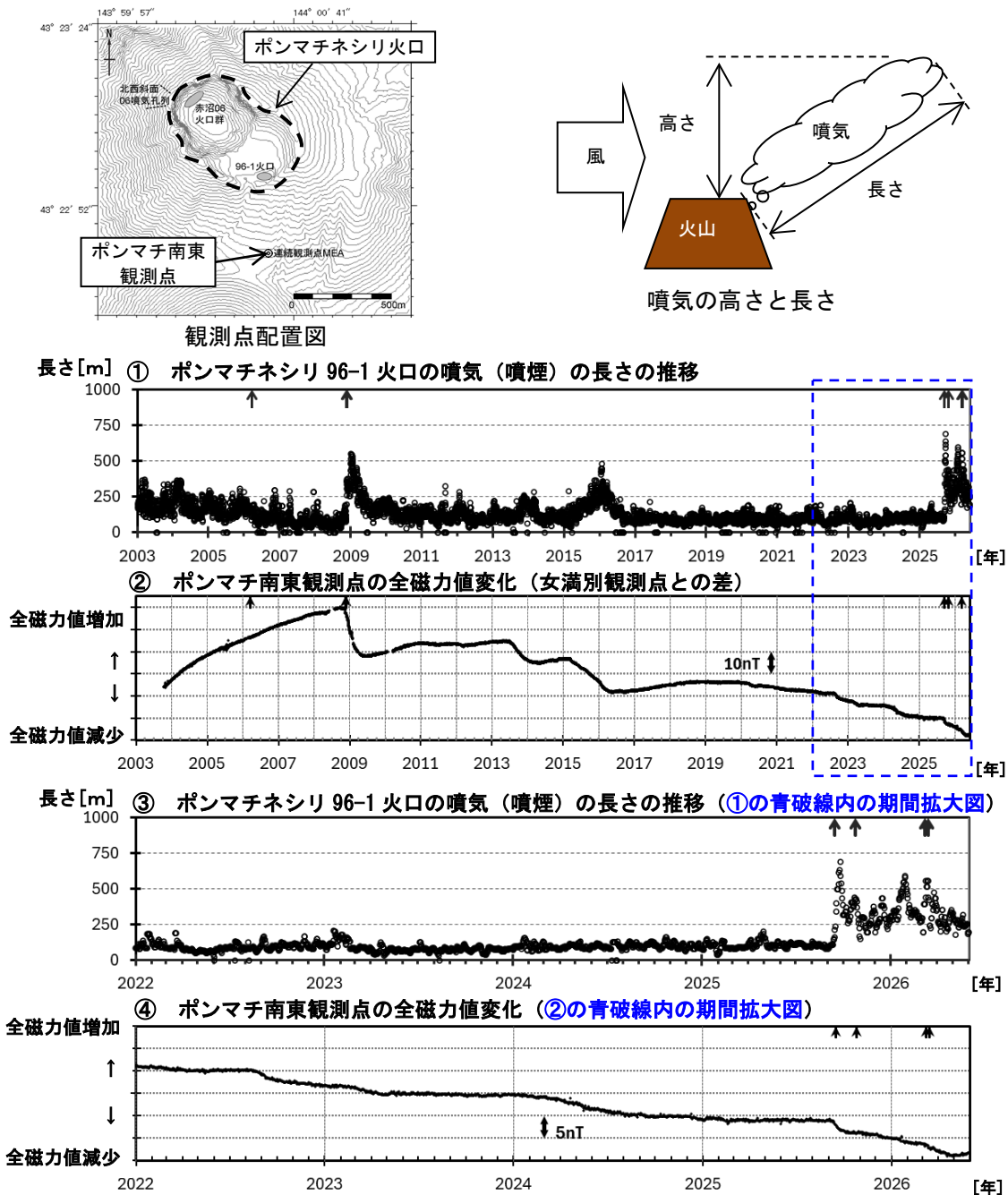


図9 雌阿寒岳 ポンマチネシリ96-1火口の噴気（噴煙）の長さや全磁力値の経過及び全磁力観測点配置図（2003年～2026年5月）

- ・①③のグラフに示す噴気の長さは気温の影響を受けることから（気温が低いと噴気は長くなり、高いと短くなる傾向がある）、気温補正後の値をプロットしています。
- ・②④のグラフに示す全磁力値は、地磁気観測所女満別観測施設との全磁力値差をプロットしており（表示開始は2003年10月16日）、空白部分は欠測を示します。
- ・図中の↑は噴火を示します。ただし、2006年の噴火は赤沼火口からの噴火です。また、2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・96-1火口の噴煙の長さは2025年9月12日以降増大し、活発な状態が続く中で盛衰がみられています。
- ・96-1火口南側のポンマチ南東観測点で、2025年9月12日以降、96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化を示すと考えられる全磁力値の減少がみられ、10月以降も緩やかな減少傾向が継続しましたが、4月下旬に鈍化し、5月は停滞して推移しました。
- ・中長期的には、2020年頃から全磁力の緩やかな減少がみられています。

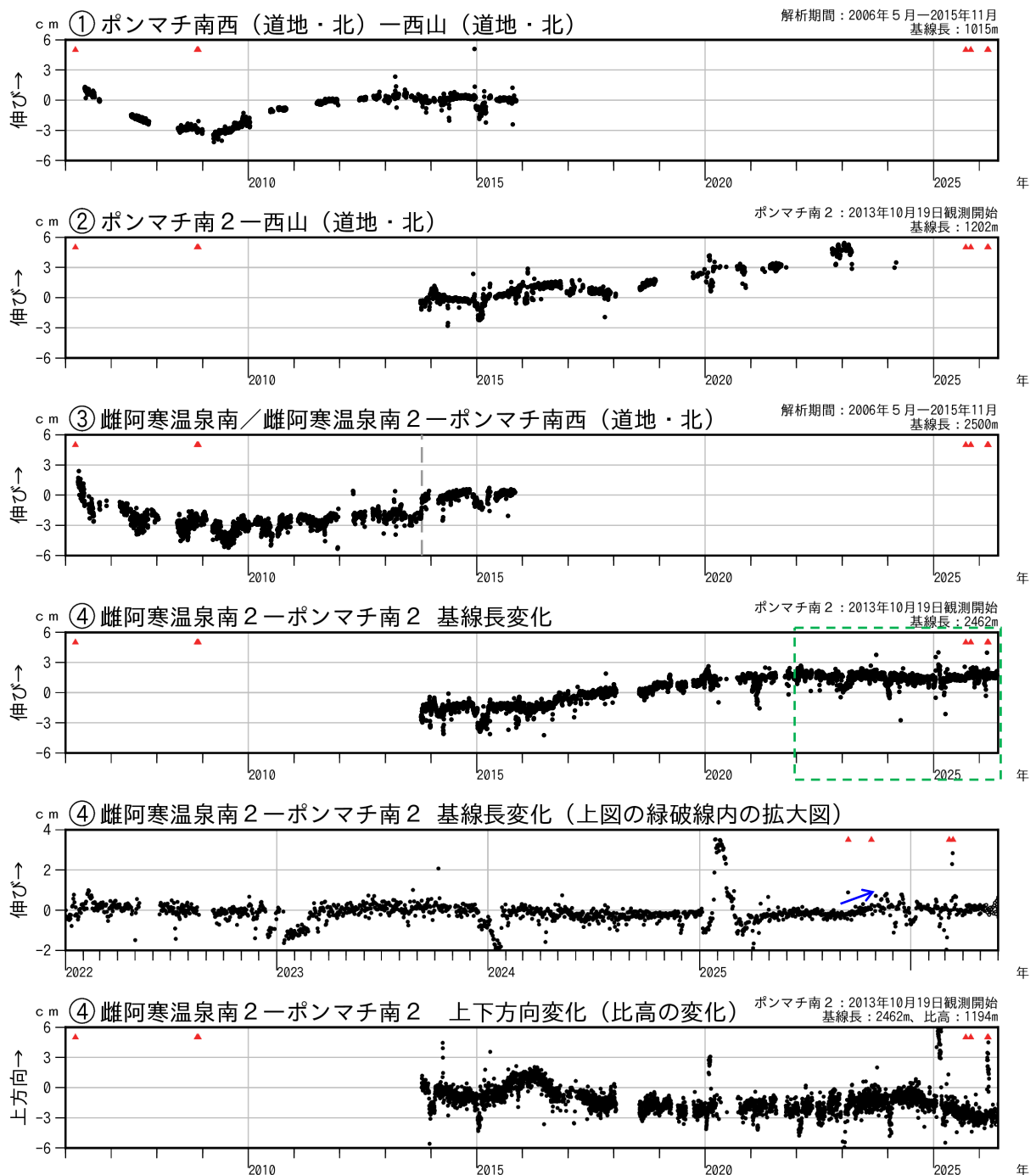


図10-1 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年4月～2026年5月）

- ・グラフ①～④はGNSS連続観測の基線図（図12）の基線①～④に対応しています。
- ・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ボンマチ南西（道地・北）とボンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線②は①、基線④（基線長）は③と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・基線③の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・グラフ④は基線④の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南2からみたボンマチ南2の上下方向の動きを表しています。
- ・冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。
- ・基線④（基線長）では、2025年9月中旬から11月頃にかけてごくわずかな伸長（青矢印）が認められましたが、その後、特段の変化は認められません。

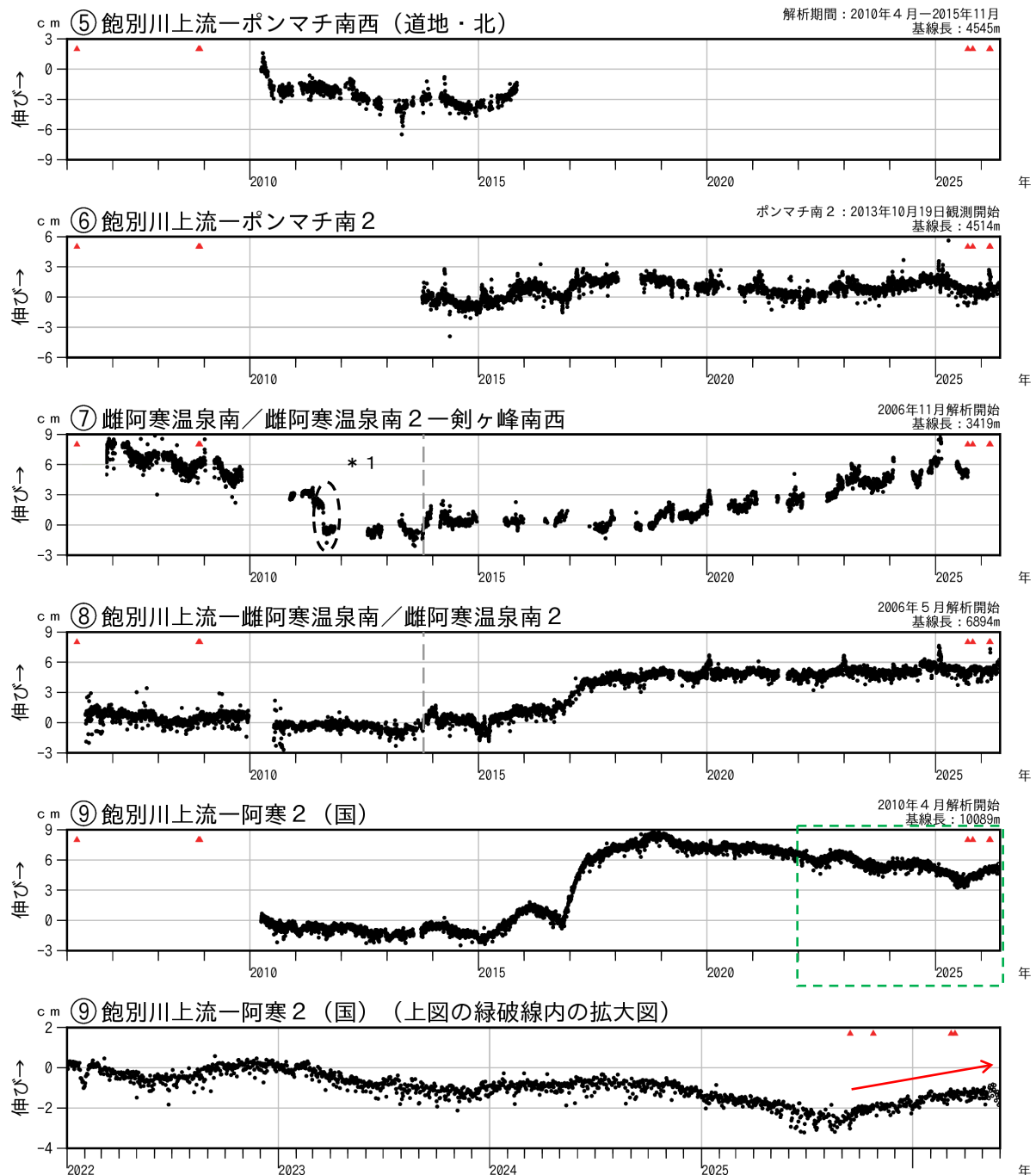


図10-2 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長の変化（2006年4月～2026年5月）

- ・ グラフ⑤～⑨はGNSS連続観測の基線図（図12）の基線⑤～⑨に対応しています。
- ・ ▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ * 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。
- ・ ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線⑥は⑤と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・ 基線⑦⑧の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・ 冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。
- ・ 東側山麓の観測点による基線⑨では、2025年8月末以降、山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長傾向（赤矢印）が認められます。
- ・ 基線⑦では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長傾向が認められています。

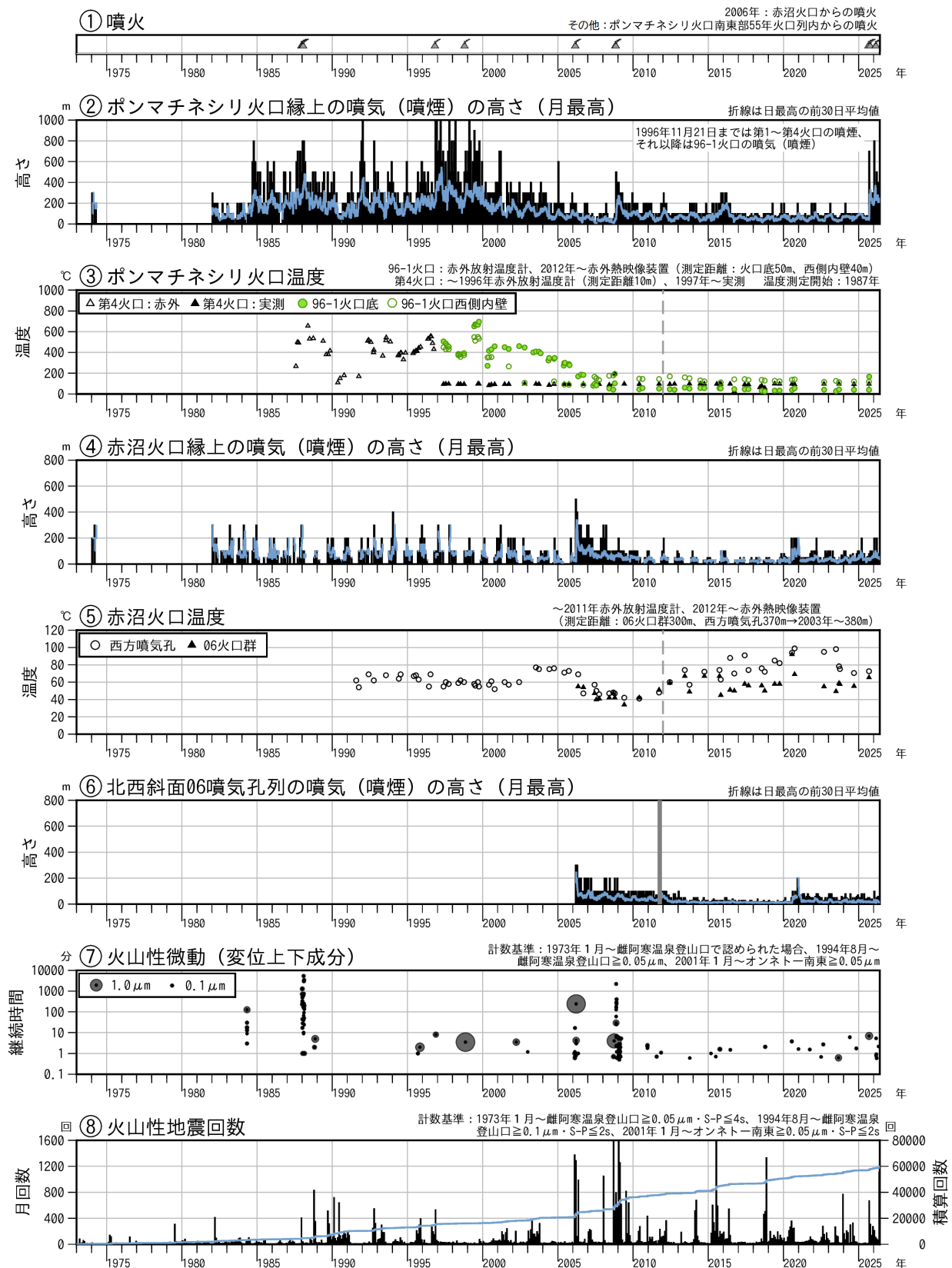


図11 雌阿寒岳 火山活動経過図（1973年1月～2026年5月）

- ・③：各火口温度は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
- ・③⑤：測定機器の変更ににより、2012年（破線）前後では測定温度に差が生じている可能性があります。
- ・⑥：灰色部分は機器障害による欠測を示します。
- ・各火口の位置は図1を参照してください。

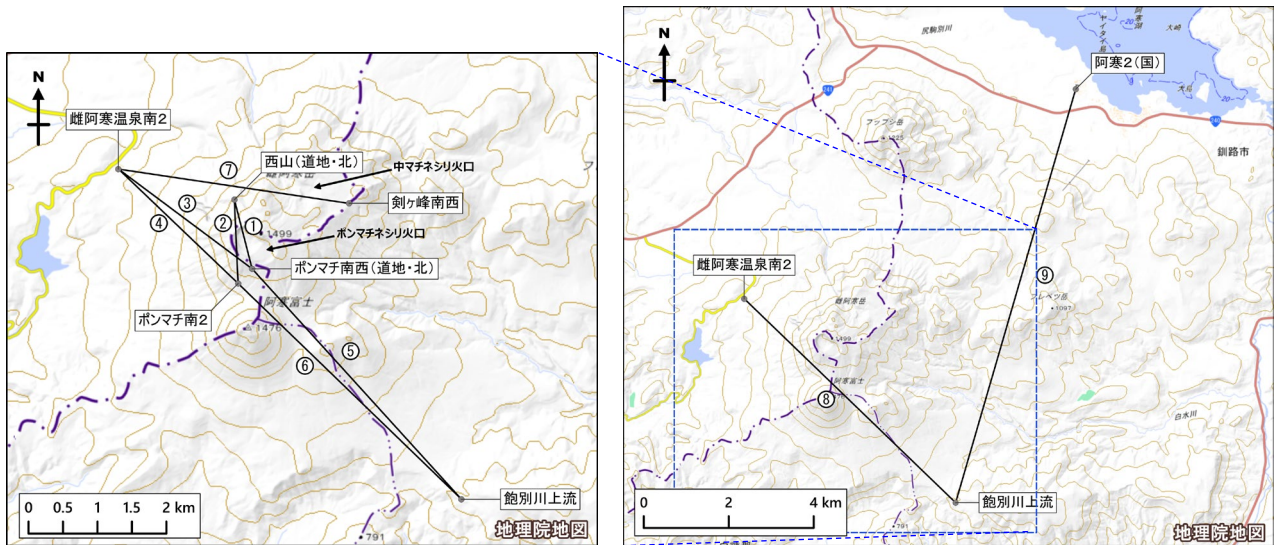
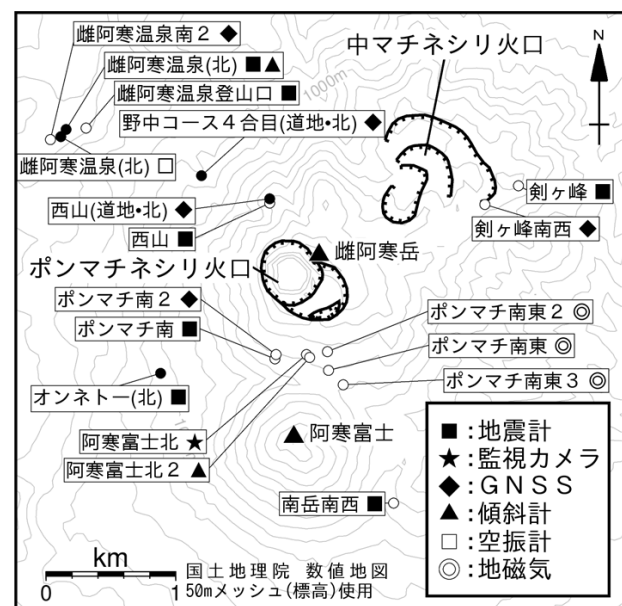
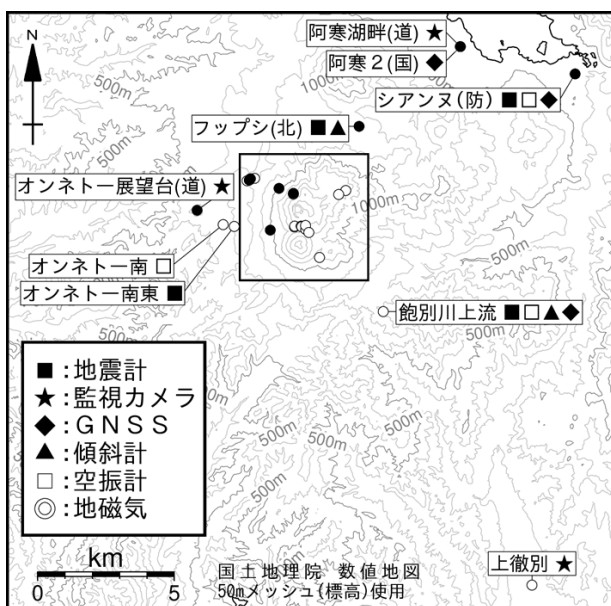


図12 雌阿寒岳 GNSS連続観測の基線図

- ・基線①～⑨は、図10のグラフ①～⑨に対応します。
- ・基線④、⑦、⑨は、それぞれ図8のグラフ③、⑥、⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。左図中の四角囲みは右図の表示範囲を示します。
(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道、
(道地):地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所

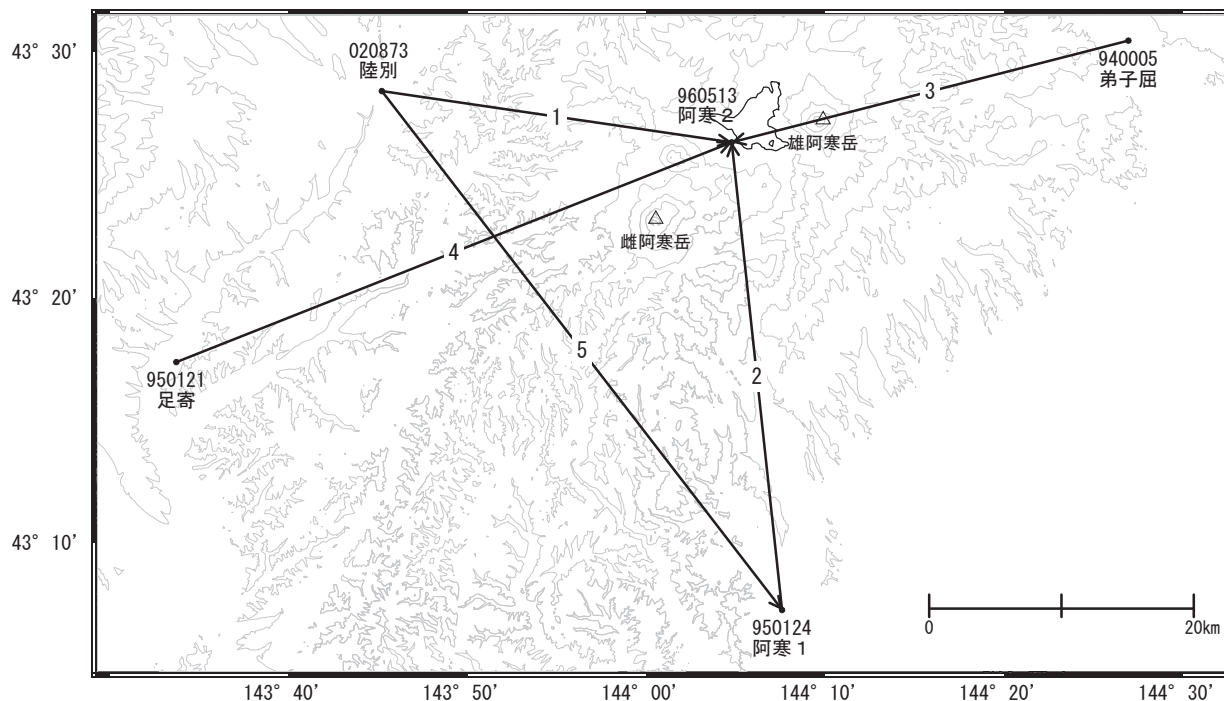
図13 雌阿寒岳 観測点配置図

雌阿寒岳周辺の地殻変動

—GEONET(電子基準点等)による連続観測結果—

「阿寒1」—「阿寒2」の基線で2025年9月頃からわずかな伸びが見られます。

雌阿寒岳・雄阿寒岳周辺 GNSS連続観測基線図

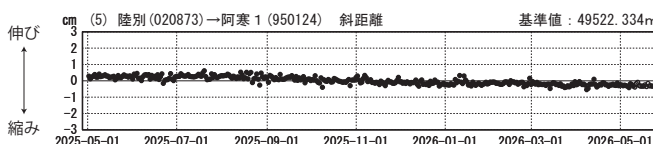
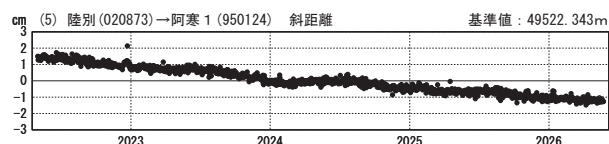
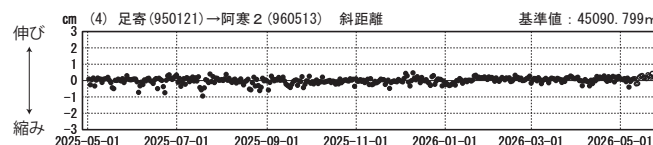
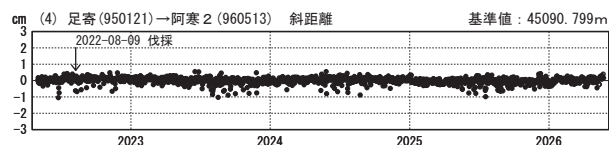
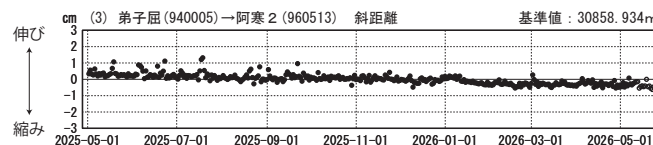
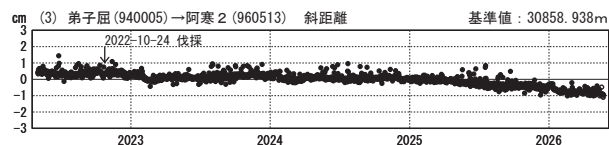
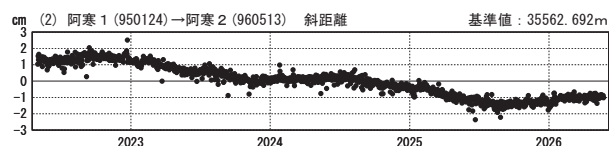
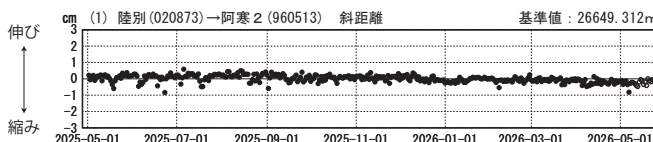
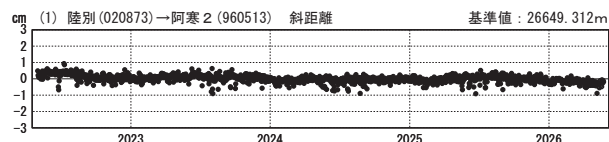


基線変化グラフ

基線変化グラフ

期間: 2022-05-01~2026-05-23 JST

期間: 2025-05-01~2026-05-23 JST



●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

国土地理院

十勝岳の火山活動解説資料（令和8年5月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

62-2 火口、振子沢噴気孔群及びその周辺では噴煙・噴気が多く、特に 62-2 火口付近はごく微弱な発光現象が時々みられるなど、活発な熱活動が続いています。

3 月以降、山体を挟む一部の GNSS 基線でわずかな伸びがみられ、62-2 火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、振子沢噴気孔群の噴気域の拡大が認められています。

火山活動はわずかに高まる傾向にあり、今後の推移には注意が必要です。

噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図 1-①～⑤、図 2-①～③、図 3～10、表 1）

監視カメラによる観測では、62-2 火口の噴煙は 2021 年頃から高い状態が続いており、今期間も噴煙・噴気が多く、噴煙の高さは最高で火口縁上 900m まで上がりました。大正火口の噴気の高さは 100m 以下、振子沢噴気孔群の噴気の高さは稜線上概ね 300m 以下で経過しました。振子沢噴気孔群の噴気は 2018 年頃からやや高い状態が続いています。

今期間、62-2 火口付近でのごく微弱な発光現象（火映を含む）を高感度の監視カメラにより複数回観測しました。この現象は、62-2 火口付近での高温のガス噴出や硫黄の燃焼等によるものと考えられ、2020 年 6 月以降時折観測されています。

11 日に国土交通省北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、振子沢噴気孔群で、昨年の観測（2025 年 8 月 12 日）と比べて活発な噴気域の拡大及び高温化が認められました。また、前十勝北西側斜面では、昨年の観測と比べて地熱域のわずかな拡大が認められました。

・地震及び微動の発生状況（図 1-⑥～⑨、図 2-⑤～⑦、図 11～13）

火山性地震は多い状態で経過しました。震源は主に 62-2 火口のごく浅い所、旧噴火口付近及びグラウンド火口付近の深さ 0 km～深さ 1 km 付近に分布しました。

31 日から 6 月 1 日（期間外）にかけて、62-2 火口付近のごく浅い所を震源とする火山性地震が一時的に増加しました。地震活動は、2026 年 4 月頃から次第に高まっており、一時的な回数の増加も時折認められています。

26 日及び 30 日に振幅が小さく継続時間が短い火山性微動がそれぞれ 1 回発生しました。

・地殻変動の状況（図 14～15）

GNSS 連続観測では、2021 年以降、62-2 火口付近の観測点を中心に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022 年以降次第に鈍化し、2024 年秋以降は特段の変化は認められていません。一方、山体を挟む一部の基線では、2026 年 3 月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びの変化が認められます。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次の火山活動解説資料（令和 8 年 6 月分）は令和 8 年 7 月 8 日に発表する予定です。

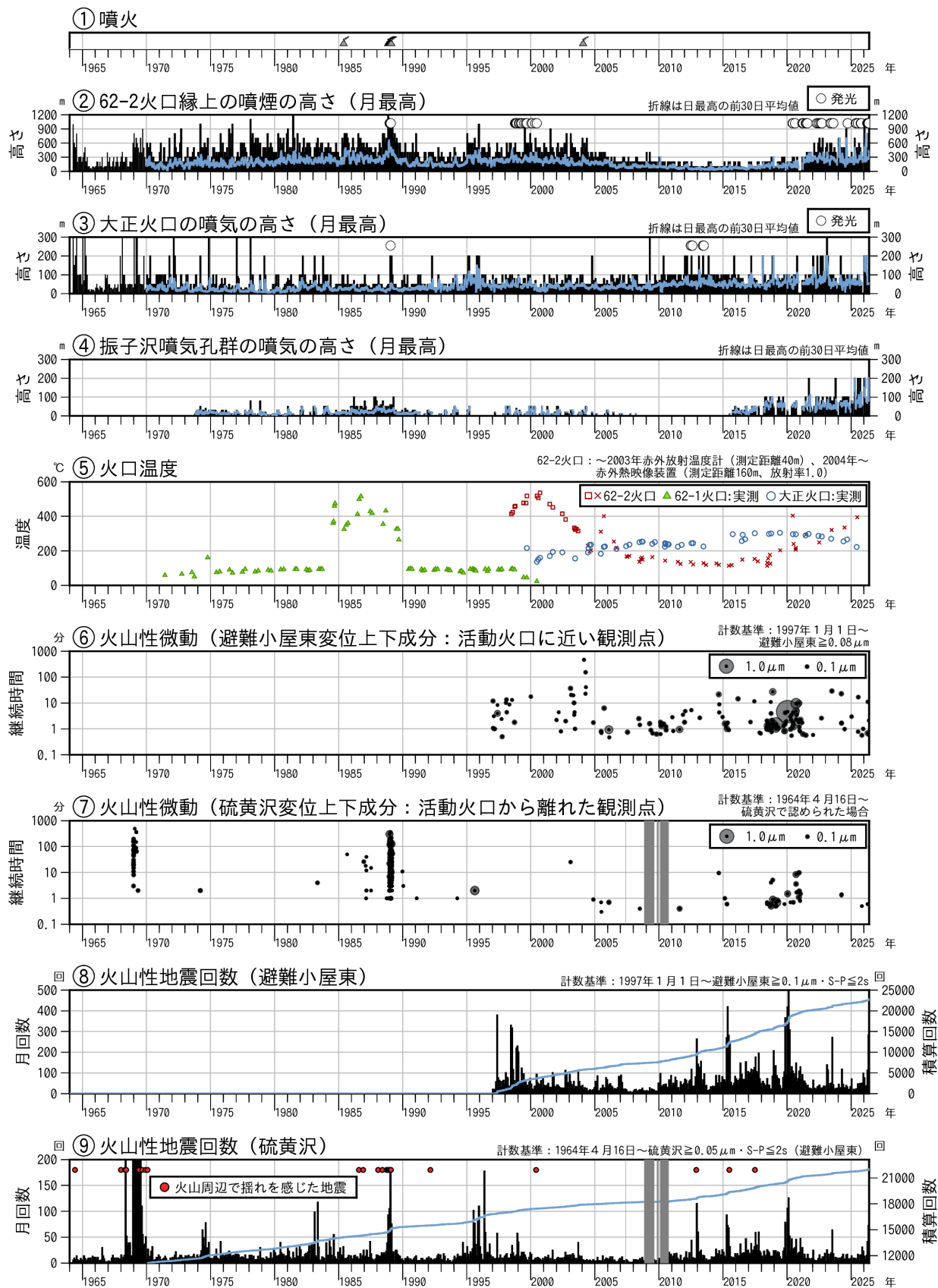


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2026年5月）

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び国立研究開発法人産業技術総合研究所のデータを含みます。

⑦⑨の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

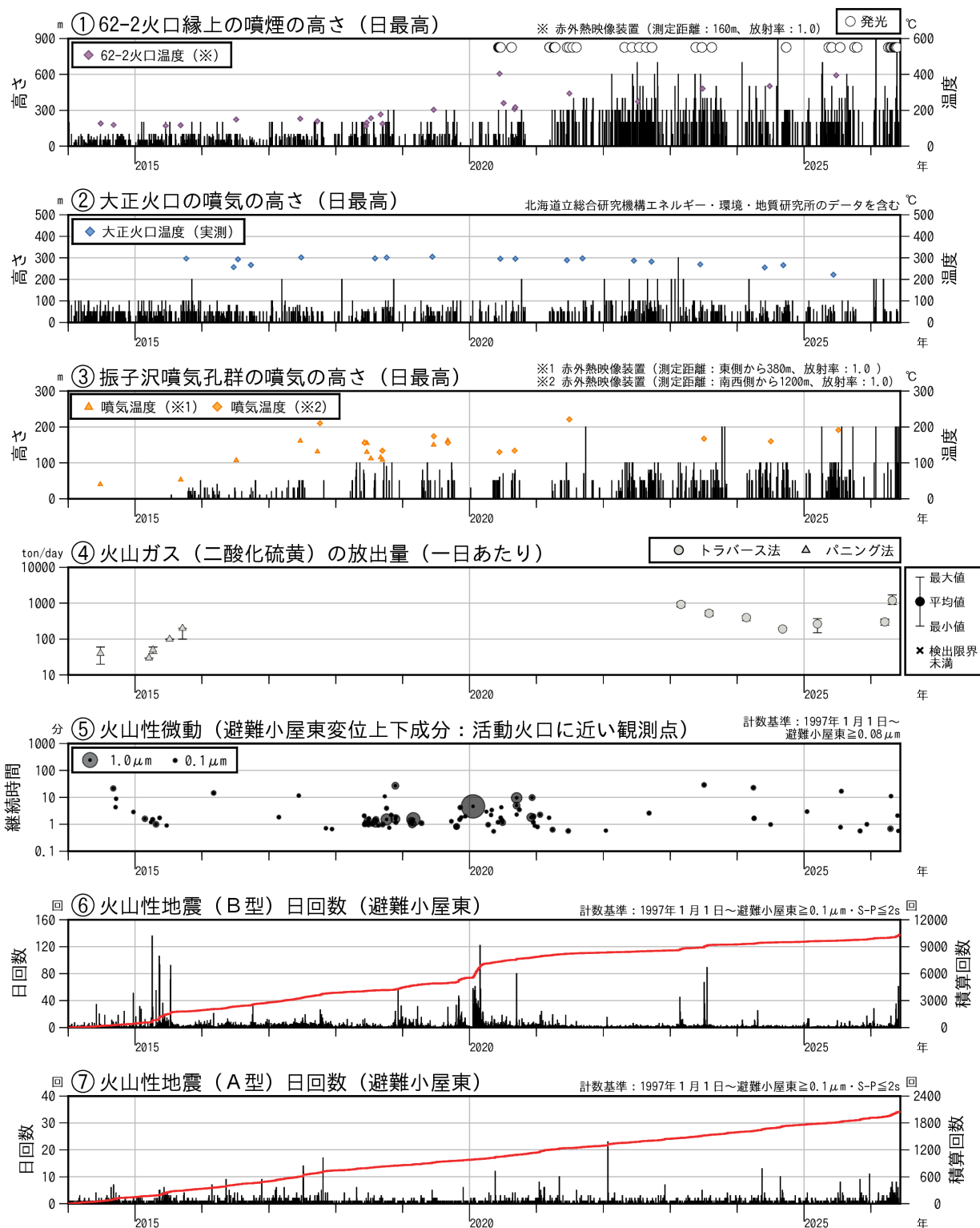


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2026年5月）

⑥は主に62-2火口付近のごく浅い所（図13参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、⑦は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。



図3 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図

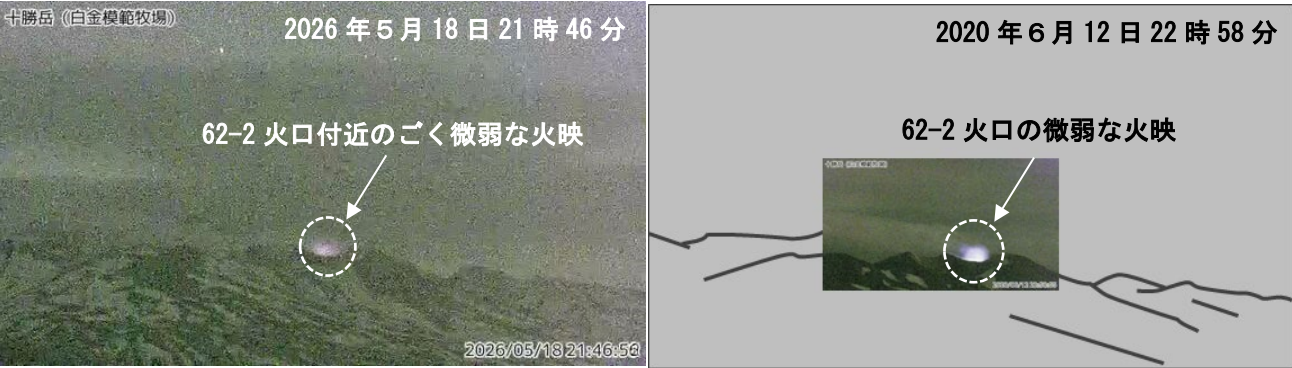


図4 十勝岳 62-2 火口付近で観測された発光現象（火映）（白金模範牧場監視カメラによる、撮影方向は図3と同様）
左：18日に観測されたごく微弱な火映
右：2020年6月12日に観測された微弱な火映（6月7日～19日の夜間、断続的に観測）

表1 十勝岳 2026年5月に観測された62-2火口付近の発光現象（山麓に設置された高感度の監視カメラによる）
※1：発光現象により火口上の雲や噴煙が明るく照らされた現象を観測した場合には、火映として表記している。

観測日	発光現象※1	発光現象の強度、発生状況
6日夜	火映	ごく微弱
11日夜	発光現象	ごく微弱
12日未明	火映	ごく微弱、断続的
13日夜	火映	ごく微弱、断続的
15日夜～16日未明	火映	ごく微弱、断続的
16日夜～17日未明	火映	ごく微弱、断続的
17日夜～18日未明	火映	ごく微弱、断続的
18日夜～19日未明	火映	ごく微弱、断続的
26日未明	火映	ごく微弱、断続的



図5 十勝岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）



図6 十勝岳 火口周辺の状況

西側上空（図5の①）から撮影

- ・62-2 火口及び振子沢噴気孔群では、活発な噴気活動が認められました。

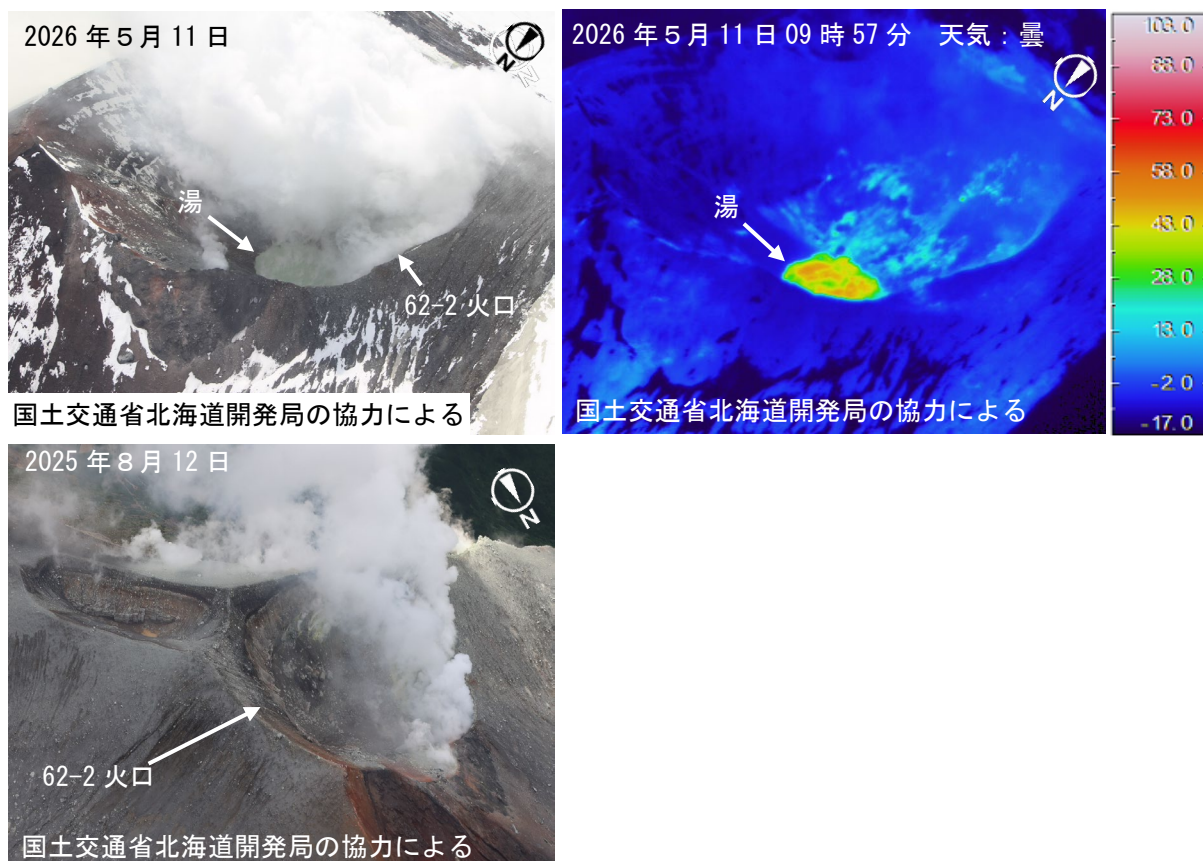


図7 十勝岳 赤外熱映像装置による 62-2 火口の地表面温度分布

上：北西側上空（図5の②）から撮影 下：北東側上空（図5の③）から撮影

・62-2 火口底には、湯がたまっていました。

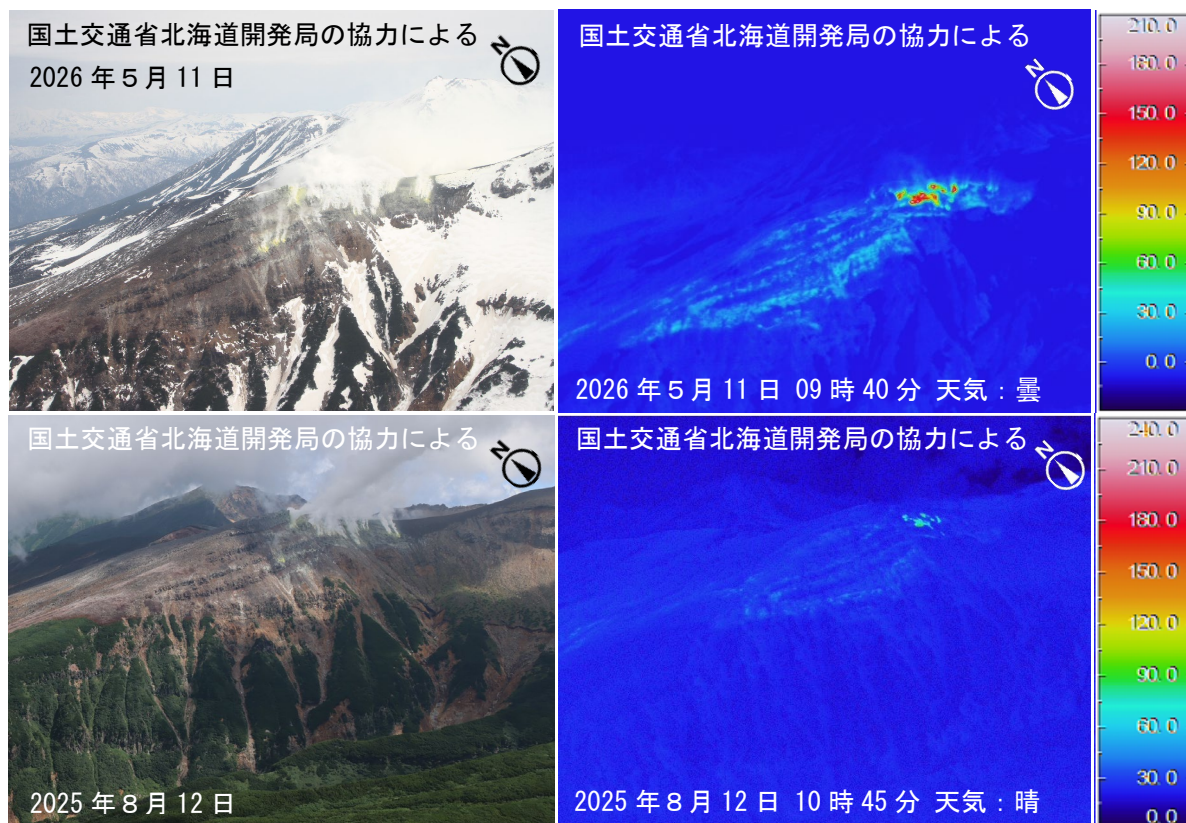


図8 十勝岳 赤外熱映像装置による振子沢噴気孔群の地表面温度分布

上：南西側上空（図5の④）から撮影 下：南西側上空（図5の⑤）から撮影

・2025 年 8 月 12 日の観測と比べて、活発な噴気域の拡大及び高温化が認められました。

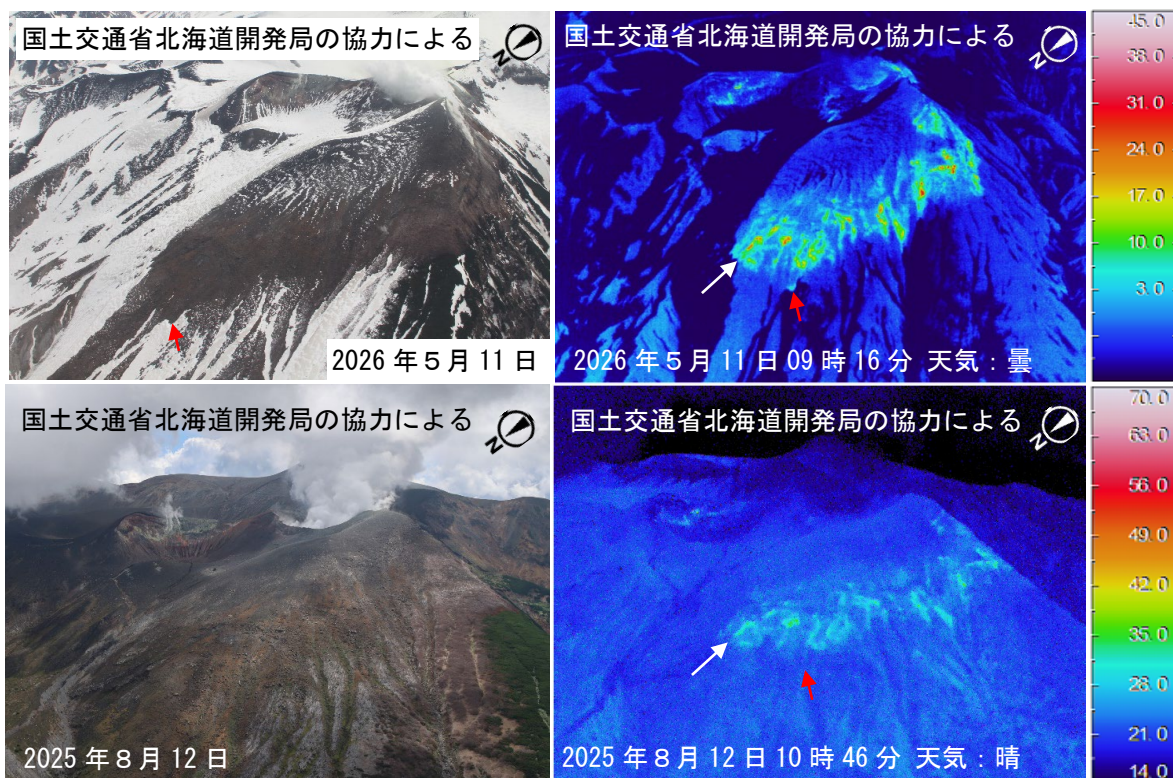


図9 十勝岳 赤外熱映像装置による前十勝北西側斜面の地表面温度分布

上：北西側上空（図5の⑥）から撮影 下：北西側上空（図5の⑦）から撮影

図中の白矢印は同じ場所を示す。

- ・2025 年 8 月 12 日の観測と比べて、地熱域のわずかな拡大が認められました（赤矢印）。

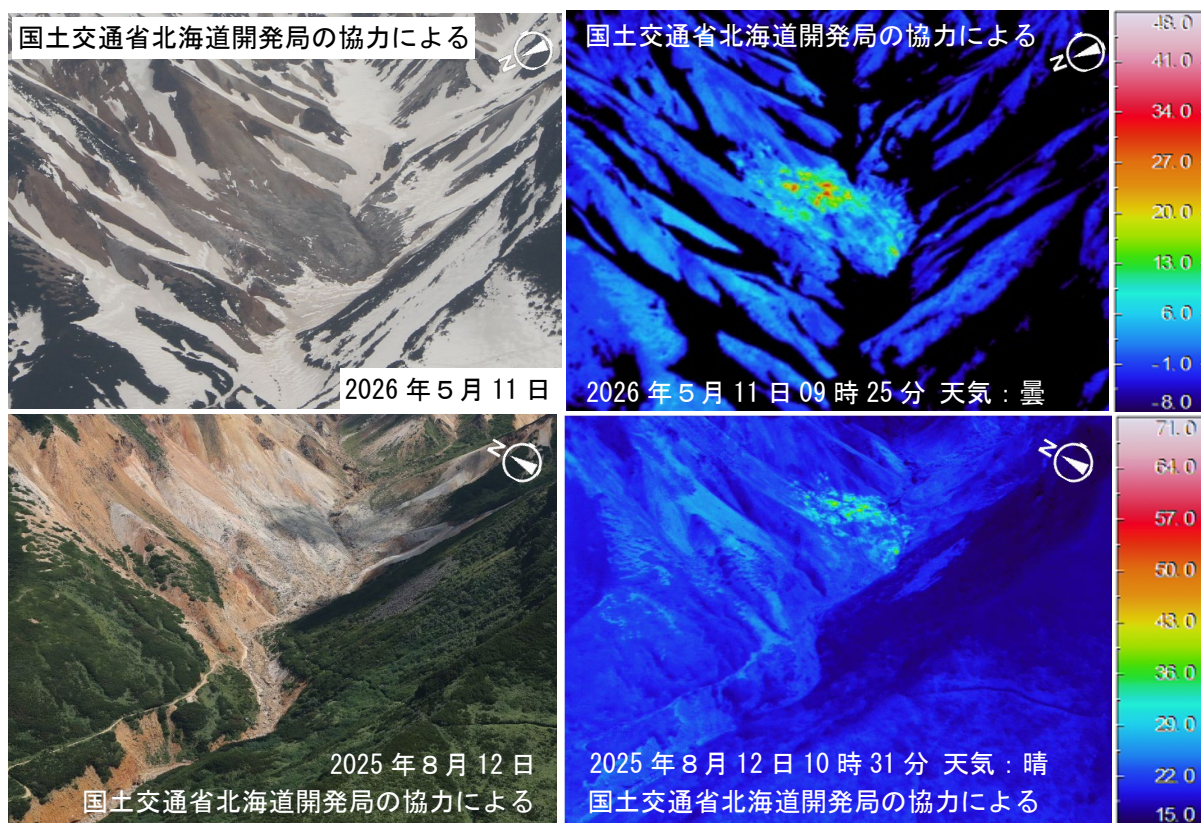


図10 十勝岳 赤外熱映像装置による旧噴火口の地表面温度分布

上：西側上空（図5の⑧）から撮影 下：西側上空（図5の⑨）から撮影

- ・2025 年 8 月 12 日の観測と比べて、特段の変化は認められませんでした。

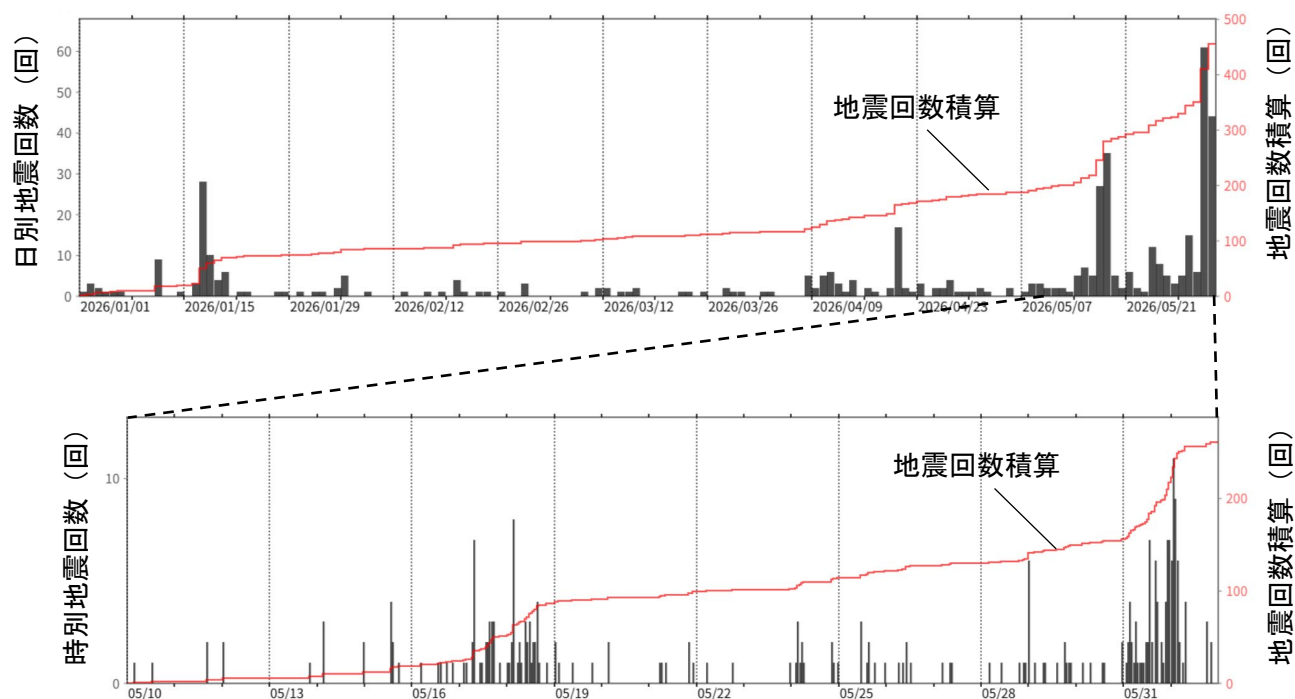


図 11 十勝岳 火山性地震の発生状況

上：日別地震回数（2026 年 1 月 1 日～6 月 1 日（期間外））

下：特別地震回数（2026 年 5 月 10 日～6 月 1 日）

いずれも 62-2 火口付近のごく浅い所を震源とする火山性地震の回数

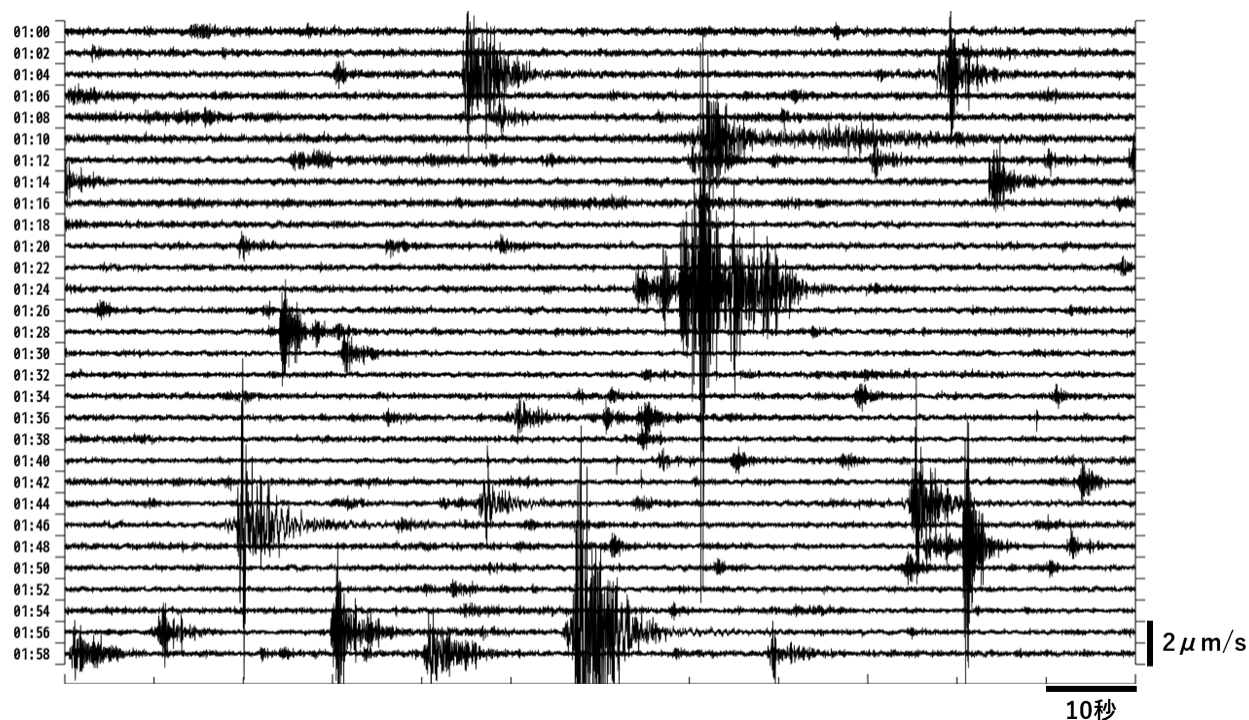


図 12 十勝岳 避難小屋東観測点の上下速度波形（6 月 1 日 01 時 00 分～02 時 00 分）

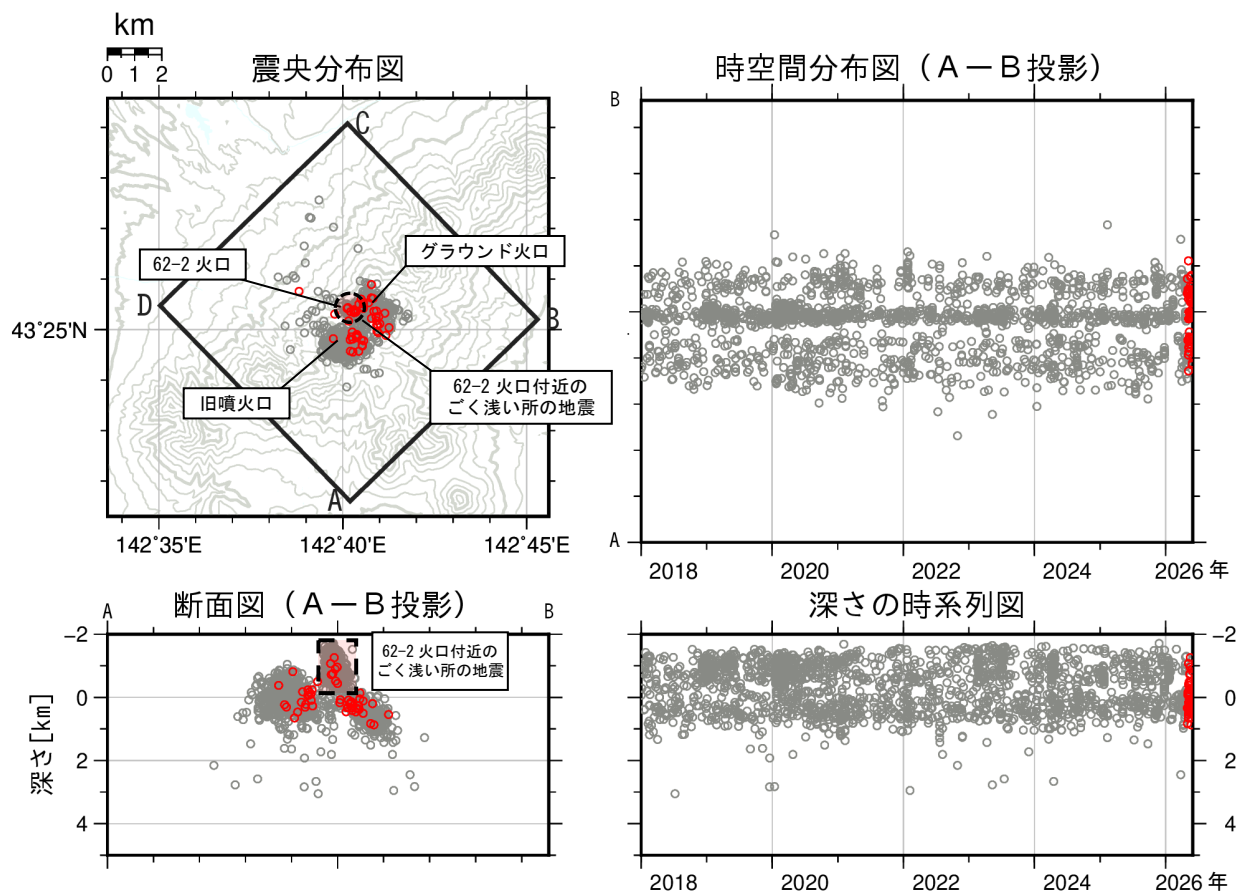


図13 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2026年5月）

○ : 2018年1月～2026年4月の震源 ● : 2026年5月の震源

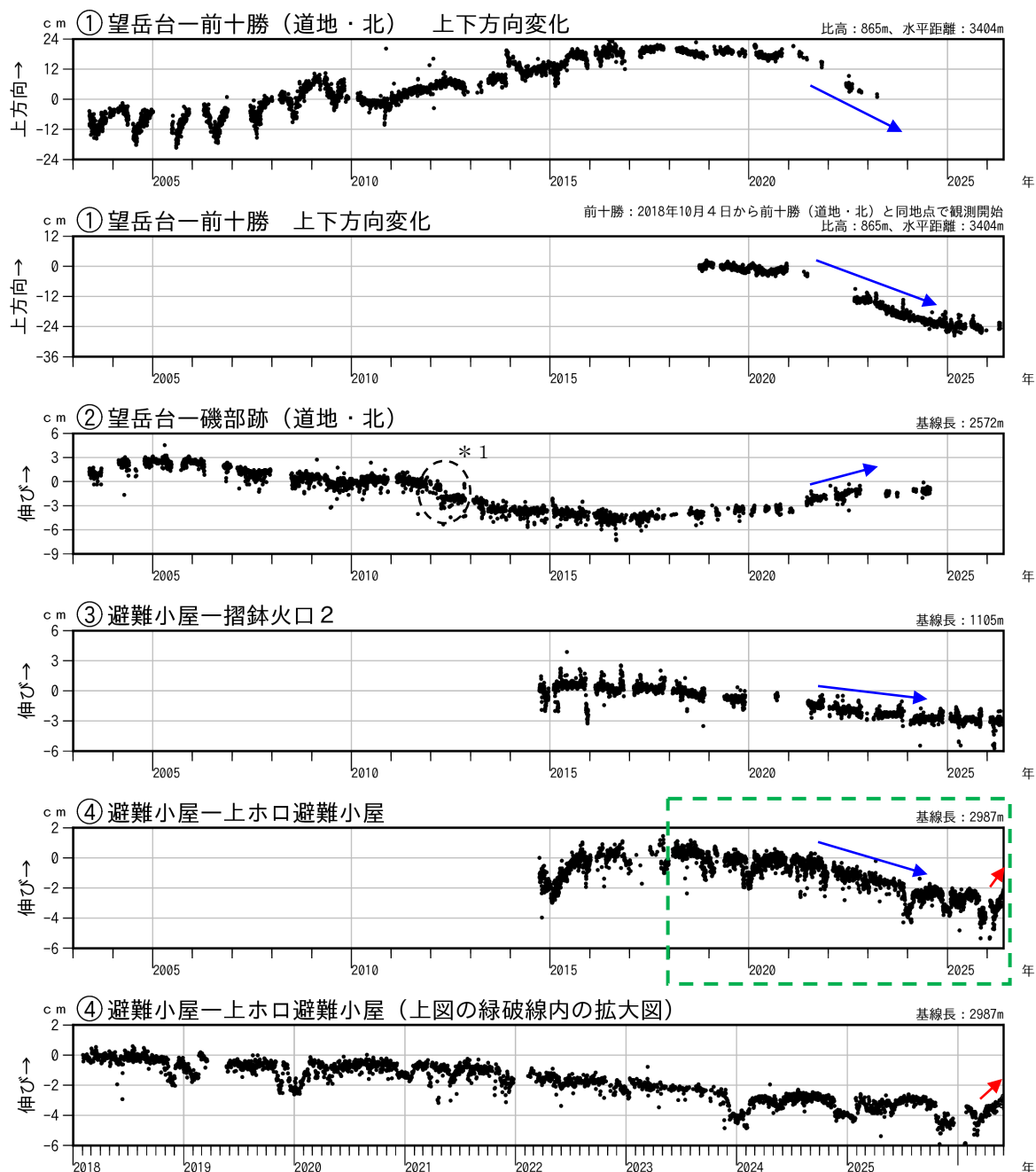


図14-1 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2026年5月）

グラフ①～④は観測点配置図（図15）の基線①～④に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

- ・ 基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び沈降（青矢印）が観測されていましたが、2022年頃からやや鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められません。ただし、62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
- ・ 基線④では2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられるわずかな伸びの変化（赤矢印）が認められます。

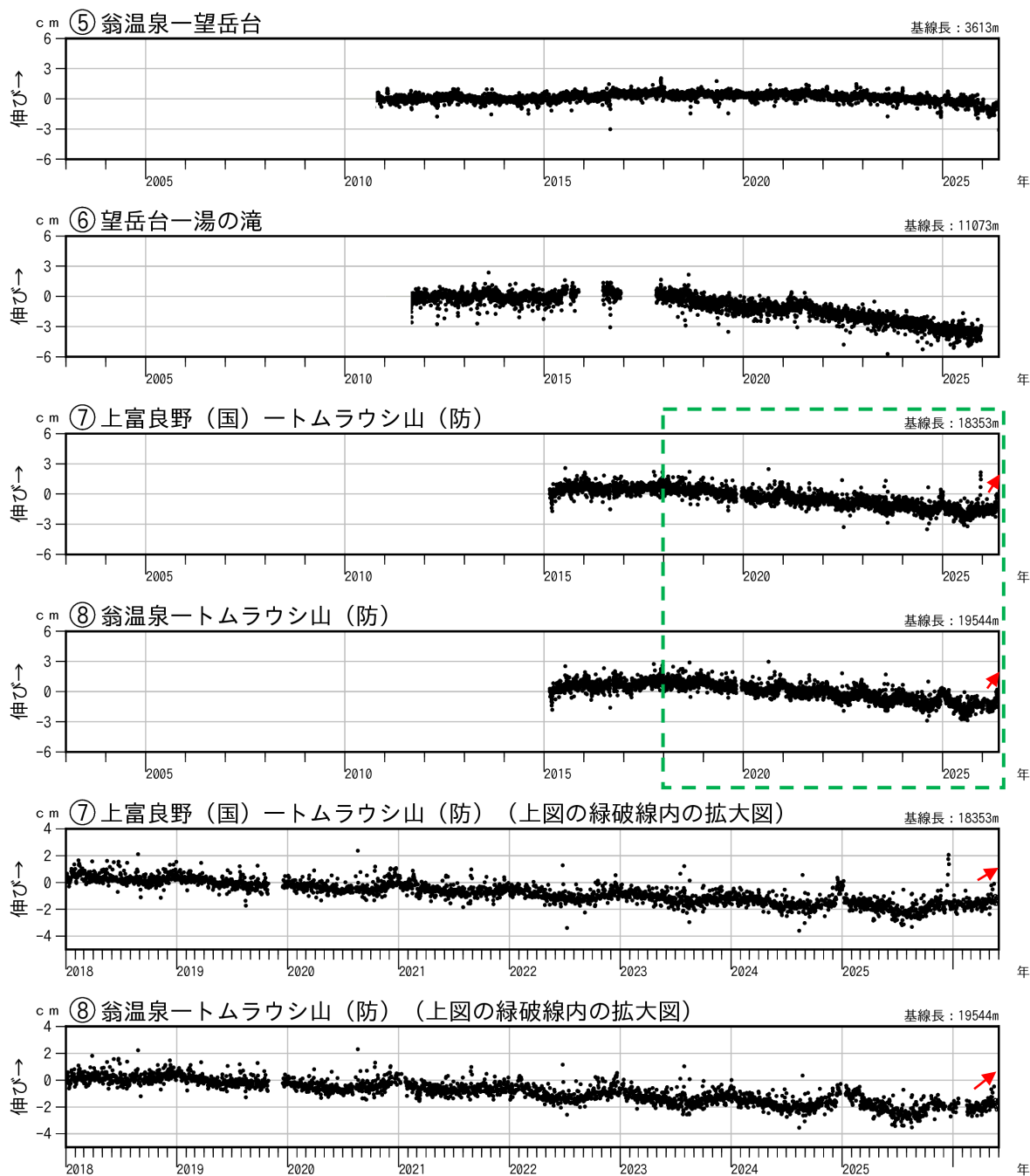


図14-2 十勝岳 GNSS連続観測による基線長変化（2003年5月～2026年5月）

グラフ⑤～⑧は観測点配置図（図15）の基線⑤～⑧に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。

- ・基線⑦⑧では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いていましたが、2026年3月頃からは伸長傾向に転じています※（赤矢印）。これらの基線の伸びは、山体付近のやや深部の膨張を示していると考えられます。

※ 例年8月頃から12月頃には同程度の伸びが認められますが、これは大気の状態変化の影響によるみかけ上の変化と考えられます。2026年3月頃からは、これらとは異なる伸びが認められています。

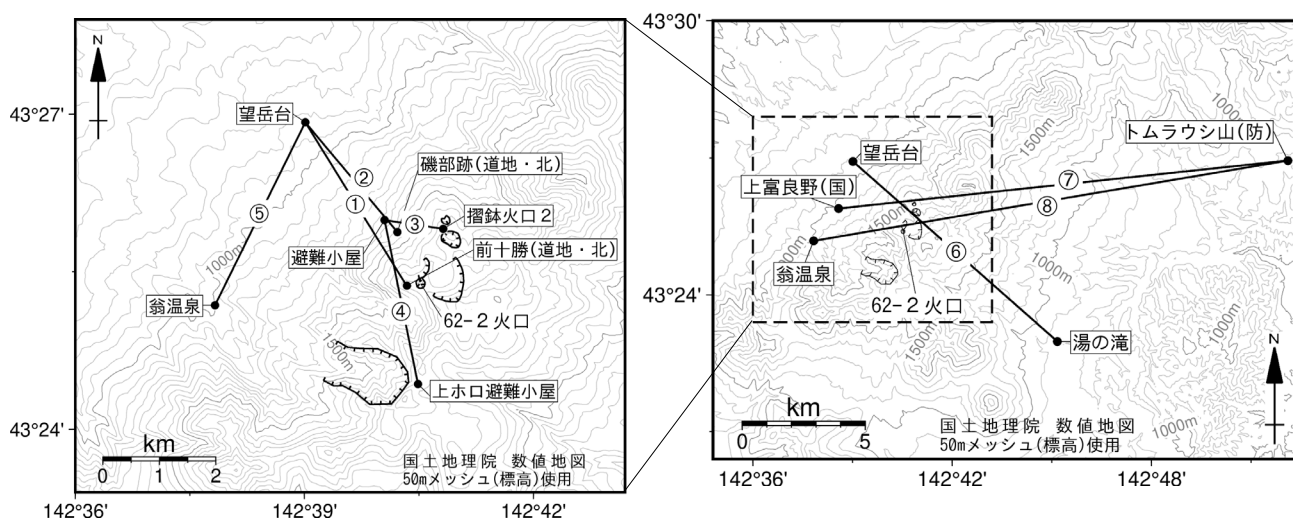
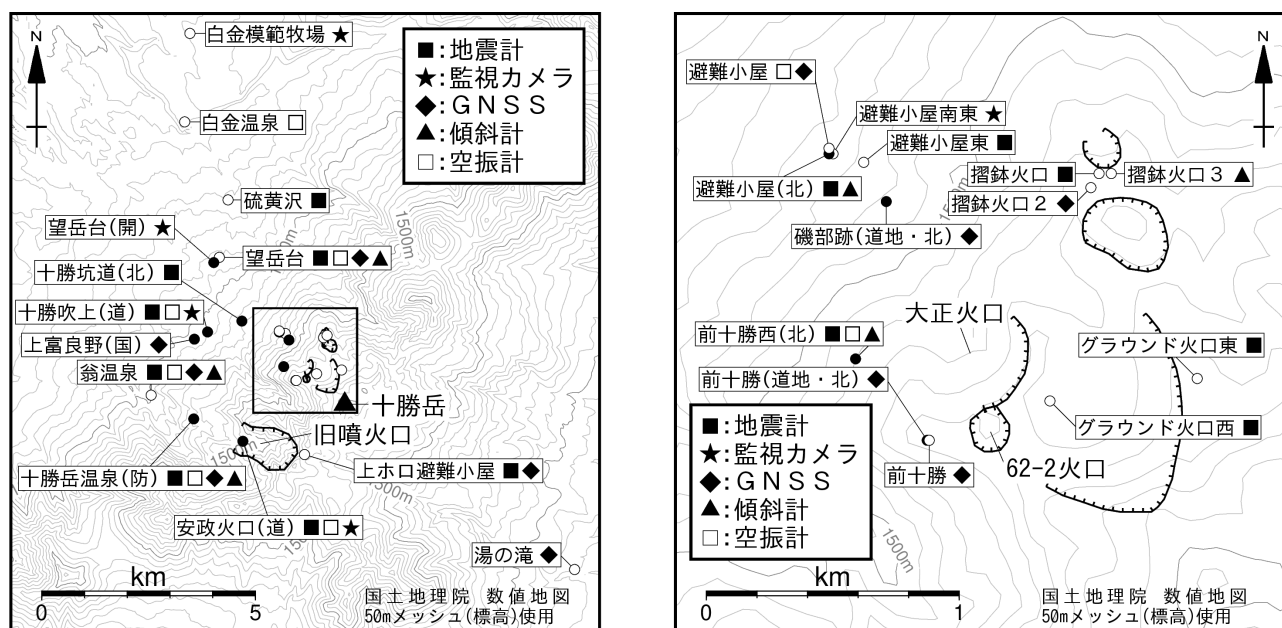


図15 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図

図中の基線①～⑧は図14のグラフ①～⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。
 (開): 国土交通省北海道開発局、(国): 国土地理院、(北): 北海道大学、(防): 国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道): 北海道、
 (道地): 地方独立行政法人北海道立総合研究気候エネルギー・環境・地質研究所

図16 十勝岳 観測点配置図

十勝岳の火山活動解説資料

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

＜噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ＞

62-2 火口及び振子沢噴気孔群付近では、熱活動のさらなる高まりが認められています。また、3月以降、山体付近のやや深部の膨張を示す地殻変動が続いており、4月以降は火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、62-2 火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化が認められています。

十勝岳では、火山活動が高まっており、62-2 火口から概ね1.5kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があることから、本日（18日）11時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項等】

62-2 火口から概ね1.5kmの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図2-①～③、図3-①、図5～9）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態で経過しており、活発な噴煙活動が続いています。5月以降は噴煙がさらに高く上がる日も時折みられており、6月12日には一時的に火口縁上1,500mまで上がりました。

62-2火口付近では、4月以降、高感度の監視カメラによりごく微弱な発光現象（火映を含む）を度々観測しています。この現象は、62-2火口付近での高温のガス噴出や硫黄の燃焼等によるものと考えられます。

6月16日から17日にかけて実施した現地調査では、62-2火口及び振子沢噴気孔群で高温の火山ガスが活発に噴出していることを確認し、噴気域の拡大や噴出量の増加が認められました。また、62-2火口では、火口底の一部で繰り返し熱泥水が噴出している状況を確認しました。

これらのことから、62-2火口及び振子沢噴気孔群付近では、熱活動のさらなる高まりが認められます。

・地殻変動の状況（図2-⑧、図10～11）

GNSS連続観測では、山体を挟む一部の基線で3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化が認められています。

・火山ガスの状況（図2-④、図3-②）

4月28日及び6月10日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）放出量は、それぞれ1日あたり1,200トン及び1,400トンで、3月以前と比べて多い状態となっています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・地震の発生状況（図2-⑤～⑦、図3-③④、図4）

62-2火口周辺の火山性地震は、4月頃からやや増加した状態となっています。また、62-2火口付近の地震活動は、4月頃から次第に高まっており、5月以降は一時的な回数の増加が時折観測されています。

○活動評価

十勝岳では火山活動が高まっており、62-2火口及び振子沢噴気孔群付近では高温の火山ガスの放出が継続すると考えられます。また、62-2火口から概ね1.5kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。



図1 十勝岳 警戒が必要な範囲

- ・62-2火口から概ね1.5kmの範囲(赤円内)では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

火山活動解説資料
令和8年6月18日 11時10分

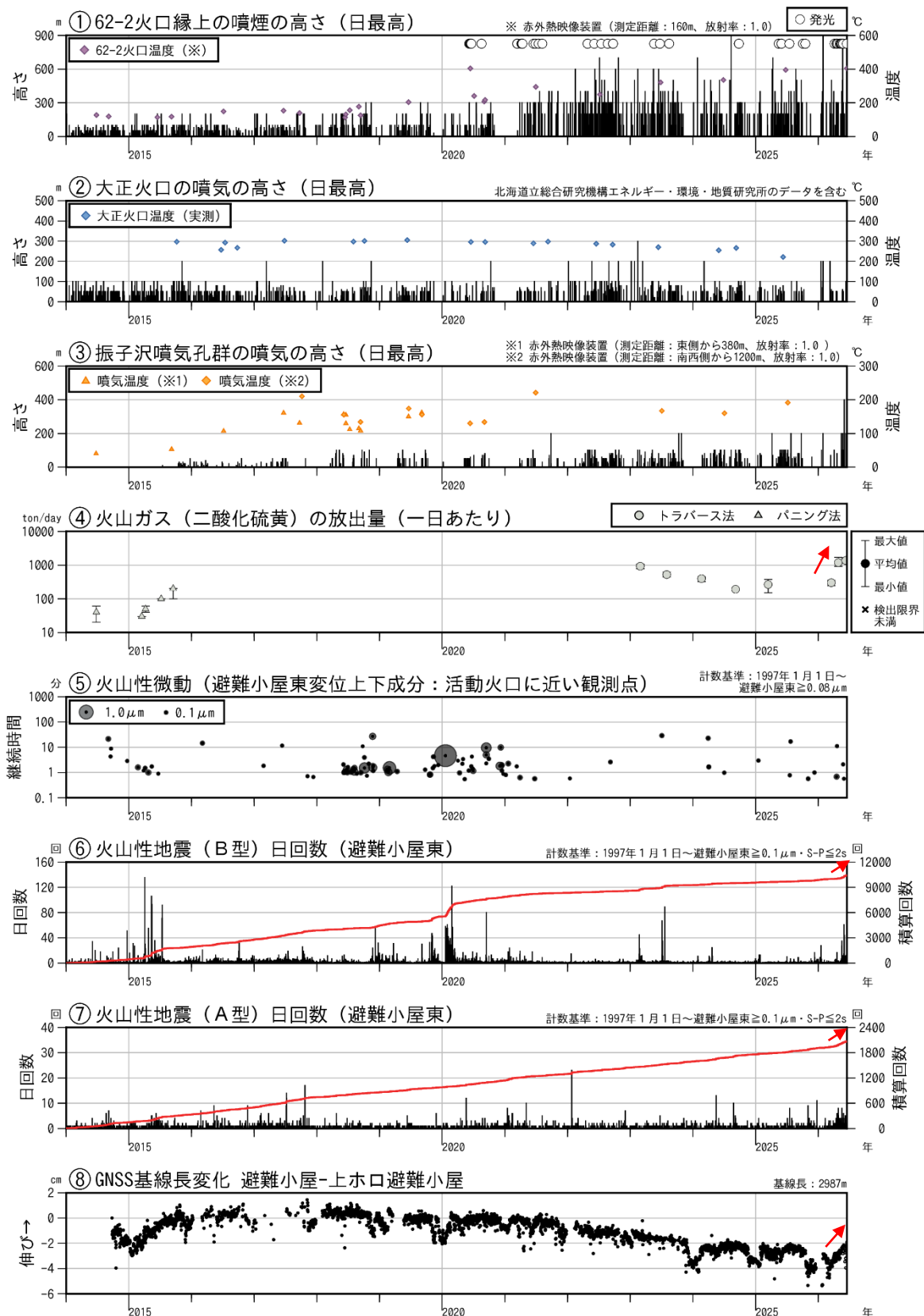


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月1日～2026年6月16日）

⑥は主に62-2火口付近のごく浅い所（図4参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、

⑦は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

⑧は観測点配置図（図11）の基線④に対応しています。白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

- ・2026年3月以降、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（④）、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（⑥⑦）、山体付近のやや深部の膨張を示すGNSS基線の伸び（⑧）が認められています（赤矢印）。

火山活動解説資料
令和8年6月18日11時10分

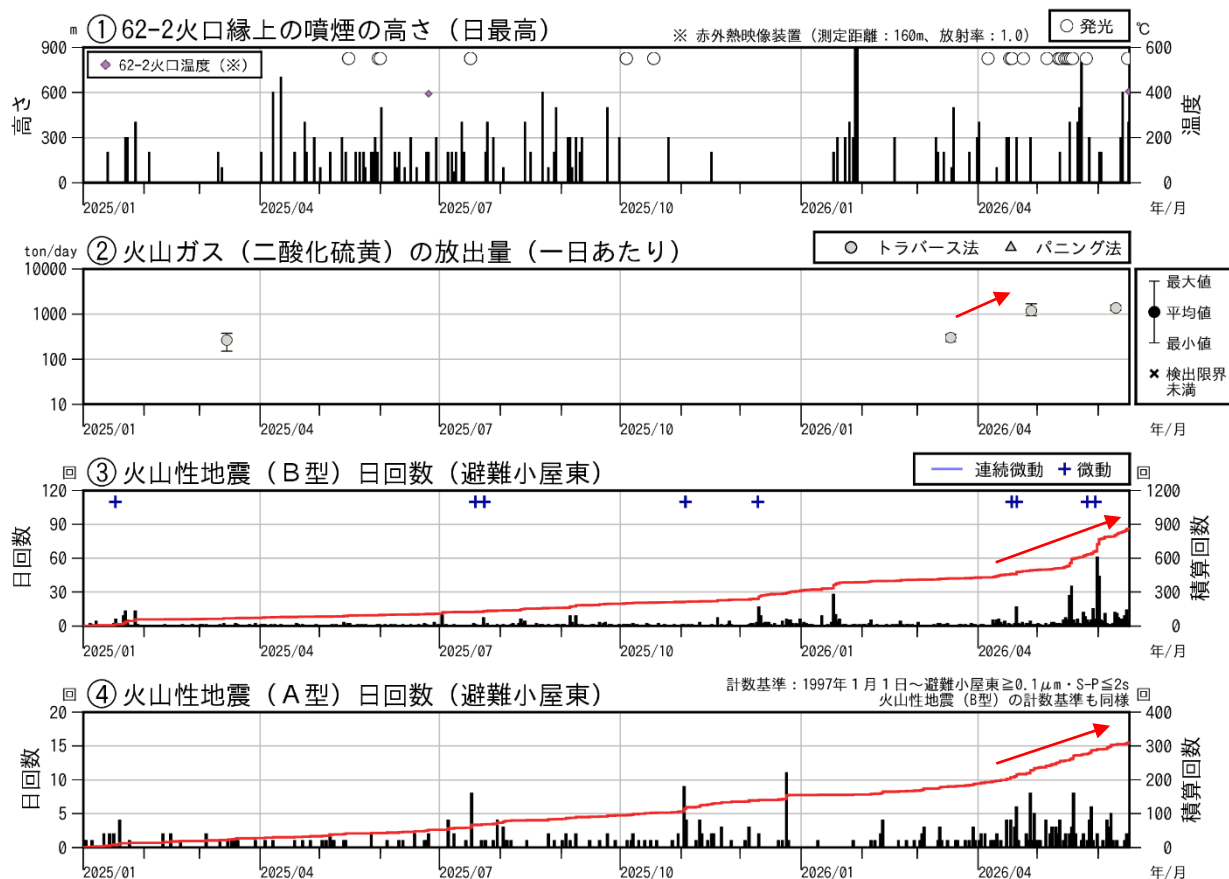


図3 十勝岳 火山活動経過図（2025年1月1日～2026年6月16日）

②は気象庁による観測結果のみを示します。

③は主に 62-2 火口付近のごく浅い所（図4参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、

④は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

- ・2026年3月以降、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（②）、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（③④）が認められています（赤矢印）。

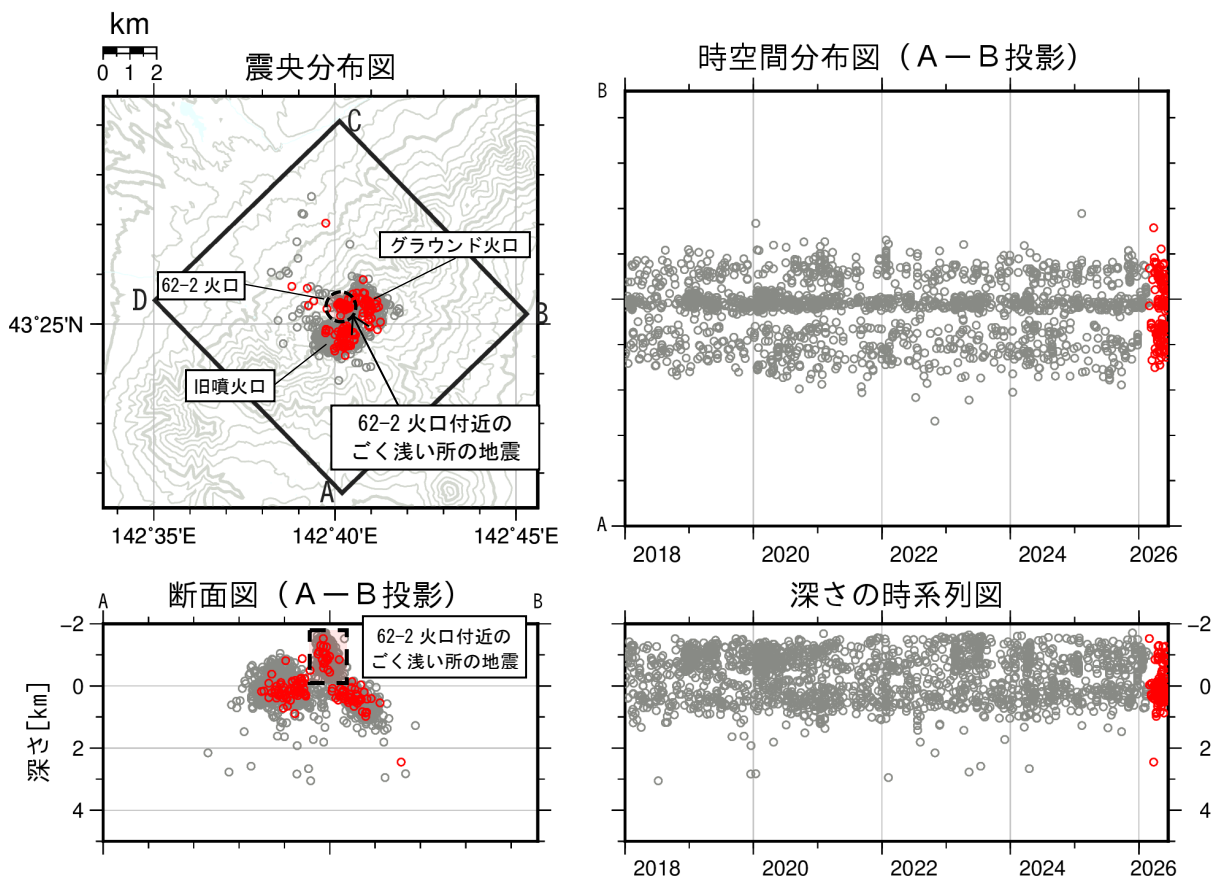


図4 十勝岳 火山性地震の震源分布 (2018年1月1日～2026年6月16日)

○ : 2018年1月～2026年2月の震源 ○ : 2026年3月以降の震源

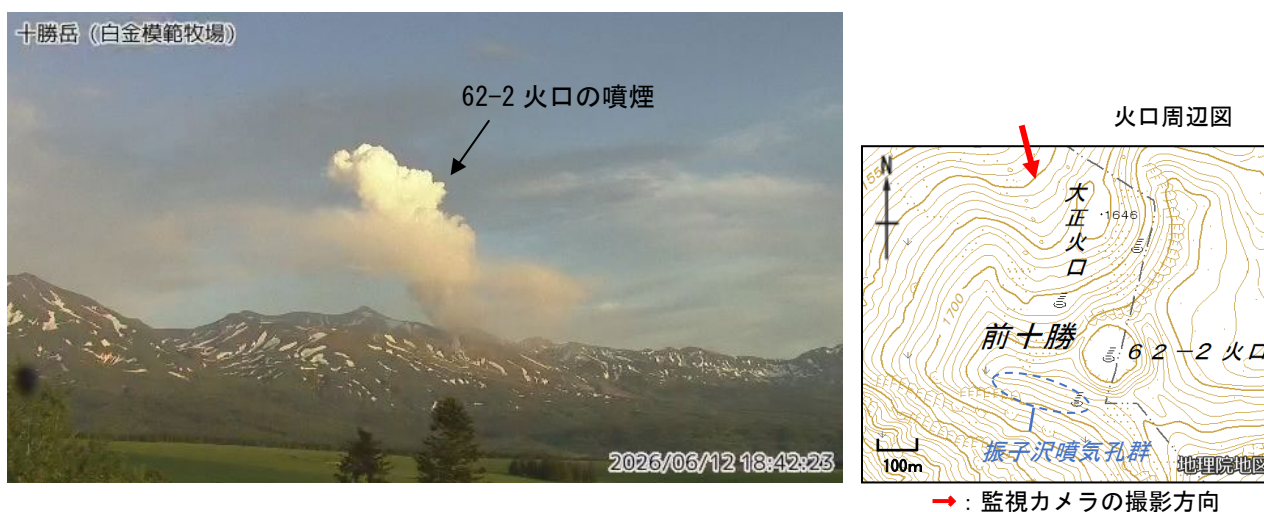
図5 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況 (白金模範牧場監視カメラによる) 及び火口周辺図
・62-2火口の噴煙は、5月以降さらに高く上がる日も時折みられており、6月12日には一時的に火口縁上1,500mまで上がりました。



図6 十勝岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）



図7 十勝岳 62-2火口内の状況（図6の①から撮影）

- ・ 62-2火口内では、高温の火山ガスが活発に噴出しており、噴気域の拡大（桃色破線）や噴出量の増加が認められました。
- ・ 2026年5月の上空からの観測で認められた火口内の湯の量は減少しており、火口底の一部（白矢印）では、繰り返し熱泥水が噴出している状況を確認しました。

火山活動解説資料
令和8年6月18日11時10分

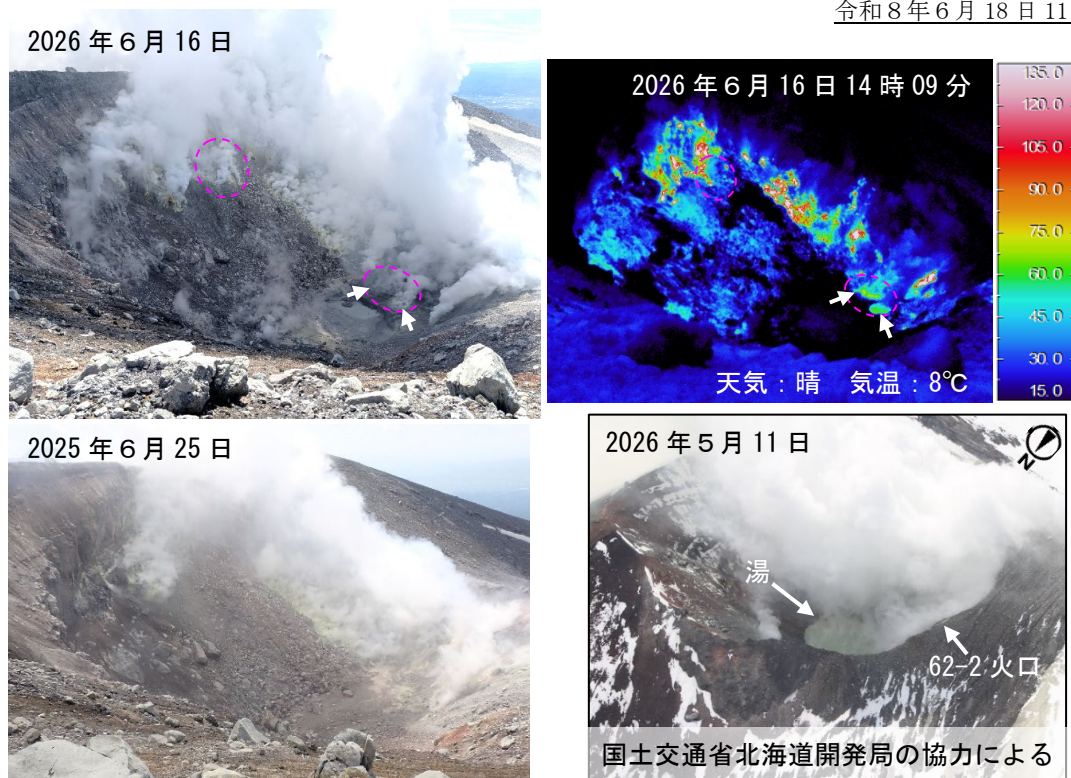


図8 十勝岳 62-2火口内の写真及び赤外熱映像装置による地表面温度分布

上：今回の現地観測の写真及び地表面温度分布（図6の①から撮影）

左下：2025年6月の現地観測による写真（図6の①から撮影）

右下：2026年5月の上空からの観測による遠景の写真（図6の②から撮影）

- ・ 62-2火口内では、高温の火山ガスが活発に噴出しており、噴気域の拡大（桃色破線）や噴出量の増加が認められました。
- ・ 2026年5月の観測で認められた火口内の湯の量は減少しており、火口底の一部（白矢印）では、繰り返し熱泥水が噴出している状況を確認しました。

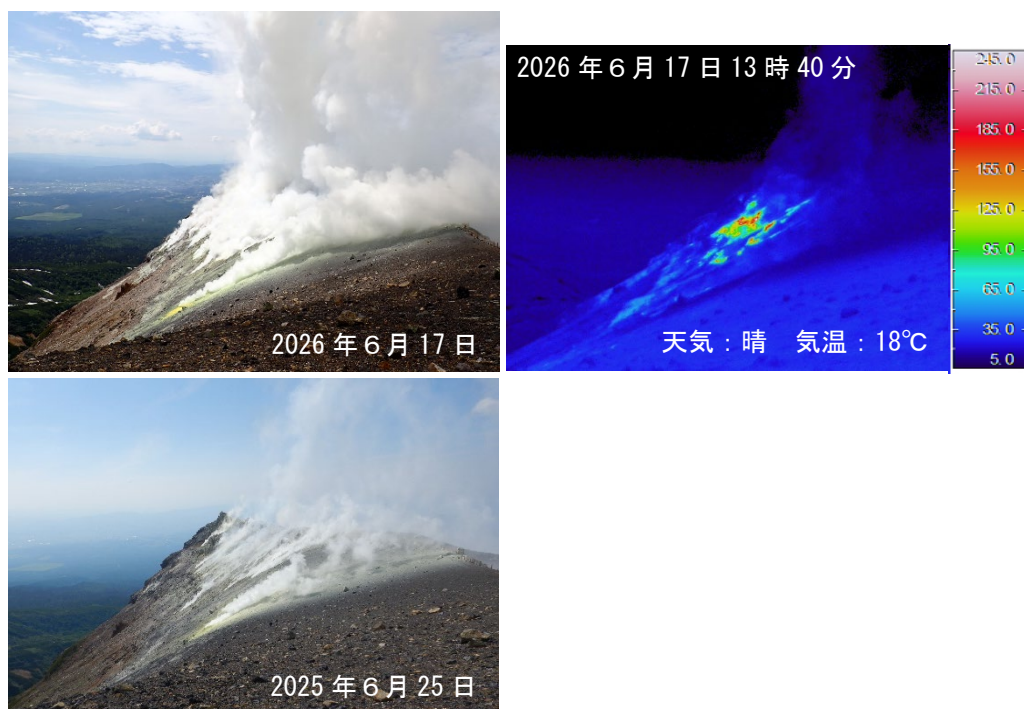


図9 十勝岳 振子沢噴気孔群の写真及び赤外熱映像装置による地表面温度分布（図6の③から撮影）

- ・ 62-2火口と隣接した振子沢噴気孔群でも、高温の火山ガスが活発に噴出していました。2025年6月の観測と比較して、噴気域の拡大や噴出量の増加が認められました。

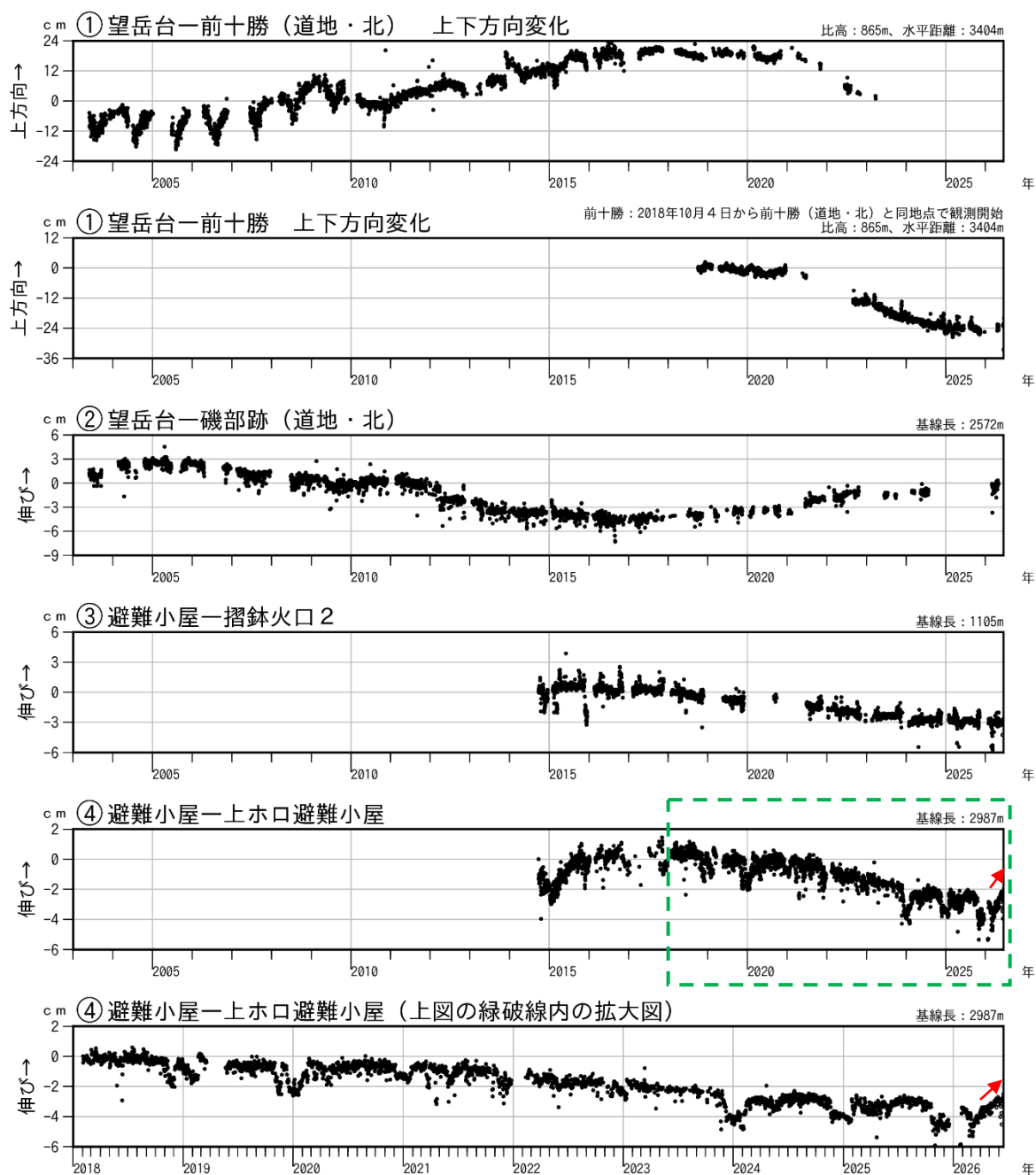


図10-1 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2026年6月16日）

グラフ①～④は観測点配置図（図11）の基線①～④に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると思われる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

各グラフの白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

- ・ 基線④では2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化（赤矢印）が認められています。

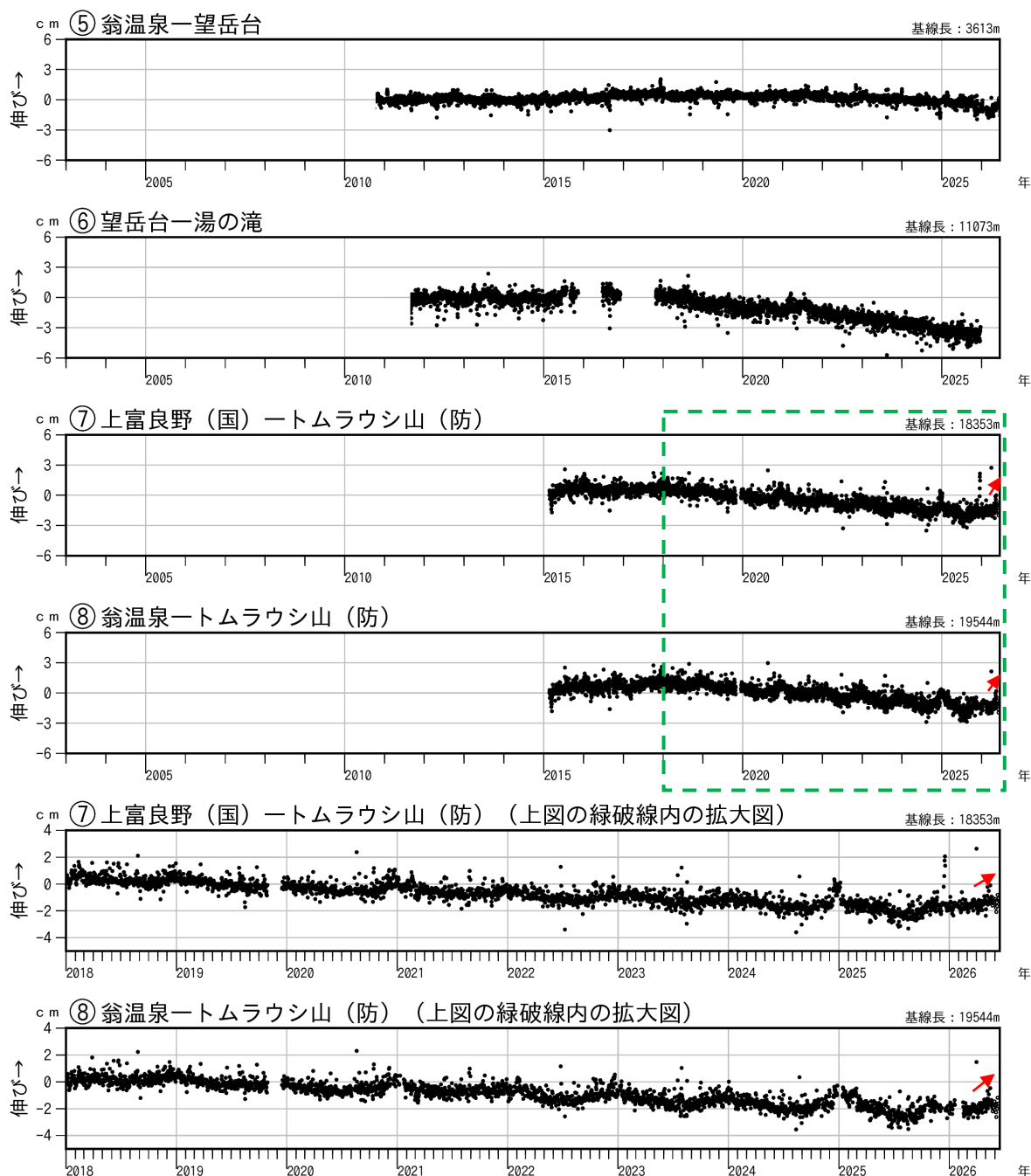


図10-2 十勝岳 GNSS連続観測による基線長変化(2003年5月～2026年6月16日)

グラフ⑤～⑧は観測点配置図(図11)の基線⑤～⑧に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。

各グラフの白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

- ・ 基線⑦⑧では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いていましたが、2026年3月頃からは伸長傾向に転じています※(赤矢印)。これらの基線の伸びは、山体付近のやや深部の膨張を示していると考えられます。

※ 例年8月頃から12月頃には同程度の伸びが認められますが、これは大気の状態変化の影響によるみかけ上の変化と考えられます。2026年3月頃からは、これらとは異なる伸びが認められています。

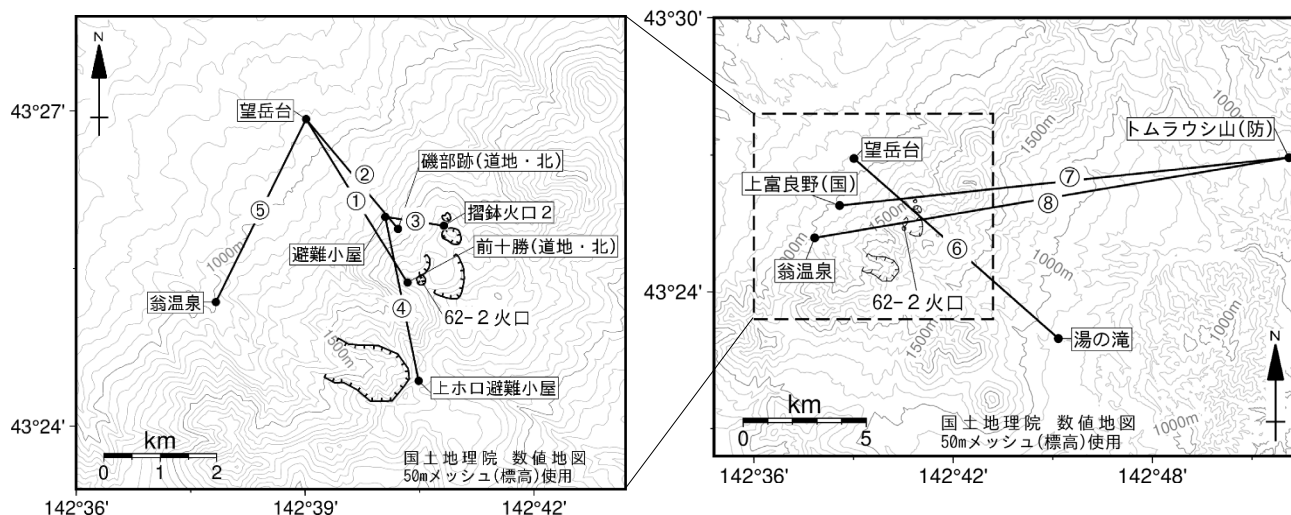
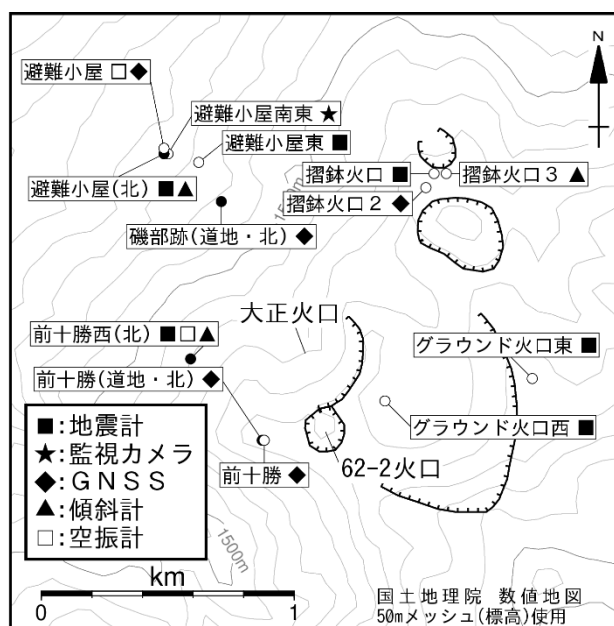
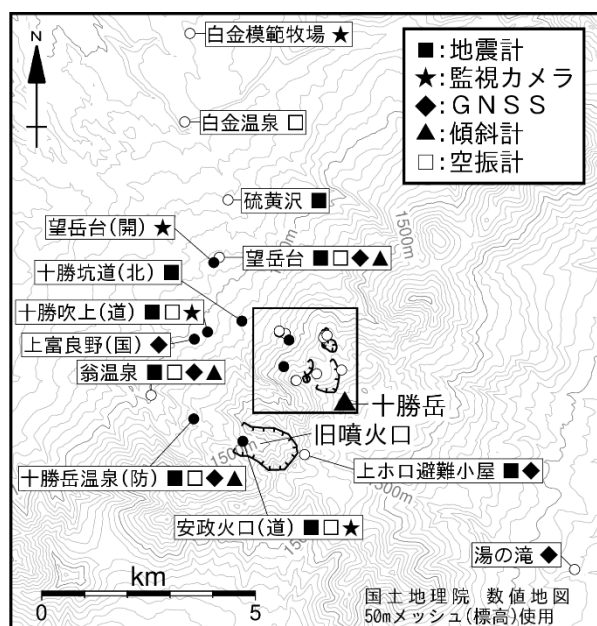


図11 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図

図中の基線④は図2のグラフ⑧に対応しています。

図中の基線①～⑧は図10のグラフ①～⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。
 (開):国土交通省北海道開発局、(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道、
 (道地):地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所

図12 十勝岳 観測点配置図

十勝岳 最近の火山活動経過の補足

十勝岳の火山活動解説資料（令和8年5月）の補足として本資料を作成した。

十勝岳では、2026年3月以降、山体やや深部の膨張を示すと考えられる GNSS 基線の変化が観測されている。4月以降、62-2 火口付近浅部の B 型地震及びその周辺の A 型地震活動がやや高まり、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、同火口周辺の熱活動のさらなる高まりが観測されている。

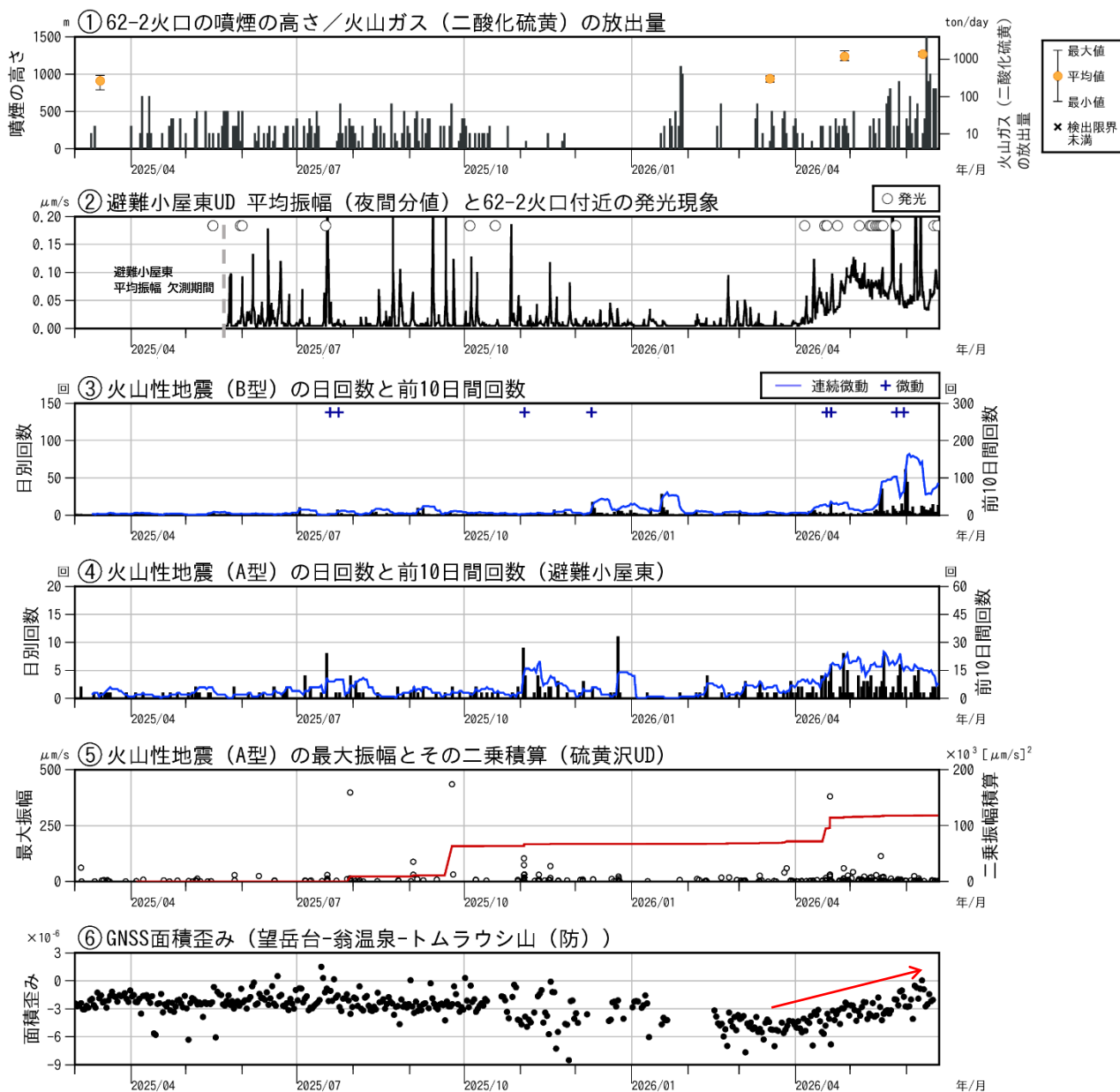


図1 十勝岳 主要な観測データの経過図（2025年4月～2026年6月18日）

- ・②は夜間の平均振幅分値のうち毎時下位5%を抽出してプロットしている。
- ・⑥は、望岳台、翁温泉、トムラウシ山（防）の3点（位置関係は図2参照）による面積歪みの変化を示している。

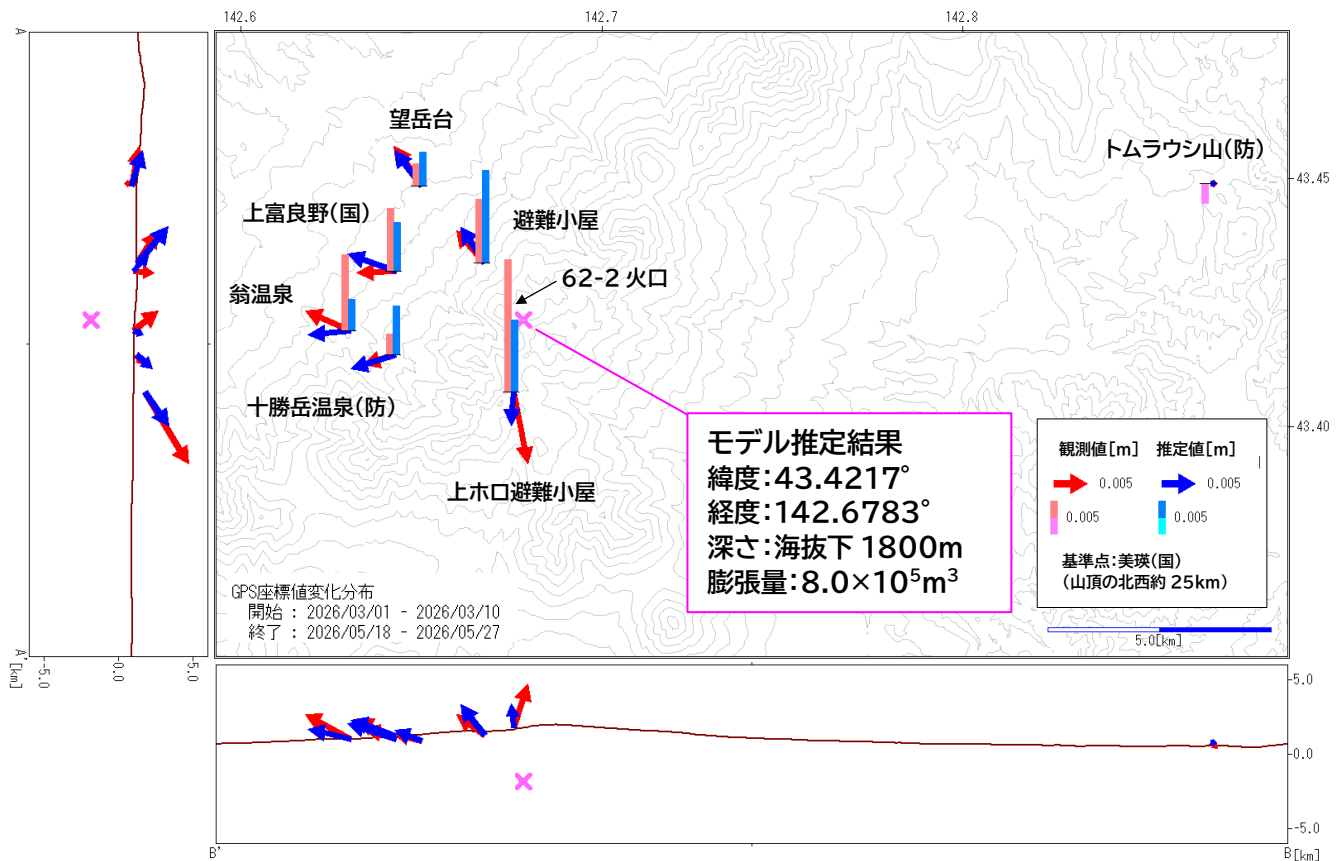


図2 十勝岳 GNSS連続観測による2026年3月～5月の地殻変動とモデル推定結果

茂木モデルを仮定し、グリッドサーチにより美瑛(国)と山体周辺の観測点の差分を説明する位置、体積変化量を推定した。

使用した差分値はテクトニックな広域変動等の影響を受けていると考えられる一次トレンド及び季節変動成分をそれぞれ除去している。

データのばらつきを基に、モデル推定の誤差評価における重み係数として水平変位に1.0、上下変位に0.5を与えた。

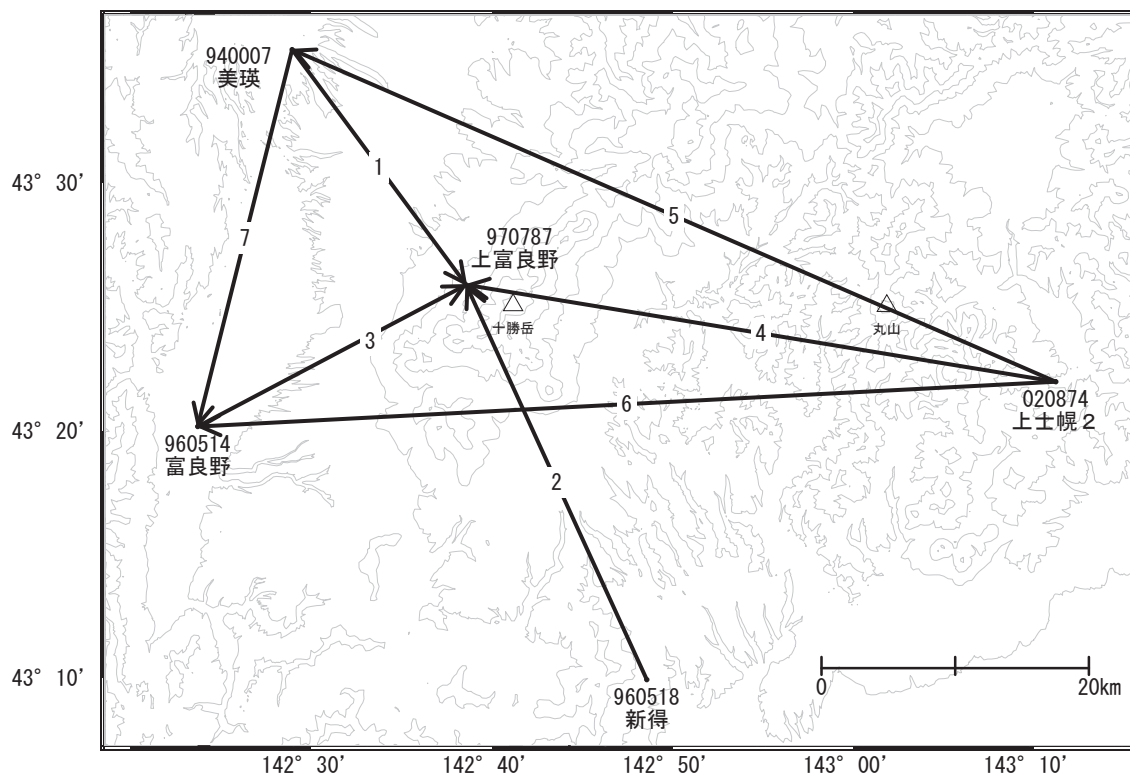
- ・2026年3月～5月間の差分から、山体直下の深さ(海拔下)1.8km付近に $8.0 \times 10^5 \text{m}^3$ 程度の膨張量を持つ膨張源が推定される。

十勝岳周辺の地殻変動

—GEONET(電子基準点等)による連続観測結果—

「上士幌2」－「上富良野」等の基線で、2026年3月末頃からわずかな伸びが見られます。

十勝岳周辺 GNSS連続観測基線図

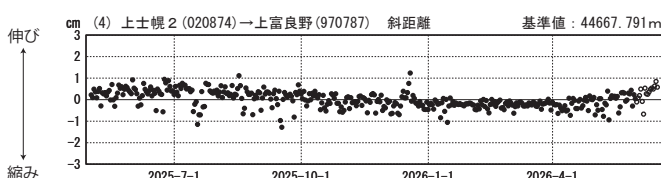
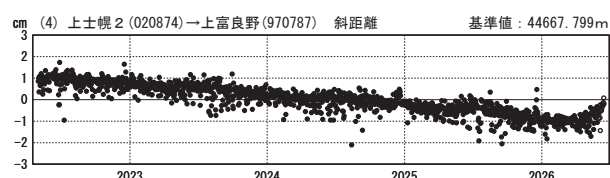
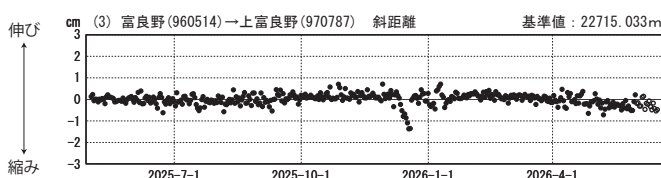
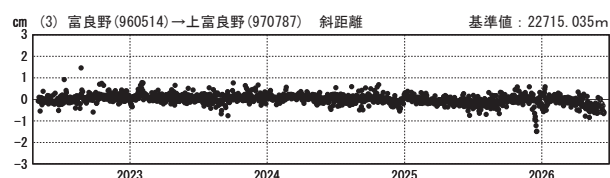
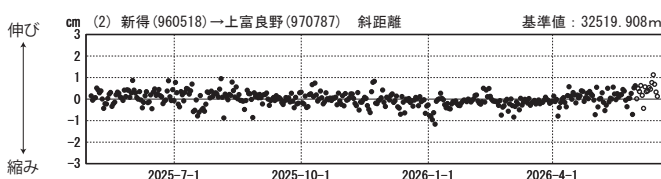
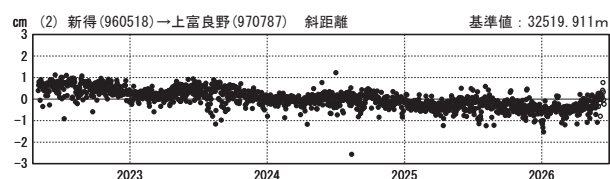
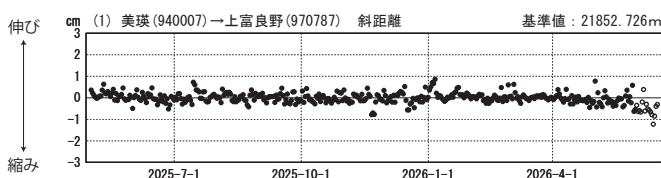
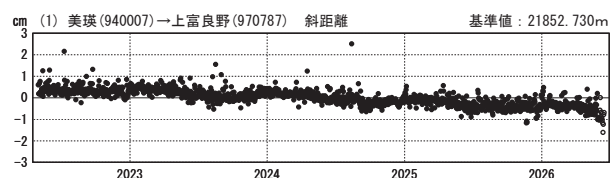


基線変化グラフ

基線変化グラフ

期間：2022-05-01～2026-06-15 JST

期間：2025-05-01～2026-06-15 JST



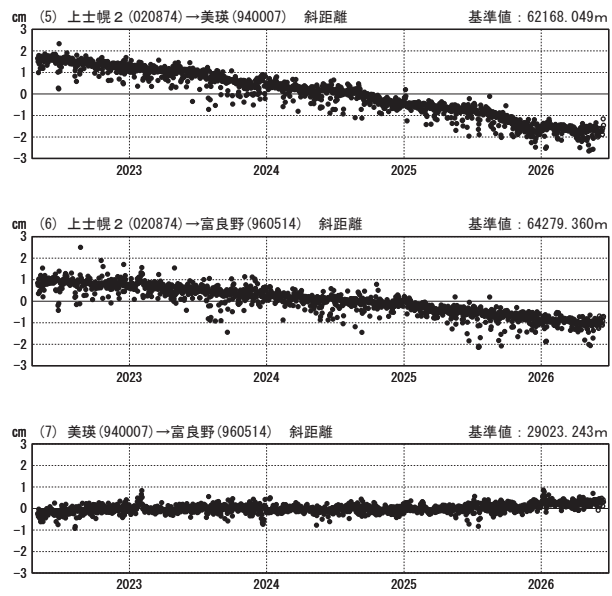
●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

国土地理院

十勝岳

基線変化グラフ

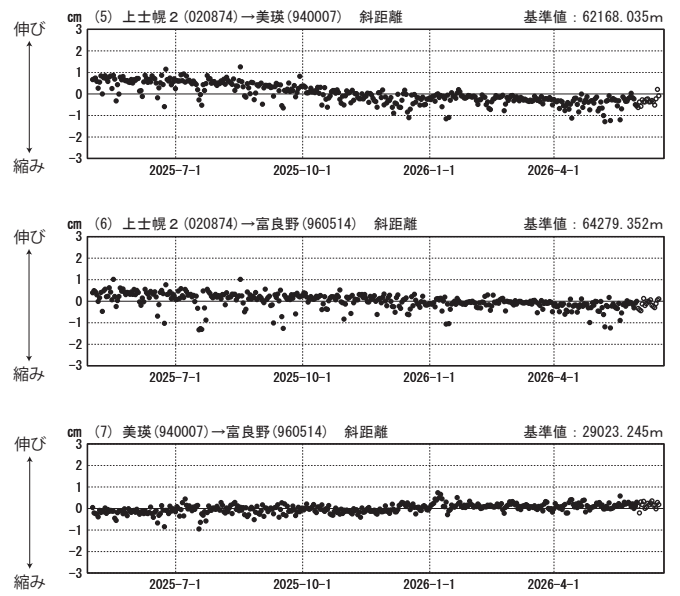
期間：2022-05-01～2026-06-15 JST



●---[F5.1:最終解] ○---[R5.1:速報解]

基線変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-06-15 JST



国土地理院

草津白根山の火山活動解説資料（令和8年5月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

白根山（湯釜付近）

白根山（湯釜付近）では、地震活動は3月頃から低調な状態で推移しています。湯釜付近の地下浅部の膨張を示すと考えられる緩やかな地殻変動や地下の温度上昇を示唆する全磁力の変化は、4月上旬には概ね停滞しています。噴気の化学成分の濃度比についても、火山活動の低下を示唆する変化が認められています。

これらのことから、白根山（湯釜付近）では、火山活動が静穏時の状態に戻る傾向が明瞭になっており、湯釜火口から概ね1kmの範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと判断し、15日に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

湯釜火口から概ね500mの範囲では、ごく小規模な火山灰等の噴出の可能性があります。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。また、湯釜火口周辺では火山ガスの噴出がみられ、その周辺のくぼ地や谷地形などでは高濃度の火山ガスが滞留することがありますので注意してください。

○ 活動概況

湯釜付近の火山活動は静穏時の状態に戻る傾向が明瞭になっていますが、近年、湯釜火口への熱水や火山ガスの一時的な供給量の増加に伴うと考えられる地震の増加や傾斜変動などを繰り返していることから、火山活動が急変する可能性もあると考えられます。

・ 噴気など表面現象の状況（図1、図3-①）

逢ノ峰山頂監視カメラ（湯釜の南約1km）による観測では、湯釜火口北側噴気地帯の噴気は高さ100m以下で推移しました。

水釜北東2監視カメラによる観測では、水釜北東斜面の一部で、2024年7月頃から12月頃にかけて、周辺の非地熱域と比較して温度の高い箇所がみられていました。2025年7月以降、再び温度の高まりがみられていましたが、現在は不明瞭となっています。

・ 火山ガスの状況（図2）

水釜北東に設置している多成分火山ガス観測装置では、2024年6月頃から噴気の二酸化炭素と硫化水素の濃度比に上昇傾向が認められ、その後は機器障害により欠測となる2024年11月まで概ね横ばいで推移していました。機器障害復旧及びセンサー交換を行った2025年6月18日以降も、濃度比は2024年6月以前より高い値で推移し、7月頃から濃度比の上昇が認められていました。

2025年10月中旬以降、濃度比の上昇は概ね停滞し、2026年初め頃から濃度比は低下傾向となっています。

・ 地震や微動の発生状況（図3②～⑥、図4、図11）

湯釜付近を震源とする火山性地震は、今期間は少ない状態で経過しました。

火山性地震の震源は、主に湯釜付近の深さ－1km（海拔1km）付近に分布しました。

今期間、火山性微動は観測されていません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧できます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和8年6月分）は令和8年7月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、関東地方整備局、草津町、東京大学地震研究所、東京科学大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『基盤地図情報』『数値地図 50mメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・地殻変動の状況（図5～7）

湯釜周辺に東京科学大学が設置している傾斜計では、2024年6月頃から湯釜付近浅部の膨張を示すと考えられる緩やかな傾斜変動が認められていました。2025年6月頃から湯釜東観測点の変動レートが増大し、湯釜西及び湯釜南観測点でも変動が認められていました。2025年10月中旬以降、湯釜付近浅部の膨張を示すと考えられる傾斜変動は鈍化しながらも継続していましたが、2026年4月上旬には概ね停滞しています。

GNSS 連続観測では、白根山の西側を挟む基線で2025年7月頃から認められていたわずかな伸びは、10月以降鈍化し、2026年1月頃から停滞しています。

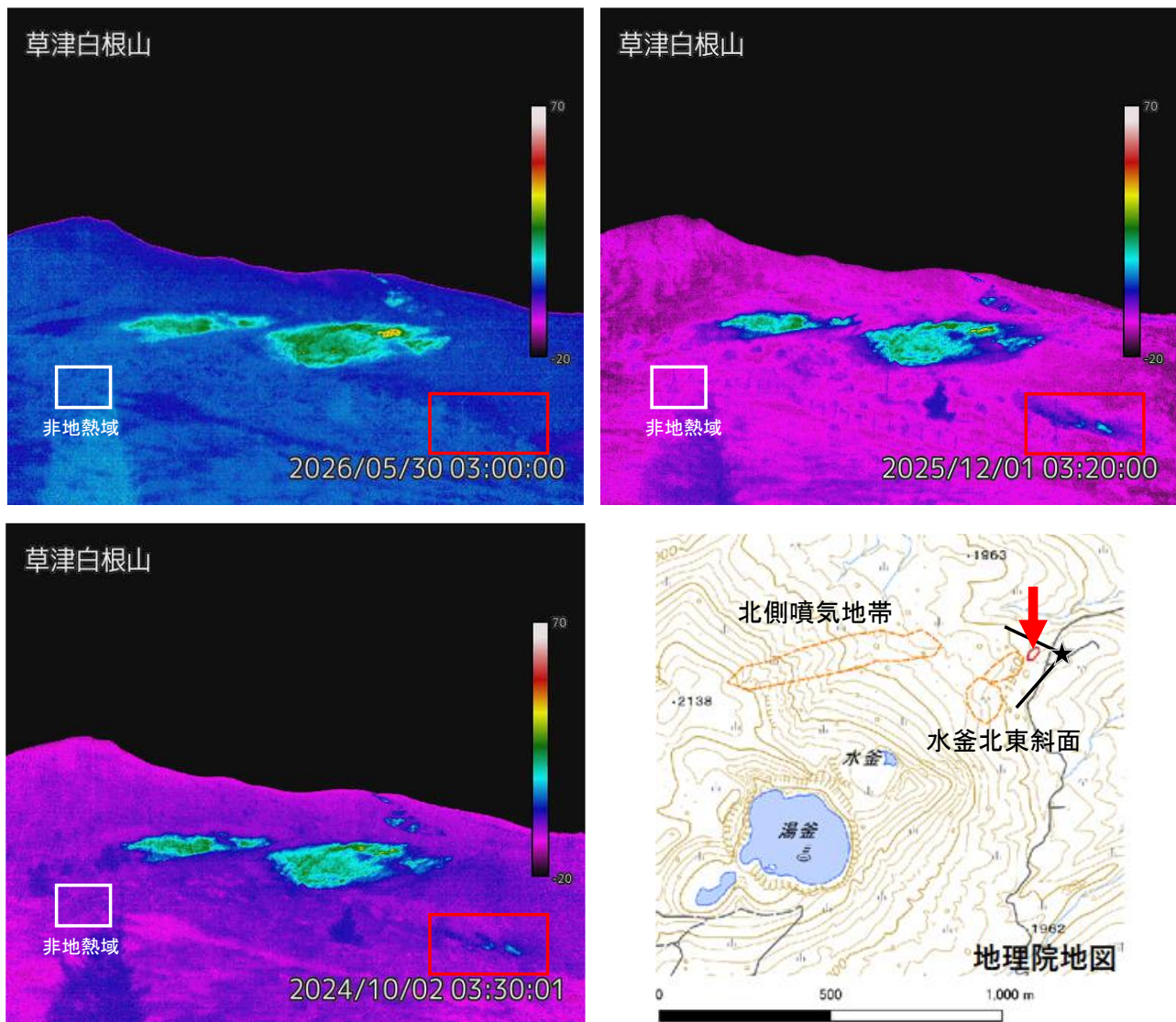
・全磁力変化の状況（図8～10）

全磁力連続観測では、湯釜南東の観測点（Q点）で、2025年に入り湯釜付近の地下の温度上昇を示唆するわずかな全磁力の減少が認められていましたが、11月以降停滞しています。また、湯釜南の観測点（P点）においても2025年7月頃から全磁力の減少が認められていましたが、11月以降鈍化し、2026年4月上旬には概ね停滞しています。



図1－1 草津白根山（白根山（湯釜付近）） 湯釜付近の状況
奥山田監視カメラは、機器障害のため2026年5月1日以降欠測となっています。

- ・湯釜火口北側噴気地帯の噴気は100m以下で推移し、特段の変化は認められませんでした。



左上、右上及び左下の図はそれぞれ5月30日、2025年12月1日及び2024年10月2日の夜間における赤外熱映像です。

赤枠は、温度上昇が認められる領域に対応し、白枠は非地熱域（地熱域との比較のため設定）を示します。

右下の地図の橙色で囲まれた領域は湯釜北側噴気地帯及び水釜北東の地熱域に対応し、矢印で示す赤枠は、温度上昇が認められる領域に対応します。星印は水釜北東2監視カメラの位置を示します。

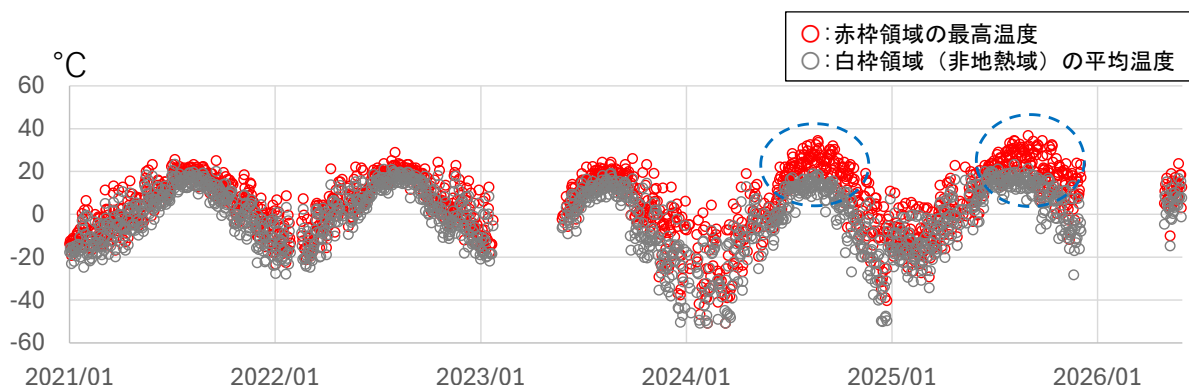


図1-2 草津白根山（白根山（湯釜付近）） 水釜北東の地熱域の状況

（2021年1月1日～2026年5月31日）

- ・水釜北東斜面の一部（上図の赤枠領域）で、2024年7月頃からみられていた周辺の非地熱域と比較して温度の高い箇所は、12月頃から次第に不明瞭となっていました。2025年7月以降、再び温度の高まりが認められていましたが、現在は不明瞭となっています（下図の青色破線内）。
- ・その他の領域では、目立った変化は認められていません。

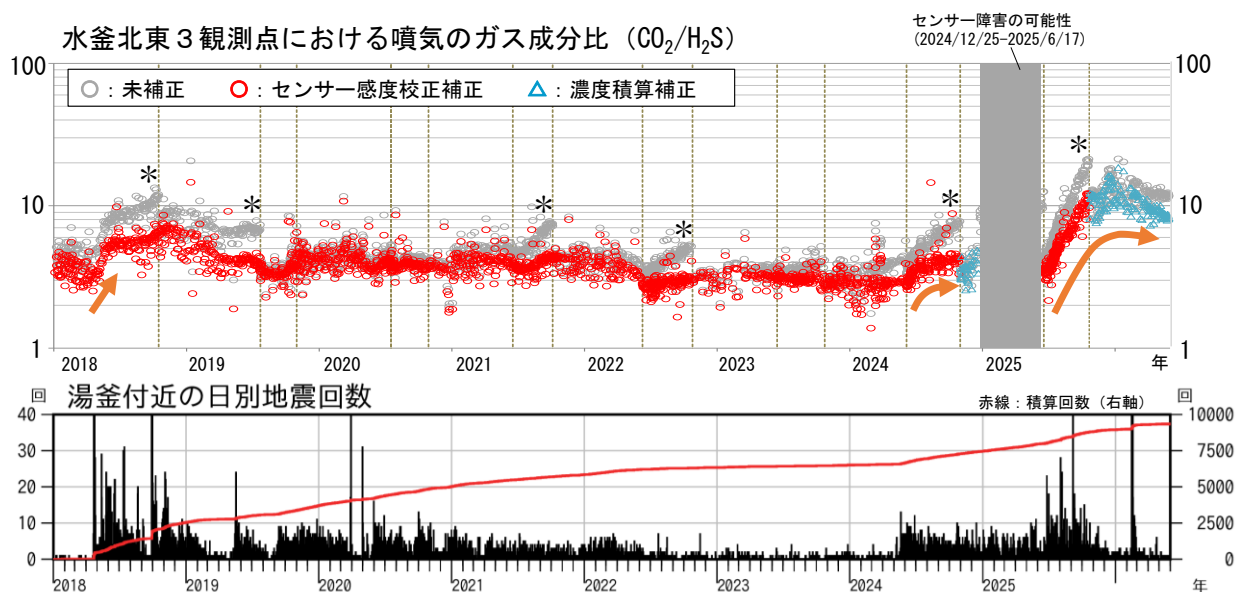


図2 草津白根山（白根山（湯釜付近）） 火山ガス観測結果（2018年1月～2026年5月31日）

- ・上図は水釜の北東に設置した多成分火山ガス観測装置（水釜北東3観測点）で観測された二酸化炭素と硫化水素の濃度比の時間変化を示しています。
- ・グラフ中の縦破線はセンサー交換日を示しており、赤丸で示す値は、センサーの感度校正をもとに補正しています。校正補正データが得られていない期間については、 H_2S センサーが暴露した濃度の積算をもとに、センサーの感度低下を推定して補正したデータを示しています（水色三角）。
- ・一方、未補正データ（灰色丸）は、センサーの感度変化に対する補正を行っていないため、 H_2S センサーの感度低下による影響を含んでいます（センサー交換日からの時間の経過とともに H_2S 濃度が低下、 $\text{CO}_2/\text{H}_2\text{S}$ 濃度比は増加する傾向：図中の*で示す変化）。
- ・地震回数が急増する等、火山活動の高まりがみられた2018年には、二酸化炭素 (CO_2) と硫化水素 (H_2S) の濃度比に上昇が認められています。
- ・2024年6月頃から二酸化炭素 (CO_2) と硫化水素 (H_2S) の濃度比に上昇傾向が認められ、その後は機器障害により欠測となる2024年11月まで、濃度比は概ね横ばいで推移していました。
- ・機器障害復旧及びセンサー交換を行った2025年6月18日以降も、濃度比は2024年6月以前より高い値で推移し、7月頃から濃度比の上昇が認められていました。2025年10月中旬以降、濃度比の上昇は概ね停滞し、2026年初め頃から濃度比は低下傾向となっています。

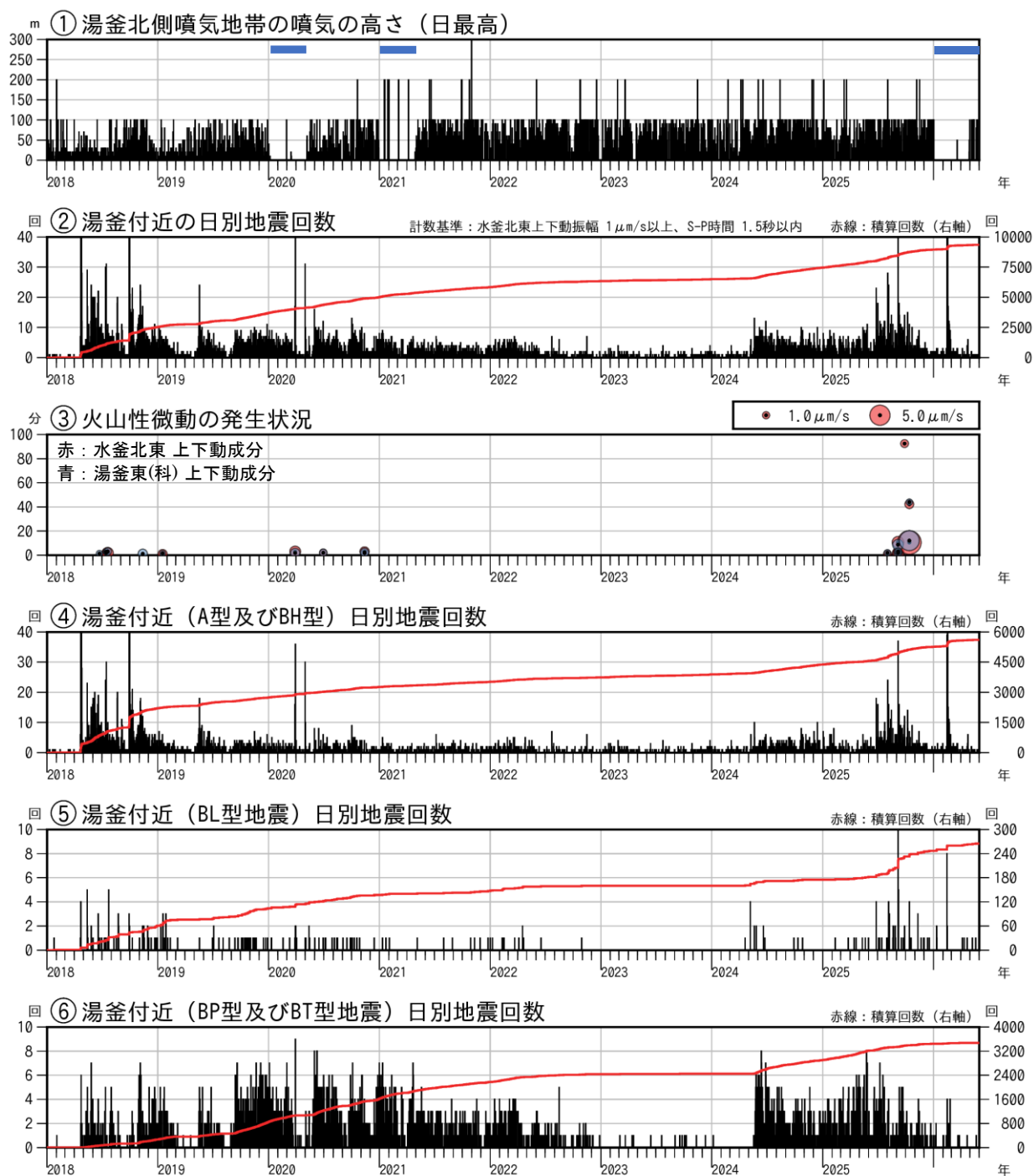


図3 草津白根山（白根山（湯釜付近）） 火山活動経過図（2018年1月1日～2026年5月31日）

上図①の青線で示す期間については、一部の観測機器で障害が発生したため、100m未満の噴気については観測できていない場合があります。

赤線は地震回数の積算を示しています。火山性地震の種類については図11を参照してください。

- ・今期間、湯釜火口北側噴気地帯の噴気は100m以下で推移しました。
- ・湯釜付近を震源とする火山性地震は、今期間は少ない状態で経過しました。
- ・今期間、火山性微動は観測されませんでした。

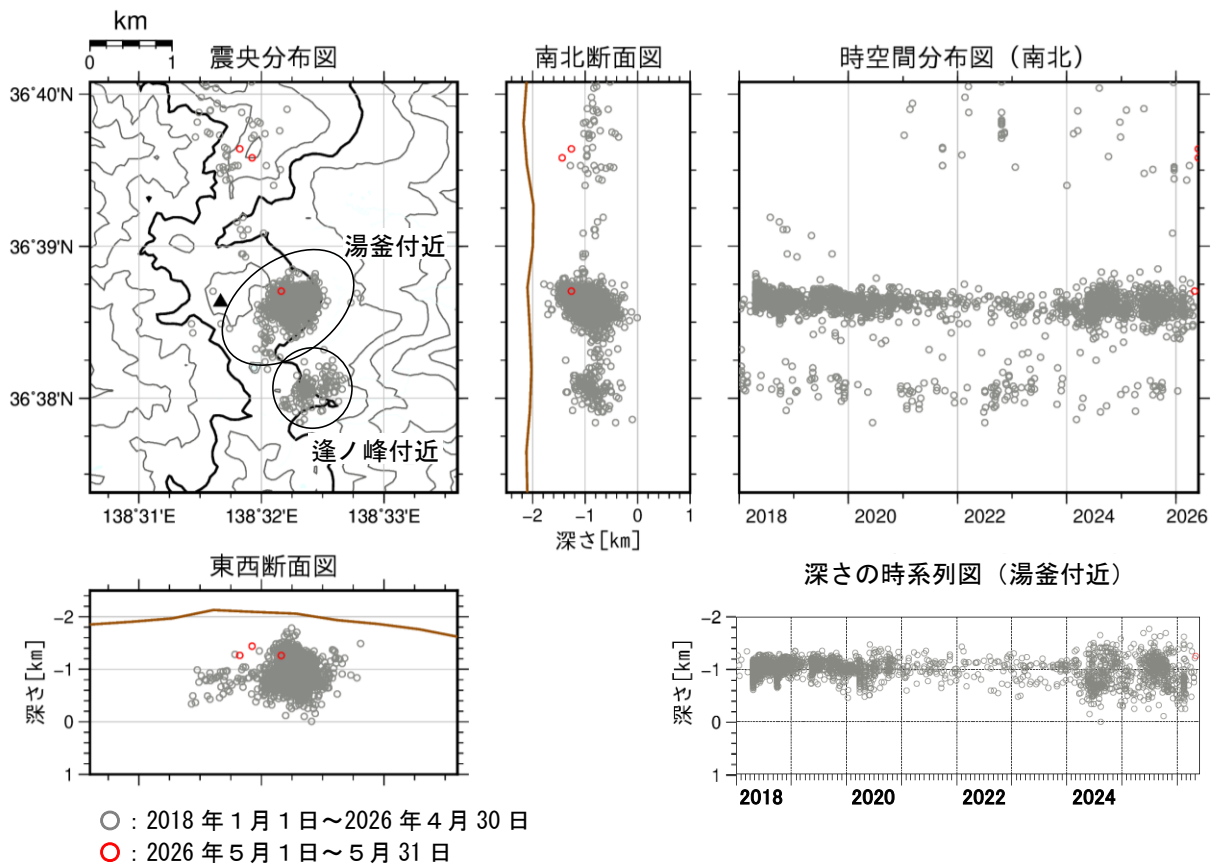


図4 草津白根山 震源分布図（2018 年 1 月 1 日～2026 年 5 月 31 日）

2019 年 11 月 8 日以降の震源分布は、震源計算に使用する観測点を新たに追加して再計算したものを示しています。

- ・ 火山性地震の震源は、主に湯釜付近の深さ－1 km（海拔 1 km）付近に分布しました。

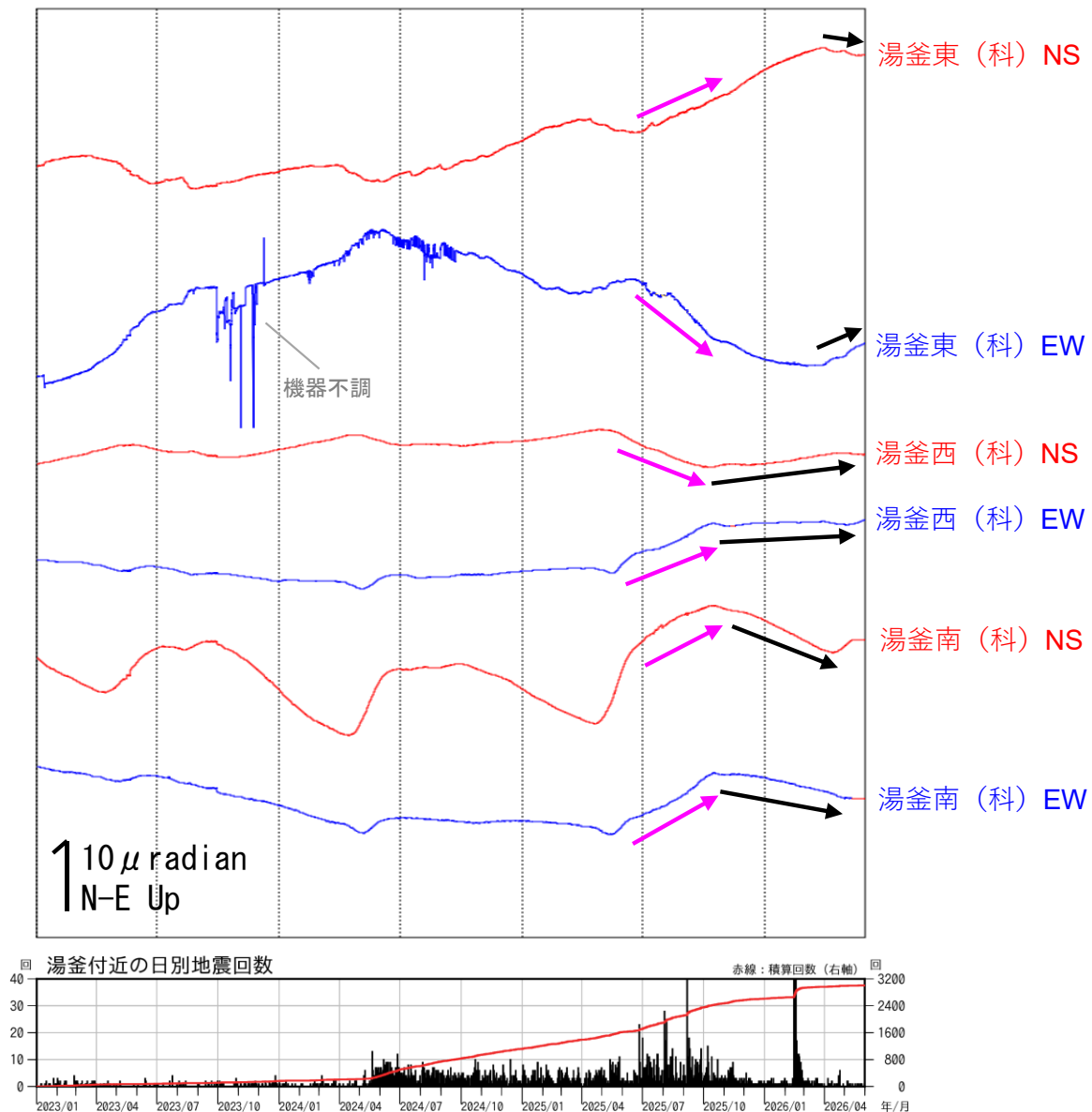


図5 草津白根山（白根山（湯釜付近）） 傾斜変動（2023年1月1日～2026年5月31日）
データは時間平均値を使用しています。（科）：東京科学大学

- ・2025年6月頃から湯釜付近浅部の膨張を示すと考えられる緩やかな傾斜変動（桃色矢印）は、2025年10月中旬以降鈍化し、2026年4月上旬には概ね停滞しています（黒矢印）。

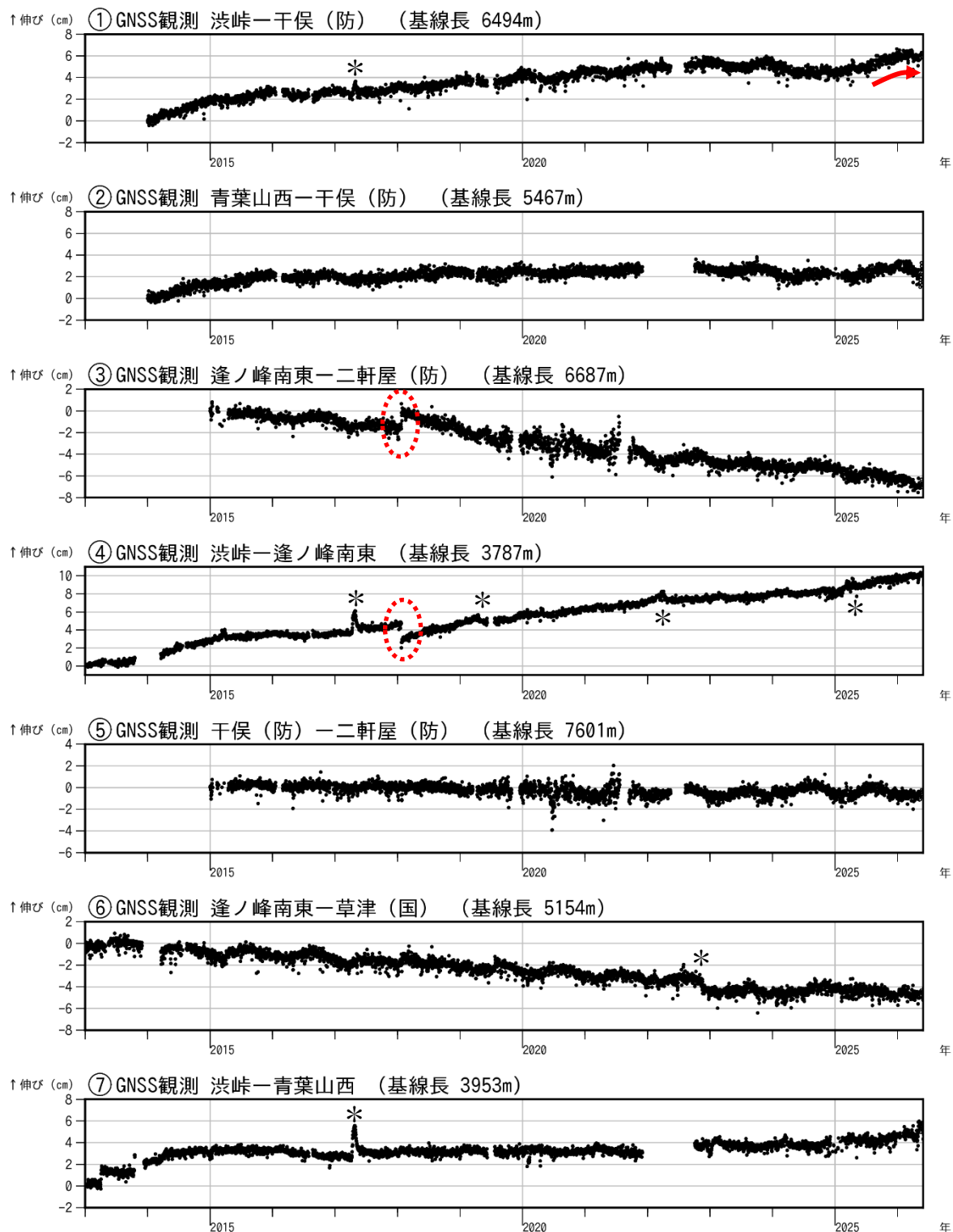


図6 草津白根山 GNSS 連続観測結果（2013年1月1日～2026年5月31日）

図中の①～⑦は図7の①～⑦と対応しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を改良しています。*の変動は、渋峠、逢ノ峰南東または草津（国）GNSS連続観測点固有の変動に対応し、火山活動によるものではないと考えられます。

- ・GNSS連続観測では、白根山の西側を挟む基線①で2025年7月頃から認められていたわずかな伸びは、10月以降鈍化し、2026年1月頃から停滞しています（赤矢印）。
- ・③④の基線では、2018年1月の本白根山噴火に伴う変化（赤色破線）が認められた後、2020年1月にかけて、噴火後の本白根山の収縮によるものと考えられる変動がみられました。

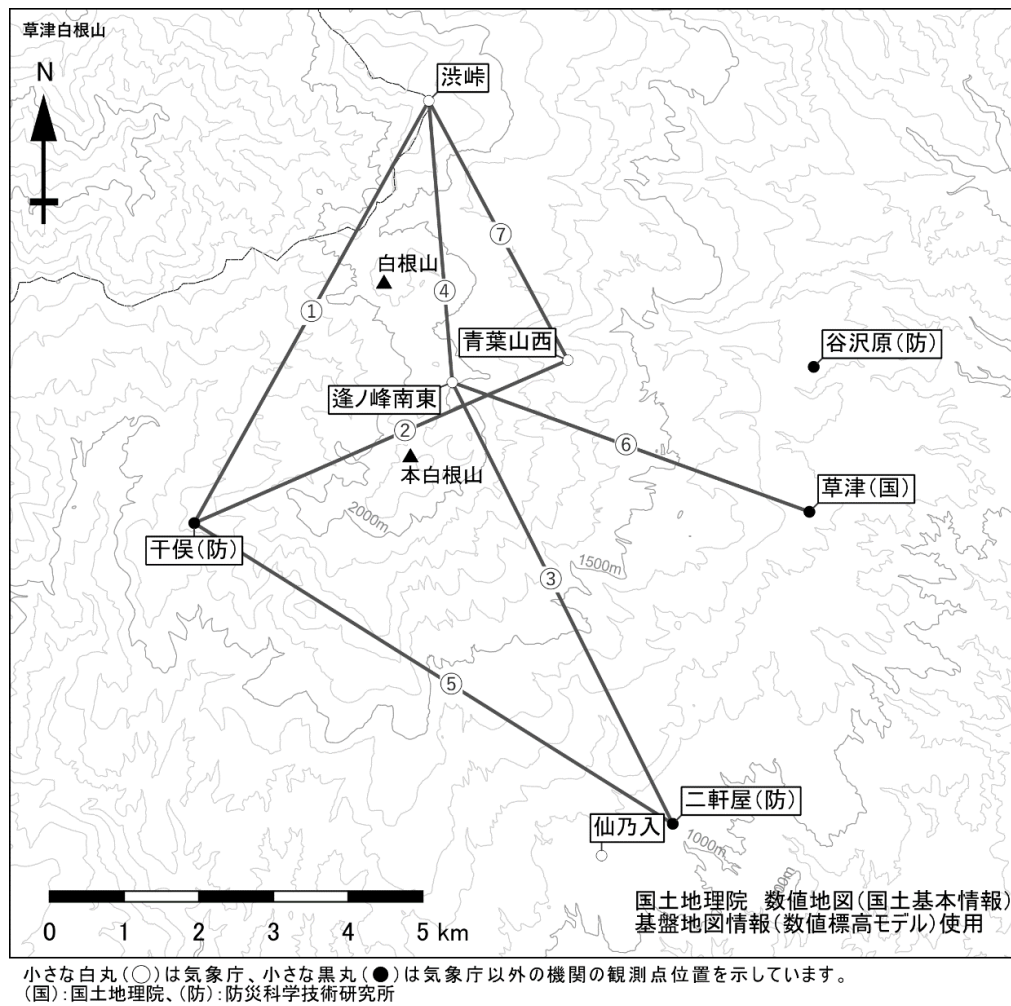


図7 草津白根山 GNSS 観測点配置図
図中の GNSS 基線は図6 及び図13 に対応しています。

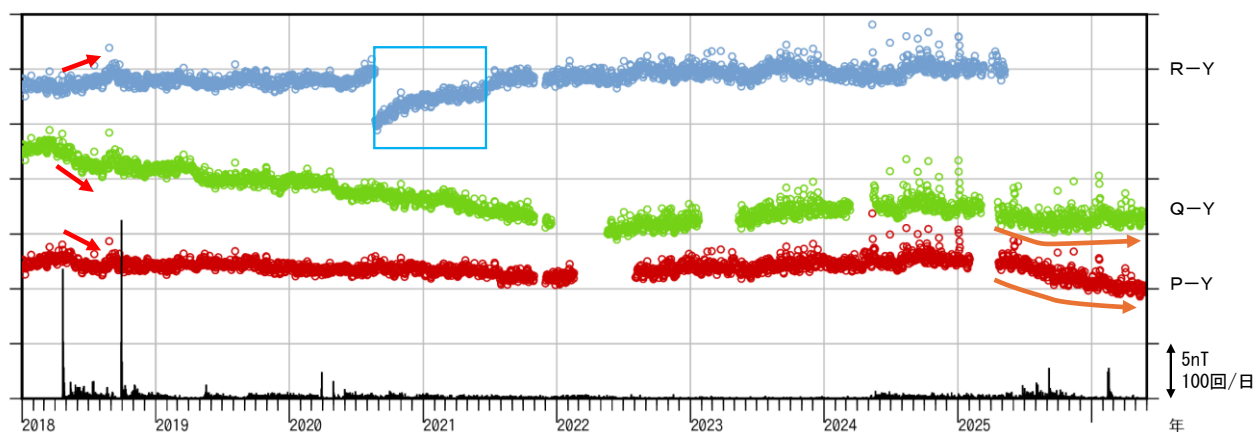


図8 草津白根山（白根山（湯釜付近））全磁力連続観測の結果

(2018年1月1日～2026年5月31日)

草津白根山から南に約60km離れた東京大学地震研究所ハケ岳地球電磁気観測所(Y)を基準とした場合の、連続観測点P、QおよびR（図9）における全磁力差の夜間（00:00～02:59(JST)）日平均値を示しています。最下段は湯釜付近で観測された日別地震回数を示しています。青枠で示す全磁力変化は、観測点周辺の土壌の磁化が落雷により一時的に変化したためであり、火山活動によるものではないと考えられます。グラフの空白部分は欠測を示しており、R観測点では2025年5月9日以降欠測となっています。

- ・2018年4月頃から7月頃にかけて観測された全磁力変動（赤矢印）、及び2018年8月から2021年末にかけて湯釜南東の観測点（Q点）で観測された緩やかな全磁力の減少は、湯釜付近の地下における温度上昇を示唆する変化と考えられます。
- ・Q点では、2025年に入り、湯釜付近の地下の温度上昇を示唆するわずかな全磁力の減少が認められていましたが、11月以降停滞しています。また、湯釜南のP点においても2025年7月頃から全磁力の減少が認められていましたが、11月以降鈍化し、2026年4月上旬には概ね停滞しています（橙矢印）。

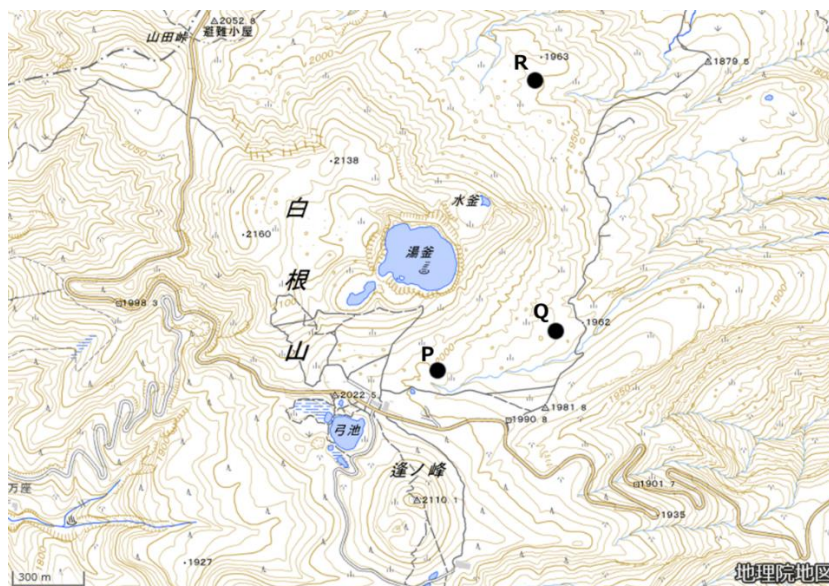


図9 草津白根山（白根山（湯釜付近）） 全磁力連続観測点配置図

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、火口直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。火口周辺で観測した全磁力の値は、南側Aでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Bでは強められて大きくなることがわかります。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

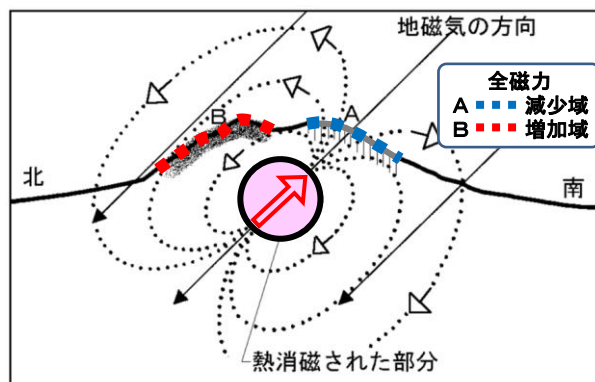
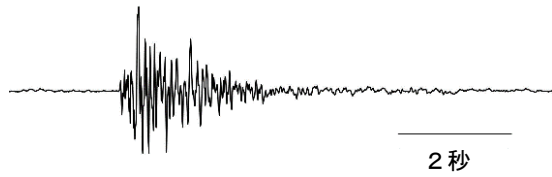


図10 熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

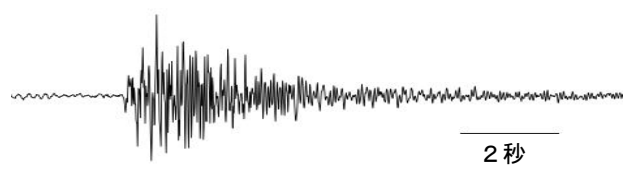
火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

観測点の全磁力変化	地下の岩石の磁化	火山体内の温度変化
北側で増加 南側で減少	消磁	上昇
北側で減少 南側で増加	帯磁	低下

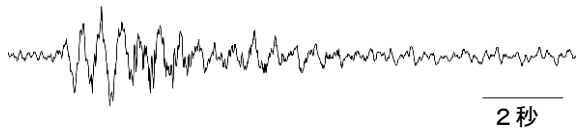
A 型地震：P, S 相が明瞭で卓越周波数は
10Hz 前後と高周波の地震



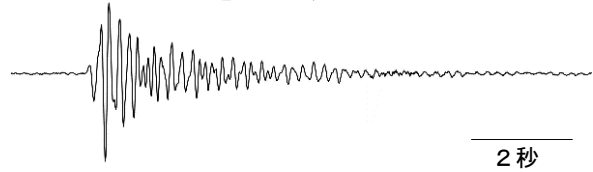
BH 型地震：P, S 相が不明瞭で卓越周波数が約 5
Hz 以上の地震



BL 型地震：P, S 相が不明瞭で卓越周波数が約 5
Hz 以下の地震



BP 型地震：ハーモニックな（調和）震動
波形を示す地震



BT 型地震：振幅の減衰が緩やかな尾長型地震
T 型地震、または N 型地震とも呼ぶ

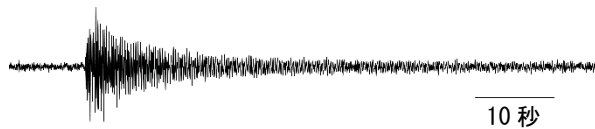


図 11 草津白根山（白根山（湯釜付近）） 主な火山性地震の特徴と波形例

本白根山

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められません。

ただし、2018年1月のように突発的に噴火が発生したことを踏まえ、今後も火口付近では、突発的な噴出に注意する必要があります。地元自治体の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴気など表面現象の状況（図12）

今期間、噴気は観測されていません。

・ 地震や微動の発生状況（図13-①～②、図14）

本白根山火口及び逢ノ峰付近を震源とする地震は、少ない状態で経過しました。

火山性微動は観測されていません。

・ 地殻変動の状況（図13-③）

地殻変動観測では、火山活動によるとみられる変動は認められませんでした。



図12 草津白根山（本白根山） 本白根山付近の状況（草津監視カメラ、30日）

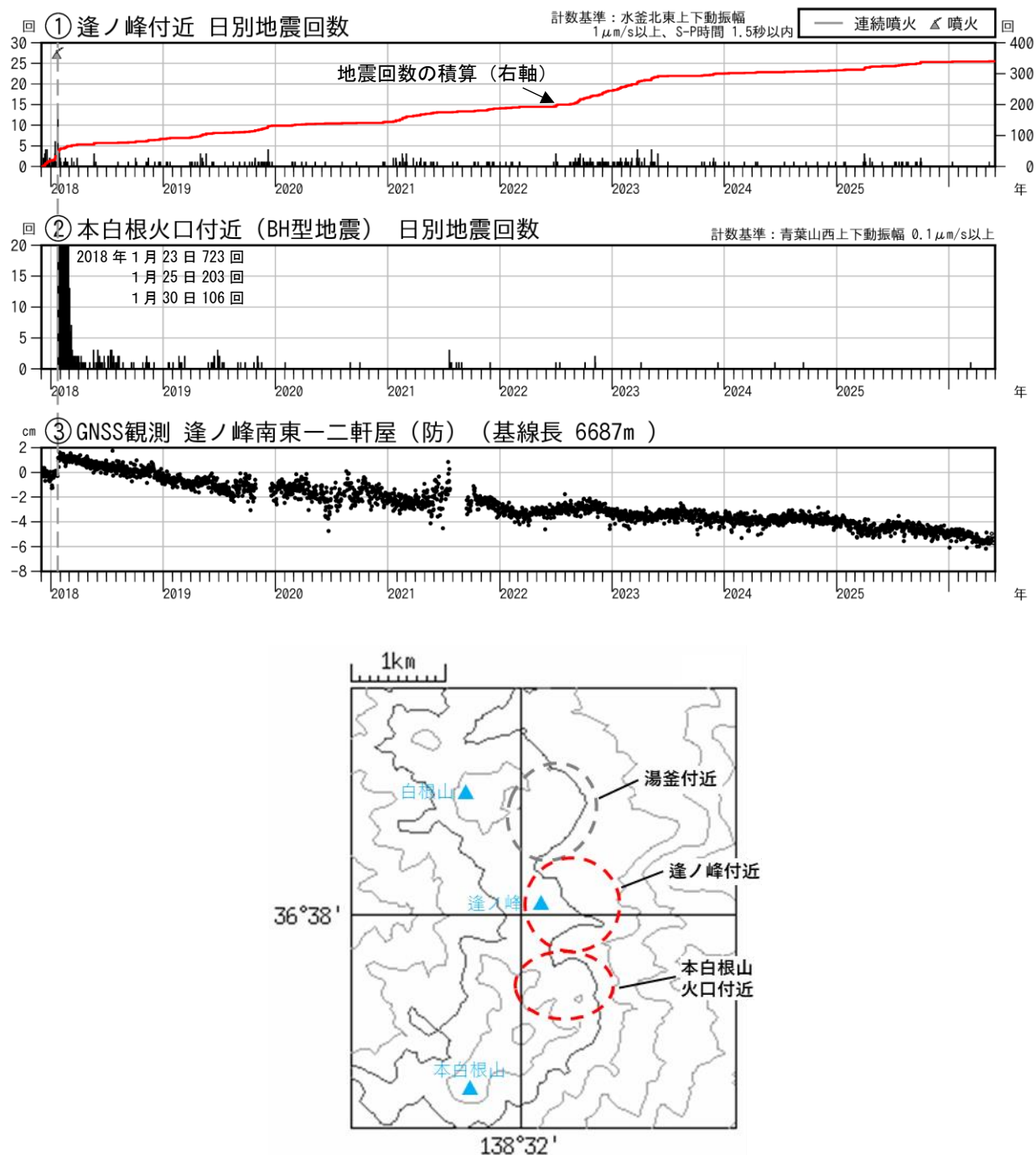


図13 草津白根山（本白根山） 火山活動経過図（2017年12月1日～2026年5月31日）

草津白根山では、火山性地震はその発生領域から、「湯釜付近」、「逢ノ峰付近」、「本白根山火口付近」に分けています。本白根山の火山活動については、逢ノ峰付近と本白根山火口付近の地震活動に注目して監視しています。

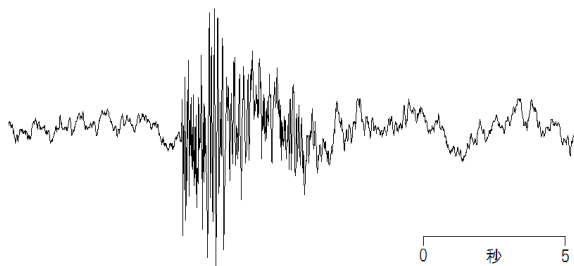
火山性地震の種類については図14を参照してください。

③は図7の③の基線に対応しています。

最下段の図は、①②の地震の震源の概ねの位置を示しています。

- ・逢ノ峰付近を震源とする火山性地震は、少ない状態で経過しています。
- ・噴火発生後、本白根山火口付近でBH型の火山性地震が多発しましたが、2018年12月以降は、少ない状態で経過しています。なお、BH型地震は初動が不明瞭なため、震源は求まっていません。
- ・③の基線では、2018年1月の噴火に伴う変化が認められた後、2020年1月にかけて、噴火後の収縮によるものと考えられる変動がみられました。

A型地震：P，S相が明瞭で卓越周波数は
10Hz前後と高周波の地震



B H型地震：S相が不明瞭で卓越周波数が
約6Hzの地震

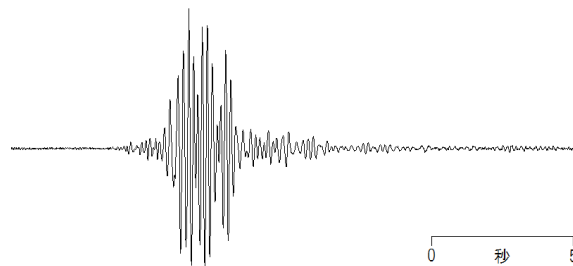
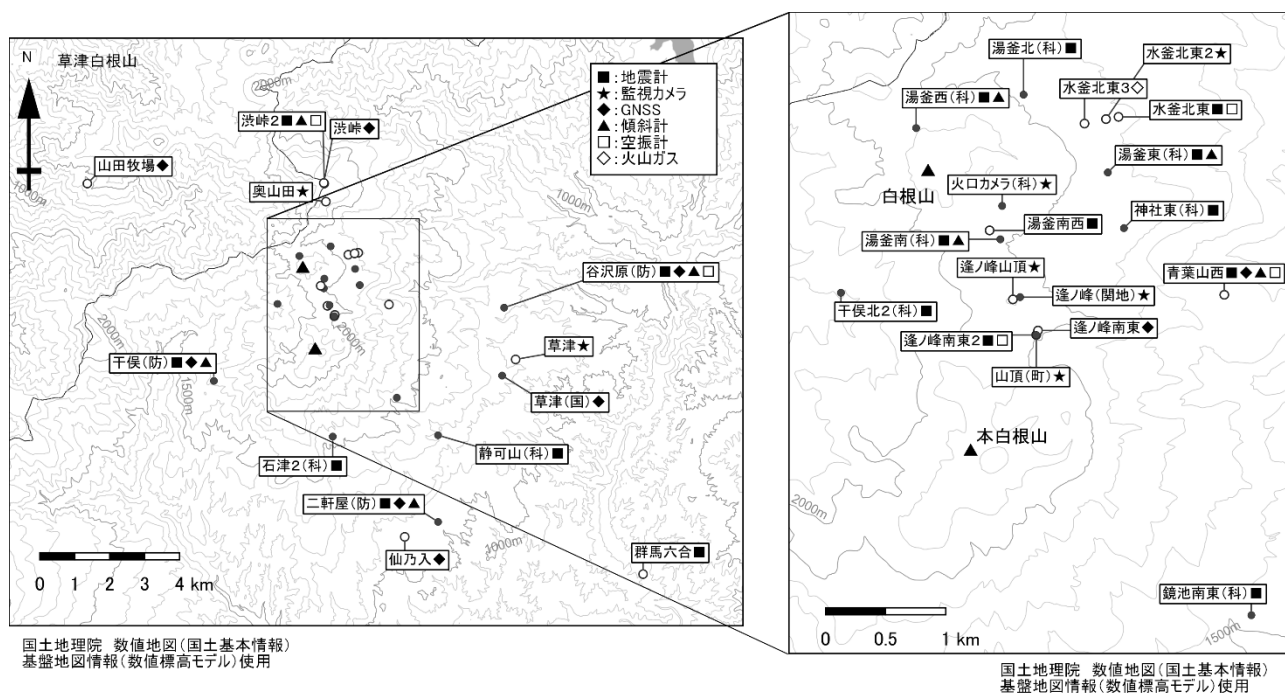


図14 草津白根山（本白根山） 主な火山性地震の特徴と波形例



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国):国土地理院、(防):防災科学技術研究所、(科):東京科学大学、(関地):関東地方整備局、(町):草津町

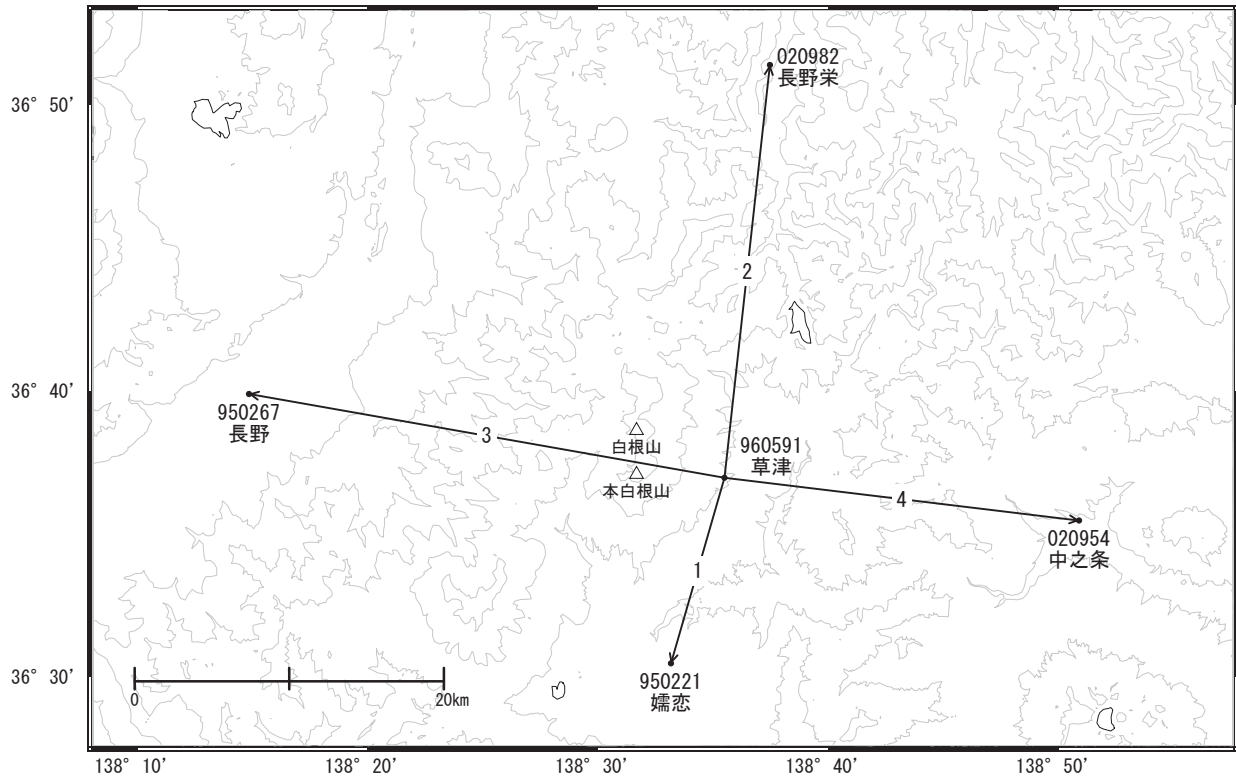
図15 草津白根山 観測点配置図

草津白根山周辺の地殻変動

—GEONET(電子基準点等)による連続観測結果—

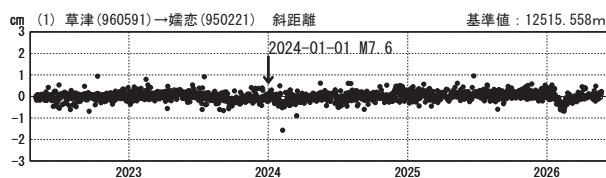
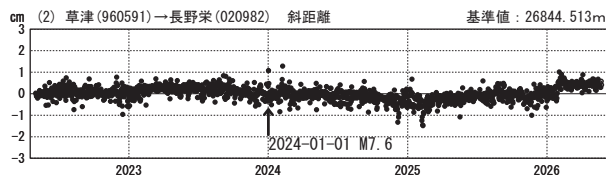
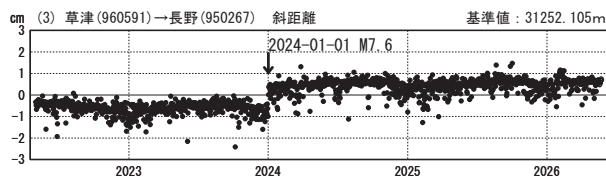
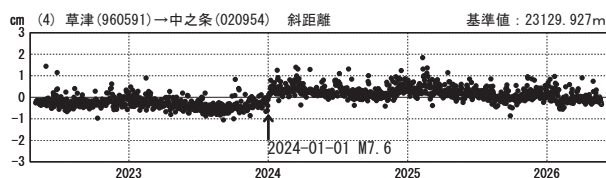
顕著な地殻変動は観測されていません。

草津白根山周辺 GNSS連続観測基線図



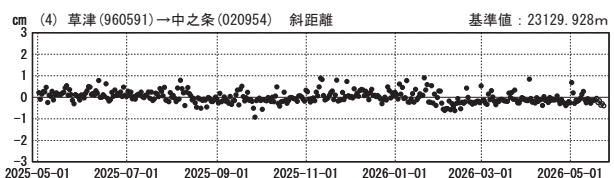
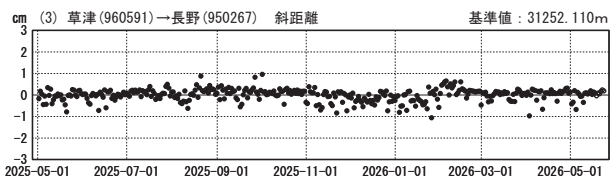
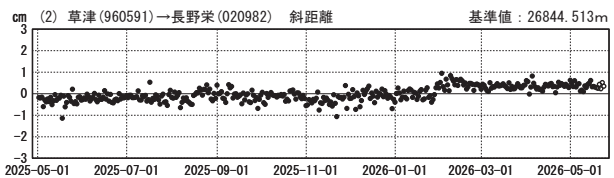
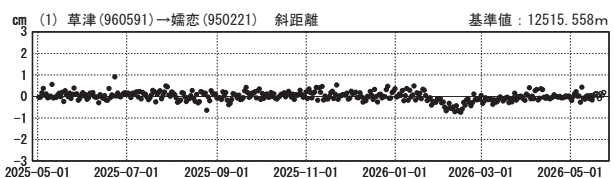
基線変化グラフ

期間：2022-05-01～2026-05-23 JST

伸び
↓
縮み伸び
↓
縮み伸び
↓
縮み伸び
↓
縮み

基線変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

国土地理院

浅間山の火山活動解説資料（令和8年5月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

山体浅部を震源とする火山性地震は、2025年7月頃から減少傾向が続いており、前1ヶ月間平均の日地震回数は、本年4月下旬以降、30回を下回っています。その他の観測データでも、火山活動の高まりを示す変化はみられていません。

火山活動は低下しており、山頂火口から500mを超える範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと判断し、22日11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

一方で、24日頃から微小地震を含む高周波地震が増加しました。

山頂火口から500mの範囲に影響を及ぼす程度のごく小規模な噴火の可能性がありますので、地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。突発的な火山灰噴出や火山ガス等に注意してください。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図1、図2-①、図3-①）

山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは火口縁上300m以下で経過しました。
今期間、火映は観測されませんでした。

・ 火山ガスの状況（図2-②、図3-②）

期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり80トンでした。
2023年4月以降、多い状態でしたが、2025年6月頃から次第に減少し、同年12月頃からは2023年3月以前と同程度の少ない状態になっています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和8年6月分）は令和8年7月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、関東地方整備局、国土地理院、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び長野県のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『基盤地図情報』『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』を使用しています。

・地震や微動の発生状況（図2－③～⑥、図3－③～⑦、図4～5）

今期間、火山性地震の日回数は、概ね10回から50回程度で推移しました。山体浅部を震源とする火山性地震は、2024年4月中旬以降増加した状態が続いていましたが、2025年7月頃から減少傾向が続いており、前1ヶ月平均の日地震回数は、本年3月下旬頃から概ね30回で推移し、4月下旬からは30回を下回っています。

一方で、24日頃から微小地震を含む高周波地震が増加しました。

今期間、震源が決まった火山性地震は、従来からみられている山頂直下の深さ－2～0km（海拔0～2km）付近に分布しています。

振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が時々発生しました。

・地殻変動の状況（図2－⑦、図3－⑧⑨、図6～8）

山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動は、2024年5月以降、停滞しています。

GNSS連続観測および光波測距観測では、今期間、火山活動によるとみられる特段の変化は認められませんでした。



図1－1 浅間山 山頂部の噴煙の状況
追分監視カメラ（5月5日）

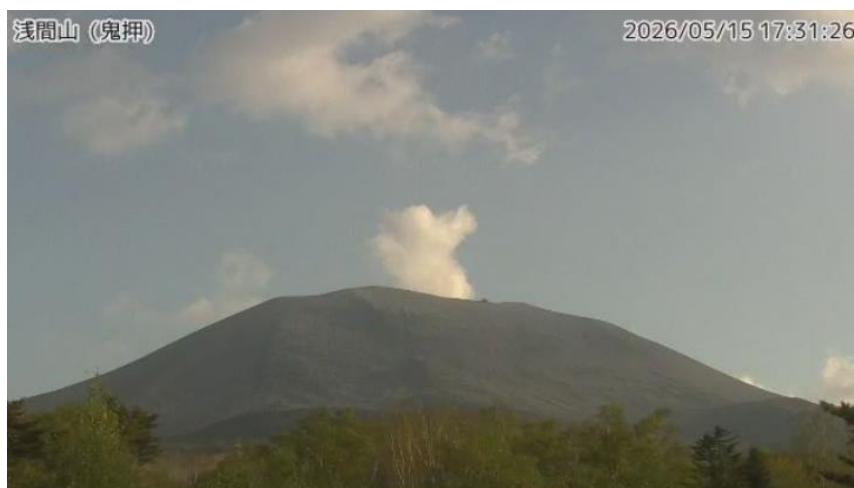


図1－2 浅間山 山頂部の噴煙の状況
鬼押監視カメラ（5月15日）

- ・山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは火口縁上300m以下で経過しました。

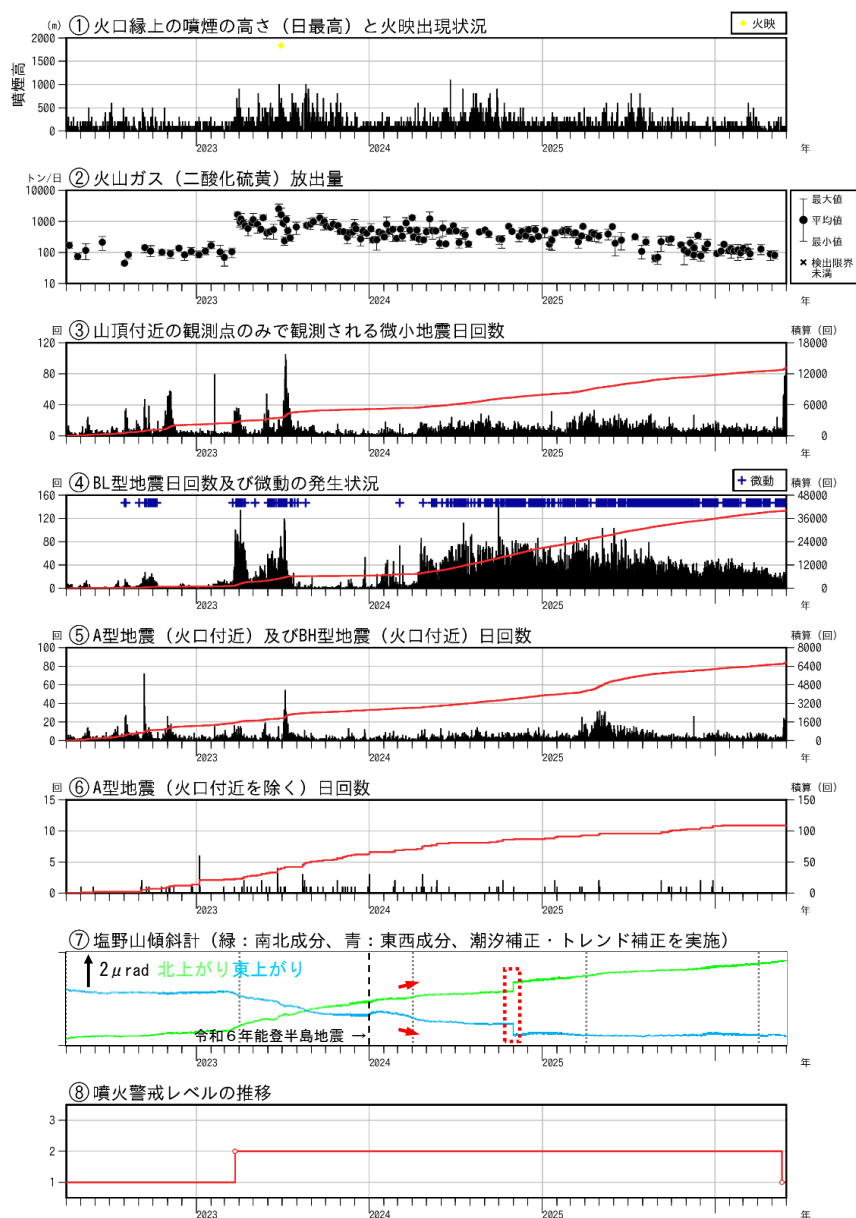


図2 浅間山 短期火山活動経過図（2022年4月1日～2026年5月31日）

- ・ 山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは火口縁上300m以下で経過しました（①）。
- ・ 期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり80トンでした。2023年4月以降、多い状態でしたが、2025年6月頃から次第に減少し、同年12月頃からは2023年3月以前と同程度の少ない状態になっています（②）。
- ・ 今期間、火山性地震の日回数は、概ね10回から50回程度で推移しました。山体浅部を震源とする火山性地震は、2024年4月中旬以降増加した状態が続いていましたが、2025年7月頃から減少傾向が続いており、前1ヶ月平均の日地震回数は、本年3月下旬頃から概ね30回で推移し、4月下旬からは30回を下回っています（④⑤⑥）。
- ・ 24日頃から微小地震を含む高周波地震が増加しました（③）。
- ・ 振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が時々発生しました（④）。
- ・ 2024年3月中旬から同年5月まで、山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動がみられました（⑦ 赤矢印）。同年5月以降、停滞しています。

⑦の赤破線内の変化はシステム更新に伴うステップです。

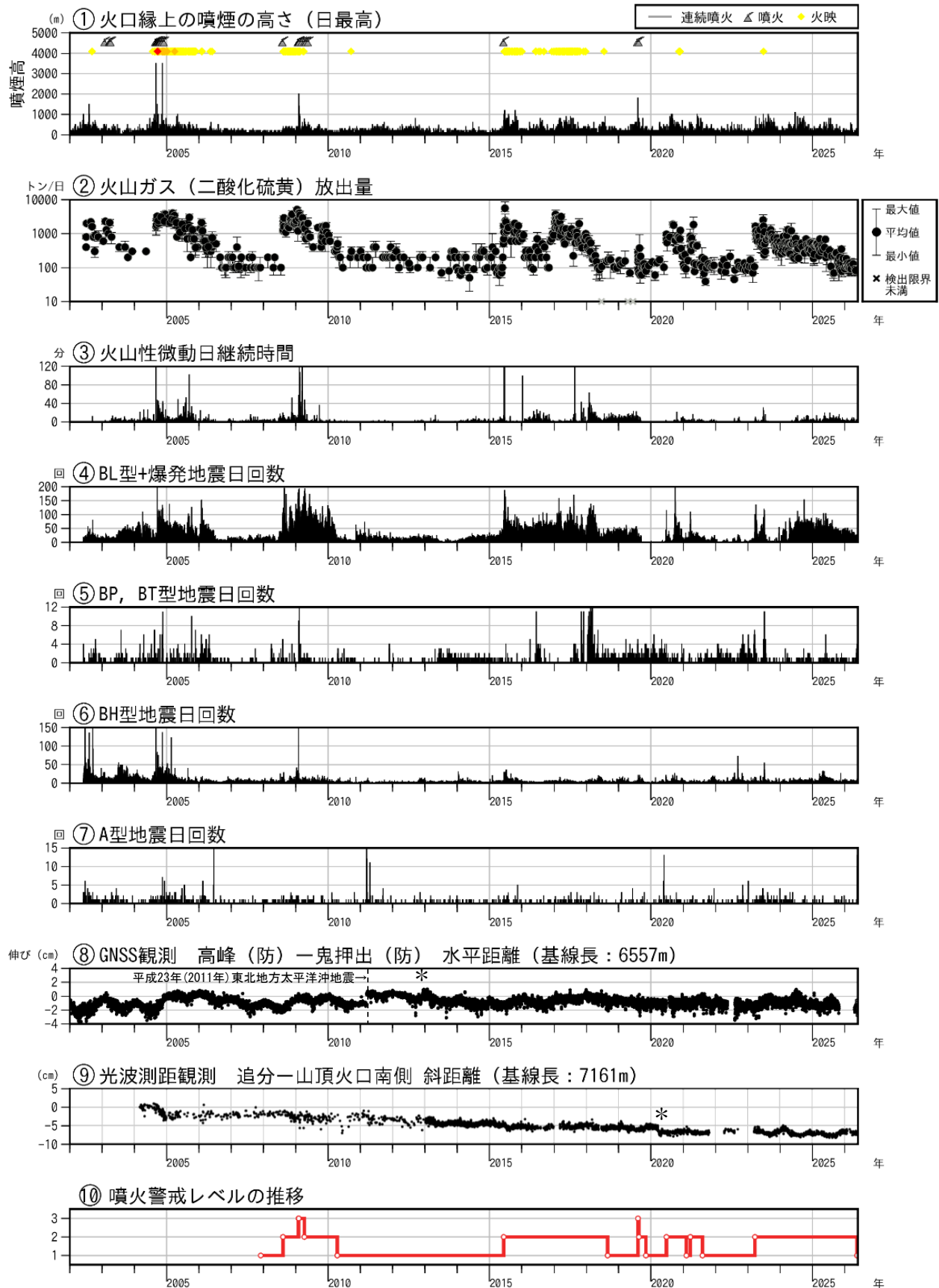


図3 浅間山 長期火山活動経過図（2002年1月1日～2026年5月31日）

（前ページ 図3の説明）

- ① 火映強度については、以下のとおりです。
 - ◆ 0：肉眼では確認できず、監視カメラ（高感度カメラ）によってのみ確認できる程度
 - ◆ 1：肉眼でようやく認められる程度
 - ◆ 2：肉眼で明らかに認められる程度
- ② 国立研究開発法人産業技術総合研究所及び東京大学による観測結果が含まれています。
- ③～⑦ 計数基準は石尊観測点で南北成分最大振幅 $0.1\mu\text{m}$ 以上、S-P 時間 3 秒以内
火山性地震の種類は図4のとおりです。
- ⑧ 2012 年 7 月 31 日まで 気象庁の高峰－鬼押観測点間の基線長（基線長 7417m）
2012 年 8 月 1 日以降 高峰（防）－鬼押出（防）観測点間の基線長
（防）：国立研究開発法人防災科学技術研究所。2010 年 10 月及び 2016 年 1 月に解析方法を変更しています。
- ⑧⑨ * で示す変動の原因は不明ですが、火山活動によるものではないと考えられます。
- ⑨ 2016 年まで 基線長 7096.767m
2017 年以降 基線長 7161.675m

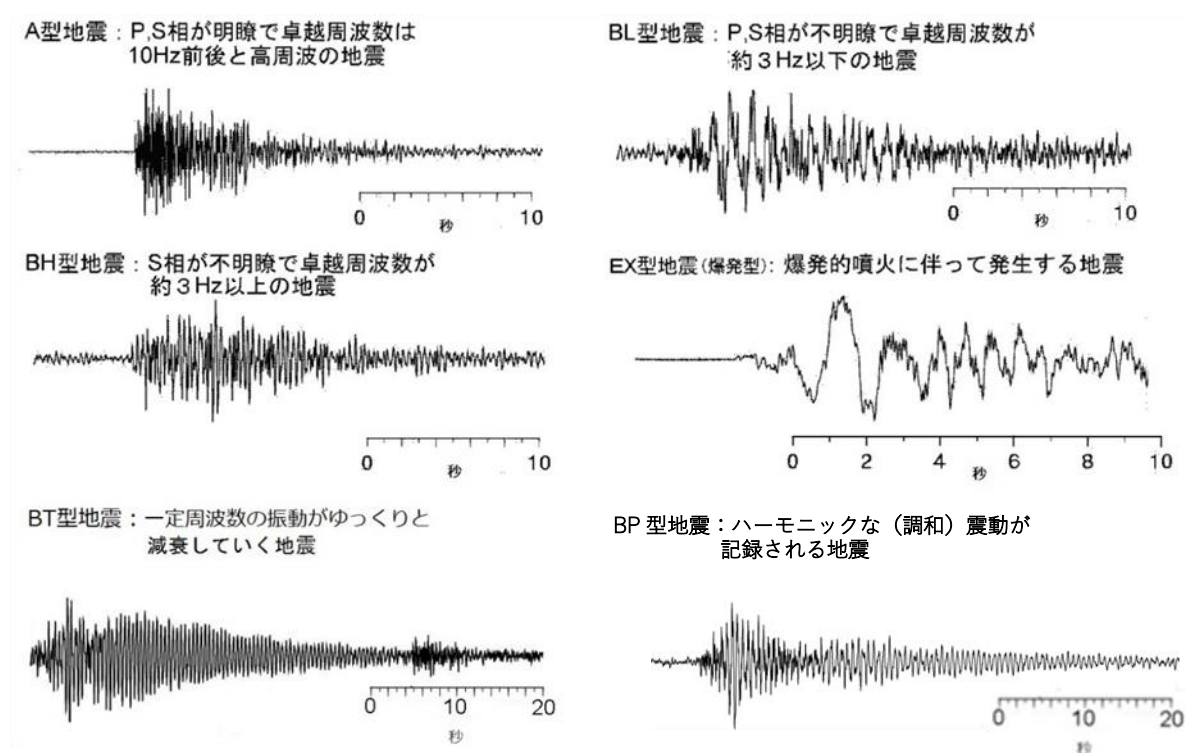


図4 浅間山 主な火山性地震の特徴と波形例

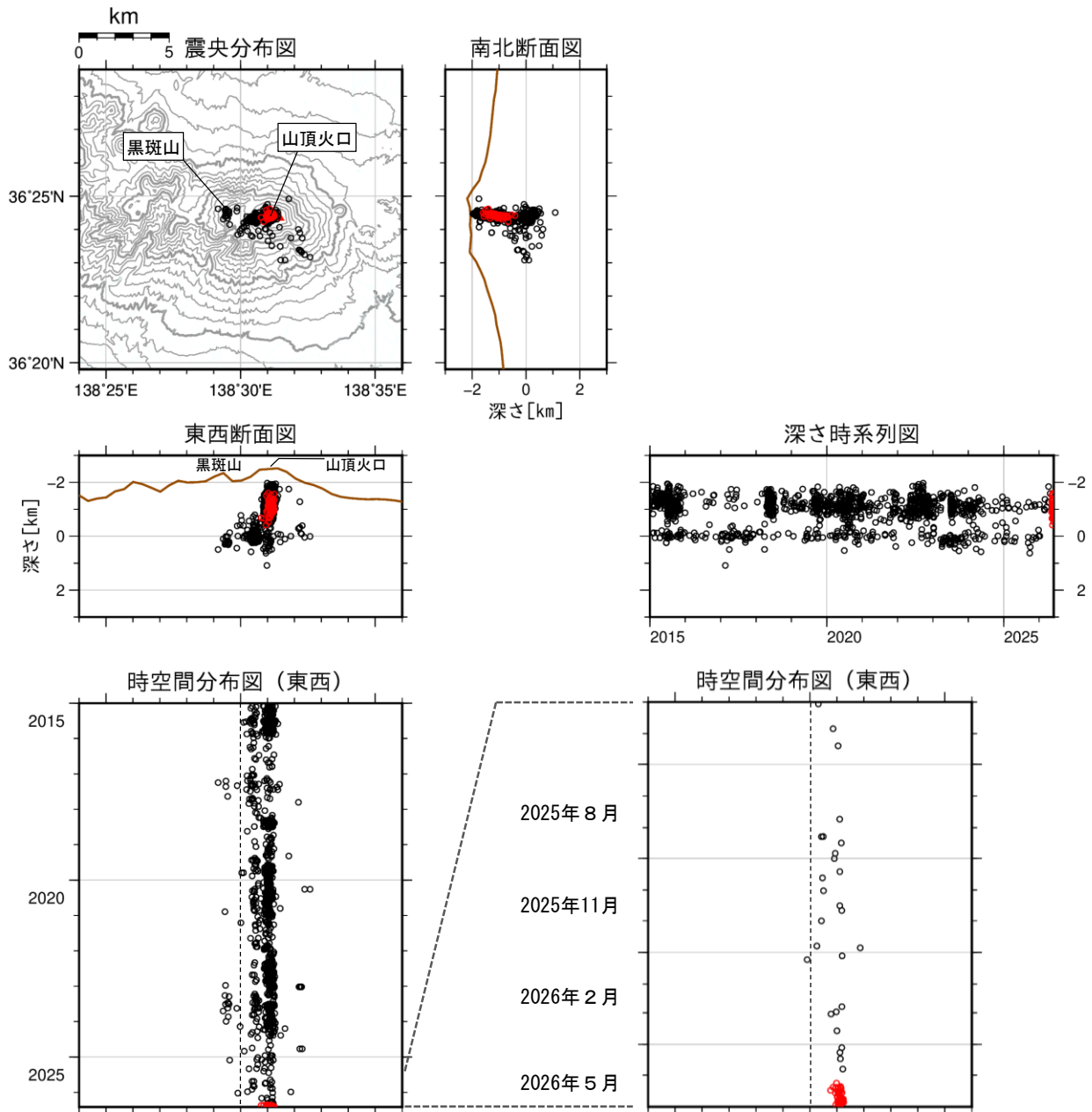


図5 浅間山 震源分布図 (2015年1月1日～2026年5月31日)

○ : 2015年1月1日～2026年4月30日

○ : 2026年5月1日～31日

- ・今期間、震源が決まった火山性地震は、従来からみられている山頂直下の深さ-2～0km（海拔0～2km）付近に分布しています。

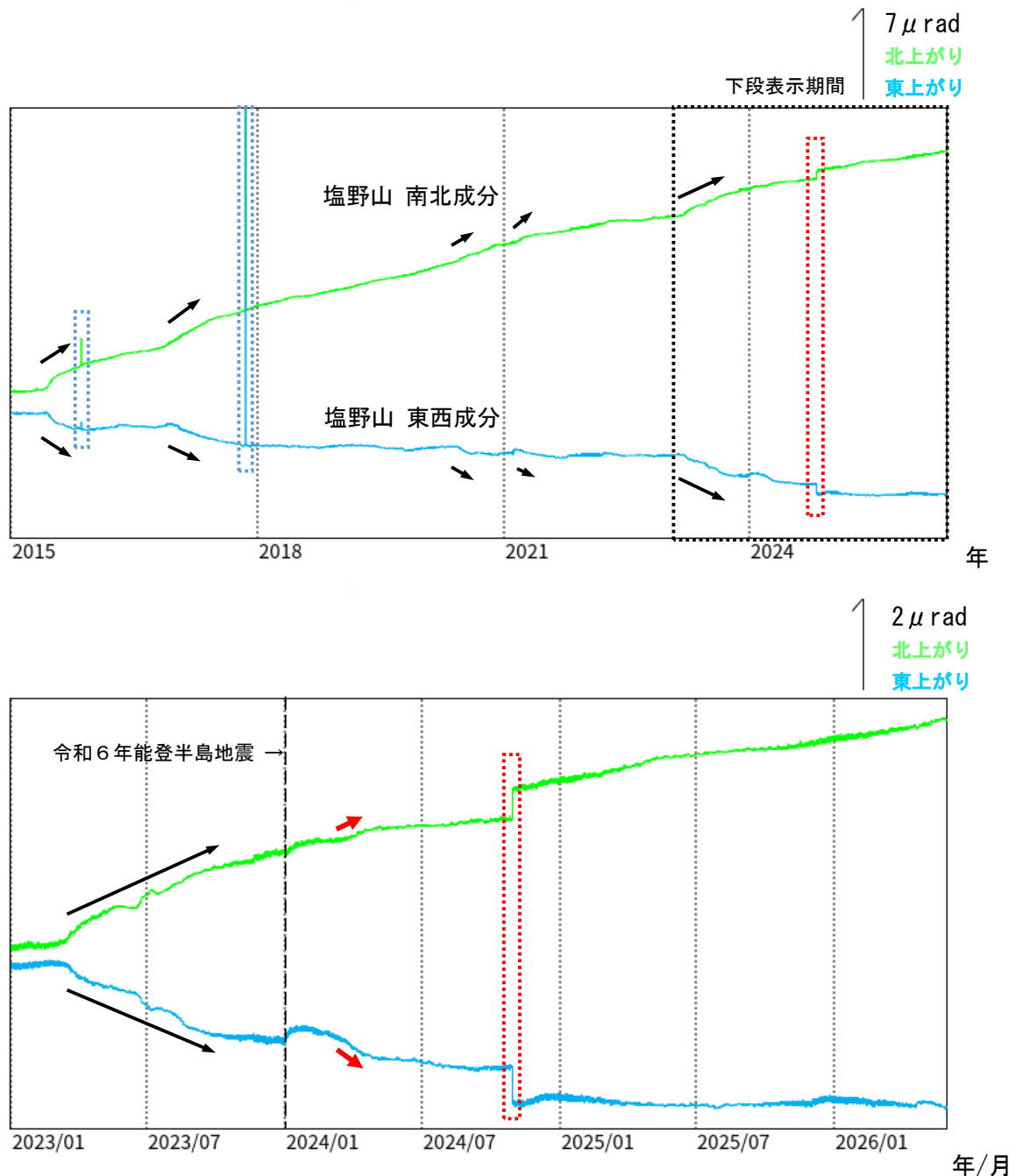


図6 浅間山 塩野山観測点における傾斜データ（2015年1月1日～2026年5月31日）

- ・2024年3月中旬から同年5月まで、山体の西側での膨張を示すと考えられる傾斜変動がみられました（赤矢印）。同年5月以降、停滞しています。
- ・同観測点では過去にも同様の傾斜変動がみられていました（黒矢印）。これらは浅間山西麓の地下でのマグマの蓄積を示す変化と考えられています。

データは時間平均値を使用しており、潮汐補正、長期にわたるトレンドの補正を実施しています。

下段は上段よりも縦軸を拡大しています。また、東西成分をシフトさせて表示しています。

図中の赤破線内の変化はシステム更新に伴うステップです。また青破線内の変化は機器点検に伴うノイズです。

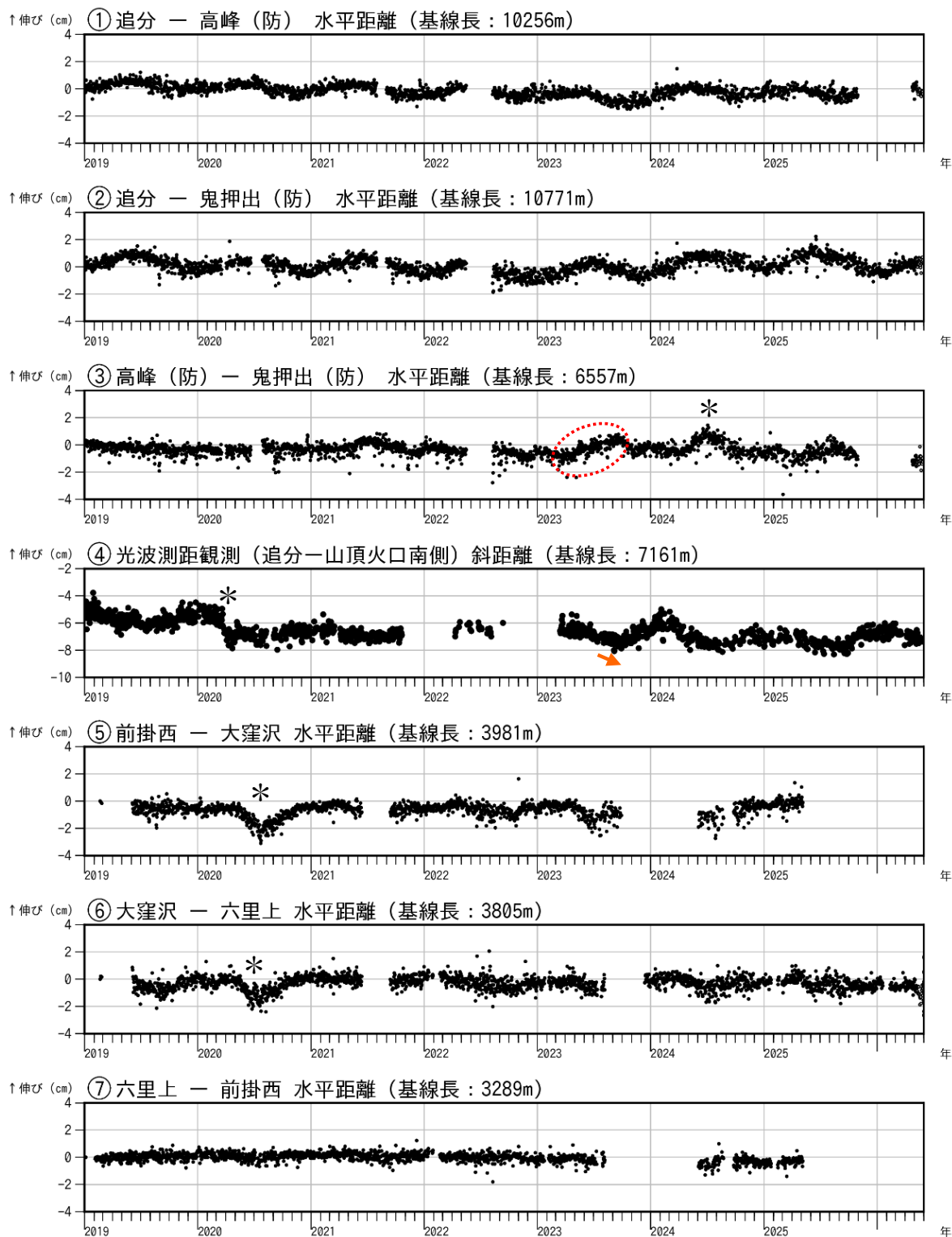


図7-1 浅間山 GNSS 連続観測及び光波測距観測結果(2019年1月1日～2026年5月31日)

- ・GNSS 連続観測及び光波測距観測では、現在、火山活動によると推定される伸びは認められていません。
- ・過去には、山体の西側を挟む基線などでわずかな伸びがみられました（③赤破線）。これらは浅間山西麓の地下でのマグマの蓄積を示すと考えられています。
- ・光波測距観測では、過去には山頂と追分の間でわずかな縮みの傾向がみられました（④橙矢印）。これは、山頂部のごく浅いところの膨張によるものである可能性があります。

（前ページ 図7-1の説明）

（防）：国立研究開発法人防災科学技術研究所

①～⑦は図8の①～⑦にそれぞれ対応しています。空白部分は欠測を示します。

①② 追分観測点は、2016年12月に移設しており、その後、基線長に年周変化がみられています。

③④ *の変動の原因は不明ですが、火山活動によるものではないと考えられます。

⑤⑥ *の変動は大窪沢観測点の固有の変動であり、火山活動によるものではないと考えられます。

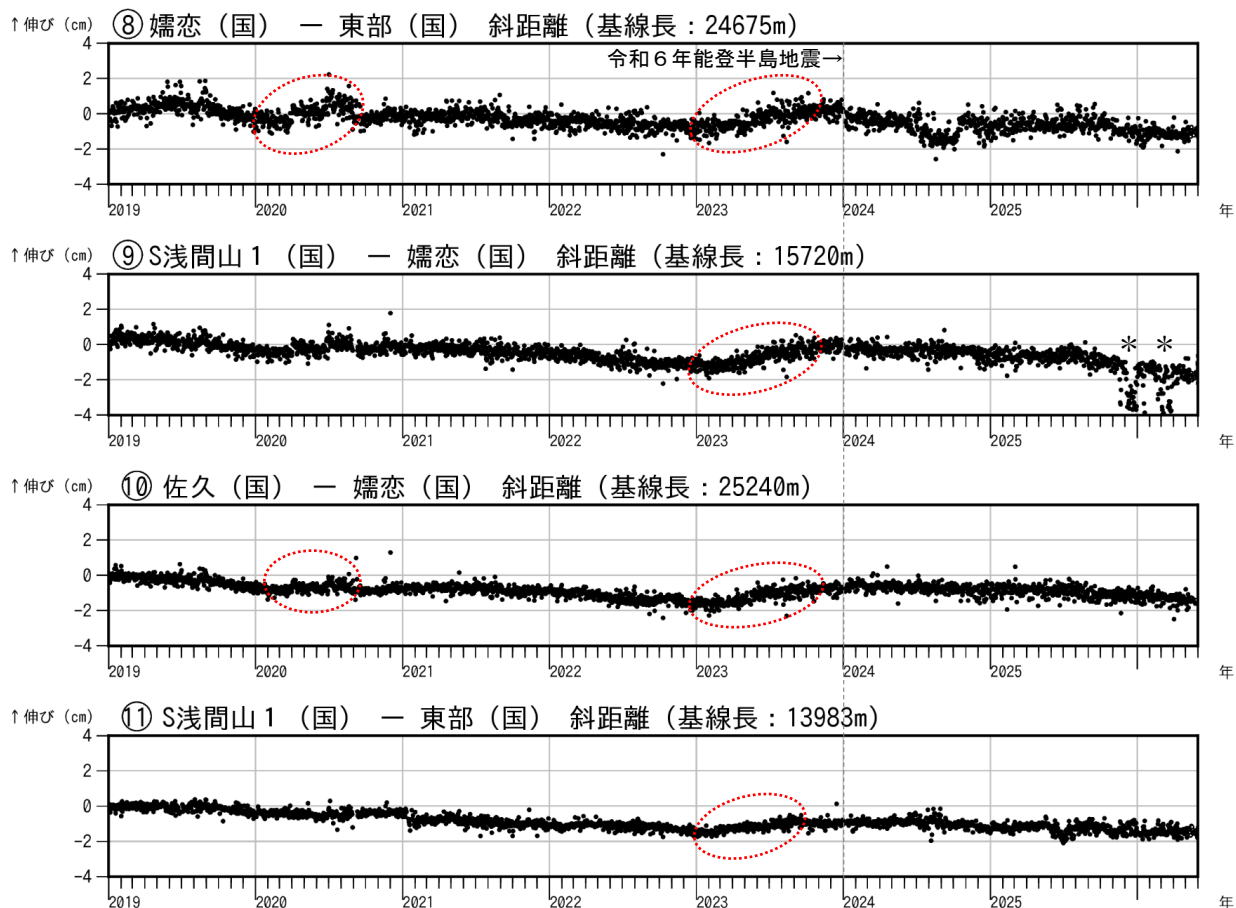


図7-2 浅間山 GNSS 連続観測結果(2019年1月1日～2026年5月31日)

- ・GNSS 連続観測では、現在、火山活動によると推定される伸びは認められていません。
- ・過去には、山体の西側を挟む基線などでわずかな伸びがみられました（赤破線）。これらは浅間山西麓の地下でのマグマの蓄積を示すと考えられています。

⑧～⑪は図8の⑧～⑪にそれぞれ対応しています。空白部分は欠測を示します。（国）：国土地理院

⑨ *の変動はS浅間山1（国）観測点の固有の変動であり、火山活動によるものではないと考えられます。

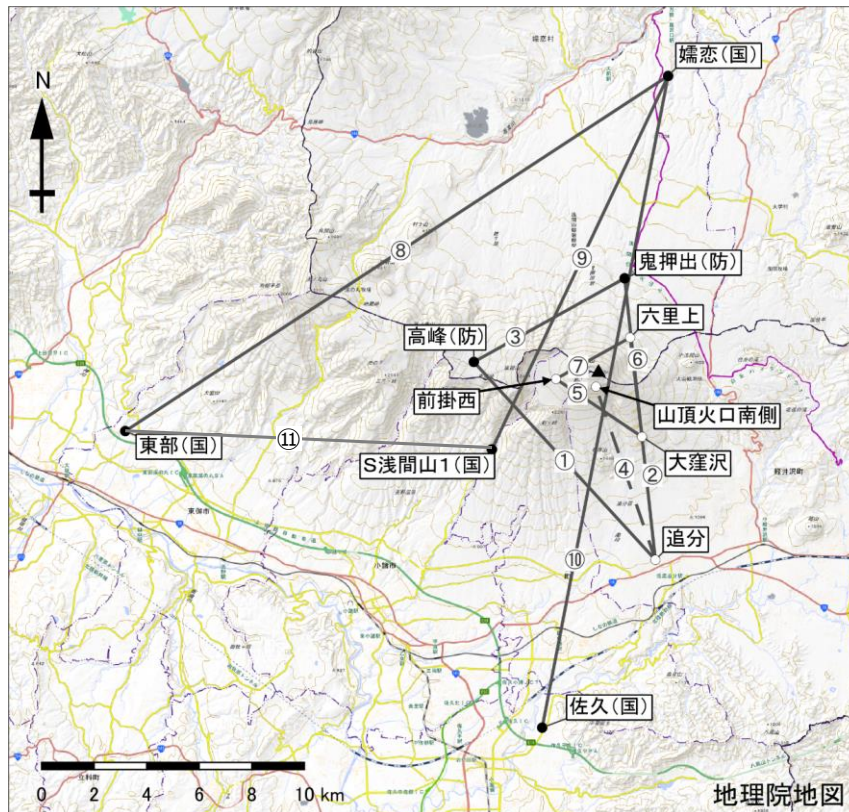


図8 浅間山 地殻変動連続観測点配置図

(防)：国立研究開発法人防災科学技術研究所、(国)：国土地理院
GNSS 基線③は図3⑧に対応しています。また、GNSS 基線①～③及び⑤～⑪は図7の①～③及び⑤～⑪にそれぞれ対応しています。光波測距測線④は図3の⑨、図7-1の④に対応しています。

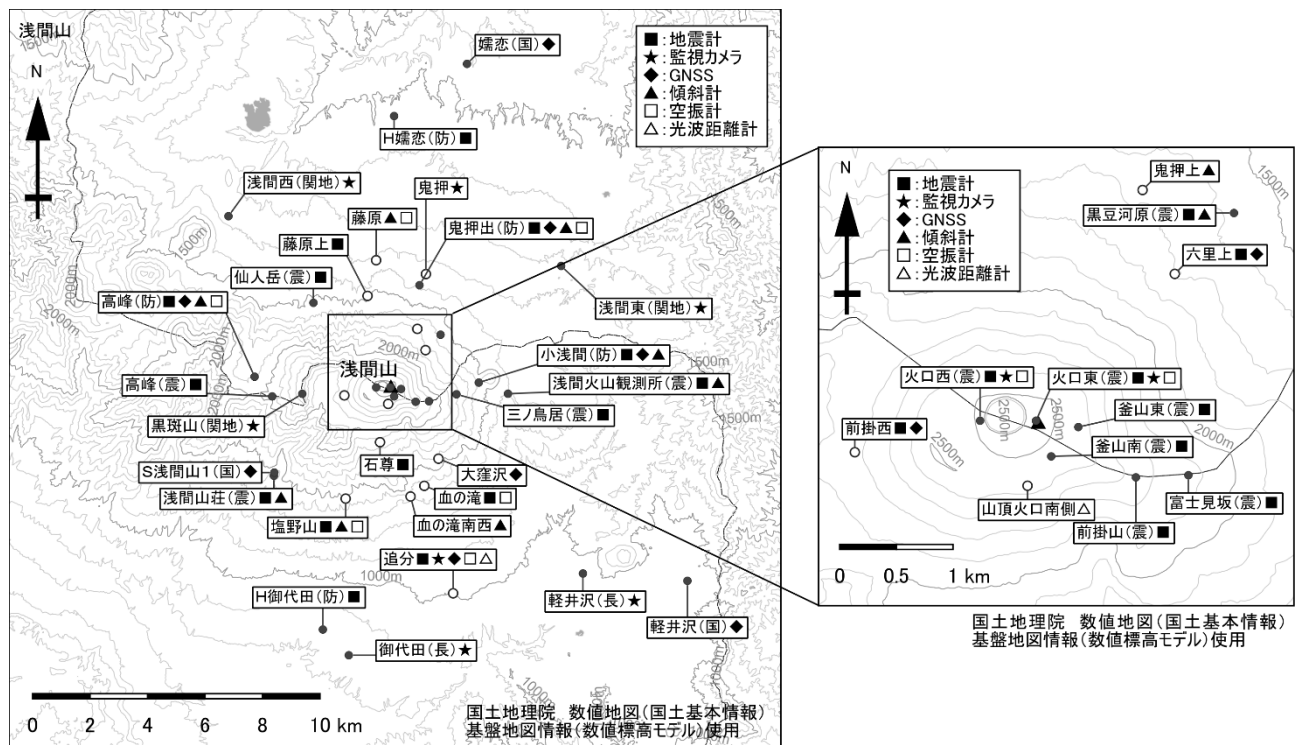


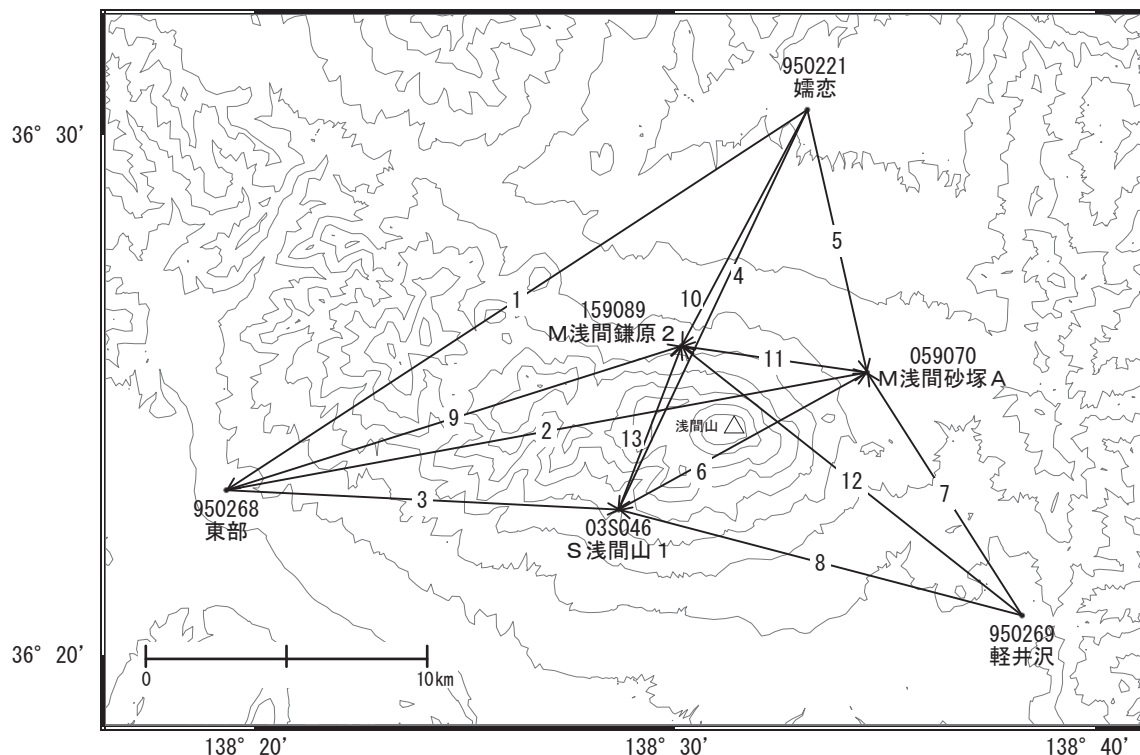
図9 浅間山 観測点配置図

浅間山周辺の地殻変動

—GEONET(電子基準点等)による連続観測結果—

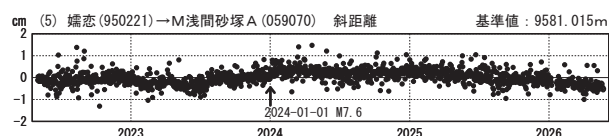
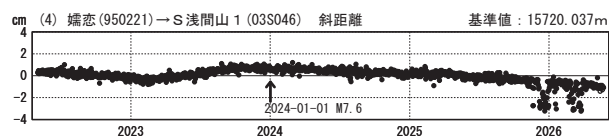
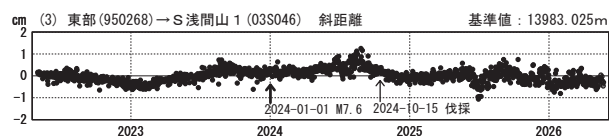
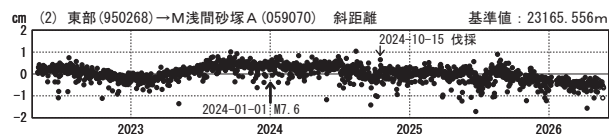
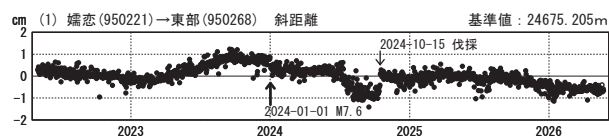
顕著な地殻変動は観測されていません。

浅間山周辺 GNSS連続観測基線図



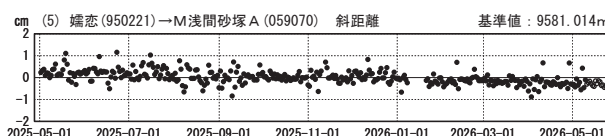
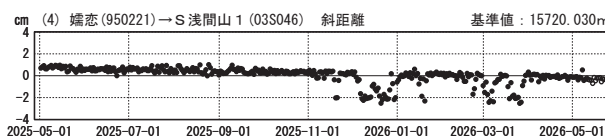
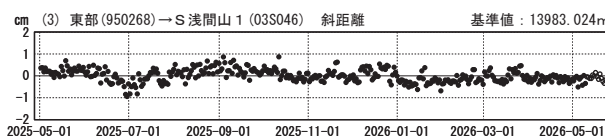
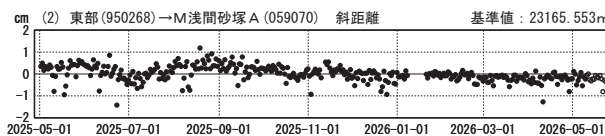
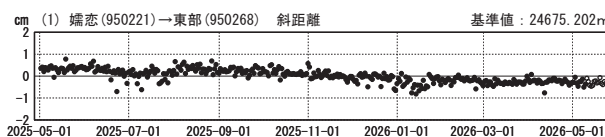
基線変化グラフ

期間: 2022-05-01~2026-05-23 JST



基線変化グラフ

期間: 2025-05-01~2026-05-23 JST

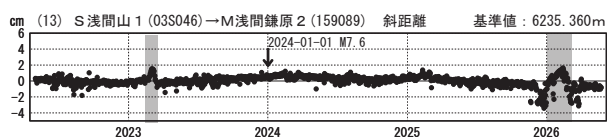
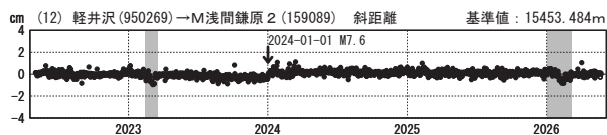
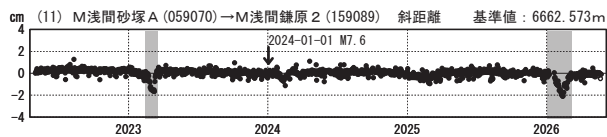
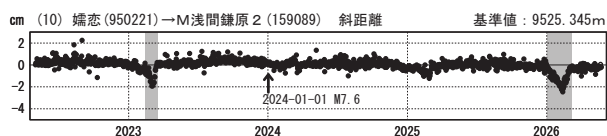
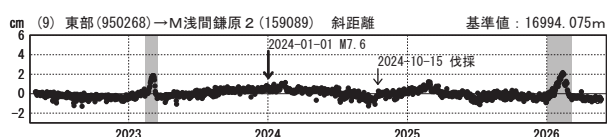
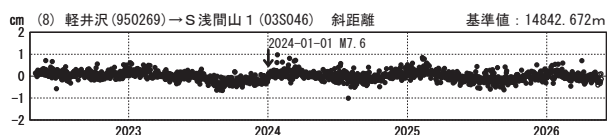
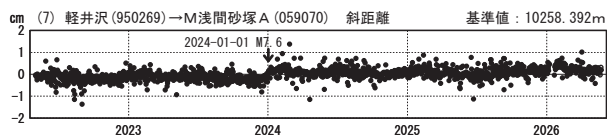
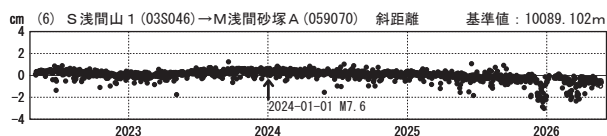


●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

国土地理院

基線変化グラフ

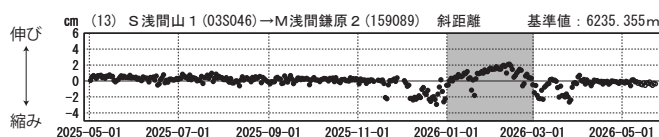
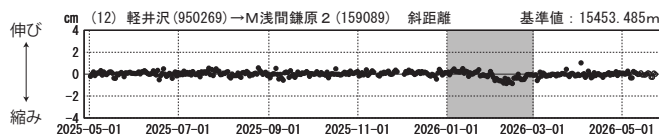
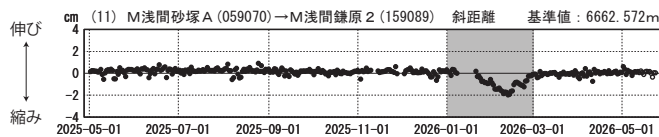
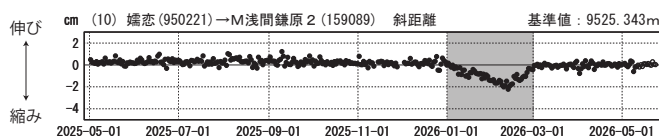
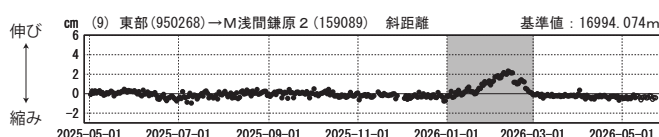
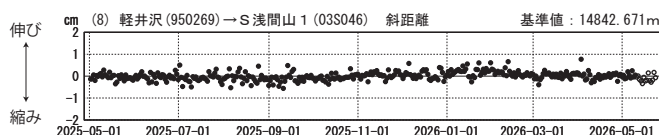
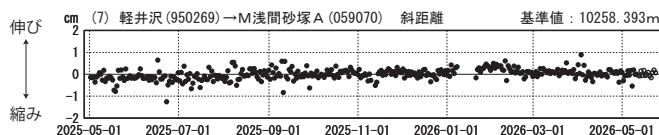
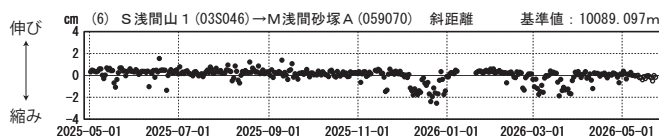
期間：2022-05-01～2026-05-23 JST



●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

基線変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



国土地理院

(注) 「S 浅間山 1」を含む基線では、2025年12月6日以降「S 浅間山 1」固有のノイズに起因する変化が見られます。

(注) 「M 浅間鎌原 2」を含む基線では、網掛け期間に凍上（土壌の凍結による地面の隆起）による装置の傾斜に起因する急激な変動が見られます。

焼岳の火山活動解説資料（令和8年5月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

山頂付近の微小な地震活動が継続しています。GNSS 連続観測では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な変化が続いています。山頂付近の噴気の状態に変化は認められません。

山頂付近の地震活動や地殻変動に加え、焼岳周辺では数年おきに震度1以上を観測する地震を含む活発な地震活動がみられるなど、中長期的に焼岳の火山活動は高まってきていますので、引き続き今後の火山活動の推移に注意が必要です。

山頂付近を含む想定火口域内では、突発的に火山ガス等が噴出する可能性があります。登山する際は、火山活動の異変に注意するとともに、ヘルメットを着用するなどの安全対策をしてください。また、噴気地帯にはとどまらないでください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・地震の発生状況（図1－②③、図2、図5－④⑤、図8～10）

山頂付近の微小な地震活動（焼岳山頂付近の概ね海拔0km以浅が震源と推定される地震）が継続しています。

火山性微動は観測されていません。

【山頂付近以外の焼岳周辺の地震活動】

今期間、低調に推移しました。

・噴気など表面現象の状況（図1－①、図3～4、図5－①～③、図11）

噴気活動に特段の変化はありません。

北陸地方整備局が設置している焼岳北監視カメラ（焼岳の北北西約4km）、焼岳東監視カメラ（焼岳の東南東約2.5km）及び焼岳南西斜面監視カメラ（焼岳の西南西約2.5km）による観測では、北峰付近の噴気、黒谷火口及び岩坪谷上部の噴気の高さは、いずれも100m以下で経過しています。

・地殻変動の状況（図1－④～⑥、図6～8）

GNSS 連続観測では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な変化が続いています。

傾斜計による観測では、火山活動によるとみられる変動は認められません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和8年6月分）は令和8年7月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、北陸地方整備局、国土地理院、東京大学、名古屋大学、京都大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『基盤地図情報』『数値地図 50mメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

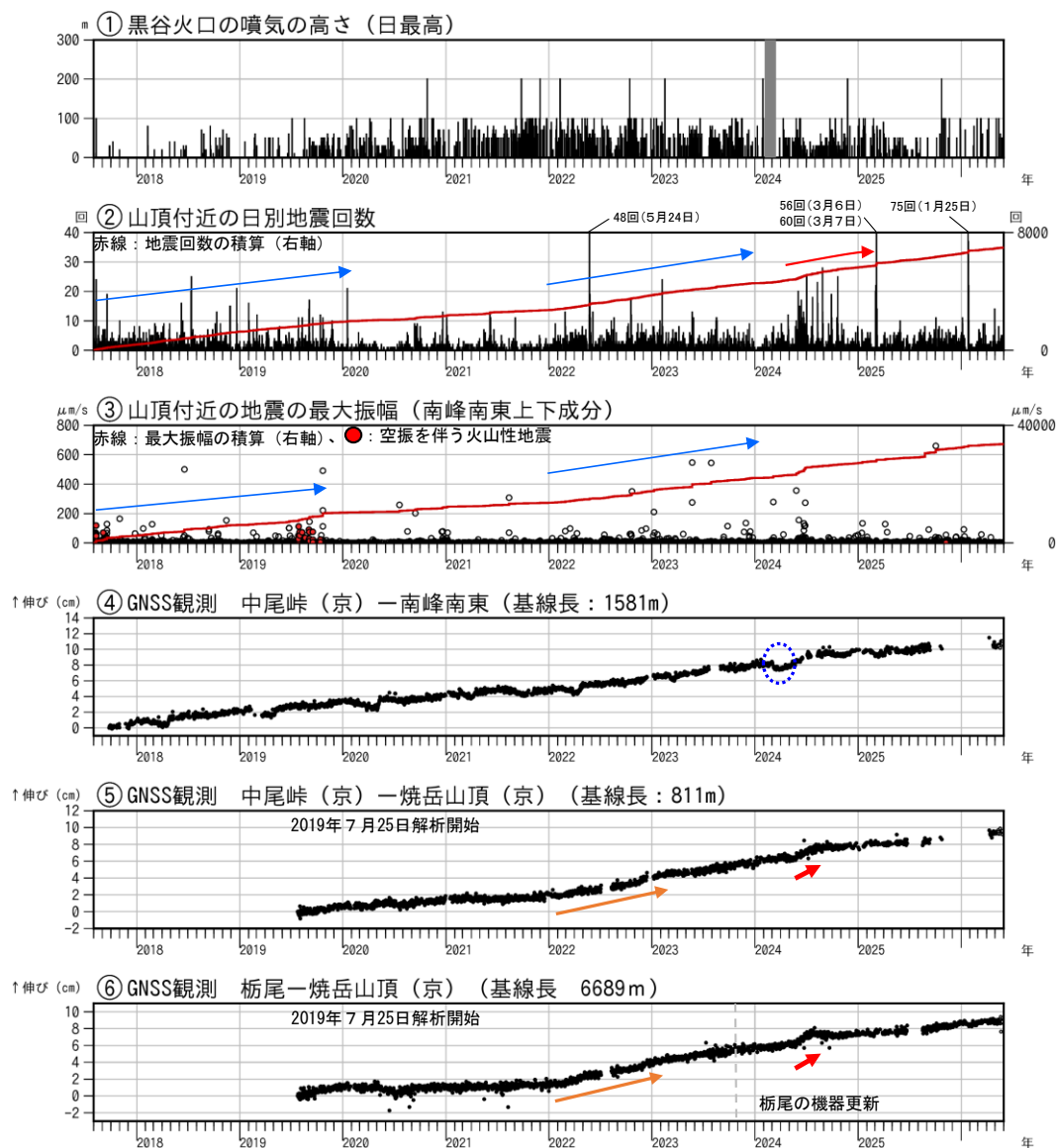


図1 焼岳 火山活動経過図（2017年8月1日～2026年5月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0 \mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことです。山頂付近の地震については、図2も参照。

①灰色の期間（2024年2月5日～3月14日）は欠測を示します。

④⑤⑥は図7の基線⑥⑧③に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（京）は京都大学の観測点です。

④の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

- ・黒谷火口では、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えていました。
- ・山頂付近の微小な地震（焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震）が継続しています（②）。
- ・2022年1月頃から2023年末まで、山頂付近の地震回数に増加傾向がみられましたが、2017年8月から2019年末の期間にみられた地震活動（積算曲線の勾配）とほぼ同程度です（②③青矢印）。2024年5月下旬から2025年3月上旬にかけて、時々短期的な増加がみられました（②赤矢印）。2026年1月下旬に、一時的に地震回数の増加がみられました。
- ・山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる伸びの変化が継続しています（④⑤⑥）。
- ・⑤⑥の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化率がやや大きくなりました（橙矢印）。また、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました（赤矢印）。

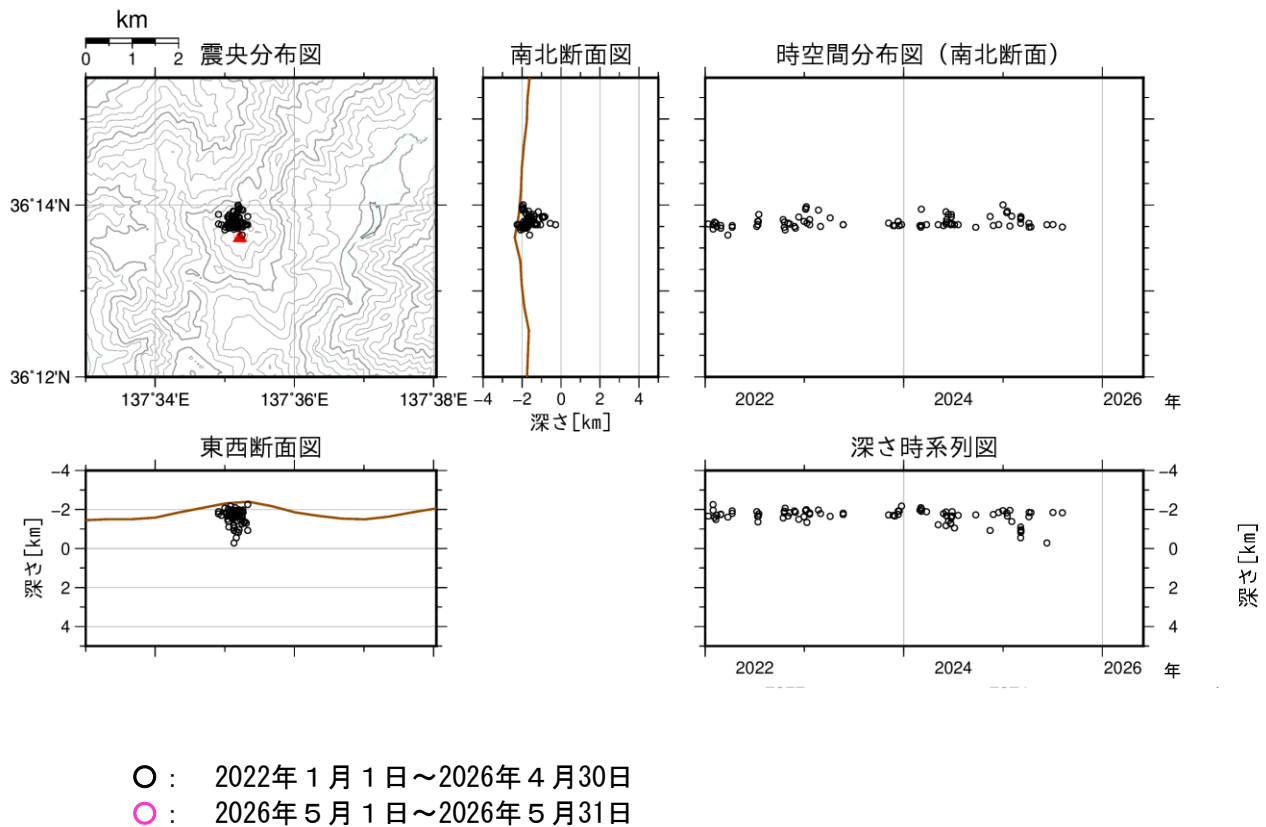


図2 焼岳 山頂付近の地震の震源分布図（2022年1月1日～2026年5月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.0秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔0km以浅が震源と推定される地震のことです。

観測点の移動状況により、求まる震源の数の減少や位置の精度低下が生じる場合があります。

- ・震源は、山頂付近の深さ0km（海拔0km）以浅に分布しています。
- ・今期間、震源が求まる地震はありませんでした。



図3 焼岳 山頂部及び南西斜面の状況

(上図：焼岳北監視カメラ、下左図：焼岳南西斜面監視カメラ、下右図：焼岳東監視カメラ)

・噴気活動に特段の変化はありません。

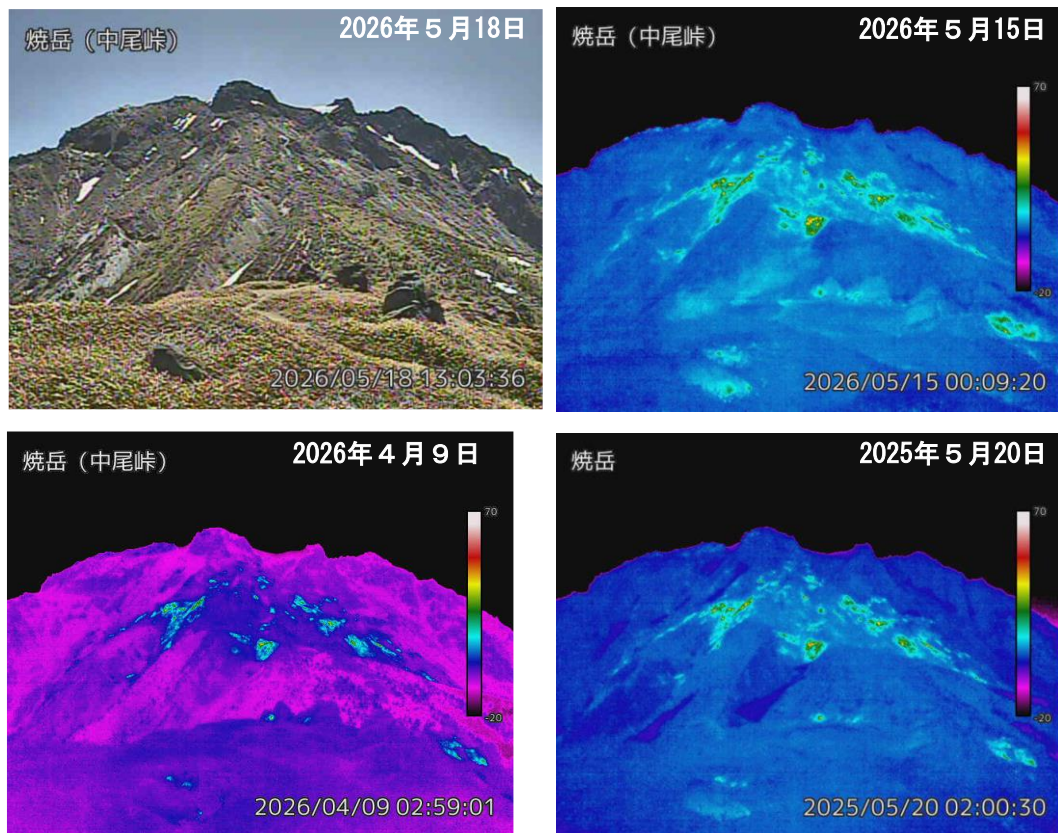


図4 焼岳 中尾峠赤外熱映像カメラによる焼岳の北側斜面の地表面温度分布と可視画像

撮影場所と撮影方向は図11を参照。

・前月（左下図）及び前年同月（右下図）と比較して、噴気の状態や地表面温度分布に特段の変化はありません。

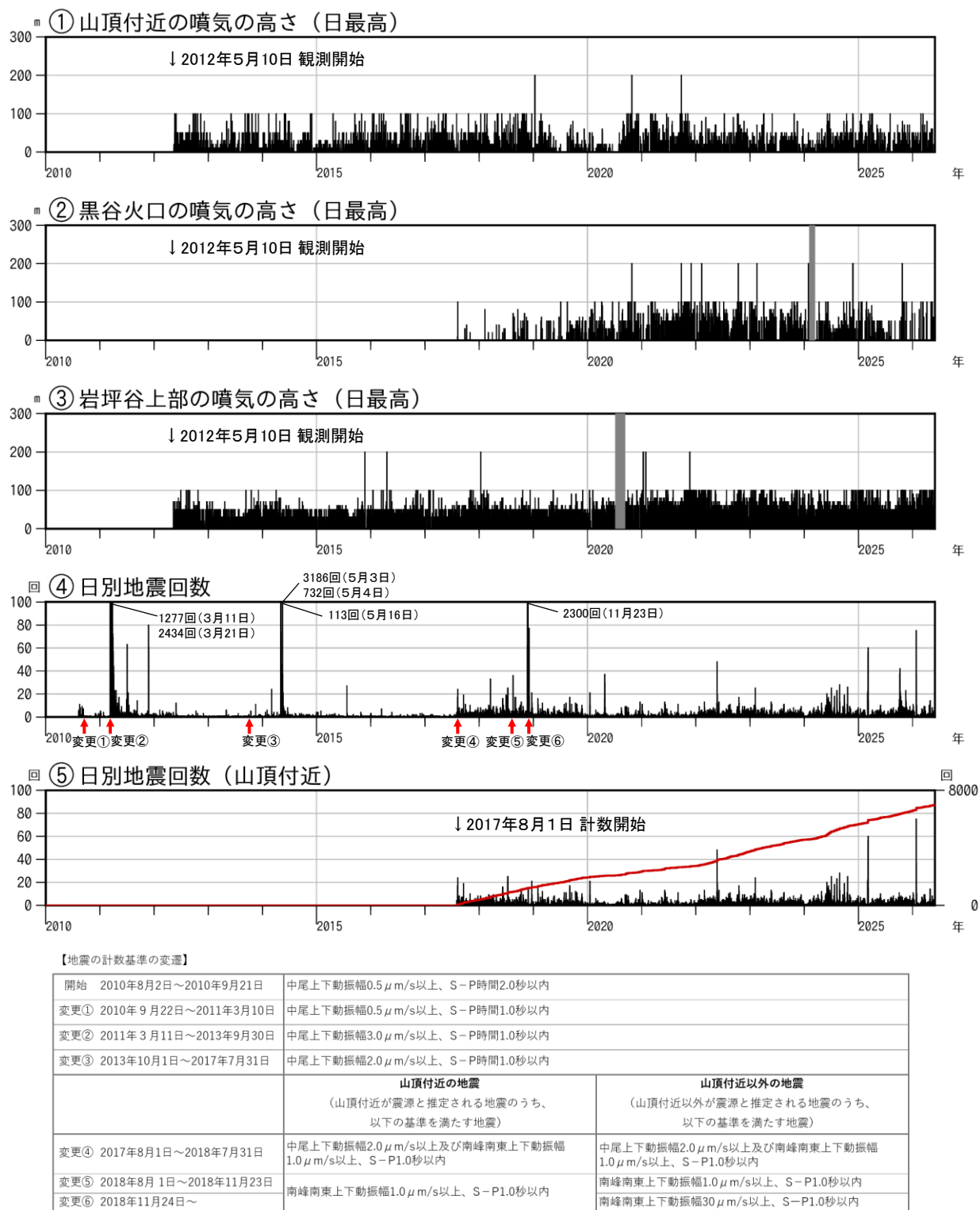


図5 焼岳 噴気の高さと地震回数の推移(2010年8月2日～2026年5月31日)

- ②黒谷火口の噴気の高さは、2024年2月5日から3月14日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ③岩坪谷上部の噴気の高さは、2020年7月7日から9月10日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ④2017年8月1日以降、山頂付近の地震と山頂付近以外の地震を分けて計数していますが、④ではこれらを合計した回数を示しています。図中の赤矢印は計数基準の変更を示しています。
- ⑤山頂付近の日別地震回数（左軸）と日別地震回数の積算（右軸）を示しています。
- ・黒谷火口では、2017年夏頃から噴気が時々観測されるようになり、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えました。

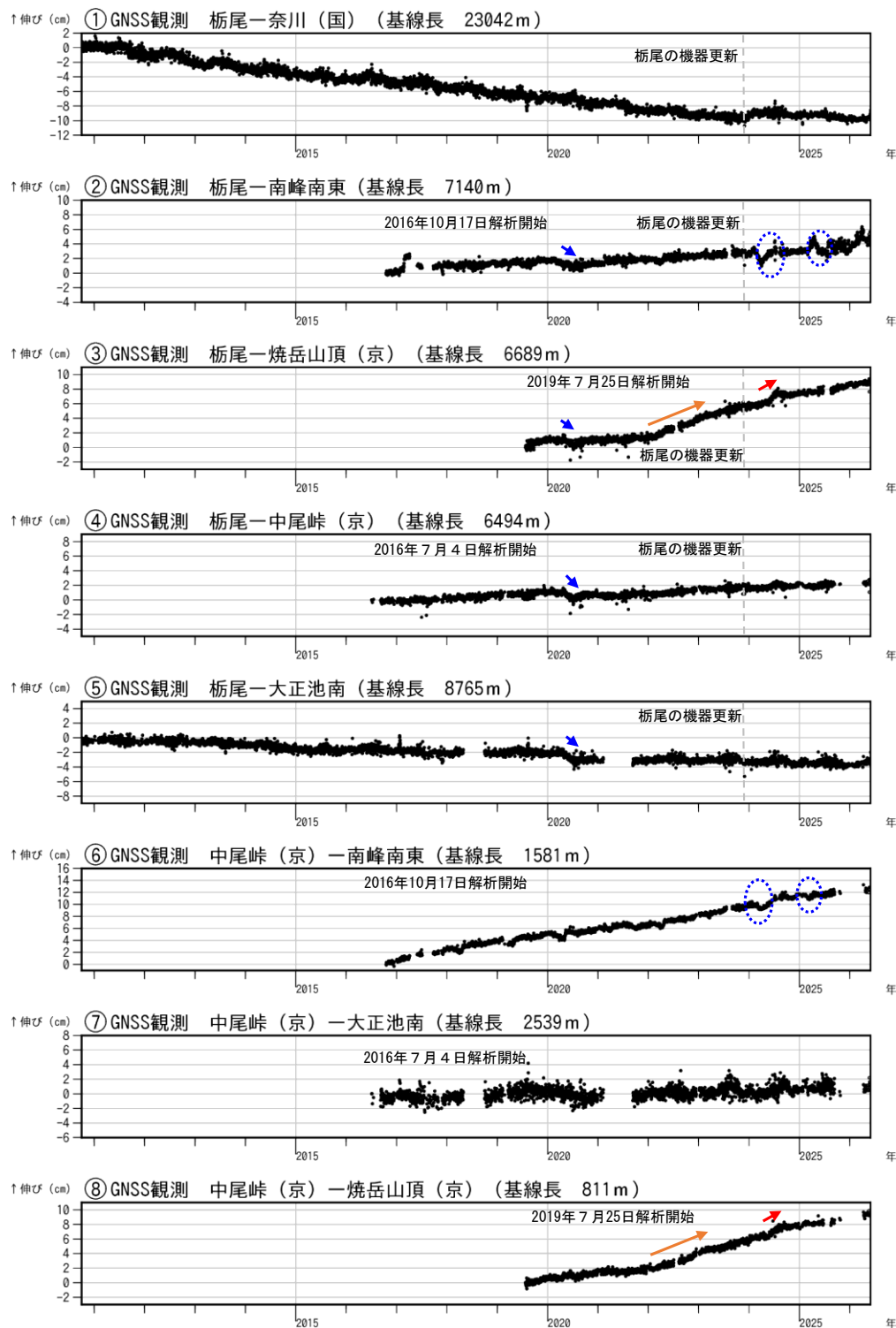


図6 焼岳 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月1日～2026年5月31日）

- ・③⑥⑧の基線では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる長期的な伸びの変化が継続しています。
- ・③と⑧の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化がみられました（橙矢印）。また、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しました（赤矢印）。
- ・②～⑤の基線では、2020年5月下旬頃から2020年7月頃にかけて、2020年4月以降活発化した山頂の東～北東側のやや深いところを震源とする地震活動に関連すると考えられる変動がみられました（青矢印）。

（前ページ 図6の説明）

図7のGNSS基線①～⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（国）は国土地理院、（京）は京都大学の観測点です。

2023年10月17日の栲尾観測点の機器交換に伴うステップ状の変化を補正しています（①～⑤の灰色点線）。

②⑥の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

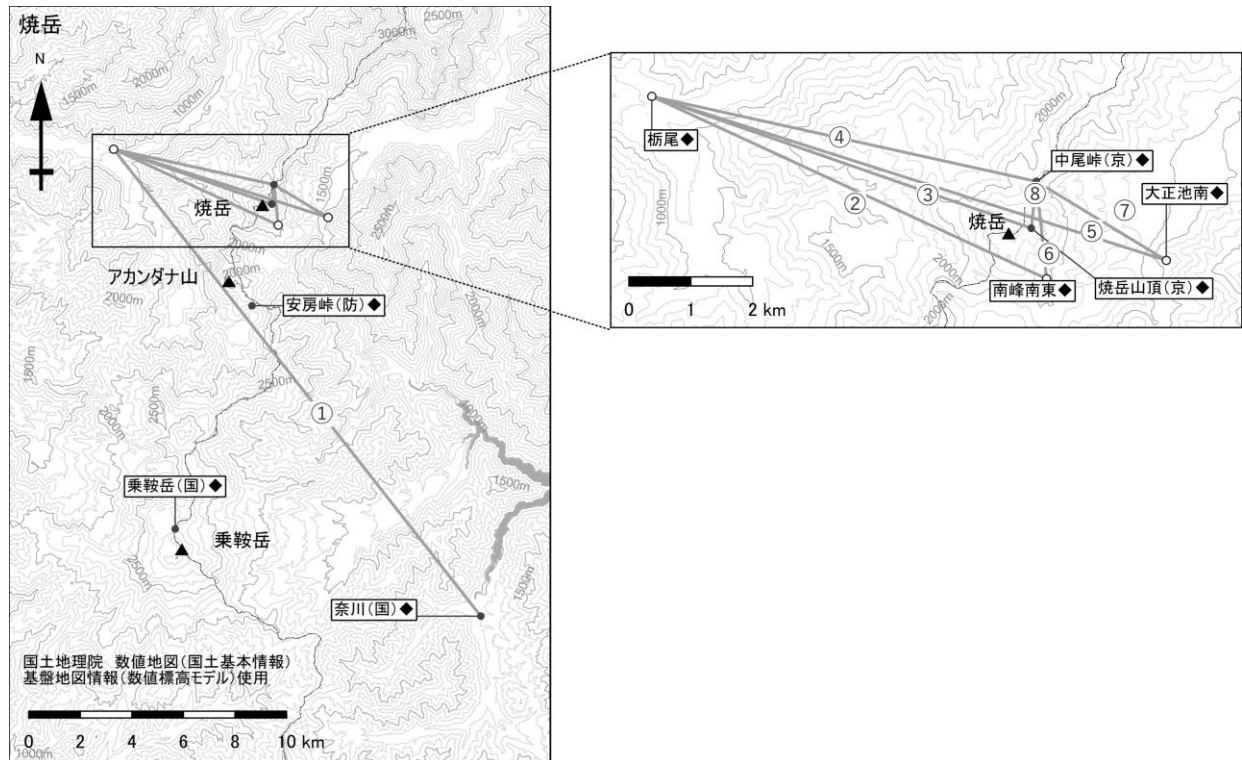


図7 焼岳 GNSS 連続観測点配置

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

①～⑧は図6のGNSS基線①～⑧に対応しています。③⑥⑧は図1のGNSS基線⑥④⑤にも対応しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所、（京）：京都大学

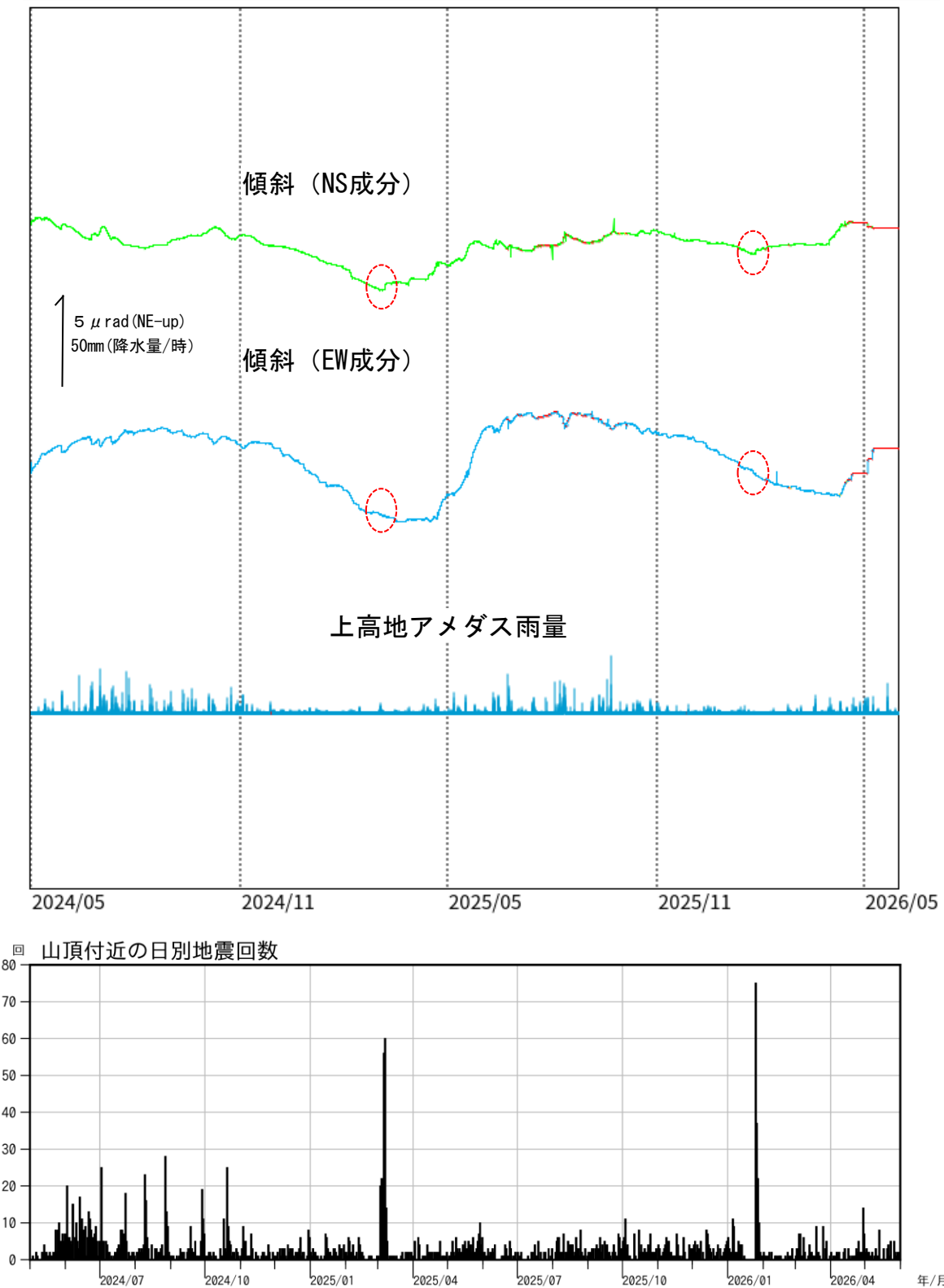


図8 焼岳 南峰南東観測点における傾斜データ及び日別地震回数
(2024年5月1日～2026年5月31日)
赤線部分は欠測を示します。

- ・傾斜計による観測では、2025年3月8日、2026年1月25日及び1月27日に山頂方向上がりを示すわずかな傾斜変動（赤破線）が認められました。その他の期間は、火山活動によるとみられる変動は認められません。

【焼岳周辺の地震活動】

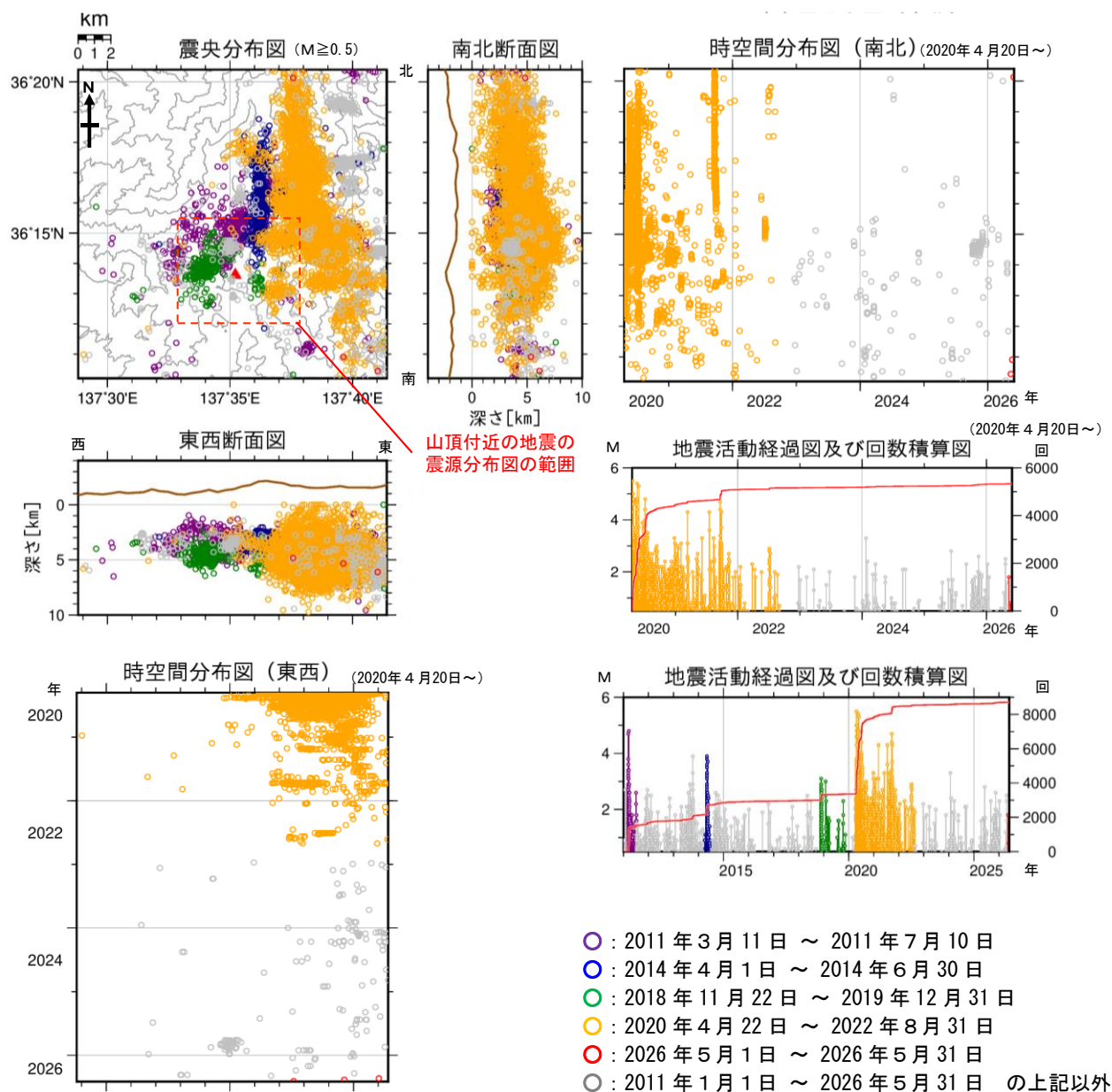


図9 焼岳 広域地震観測網による山体及び周辺の地震活動(2011年1月1日～2026年5月31日)

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。

M（マグニチュード）は地震の規模を表します。

図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

地震活動経過図及び回数積算図の赤線は積算回数（右軸）を示しています。

震央分布図中の赤破線領域は、図2で示す領域に対応しています。

- ・焼岳周辺では、2011 年（紫丸）、2014 年（青丸）、2018 年から 2019 年にかけて（緑丸）、2020 年 4 月から 2022 年 8 月にかけて（橙丸）、地震活動の活発化がみられました。
- ・今期間、震源が求まる焼岳周辺の地震活動は低調に経過しました。

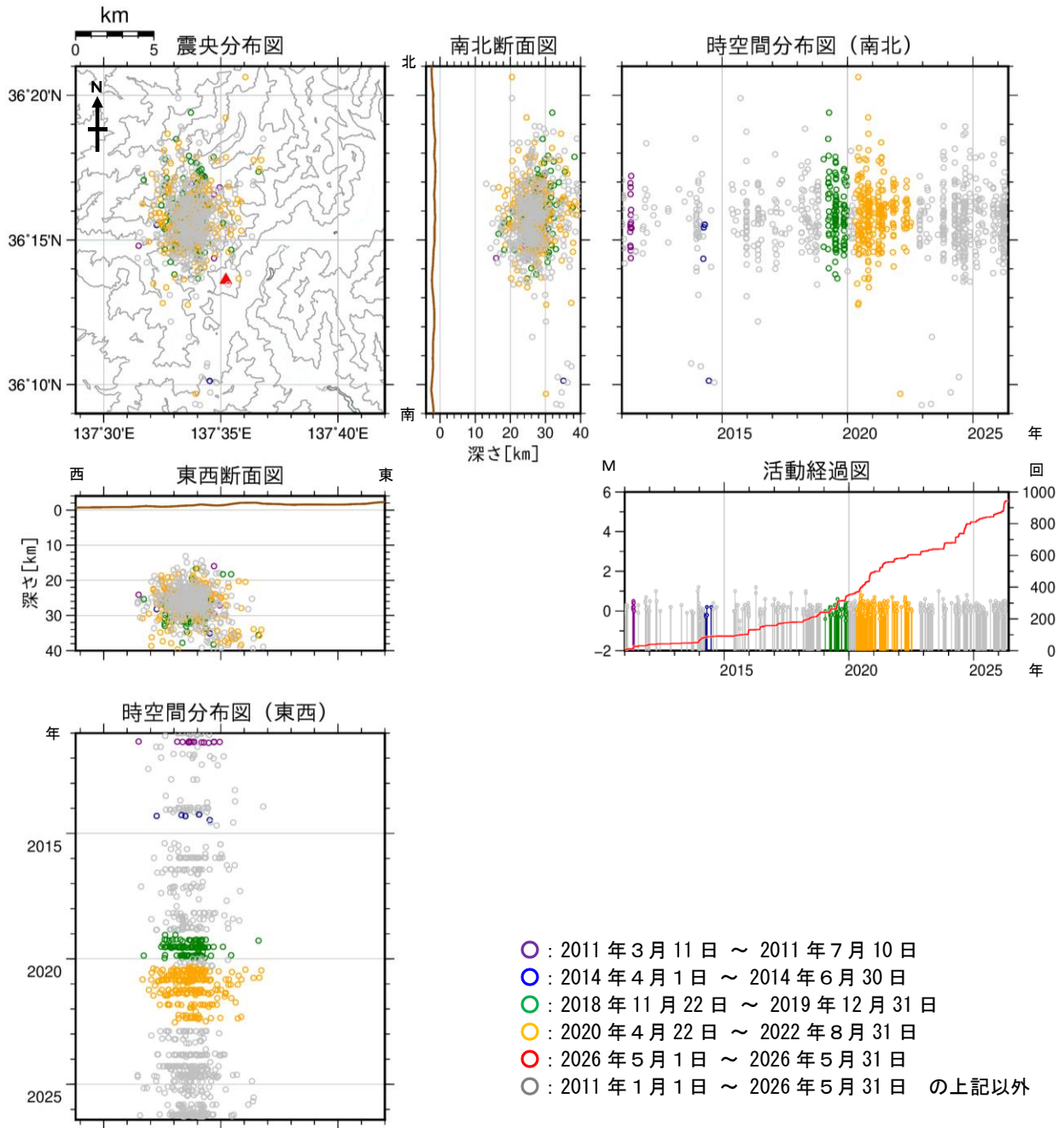


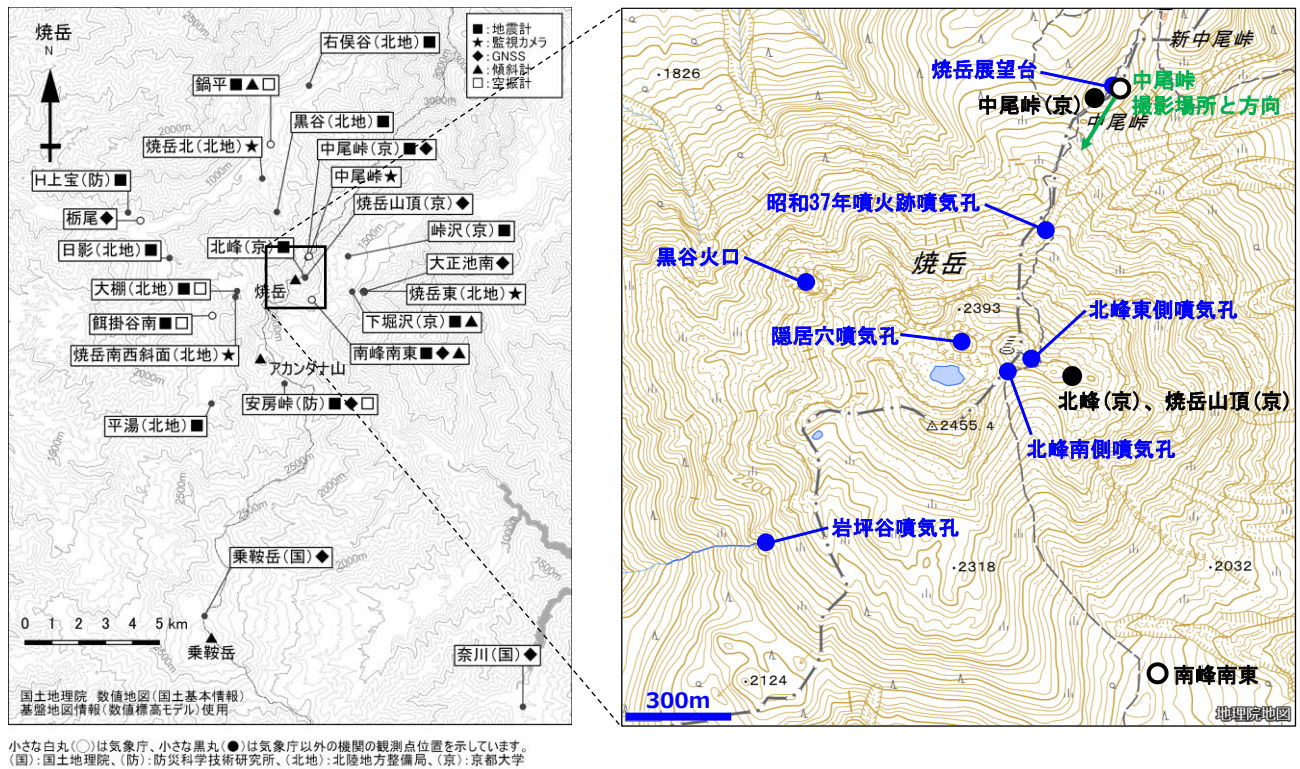
図10 焼岳 広域地震観測網による深部低周波地震の震源分布図（2011年1月1日～2026年5月31日）

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。

M（マグニチュード）は地震の規模を表します。

図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

- ・焼岳の北西側の深い所を震源とする低周波地震の発生状況に特段の変化はみられません。
- ・図9に示したような焼岳周辺の地震活動の活発化がみられた期間付近で、深部低周波地震が増加することがあります。



○は気象庁、●は気象庁以外の機関の観測点を示しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局

図 11 焼岳 観測点配置及び噴気孔位置

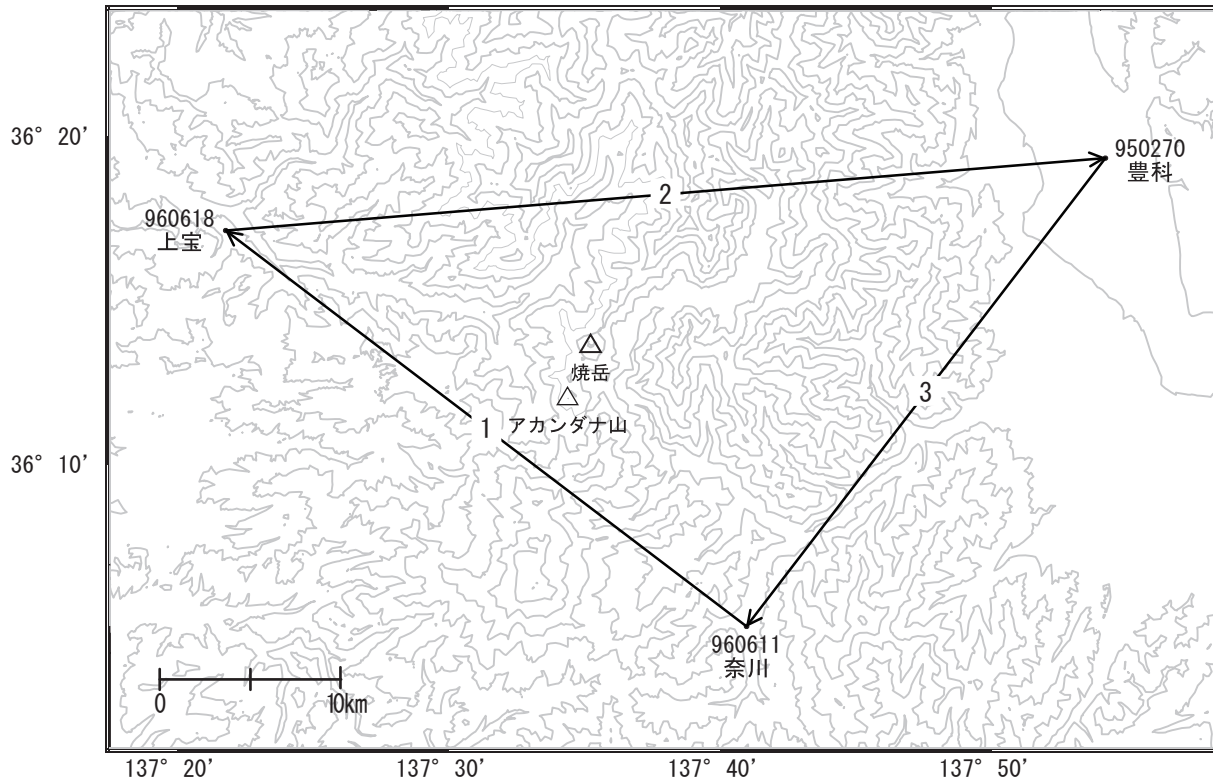
右図中の緑矢印は図4の撮影位置と方向を示します。

焼岳周辺の地殻変動

—GEONET(電子基準点等)による連続観測結果—

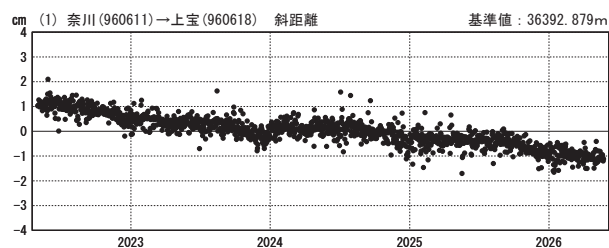
顕著な地殻変動は観測されていません。

焼岳周辺 GNSS連続観測基線図



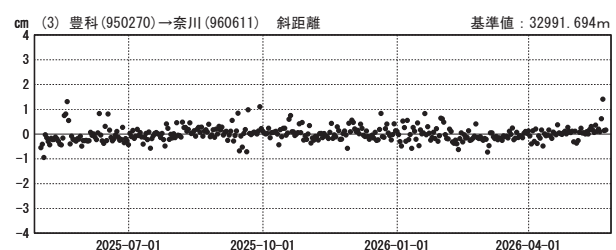
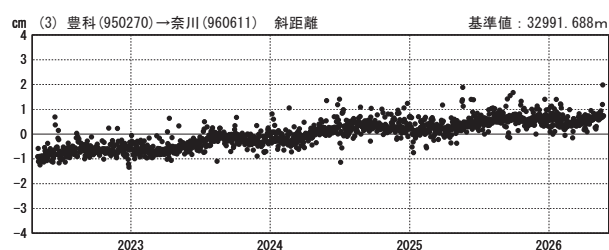
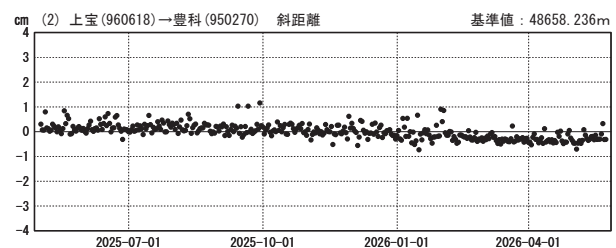
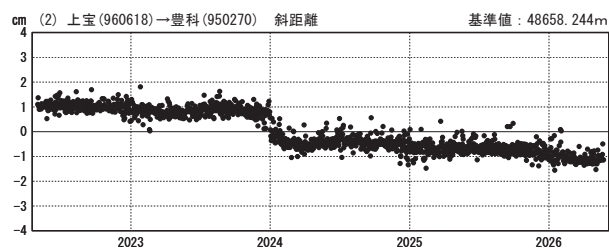
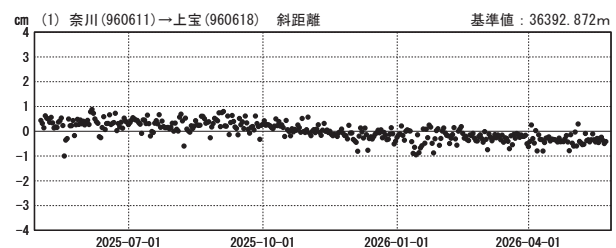
基線変化グラフ

期間: 2022-05-01~2026-05-23 JST



基線変化グラフ

期間: 2025-05-01~2026-05-23 JST



●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

国土地理院

令和7年（2025年）の硫黄島の火山活動

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

1月28日から2月14日及び10月17日に^{おきなほま}翁浜沖で噴火が発生しました。また、9月1日から30日にかけて千鳥ヶ浜で噴火が断続的に発生しました。千鳥ヶ浜での噴火に先行して8月30日から地震活動が活発化するとともに、通常より大きな隆起が観測されました。

長期的には島全体の隆起を示す地殻変動がみられています。また、島内には多くの噴気地帯や噴気孔があり、各所で小規模な噴火が時々発生しています。

○ 噴火警報・予報の状況、2025年の発表履歴

2025年中変更なし	火口周辺警報（火口周辺危険） 火山現象に関する海上警報（周辺海域警戒）
------------	--

○ 2025年の活動概況

・ 噴火等表面現象の状況（図1～9、図11①）

＜翁浜沖＞

海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、翁浜沖で1月28日から2月14日にかけて噴火が継続して認められました。この噴火活動では、灰色、または黒色の噴出物を含む水柱が概ね数分程度の間隔で、海面から最大で20m程度の高さまで上がりました。また、噴火地点付近では変色水や軽石の浮遊も確認されました。

海上自衛隊の協力により気象庁が実施した現地調査では、2月6日に翁浜沖の噴出地点付近で噴出物の堆積により形成されたと考えられる陸地を確認しました。また、2月13日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、翁浜沖に噴出物の堆積により形成されたと考えられる陸地が確認されましたが、3月12日の観測では浸食等により消失していました。

海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、10月17日10時28分頃に翁浜沖のこれまで噴火がみられた地点で、噴火が確認されました。この噴火では、高さ10～30m程度の黒色の噴煙及び海面の変色が認められました。

＜千鳥ヶ浜＞

9月1日19時14分頃に千鳥ヶ浜で噴火が発生しました。^{あそだいひがし}阿蘇台東監視カメラによる観測では、噴煙は高さ1,100m以上まで上がりました。高感度監視カメラでは、9月3日から7日にかけて、高温の噴出物を含む噴煙も時折観測されました。その後、9月30日にかけて断続的に噴火が発生しましたが、10月以降噴火は観測されませんでした。

海上自衛隊硫黄島航空基地隊より提供された噴火後の写真では、千鳥ヶ浜に新たな火口が形成され、複数箇所から白色の噴煙が上がっているのが認められました。また、火口周辺には灰黒色～灰白色の噴火堆積物が分布しているのが認められました。

海上保安庁が9月30日に実施した上空からの観測では、千鳥ヶ浜に形成された新たな火口から白色噴煙が上がっており、火口には灰色の火口湖が形成され、溢れた湖水が海に流れ込む様子が認められました。12月18日の観測では、千鳥ヶ浜火口では灰緑色の火口湖から少量の湯気が上がっているのが認められました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

＜ミリオンダラーホール（旧噴火口）＞

海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、9月5日10時頃から島西部の旧噴火口（通称：ミリオンダラーホール）で高さ50～100m程度の白色噴気が観測されました。海上自衛隊硫黄島航空基地隊より提供された9月8日に撮影した写真では、ミリオンダラーホールから白色噴気が上がっているのが認められ、その北側には複数の新たな火口地形が認められました。また、周辺の地表には灰黒色～灰白色の噴出物が分布しており、噴出物の飛散による植生の変色域も認められました。これらのことから、ミリオンダラーホール（新たな火口を含む）でごく小規模な噴火が発生したものと推定されます。

＜井戸ヶ浜＞

海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、10月3日、7日及び24日に井戸ヶ浜で噴出現象が確認されました。10月7日に上空から撮影された写真では、井戸ヶ浜の既存の火口から白色噴気が上がっており、火口から北方向にかけて噴火堆積物と考えられる黒色の変色域が認められました。これらのことから、井戸ヶ浜ではごく小規模な噴火が発生したものと推定されます。

阿蘇台東監視カメラによる観測では、今期間、井戸ヶ浜では高さ10～50m程度の白色噴気が時折観測されました。

・地震や微動等の発生状況（図10、図11②～⑥、図12、図14①～③、図15①～④）

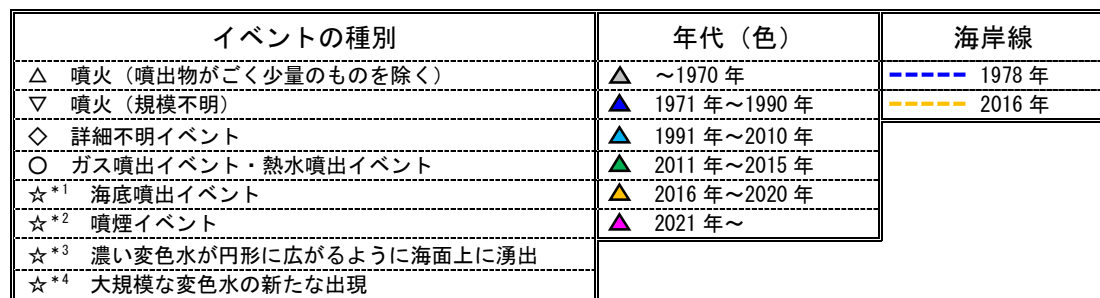
1月28日から2月14日にかけての翁浜沖での噴火に伴い、単色型微動及び空振が多数観測されました。

9月1日からの千鳥ヶ浜での噴火に先行して、火山性地震及び単色型微動が8月30日から増加しました。9月1日には火山性地震の日回数が700回に達しました。9月7日以降、地震は次第に減少し、単色型微動も10月以降減少しました。また、千鳥ヶ浜の噴火に伴い空振が観測されました。千鳥観測点における空振の最大振幅は、9月1日の噴火で観測された20.6Paでした。

・地殻変動の状況（図11⑦、図13、図14④、図15⑤、図16、図17）

GNSS連続観測では、8月30日頃から通常より大きな隆起が観測されました。千鳥ヶ浜の噴火地点に近い島の西部の観測点（M硫黄島A）における隆起量は約30cmに達しました。その後、島内の観測点では9月5日頃から沈降に転じましたが、10月中旬頃から停滞し、11月に入り隆起が認められています。

2024年頃から隆起速度に低下が認められるものの、長期的には島全体の隆起が継続しています。



噴出地点及び各噴出地点で確認された現象は、関・他(2024)* (2023年8月まで)及び気象庁、海上自衛隊及び防災科学技術研究所(2023年9月以降)の観測を基に記載しています。青及び橙破線はそれぞれ1978年及び2016年の海岸線を示します。

(<https://www.gsj.jp/publications/pub/openfile/openfile0755.html>).

- ・ 翁浜沖で1月28日から2月14日にかけて噴火が継続して認められました。
- ・ 島西部の千鳥ヶ浜で9月1日から30日にかけて断続的に噴火が発生しました。また、ミリオンダラーホール(旧噴火口)でも9月に噴火が発生しました。
- ・ 10月には井戸ヶ浜及び翁浜沖で噴火が認められました。



図2-1 硫黄島 翁浜沖での2月の噴火の状況（左：2月1日、右：2月6日）

- ・海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、翁浜沖で1月28日から2月14日にかけて噴火が確認されました。灰色または黒色の噴出物を含む水柱が数分程度の間隔で、海面から最大で20m程度の高さまで上がるのが観測されました。また、変色水も認められました。
- ・翁浜沖の噴出地点付近で噴出物の堆積（矢印）が確認されました。



図2-2 硫黄島 翁浜沖での10月の噴火の状況（海上自衛隊硫黄島航空基地隊提供）

- ・海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、10月17日10時28分頃に翁浜沖のこれまで噴火がみられた地点で、噴火が確認されました。この噴火では、高さ10～30m程度の黒色の噴煙及び海面の変色が認められました。



図3-1 硫黄島 翁浜沖の状況（海上保安庁提供）

- ・ 2月13日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、翁浜沖に噴出物の堆積により形成されたと考えられる陸地が確認されましたが、3月12日の観測では浸食等により消失していました（破線内）。



図3-2 硫黄島 翁浜沖の状況（海上保安庁提供）

- ・ 10月23日及び12月18日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、翁浜沖のこれまで噴火がみられた地点で、気泡の湧出が認められました。

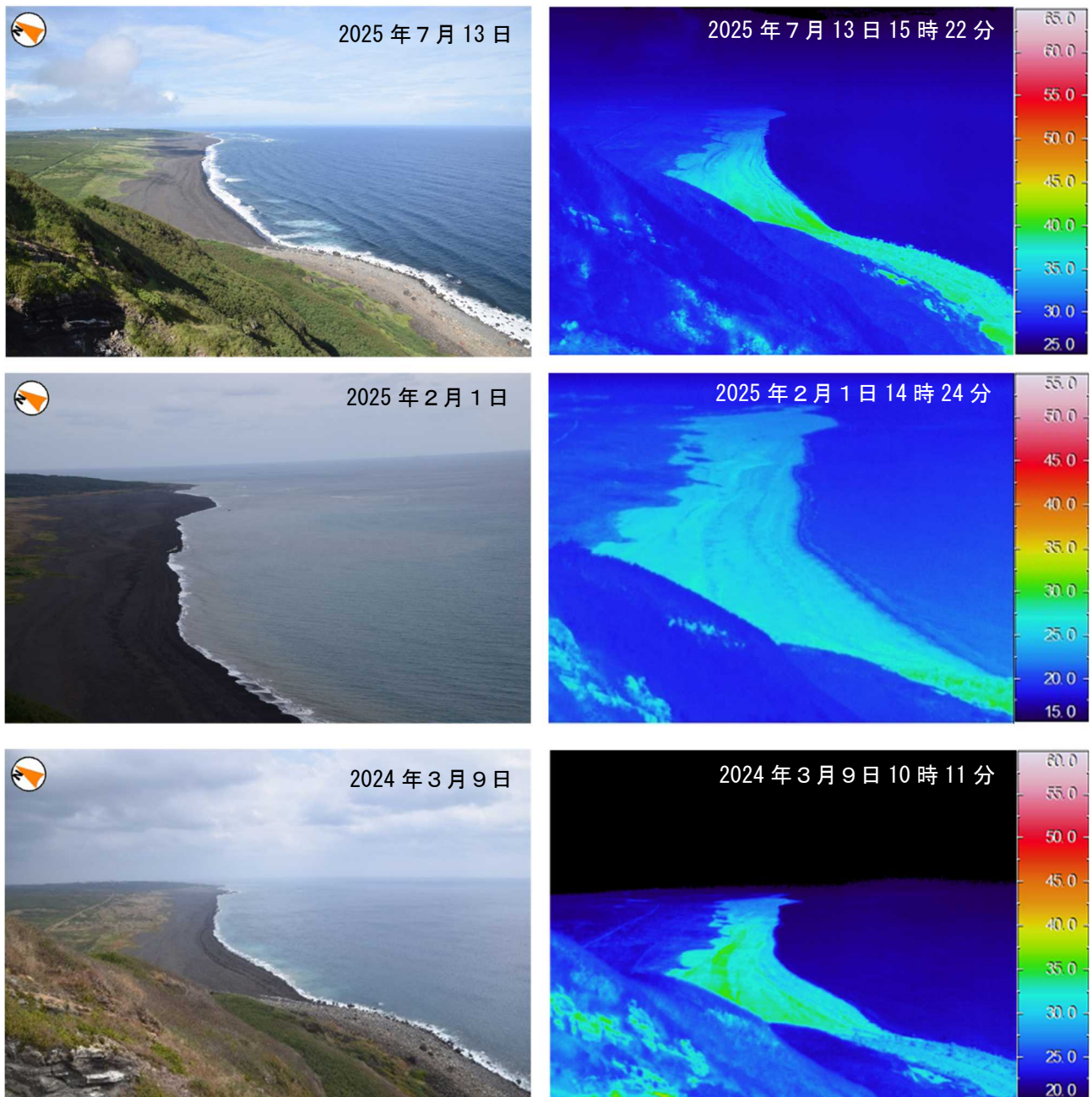


図4 硫黄島 摺鉢山から見た翁浜の状況

- ・ 7 月 13 日に実施した現地調査では、翁浜沖で噴出や変色水はみられませんでした。また、赤外熱映像装置による観測では、翁浜やその沖合に熱異常は認められませんでした。



図5 硫黄島 千鳥ヶ浜における噴火の状況（阿蘇台東 高感度監視カメラによる）

- ・ 9月1日19時14分頃に千鳥ヶ浜で噴火が発生しました。阿蘇台東監視カメラによる観測では、噴煙は高さ1,100m以上まで上がりました。また、9月3日から7日にかけて、高温の噴出物を含む噴煙も時折観測されました。
- ・ その後、9月30日にかけて断続的に噴火が発生しました。10月以降、噴火は観測されませんでした。



図6-1 硫黄島 千鳥ヶ浜の状況（海上自衛隊硫黄島航空基地隊提供）

- ・海上自衛隊硫黄島航空基地隊より提供された9月1日に発生した噴火後の写真では、千鳥ヶ浜に新たな火口が形成され、複数箇所から白色の噴煙が上がっているのが認められました。また、火口周辺には灰黒色～灰白色の噴火堆積物が分布しているのが認められました。



図6-2 硫黄島 千鳥ヶ浜の状況（海上保安庁提供）

- ・9月30日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、千鳥ヶ浜に形成された新たな火口から白色噴煙が高さ約600mまで上がっているのが確認されました。また、火口には灰色の火口湖が形成され、湯気が盛んに上がっており、溢れた湖水が海に流れ込む様子が認められました。千鳥ヶ浜の火口周辺の海域では、灰白色の変色水が認められました。
- ・12月18日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、千鳥ヶ浜火口では灰緑色の火口湖から少量の湯気が上がっており、火口周辺の海域では灰白色及び青白色の変色水が認められました。



図7 硫黄島 ミリオンドラーホールの状況（海上自衛隊硫黄島航空基地隊提供写真に加筆）

- ・海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、9月5日10時頃から島西部の旧噴火口（通称：ミリオンドラーホール）で高さ50～100m程度の白色噴気が観測されました。
- ・海上自衛隊硫黄島航空基地隊より提供された9月8日に撮影した写真では、ミリオンドラーホールから白色噴気が上がっているのが認められ、その北側には複数の新たな火口地形が認められました。また、周辺の地表には灰黒色～灰白色の噴出物が分布しており、噴出物の飛散による植生の変色域も認められました。このことから、ミリオンドラーホール（新たな火口を含む）でごく小規模な噴火が発生したものと推定されます。



図8 硫黄島 井戸ヶ浜の状況（海上自衛隊第21航空群提供写真に一部加筆）

- ・海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、10月3日、7日及び24日に井戸ヶ浜で噴出現象が確認されました。10月7日に上空から撮影された写真では、井戸ヶ浜の既存の火口から白色噴気が上がっており、火口から北方向にかけて噴火堆積物と考えられる黒色の変色域が認められました。
- ・これらのことから、井戸ヶ浜ではごく小規模な噴火が発生したものと推定されます。



図9 硫黄島 井戸ヶ浜の状況（阿蘇台東監視カメラによる）

- ・阿蘇台東監視カメラによる観測では、井戸ヶ浜で高さ 10～50m程度の白色噴気が時折観測されました。

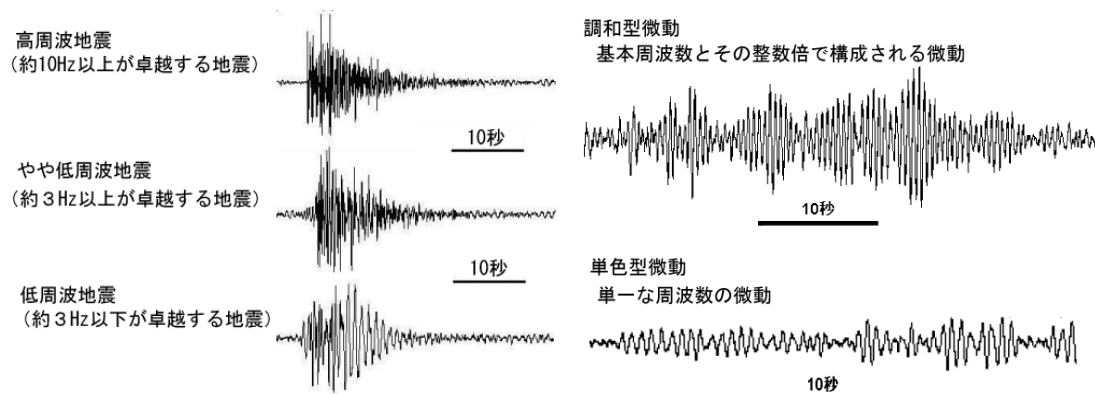


図10 硫黄島 硫黄島でみられる主な火山性地震、微動（調和型、単色型）の特徴と波形例

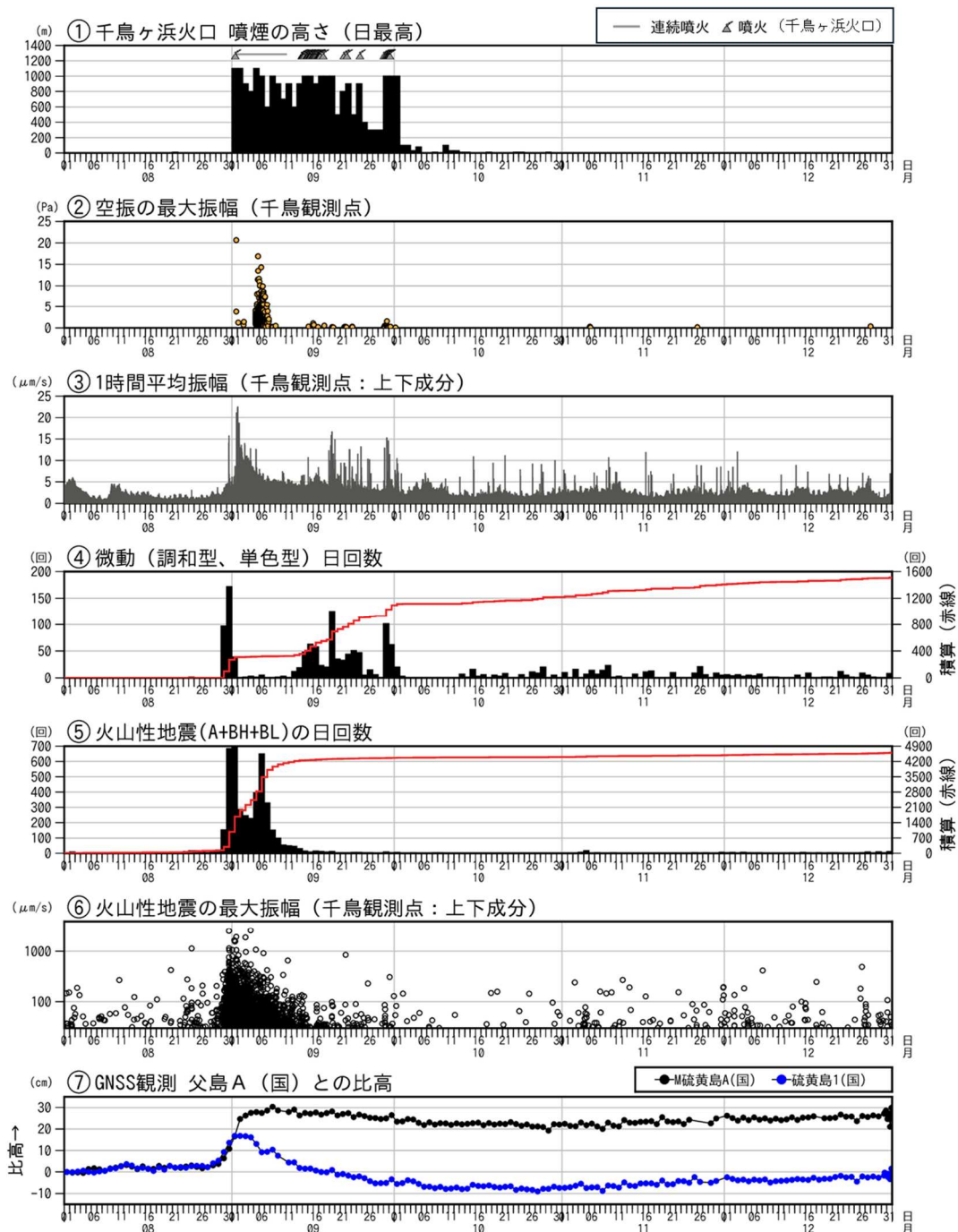


図 11 硫黄島 火山活動経過図 (8月1日～12月31日)

- ・ 千鳥ヶ浜では9月1日19時14分頃に噴火が発生し、噴煙は高さ1,100m以上まで上がりました。その後、9月30日にかけて断続的に噴火が発生しました。10月以降、噴火は観測されませんでした。
- ・ 千鳥ヶ浜の噴火に伴い空振が観測されました。千鳥観測点における空振の最大振幅は、9月1日の噴火で観測された20.6Paでした。
- ・ 千鳥ヶ浜の噴火に先行し、これまでの翁浜沖の噴火活動でみられたような単色型微動が8月30日から増加しました。また、火山性地震も8月30日から増加し、9月1日には日回数が700回に達しました。9月7日以降、地震は次第に減少し、単色型微動も10月以降減少しました。
- ・ GNSS連続観測では、8月30日頃から通常より大きな隆起が観測されました。千鳥ヶ浜の噴火地点に近い島の西部の観測点(M硫黄島A)における隆起量は約30cmに達しました。その後、島内の観測点では9月5日頃から沈降に転じましたが、10月中旬頃から停滞し、11月に入り隆起が認められています。

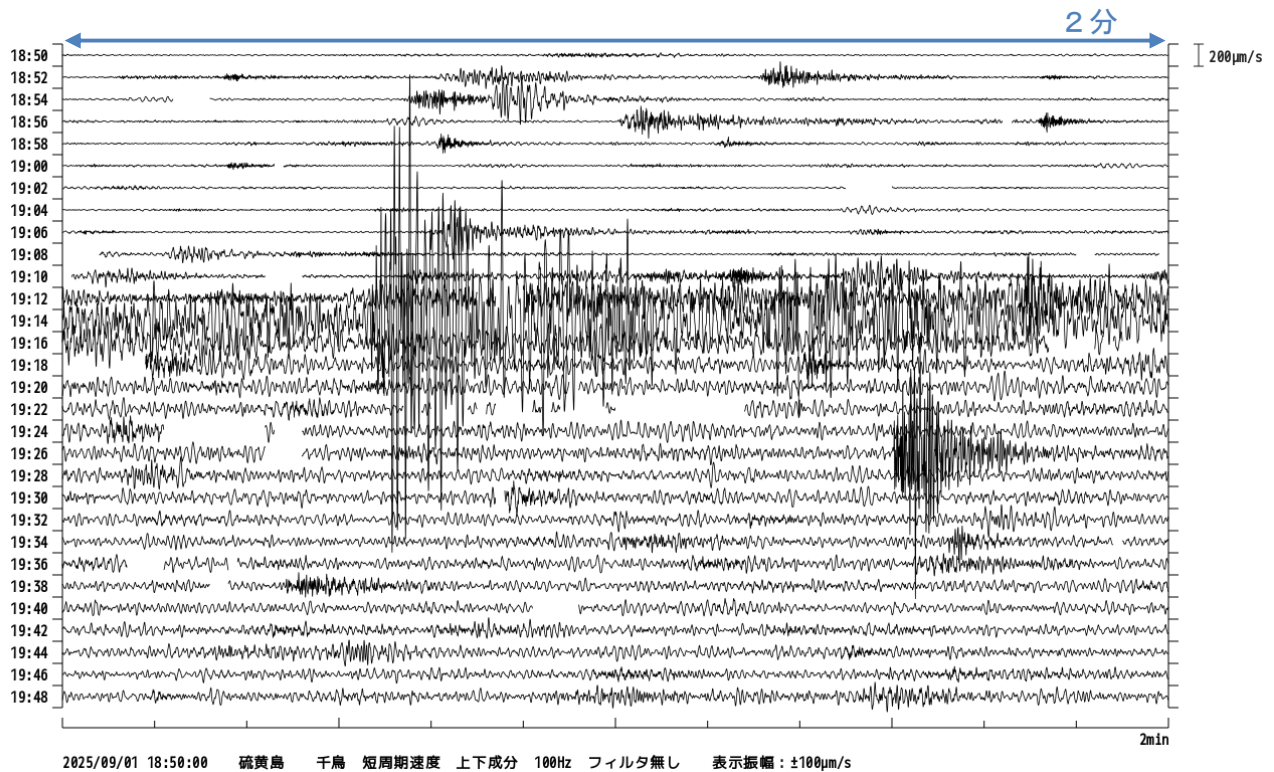


図 12-1 硫黄島 9月1日の千鳥ヶ浜の噴火に伴い観測された火山性微動

(9月1日18時50分～19時50分：千鳥観測点 上下成分)

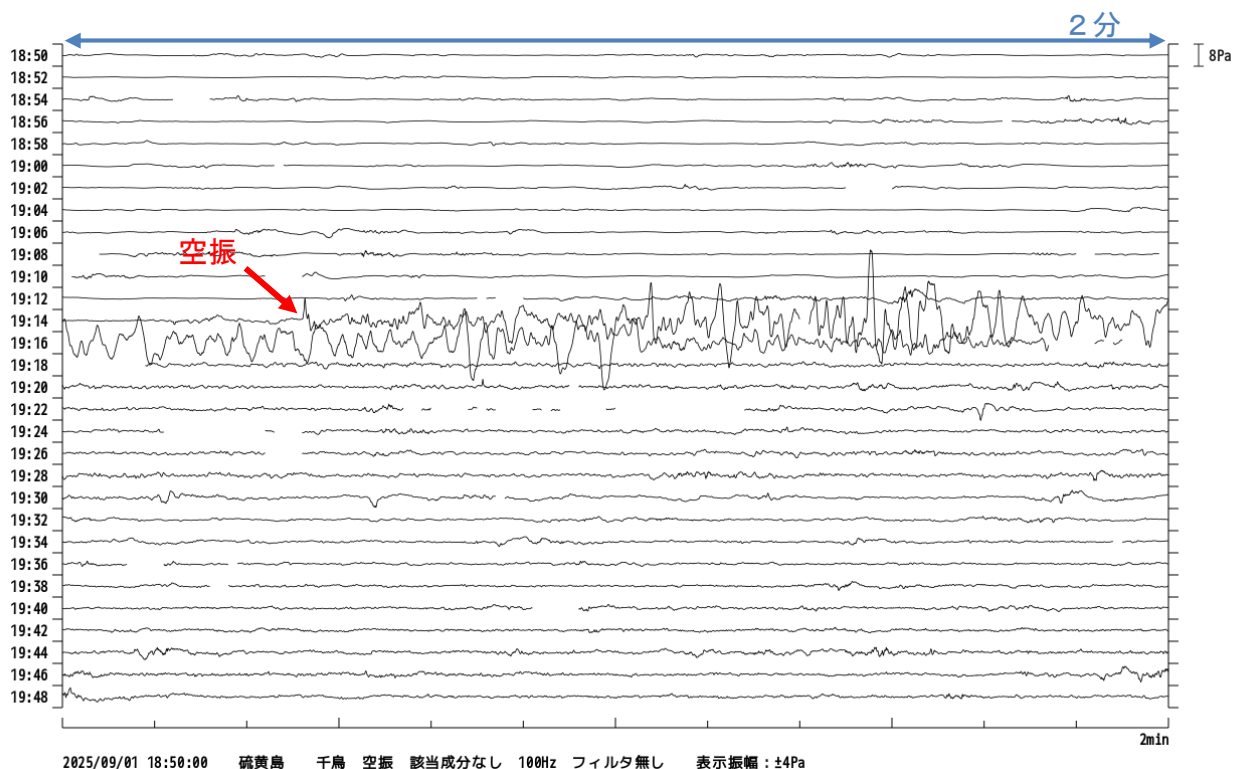


図 12-2 硫黄島 9月1日の千鳥ヶ浜の噴火に伴い観測された空振波形

(9月1日18時50分～19時50分：千鳥観測点)

- ・ 9月1日19時14分頃に発生した噴火に伴い、火山性微動及び空振（最大振幅：20.6Pa）が観測されました。

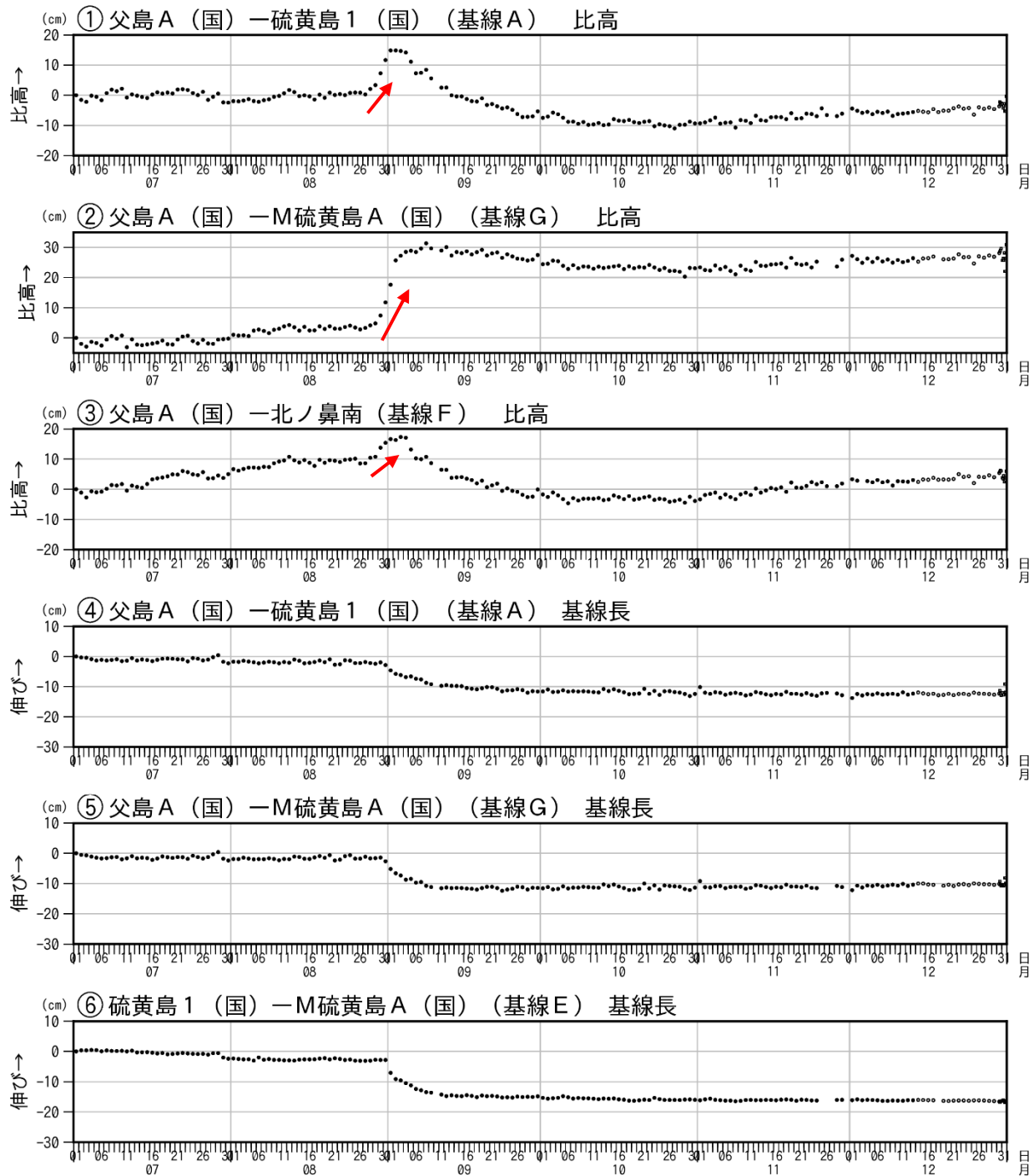


図 13 硫黄島 GNSS 連続観測結果 (7 月 1 日～12 月 31 日)
(国): 国土地理院。グラフの空白部分は欠測。基線は図 17 に対応。

- ・ GNSS 連続観測では、長期的な島全体の隆起が継続するなかで、8 月 30 日頃から通常より大きな隆起が観測されました (①～③ 赤矢印)。元山の観測点 (硫黄島 1 及び北ノ鼻南) の隆起は、9 月 5 日頃から沈降に転じ、千鳥ヶ浜火口に近い島の西部の観測点 (M硫黄島 A) では、9 月中旬以降、緩やかな沈降が認められました。沈降は 10 月中旬頃から停滞しましたが、11 月に入り隆起に転じています。
- ・ ④～⑥ の基線では 8 月 30 日頃から基線長の縮みの変化がみられていましたが、次第に鈍化し 10 月以降、概ね停滞しています。基線長の縮みの変化は、主に硫黄島 1 (国) 観測点の北西から北方向の変位及び M硫黄島 A 観測点の北西から北東方向の変位によるものです。

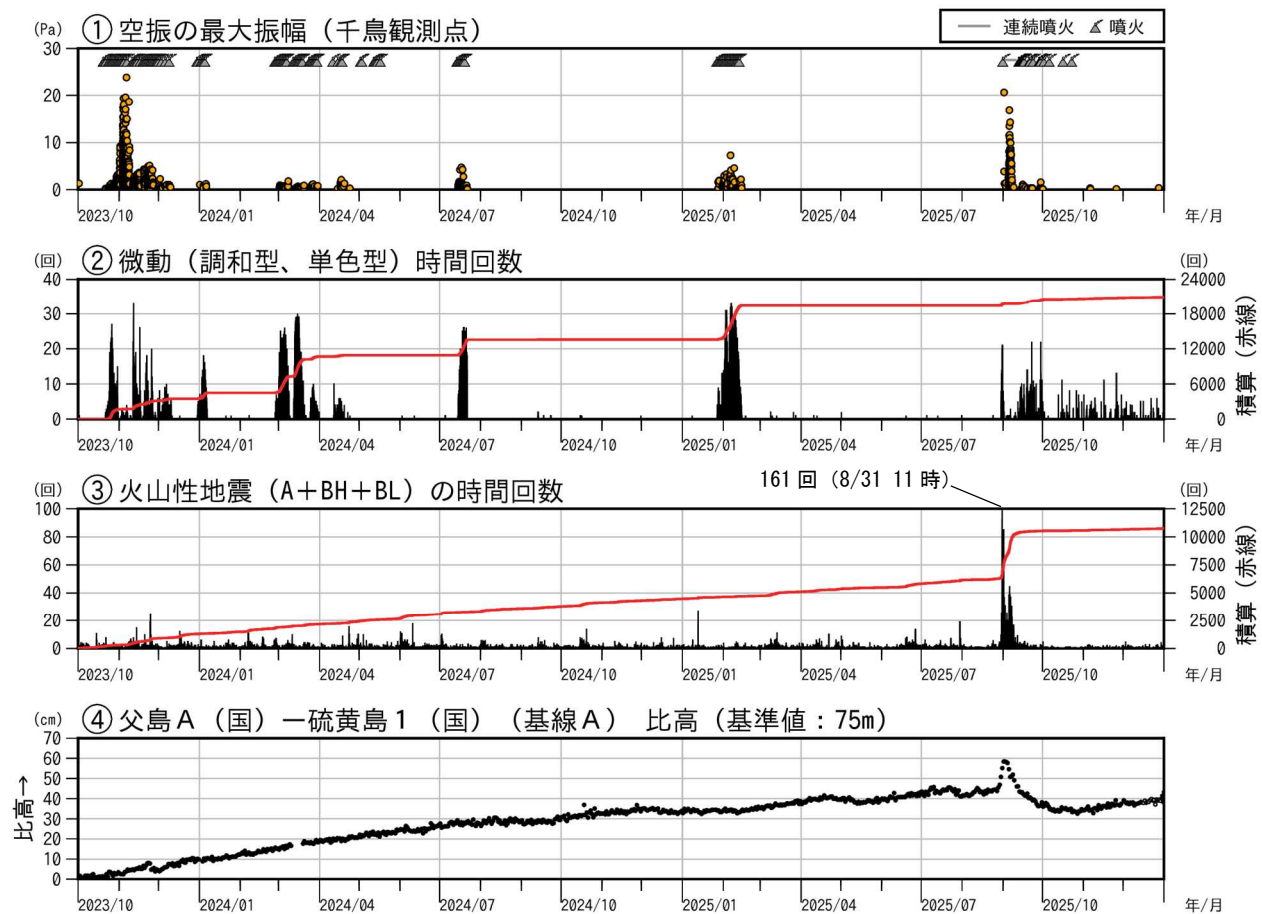


図 14 硫黄島 火山活動経過図 (2023 年 10 月 1 日～2025 年 12 月 31 日)

【計数基準】千鳥あるいは天山（防）で上下動振幅 $30 \mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 2.0 秒以内

千鳥観測点での空振の振幅は、上記の地震の計数基準によらず、噴火に伴う明瞭な信号であると判断した場合にのみ検出しています。ただし、ノイズレベルが大きく、噴火に伴う空振の振幅が検出できなかった期間があります。

④父島 A に対する比高の変化（図 17 に対応）

（国）：国土地理院 グラフの空白部分は欠測

- ・ 1 月 28 日から 2 月 14 日にかけて翁浜沖での噴火に伴う空振が観測されました。また、9 月には千鳥ヶ浜での噴火に伴う空振が観測されました（①）。
- ・ 翁浜沖での噴火に伴い、1 月下旬から 2 月中旬にかけて単色型微動が増加しました。また、千鳥ヶ浜での噴火に先行して 8 月 30 日から単色型微動が増加しました。10 月以降、単色型微動は減少し、日回数は概ね 20 回以下で推移しました（②）。
- ・ 火山性地震が 8 月 30 日から増加し、9 月 1 日には地震の日回数は 700 回に達しました。9 月 7 日以降、地震は次第に減少しました（③）。
- ・ GNSS 連続観測では、長期的に島全体の隆起が継続しているなかで、8 月 30 日頃から通常より大きな隆起が観測されました。硫黄島 1 観測点の隆起は、9 月 5 日頃から沈降に転じました。沈降は 10 月中旬頃から停滞しましたが、11 月に入り隆起に転じています（④）。

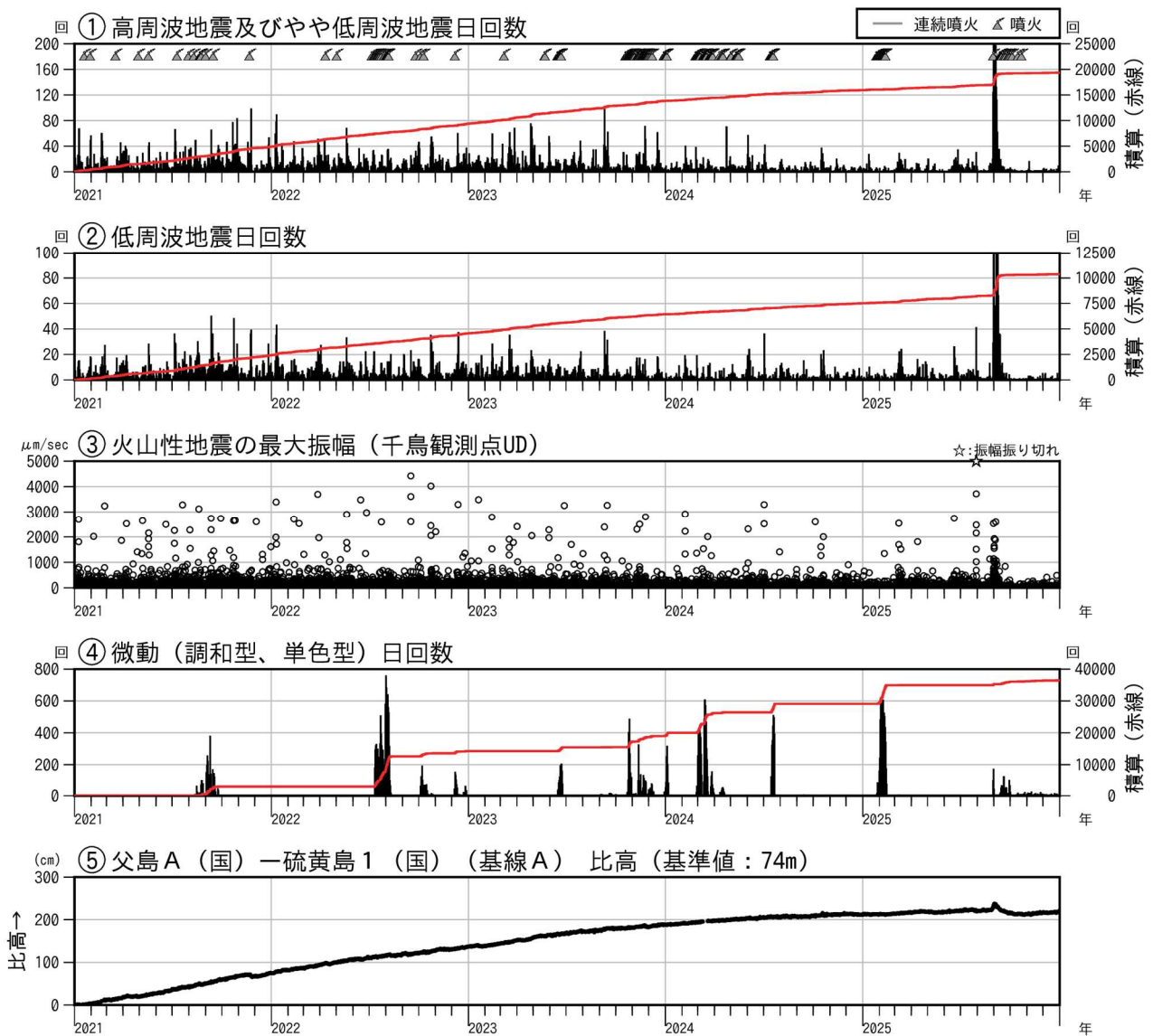


図 15 硫黄島 火山活動経過図 (2021 年 1 月 1 日～2025 年 12 月 31 日)

【計数基準】千鳥あるいは天山（防）で上下動振幅 $30 \mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 2.0 秒以内

- ・ 中期的には 2024 年以降、それ以前と比較して火山性地震の発生頻度に低下傾向が認められていましたが、8 月 30 日から火山性地震が増加しました。9 月 7 日以降、地震は次第に減少しました（①～③）。
- ・ 単色型微動は、2021 年以降の翁浜沖での噴火の際にも観測されています（④）。
- ・ 2024 年頃から隆起速度に低下が認められるものの、長期的には島全体の隆起が継続しています（⑤）。

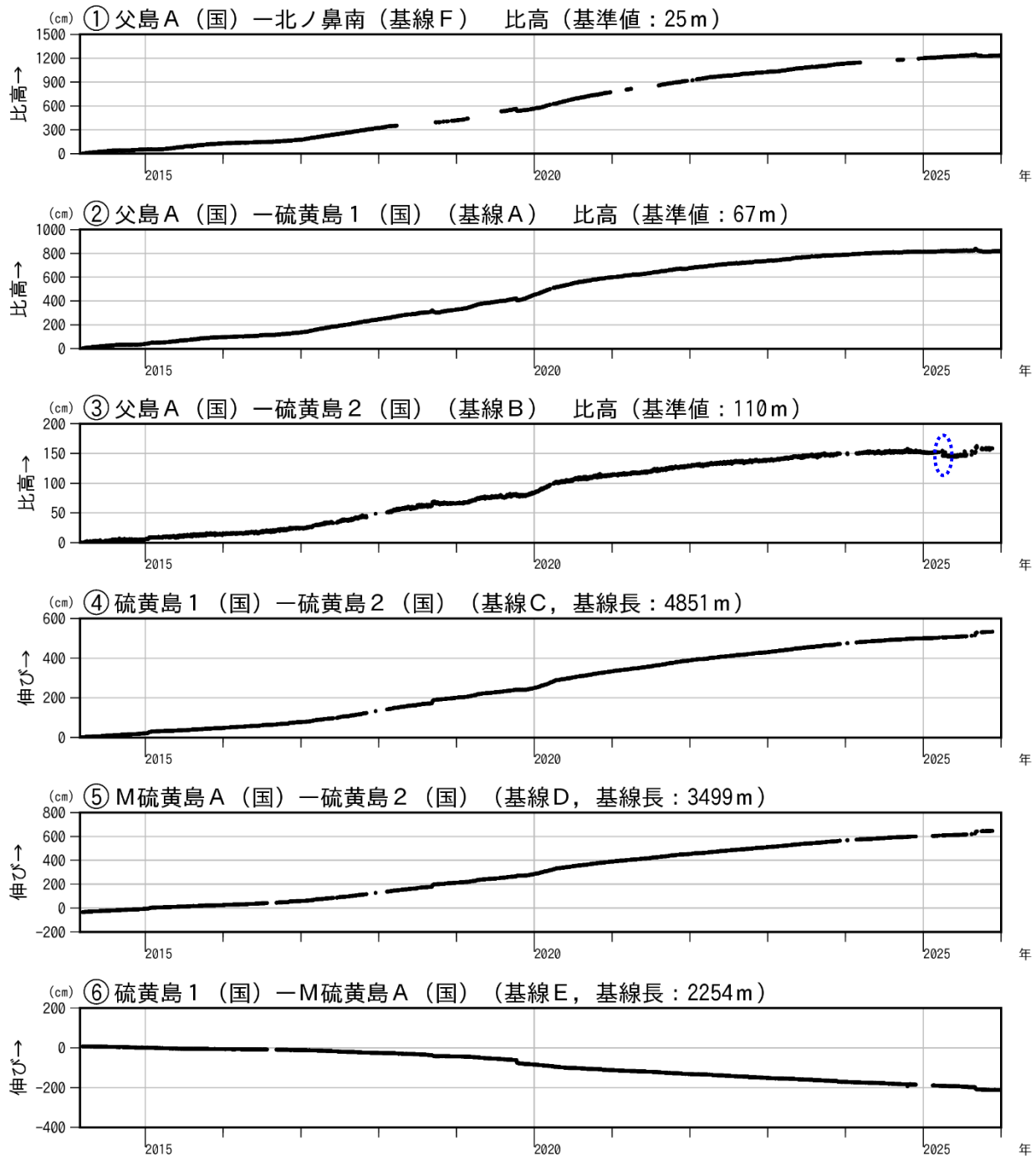
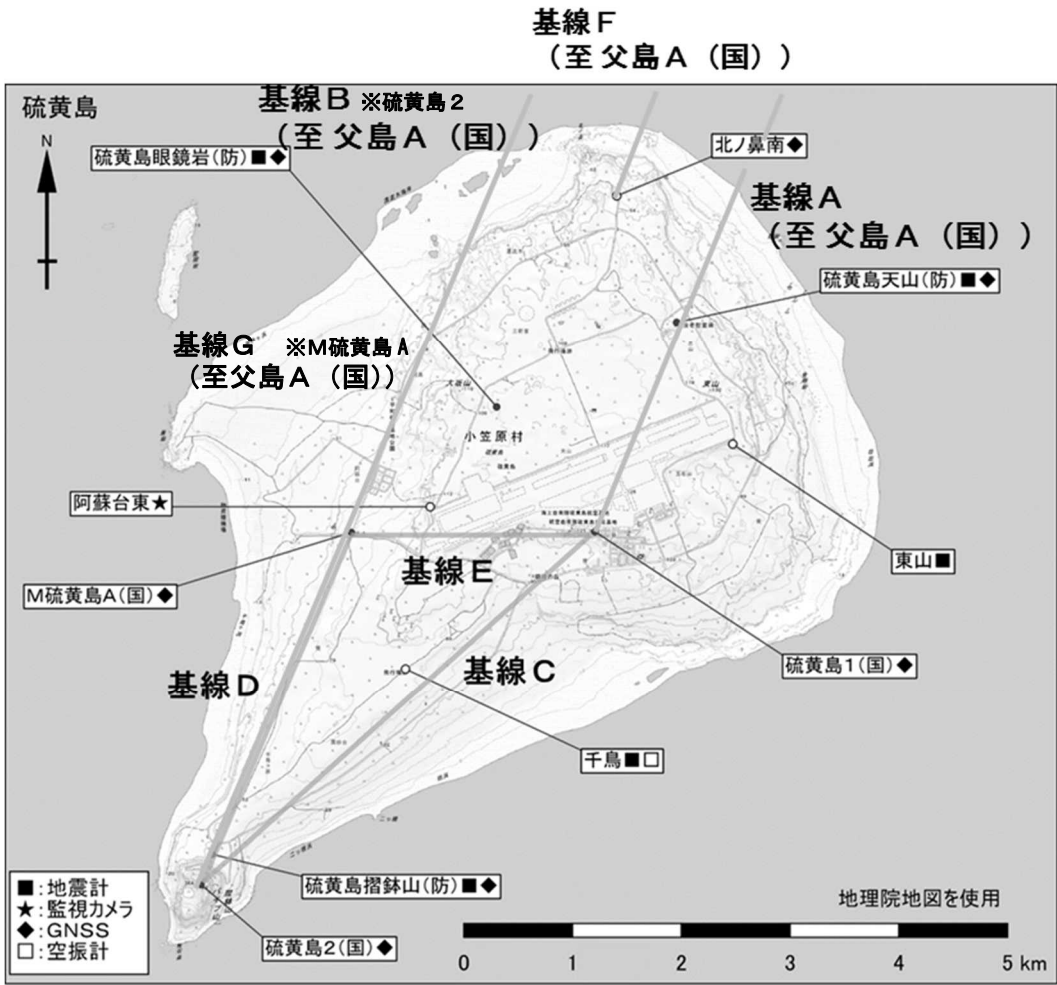


図 16 硫黄島 GNSS 連続観測結果 (2014 年 3 月 1 日 ~ 2025 年 12 月 31 日)

(国) : 国土地理院。グラフの空白部分は欠測。

- ① 父島 A に対する北ノ鼻南の比高の変化 (図 17 基線 F)
- ② 父島 A に対する硫黄島 1 の比高の変化 (図 17 基線 A)
- ③ 父島 A に対する硫黄島 2 の比高の変化 (図 17 基線 B)
- ④ 硫黄島 1 — 硫黄島 2 の基線長変化 (図 17 基線 C)
- ⑤ M硫黄島 A — 硫黄島 2 の基線長変化 (図 17 基線 D)
- ⑥ 硫黄島 1 — M硫黄島 A の基線長変化 (図 17 基線 E)
- ③ 青破線で示す変化は火山活動によるものではないと考えられます。

・2024 年頃から隆起速度に低下が認められるものの、長期的には島全体の隆起が継続しています(①~③)。
 ・長期的に④及び⑤の基線長に伸びがみられますが、主に硫黄島 2 (国) 観測点で南方向の変位が継続していることによります。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所

図 17 硫黄島 観測点配置図

表 1 硫黄島 気象庁の観測点一覧

測器種類	地点名	位置			設置高 (m)	観測開始日	備考
		緯度	経度	標高(m)			
地震計	千鳥	24° 46.12′	141° 18.43′	72	0	2011.3.8	
	東山	24° 47.26′	141° 20.25′	110	0	2018.3.1	広帯域地震計
空振計	千鳥	24° 46.12′	141° 18.43′	72	2	2011.4.1	
GNSS	北ノ鼻南	24° 48.49′	141° 19.57′	78	3	2014.3.13	
監視カメラ	阿蘇台東	24° 46.93′	141° 18.56′	103	2	2011.3.10	

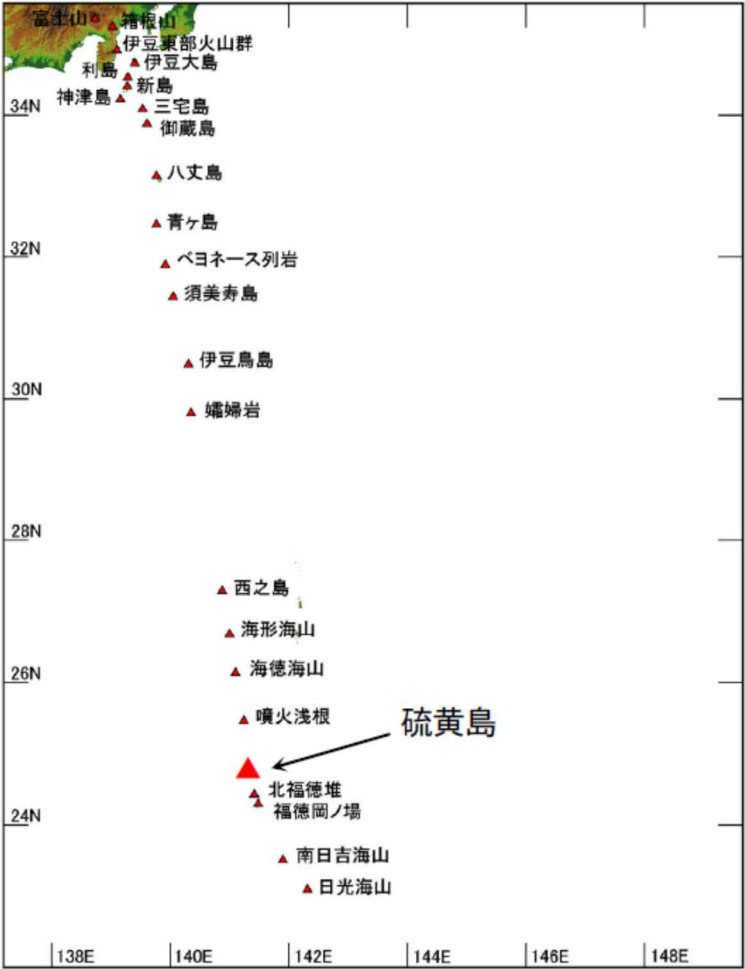


図 18 硫黄島 位置図

硫黄島の火山活動解説資料（令和8年5月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

今期間、島内及びその周辺海域で噴火は認められず、火山性地震は少ない状態で経過しました。長期的には島全体の隆起を示す地殻変動が認められ、多くの噴気地帯や噴気孔があり、各所で小規模な噴火が時々発生していることから、従来から小規模な噴火がみられていた領域や沿岸では、小規模な噴火の発生に警戒してください。

平成19年12月1日に火口周辺警報（火口周辺危険）を発表しました。また、平成24年4月27日以降の火山活動に伴い、平成24年4月29日に火山現象に関する海上警報を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴気など表面現象の状況（図1～2）

今期間、島内及びその周辺海域で噴火は確認されませんでした。阿蘇台東監視カメラによる観測では、28日に千鳥ヶ浜火口付近からの土砂噴出を観測しましたが、噴煙は観測されませんでした。井戸ヶ浜では白色噴気が時折観測されました。阿蘇台陥没孔からの噴気は低調に経過しました。

・ 地震や微動の発生状況（図3、図4-①～③、図5-①～④）

今期間、火山性地震はやや少ない状態で経過しました。これまでの翁浜沖や千鳥ヶ浜火口の噴火活動でみられたような単色型微動の日回数は、少ない状態で経過しました。

・ 地殻変動の状況（図4-④・⑤、図5-⑤、図6、図7）

GNSS連続観測では、2025年11月以降、隆起が認められています。2024年頃から隆起速度に低下が認められるものの、長期的には島全体の隆起が継続しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

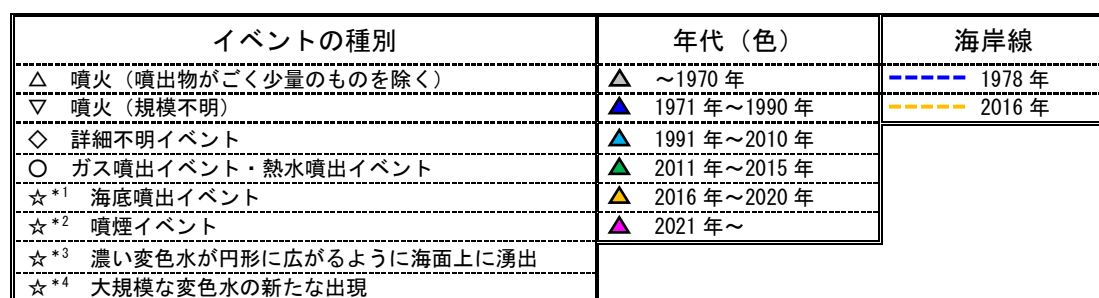
次回の火山活動解説資料（令和8年6月分）は令和8年7月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。



噴出地点及び各噴出地点で確認された現象は、関・他(2024)* (2023年8月まで)及び気象庁、海上自衛隊及び防災科学技術研究所(2023年9月以降)の観測を基に記載しています。青及び橙破線はそれぞれ1978年及び2016年の海岸線を示します。

・今期間、島内及びその周辺海域で噴火は確認されませんでした。



図2 硫黄島 井戸ヶ浜及び千鳥ヶ浜の状況（阿蘇台東監視カメラによる）

- ・ 千鳥ヶ浜火口付近では、28日に高さ20m程度まで上がる土砂噴出が観測されました。千鳥ヶ浜火口からの噴煙は観測されませんでした。
- ・ 井戸ヶ浜で白色噴気が時折観測されました。阿蘇台陥没孔からの噴気は低調に経過しました。

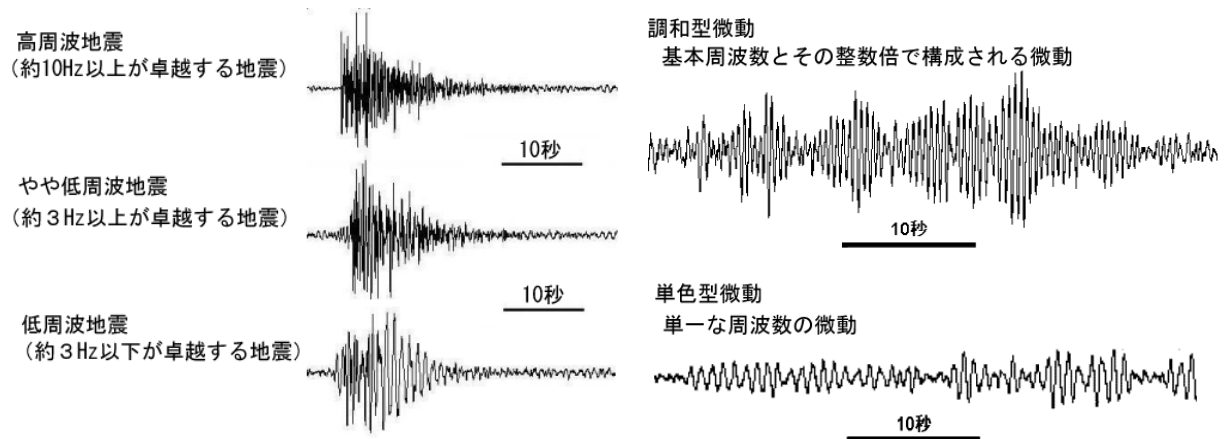


図3 硫黄島 硫黄島でみられる主な火山性地震、微動（調和型、単色型）の特徴と波形例

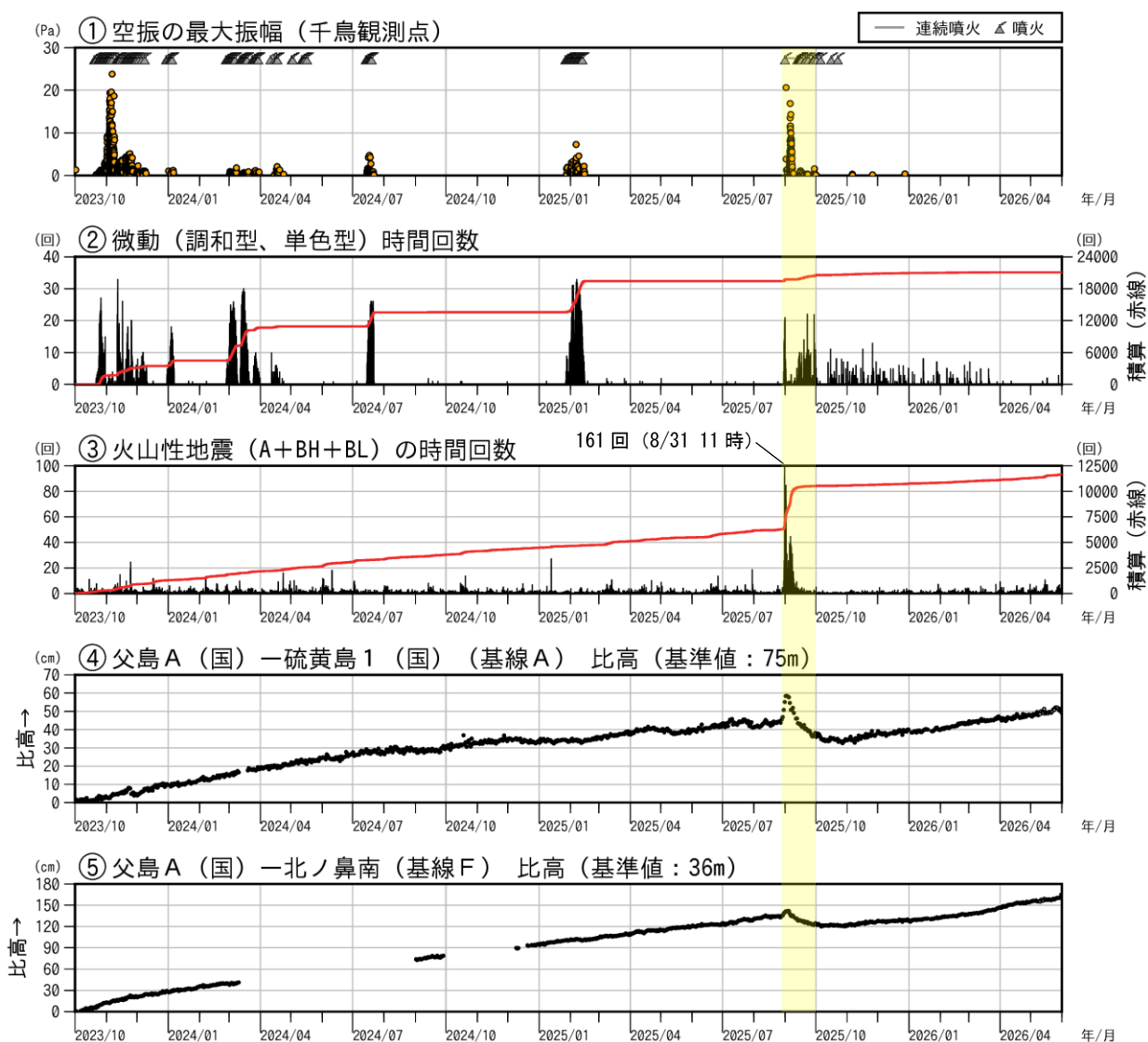


図4 硫黄島 火山活動経過図（2023年10月1日～2026年5月31日）

【計数基準】千鳥あるいは天山（防）で上下動振幅 $30\mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 2.0 秒以内

千鳥観測点での空振の振幅は、上記の地震の計数基準によらず、噴火に伴う明瞭な信号であると判断した場合にのみ検測しています。ただし、ノイズレベルが大きく、噴火に伴う空振の振幅が検測できなかった期間があります。

④⑤ 父島Aに対する比高の変化（図7に対応）

（国）：国土地理院 グラフの空白部分は欠測

- ・今期間、島内及びその周辺海域で噴火は確認されませんでした。
- ・これまでの翁浜沖や千鳥ヶ浜での噴火活動でみられたような単色型微動の日回数は、今期間、少ない状態で経過しました（②）。
- ・今期間、火山性地震はやや少ない状態で経過しました（③）。
- ・GNSS 連続観測では、2025年11月以降、隆起が認められています（④⑤）。
- ・2025年9月に千鳥ヶ浜で発生した噴火では、噴火に先行して8月30日から地震活動が活発化するとともに、通常より大きな隆起が観測されました（黄色部分）。

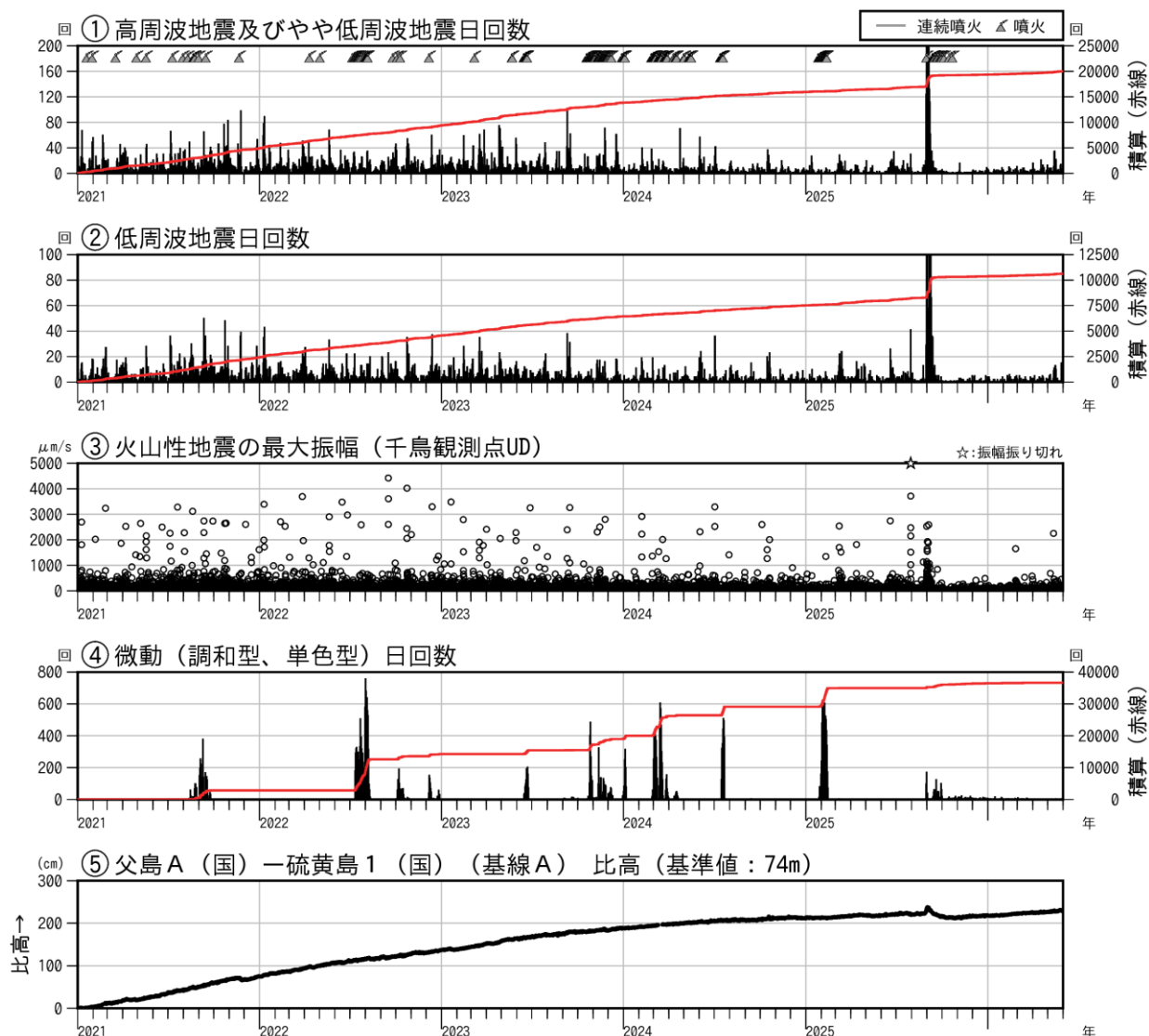


図5 硫黄島 火山活動経過図（2021年1月1日～2026年5月31日）

【計数基準】千鳥あるいは天山（防）で上下動振幅 $30 \mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 2.0 秒以内

- ・ 中期的には 2024 年以降、それ以前と比較して火山性地震の発生頻度に低下傾向が認められていましたが、2025 年 8 月 30 日から 9 月上旬にかけて地震が増加しました。今期間はやや少ない状態で経過しました（①～③）。
- ・ 単色型微動は、2021 年以降の翁浜沖での噴火の際にも観測されています（④）。
- ・ 2024 年頃から隆起速度に低下が認められるものの、長期的には島全体の隆起が継続しています（⑤）。

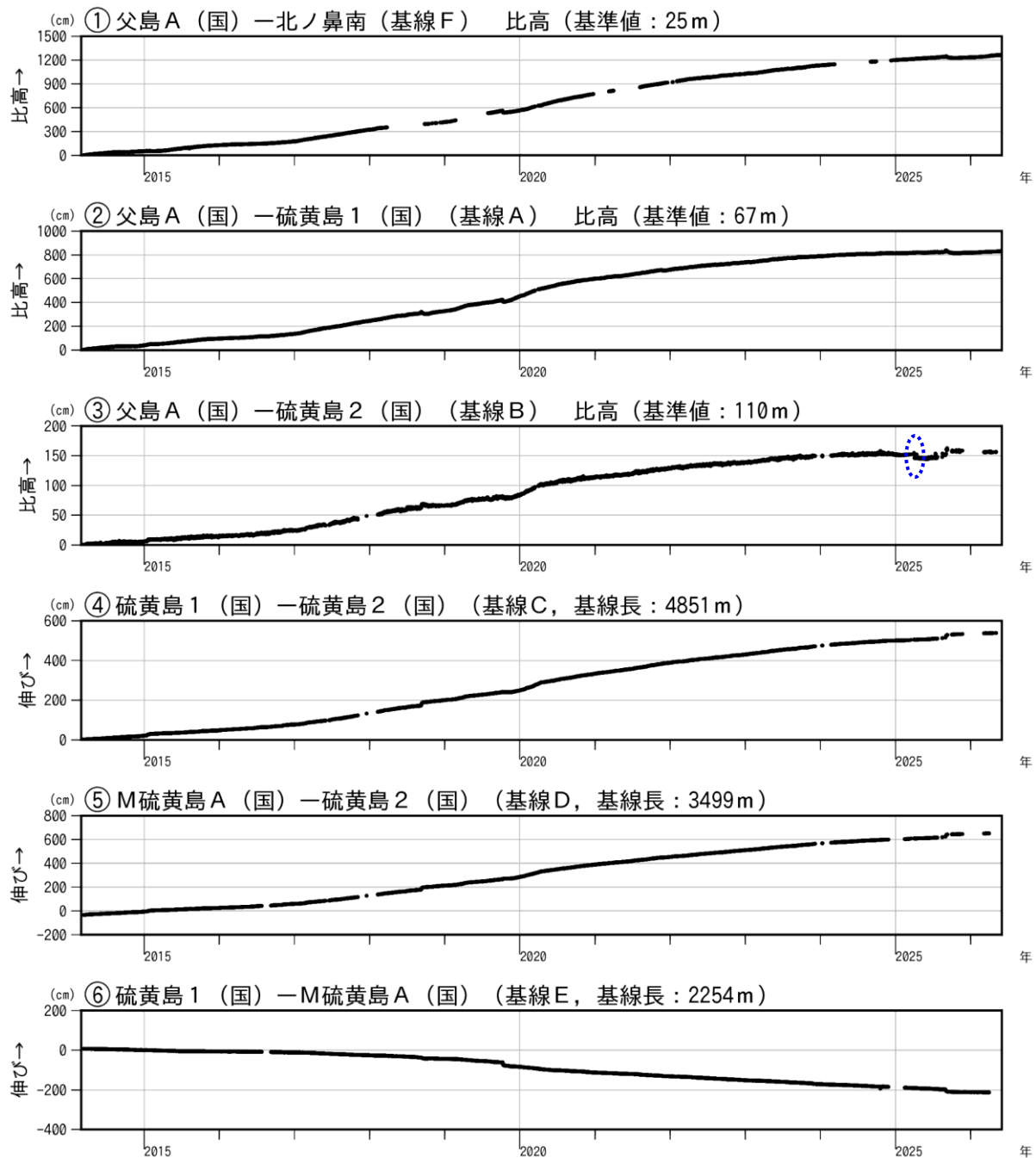
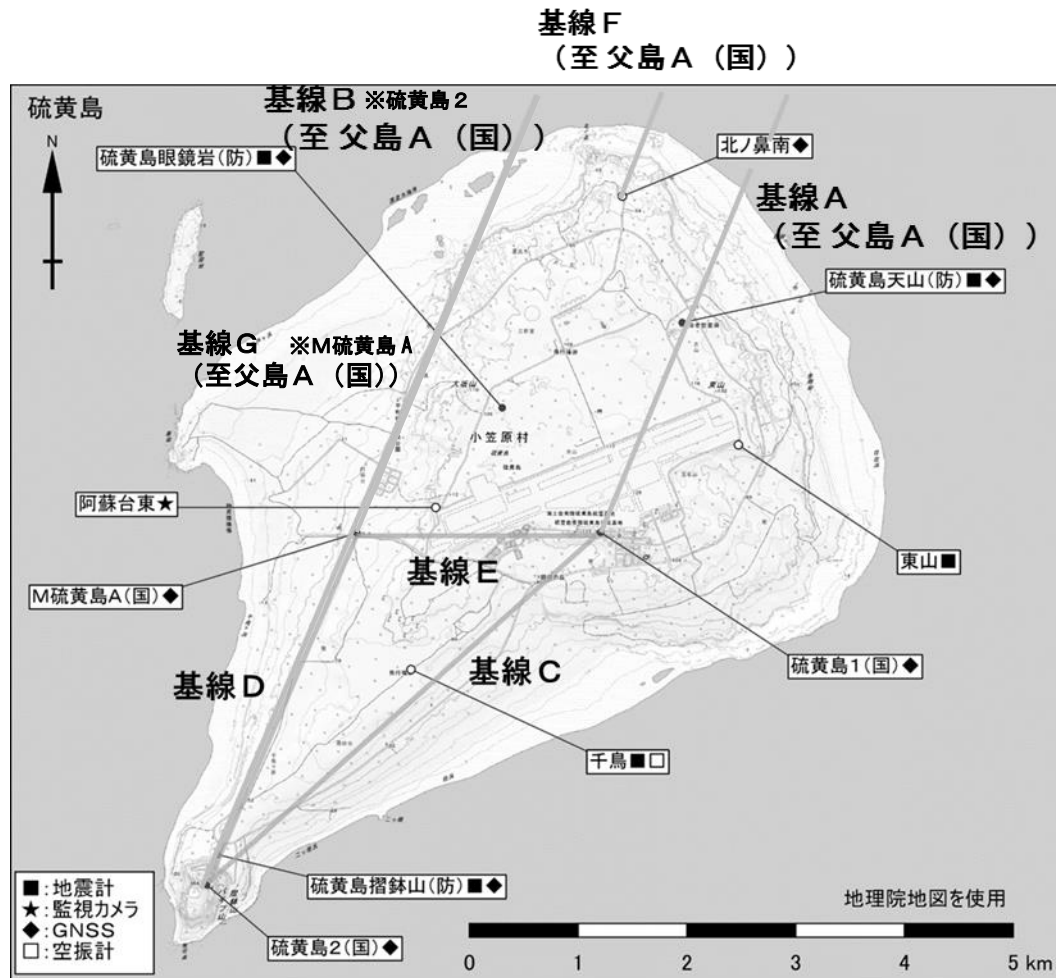


図6 硫黄島 GNSS 連続観測結果（2014年3月1日～2026年5月31日）

（国）：国土地理院。グラフの空白部分は欠測。

- ① 父島Aに対する北ノ鼻南の比高の変化（図7基線F）
 - ② 父島Aに対する硫黄島1の比高の変化（図7基線A）
 - ③ 父島Aに対する硫黄島2の比高の変化（図7基線B）
 - ④ 硫黄島1－硫黄島2の基線長変化（図7基線C）
 - ⑤ M硫黄島A－硫黄島2の基線長変化（図7基線D）
 - ⑥ 硫黄島1－M硫黄島Aの基線長変化（図7基線E）
- ③青破線で示す変化は火山活動によるものではないと考えられます。

- ・2024年頃から隆起速度に低下が認められるものの、長期的には島全体の隆起が継続しています（①～③）。
- ・長期的に④及び⑤の基線長に伸びがみられますが、主に硫黄島2（国）観測点で南方向の変位が継続していることによります。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国):国土地理院、(防):防災科学技術研究所

図7 硫黄島 観測点配置図

GNSS 基線（A～F）は図4～6の基線に対応しています。

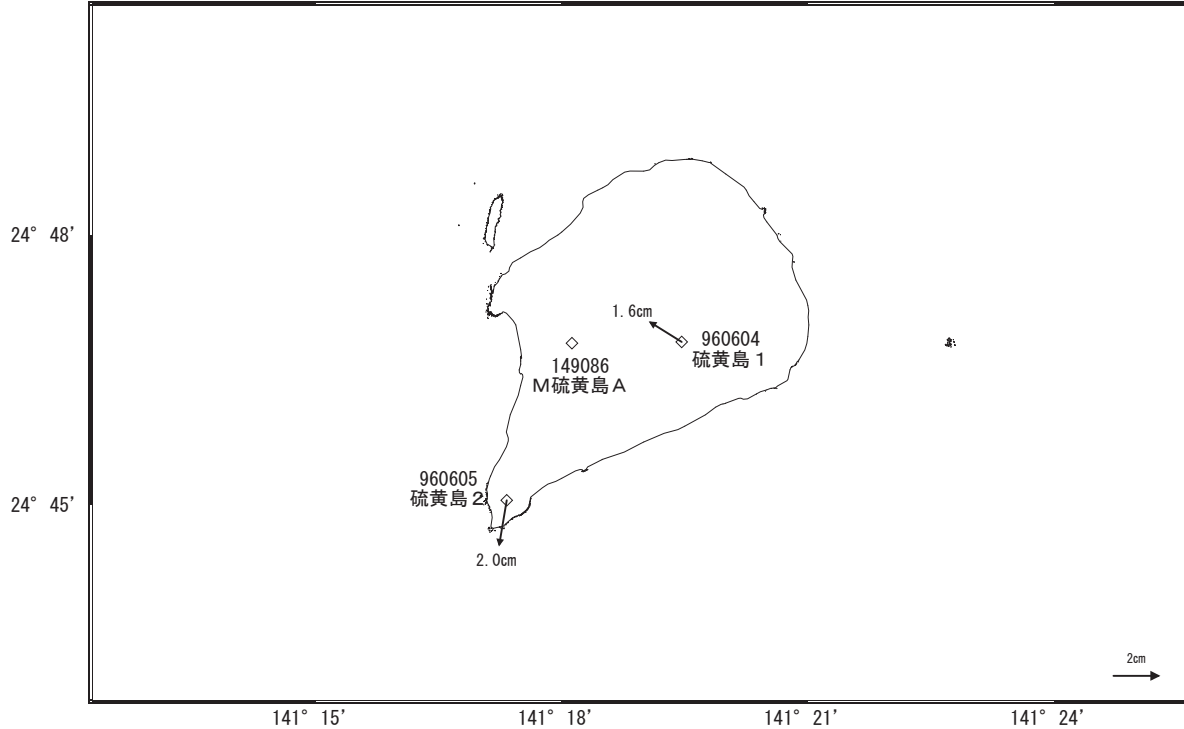
い お う とう

硫黄島周辺の地殻変動

—GEONET(電子基準点等)による連続観測結果—

「硫黄島1」では隆起が、「硫黄島2」では南向きの変動が継続しています。

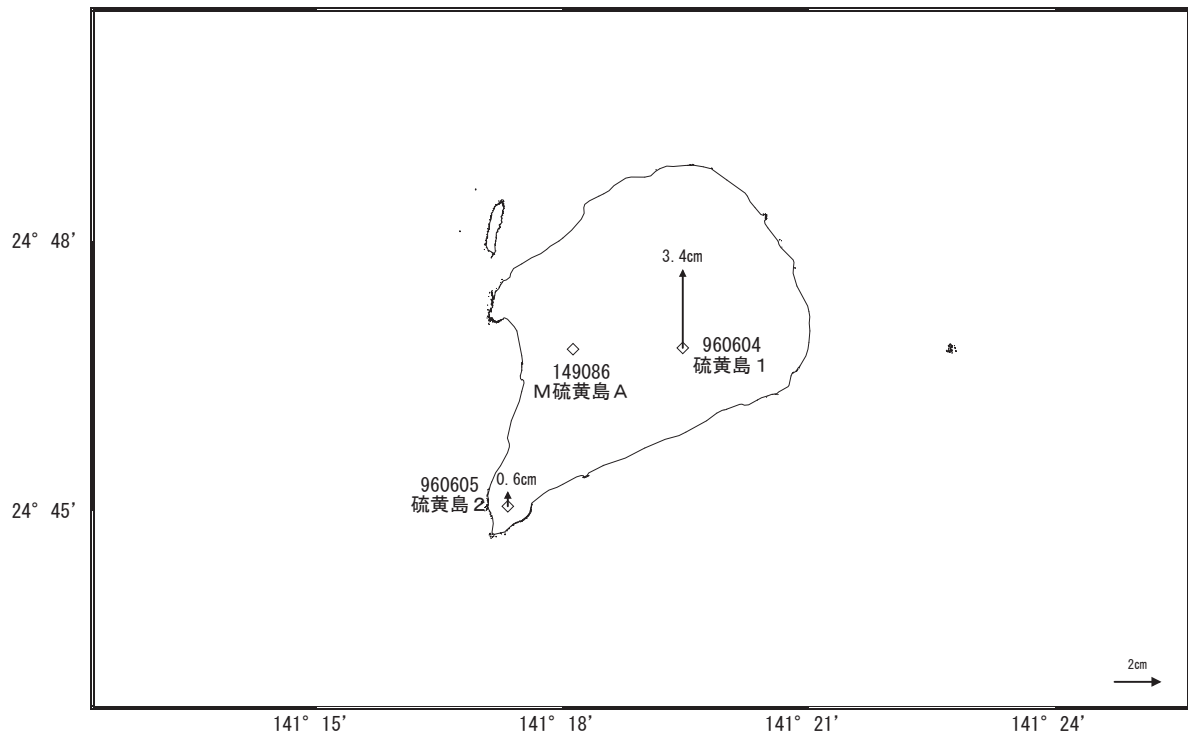
地殻変動(水平)

基準期間:2026-04-07~2026-04-16[F5.1:最終解]
比較期間:2026-05-07~2026-05-16[R5.1:速報解]

☆ 固定局:父島A (052007)

国土地理院

地殻変動(上下)

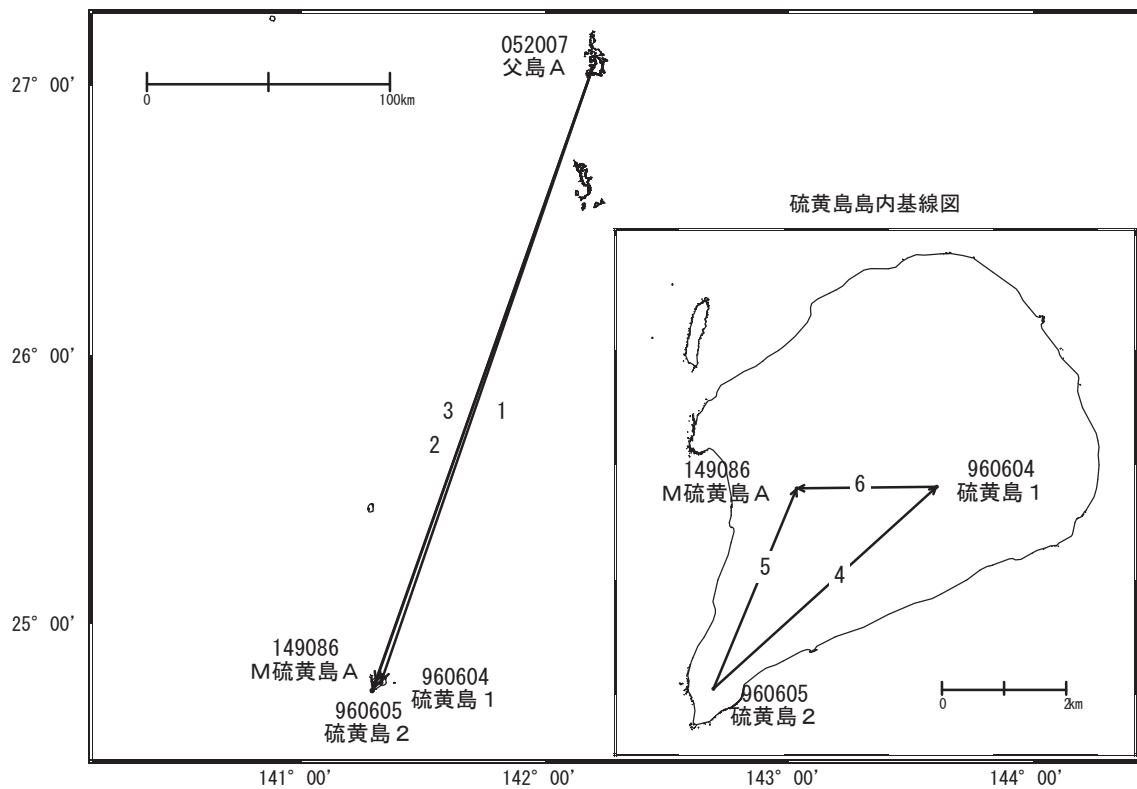
基準期間:2026-04-07~2026-04-16[F5.1:最終解]
比較期間:2026-05-07~2026-05-16[R5.1:速報解]

☆ 固定局:父島A (052007)

国土地理院

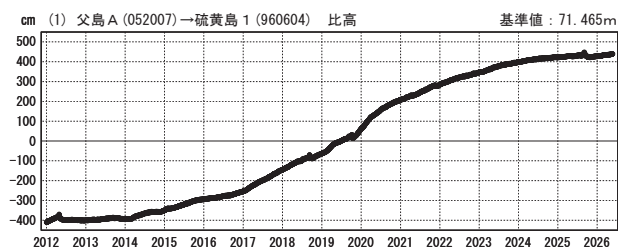
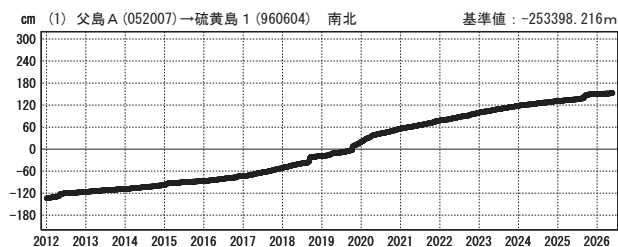
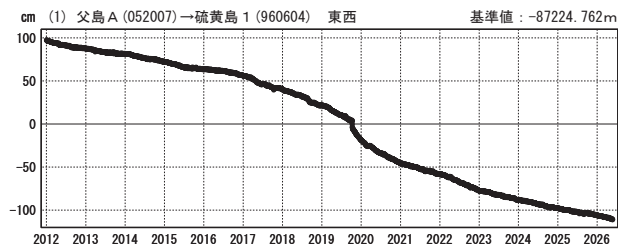
(注) 「M硫黄島A」は、2026年4月1日からデータが取得できていません。

硫黄島周辺 GNSS連続観測基線図



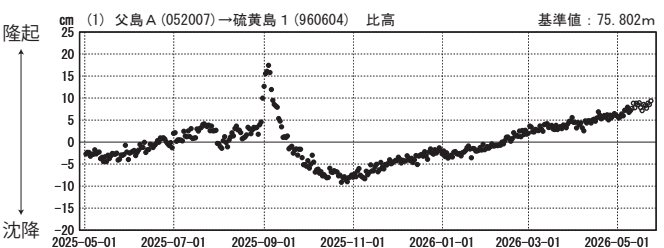
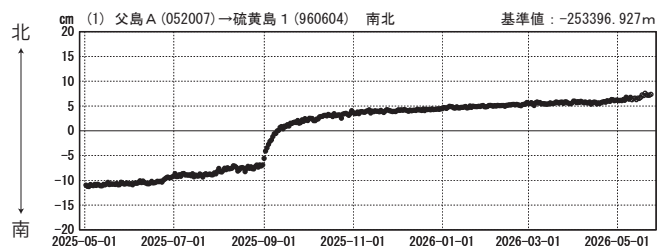
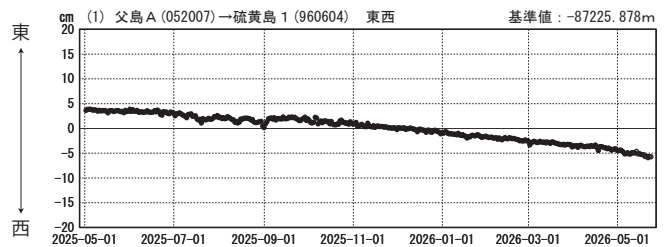
成分変化グラフ

期間：2012-01-01～2026-05-23 JST



成分変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-05-23 JST

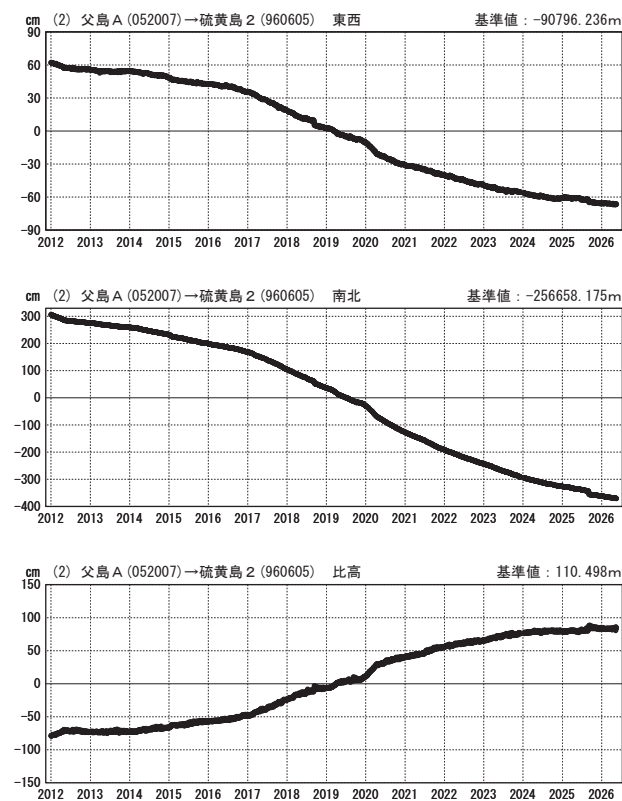


●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

国土地理院

成分変化グラフ

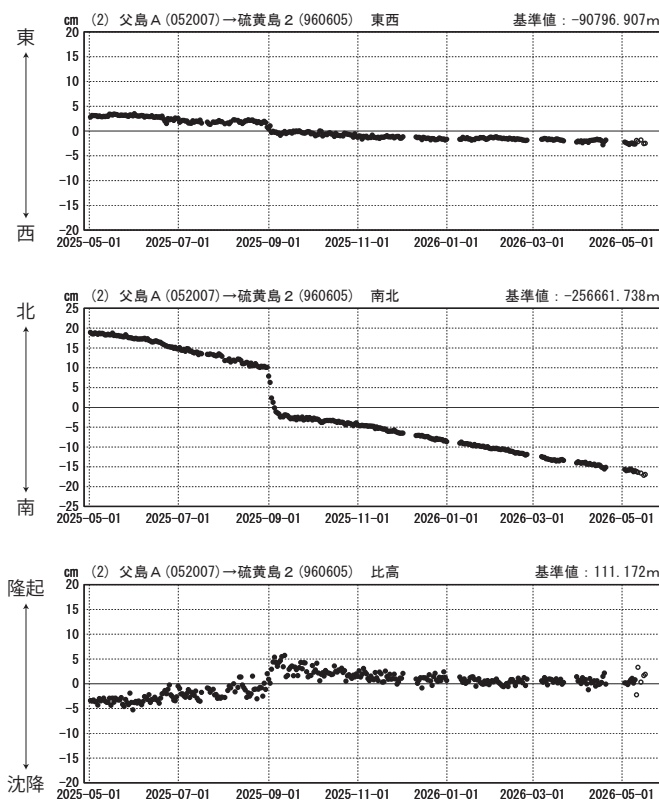
期間：2012-01-01～2026-05-23 JST



●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

成分変化グラフ

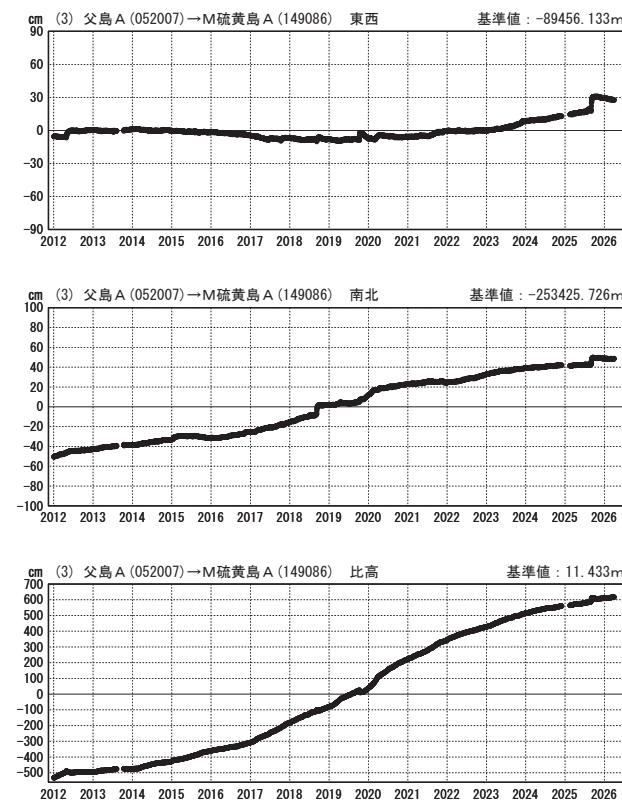
期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



国土地理院

成分変化グラフ

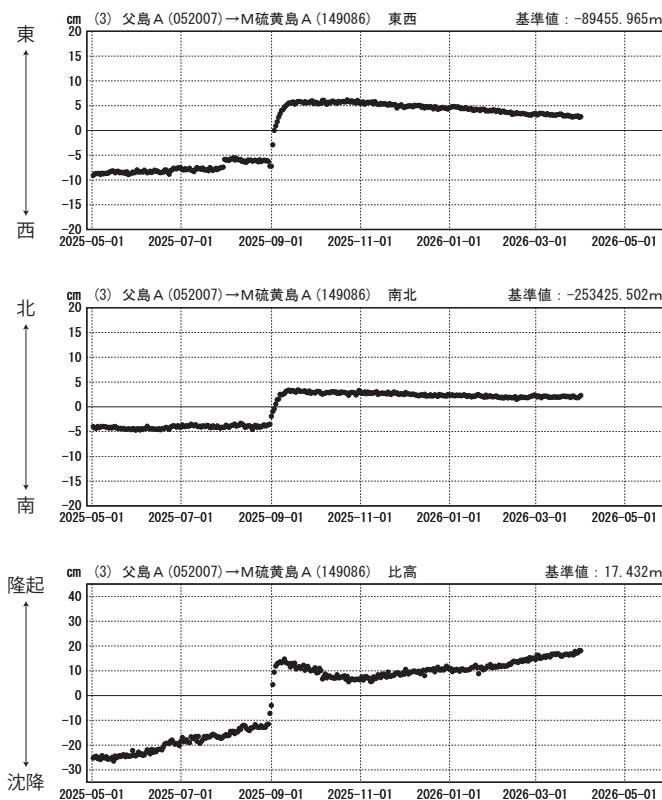
期間：2012-01-01～2026-05-23 JST



●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

成分変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



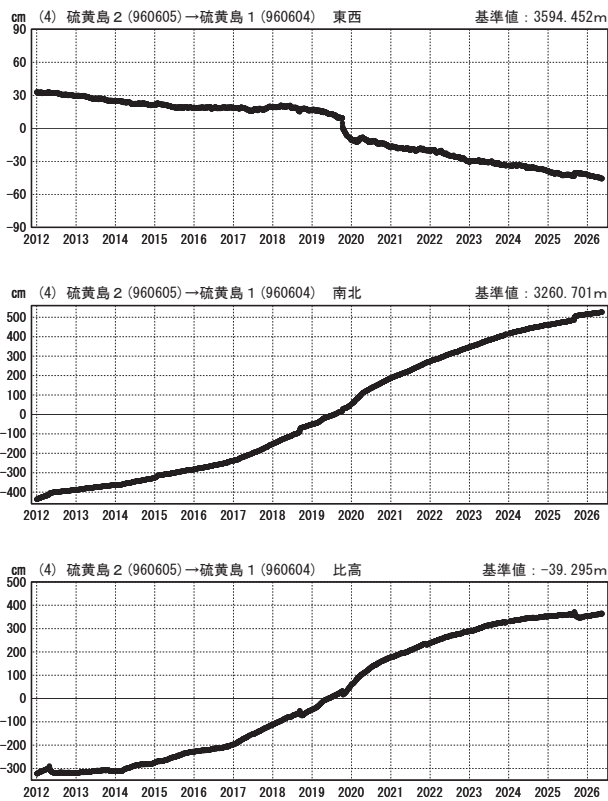
国土地理院

(注) 「M硫黄島 A」は、2026年4月1日からデータが取得できていません。

(注) 「硫黄島 2」は、通信不調のためデータの取得が遅れることがあります。随時データリカバリを実施しています。

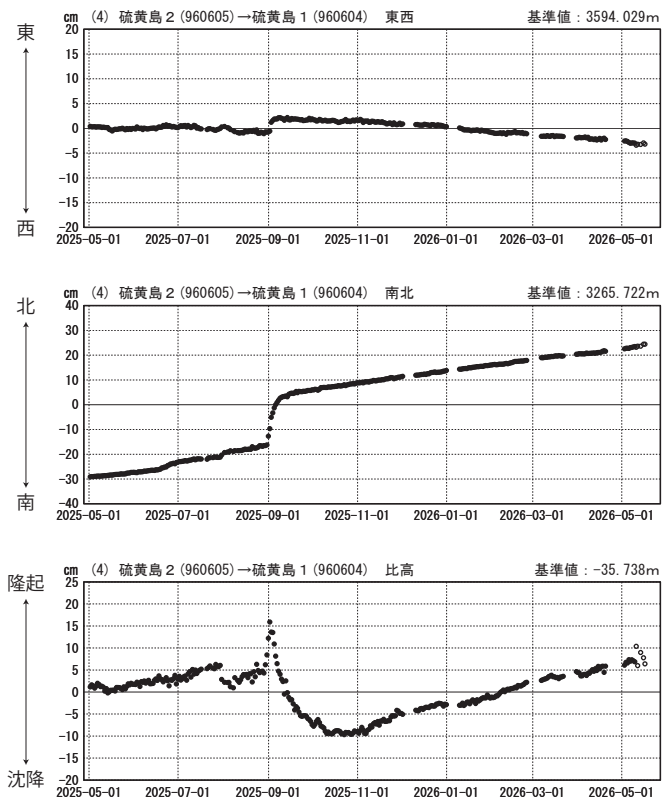
成分変化グラフ

期間：2012-01-01～2026-05-23 JST



成分変化グラフ

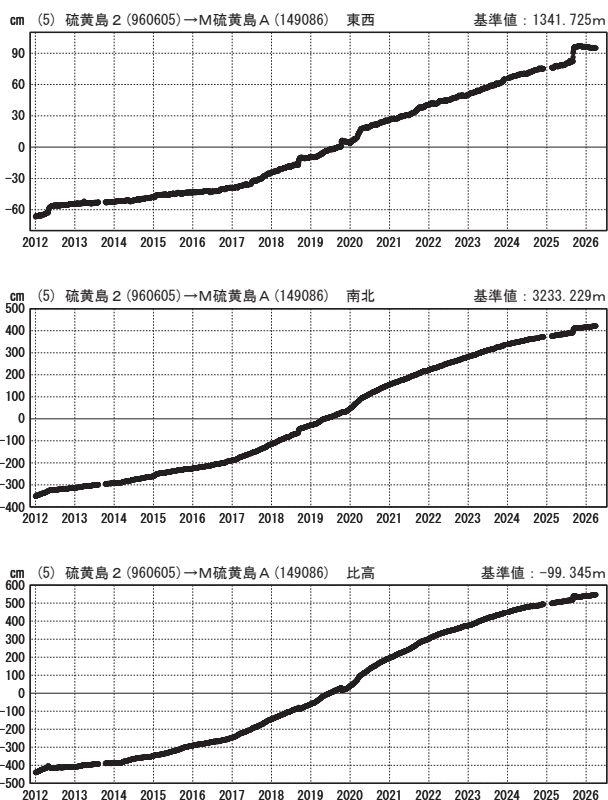
期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



国土地理院

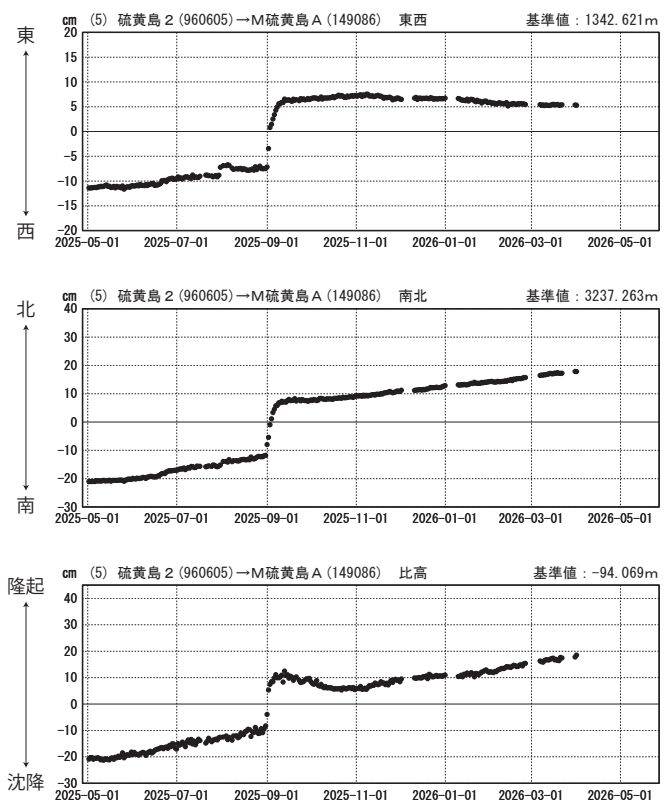
成分変化グラフ

期間：2012-01-01～2026-05-23 JST



成分変化グラフ

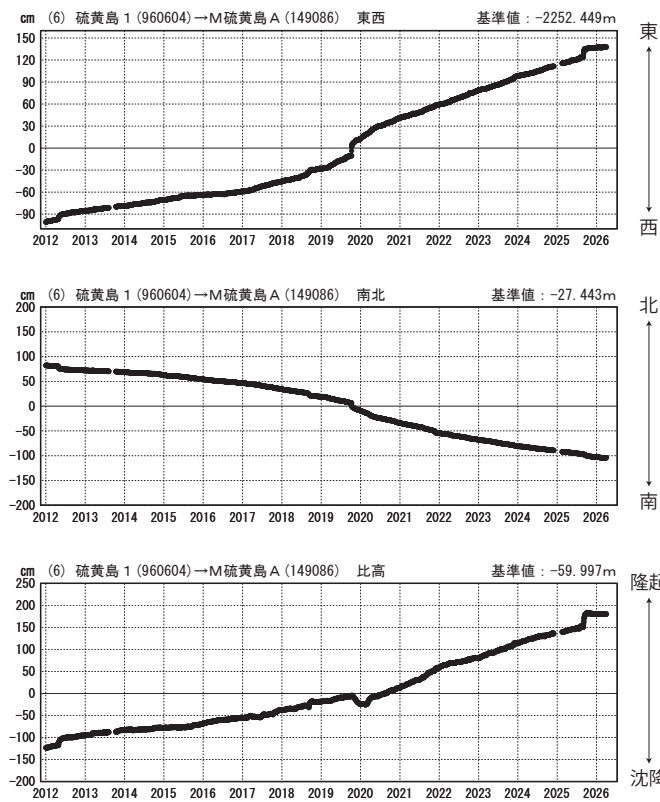
期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



国土地理院

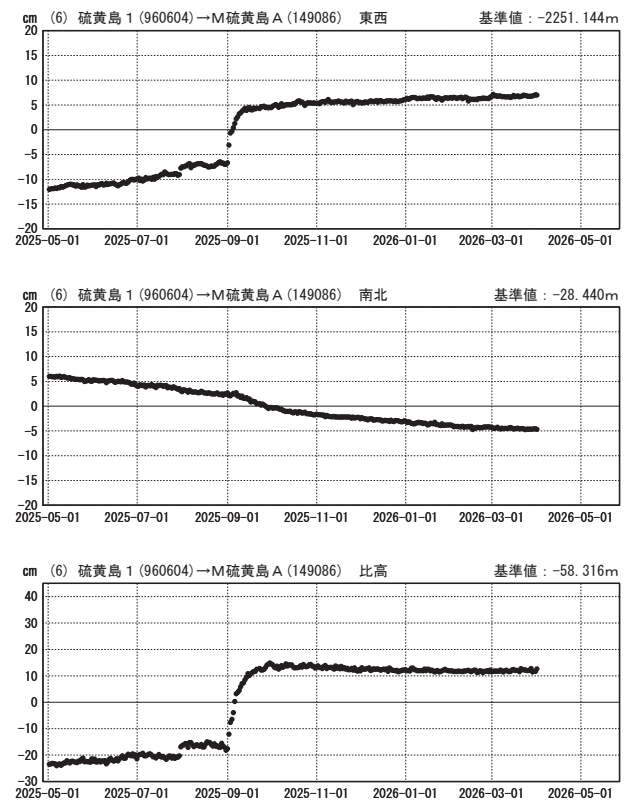
成分変化グラフ

期間：2012-01-01～2026-05-23 JST



成分変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



国土地理院

硫黄島で2025年9月から10月にかけて噴火した火口の現地調査

概要

2025年9月から10月にかけて硫黄島の西部で発生した噴火地点の予察的な現地調査の結果、千鳥ヶ浜の噴火では噴出量は150万 m^3 程度で、初期に低温・低速の火砕サージの噴出があり、また比較的後期に火山弾を放出するマグマ噴火に移行したと推定される。その他の2ヶ所の既存火口での噴火については噴出物に肉眼的に確実なマグマ物質は確認されず、噴出量も1000 m^3 のオーダー程度であったと推定される。

はじめに

2025年9月1日に形成され、9月30日頃まで噴火活動が続いた千鳥ヶ浜火口（仮称）、9月5日に小規模な噴火があったミリオンダラーホール火口、10月3日～24日にかけて小噴火があった井戸ヶ浜火口について11月5日に現地調査を行った（図1）。調査は短時間で観察地点が限られたため、遠方から撮影した望遠写真の解析も併用した。なお気象庁等の公表資料掲載写真も参考にした。今回は地形や噴出物の肉眼的特徴の報告であり、分析結果については続報で報告する。

千鳥ヶ浜火口

火口近傍の直接の観察は揚搭場付近（図1～2）でのみ行なわれ、他の部分は主に釜岩や阿蘇台周辺からの遠望観察による推定である（図3～5）。このため視点が限られており、特に火口の深部などに観察できていない部分がある。今回の噴火では多数の噴出孔が形成されたので、便宜的に主噴出孔群と北西噴出孔群に分けることにする（図1）。

主噴出孔群は千鳥ヶ浜の海岸付近から揚搭場付近までNE-SW方向にのびる噴出孔列で、長さは650mに達する。中央部に火口縁の長径300m程の大きな噴出孔があり、長径160m程の湯だまりが存在する（図2）。内部の地形は複雑で火口壁は急崖が幾重に囲んでおり、それらを切るような小規模な噴出孔地形も複数存在する。急崖の一部は火口底の陥没または地すべりの斜面崩壊によって形成したものと考えられる（図2）。湯だまり水面までの現在の深さは15～20m程度であるが、周囲に当初より高い位置に水位があったことを示す段丘状の平坦面がある。主噴出孔群の南西部は海岸に隣接する長さ約250m幅約120mの窪地で、湯だまりから溢流した熱水や土砂が海へ流れだす流路になっている（図1）。海側の出口に一時期形成されていた三角州は調査時にはほぼ失われていた。これらの噴出孔の周囲は緩やかな火砕丘斜面となっている。主噴出孔群北西側火口縁の比高は10m前後あるのに対し、南東側は噴出物が薄く火口縁は平坦である。主噴出孔群の火口縁を跨ぐように湯だまりの西側に接して直径130m、比高20m程度の急峻な円錐形の火砕丘（急峻小丘と仮称）がある。この火砕丘にも数個の噴出孔が開いており、東の湯だまり側が半分崩壊したような形になっている（図2、図5）。主噴出孔群北東端の噴出孔は他の噴出孔から100m程離れた位置にある直径約40mの小噴出孔である（図1、図6）。周囲に堆積している噴出物にここからの噴出を示唆する厚さの変化などがみられないため、陥没孔である可能性がある。

北西噴出孔群は主噴出孔群の北西側斜面に散らばる小噴出孔をまとめたもので、個々の噴出孔の大きさは約30m～60m程度である（図1、図3）。接近しての観察はできていないが、噴出孔はいずれも浅く輪郭がやや不明瞭であることから、形成後に他の場所より噴出した噴出物に覆われている可能性がある。

全体に10月上旬に接近した台風22号による降雨で浸食が進んでおり、特に主噴出孔列南東縁は山側から流入する雨水により深いガリーが数か所で形成されている。調査時の噴気活動は低調で主噴出孔列の湯だまり南西端付近の噴気以外は確認できなかった。

噴出物の分布については下限を視認できた場所が限られたため、厚さが確定しない部分が多いが、急峻小丘で16m以上、その他の主噴出孔群の火口壁では北西側で7～10m以上、南東側で2～4m程度の厚さがあると推定される（図1～5）。噴出物には平行層理からなる層構造が発達している。揚搭場付近の噴出物（図7）は2m程の厚さがあるが、基底部の20～30cm程度は層理不明瞭で角礫に富む灰白色粘土質層からなる。それより上部は主に褐色砂質の噴出物で、色調がわずかに異なる数cm程度の単層が累重し

ている。含まれている火山ガラス片やスコリア（軽石）礫は変質程度が様々であり、もともとあった砂浜の堆積物に由来するものが多く含まれていると考えられる。北西側に1 km 程離れた釜岩付近ではほぼ基底の粘土質層に相当する堆積物からなり、10 cm 程度の厚さで1~2 cm の石質岩片が含まれている（図8）。火口東側の噴出物については直接の観察はできなかったが、噴出物の色調や透水性の悪さ（降雨時の写真に水たまりが多数写っている）から、こちらも遠方に到達している噴出物は基底の粘土質層に相当するものと推定される。

揚搭場周辺の噴出物表面には直径1 m 前後の火山弾が散在している（図9~10）。火山弾は塑性変形した牛糞状火山弾で、しばしば破碎している。急峻小丘からその北東側の火口縁にかけてはより大型の2 m 程度の大きさのものも認められる（図4）。観察できた範囲では、牛糞状火山弾は噴出物の表面付近の層準にあり、明瞭なサグ構造は形成されていない（図10）。石質の投出岩塊は数10cm 以下の大きさのものが多く、10 cm 程度のものは北西側で800 m 程度、東側で400 m 程度離れたところまで認められる。なお揚搭場付近では堆積物表面に深いサグ構造が数ヶ所存在している（図2）。

聞き取り調査によると9月2日には既に揚搭場付近に1.5 m 程度の厚さの噴出物が堆積していたと考えられるので、現在見られる噴出物の大部分は噴火の初期に噴出したものとみられる。基底部の粘土質層は噴火開始時の風上（南東）方向にも広く分布することから火砕サージに由来する噴出物である可能性が高い。ただしサージに特有の斜交層理などの堆積構造や、樹木や構造物の横方向の流れによるとみられる破壊や熱による影響は確認できる範囲にはなかった。牛糞状火山弾は9月3日頃以降の赤熱した噴煙が観測された時期の噴出物と考えられる。これらの火山弾と同時に噴出した細粒な火砕物は急峻小丘付近で厚く堆積している可能性があるが、未踏査区域であるので今後の調査で明らかにする必要がある。全体の層厚分布から Fierstein and Nathenson (1992)の方法で噴出量を概算すると約150万 m³程度である。

ミリオンダラーホール火口

ミリオンダラーホール火口についても短時間の調査を北東の道路側から行った（図11、12）。2012年以降の噴火地点である既存の噴出孔ACの北側に、阿蘇台断層の断層崖に沿って70 m 程度の長さの噴出孔列が生じていた。噴出孔ACについては観察地点が限られたため火口壁直下などが死角となったことと、噴気でも通せない部分があることで不明な部分が多いが、内部の少なくとも南側には湯だまりが生じており、中央部の2021年噴火の際の小噴出孔のひとつ21bのあった付近で断続的に1~2 m 程度の高さに熱水を噴き上がっていた（図13）。噴出孔AC周辺の噴出物は粘土質で火口東側では数cm 程度の厚さがあった。

新しい噴出孔列には噴出孔が2ヶ所確認できた（図11、14）。南側の噴出孔は幅3m 程度、長さ5 m 程度で南北に細長い形状であった。北側の噴出孔も南北に細長く3~4個の噴出孔が連なった形で幅は10 m 程度、長さは35 m 程度あるとみられる（図15）。新たな噴出孔からの噴出物は粘土質であるが砂礫を多く含み、噴出孔東側の断層崖上で最大70 cm 程度、西側の低地側で1.5 m 前後の厚さがあると推定される（図11、14）。投出岩塊については、火口列東側では大きさが数10 cm 以下の石質岩片が火口縁から50 m 程度までの範囲に分布していた（図11）。一見して本質物質と判断されるような岩塊は確認できなかった。

井戸ヶ浜火口

井戸ヶ浜火口では2024年5月の噴火で生じた噴出孔A内部から噴出したと考えられる。噴出孔A内には湯だまりが形成していた（図16）。噴出物は黒色砂質で噴出孔A火口縁の南側で5 cm 以上、噴出孔A北側に接する小噴出孔B付近で局所的に1 m 近い厚さがあるとみられる（図17）。火口縁付近では大きさ20 cm 程度の石質岩片が含まれているが、火口縁から10~20 m 程離れると以前から存在した岩片との区別が難しい。火口縁外側の噴出物の表面には流水による浸食、移動の痕跡が著しい。

まとめ

千鳥ヶ浜火口では北東-南西方向に650 m 程の長さで噴出孔が配列している。今回噴出物に牛糞状火山弾が確認されたことによりマグマの噴出があったことは確実と考えられる。噴火は最初に石質岩片を多く含

む熱水変質粘土、次いで軽石や火山ガラスを多く含む砂状の噴出物、その後に牛糞状火山弾の放出と変化したと推定されることから、次第に熱水系に由来する物質の関与が減少しマグマの関与が増大したと考えられる。最初の熱水変質粘土を多く含む噴火の際に火砕サージが発生し広い範囲に到達した。この火砕サージは三宅島 2000 年噴火時の“低温火砕流”のように低温・低速であったと考えられる。噴出量の概算は 150 万 m^3 程度であるが、大部分は初期の 1~2 日程度に放出され、マグマ噴出が確実な火山弾放出時の噴出量の割合は少ないとみられる。

ミリオンダラーホール火口と井戸ヶ浜火口では噴出物は粘土質あるいは砂質で、火山弾のような肉眼的に確実なマグマ物質の存在は確認できなかった。噴出量はどちらの火口も 1000 m^3 のオーダーとみられる。

※本資料の掲載内容は暫定的な推定結果であり、今後修正される可能性があります。

謝辞 現地情報や試料の収集に際し海上自衛隊海上幕僚監部および硫黄島航空基地隊、気象庁地震火山部に御協力していただいた。Sentinel-2 画像は Copernicus プロジェクトにより公開されているものを使用させていただいた。以上の方々に記して御礼申し上げる。

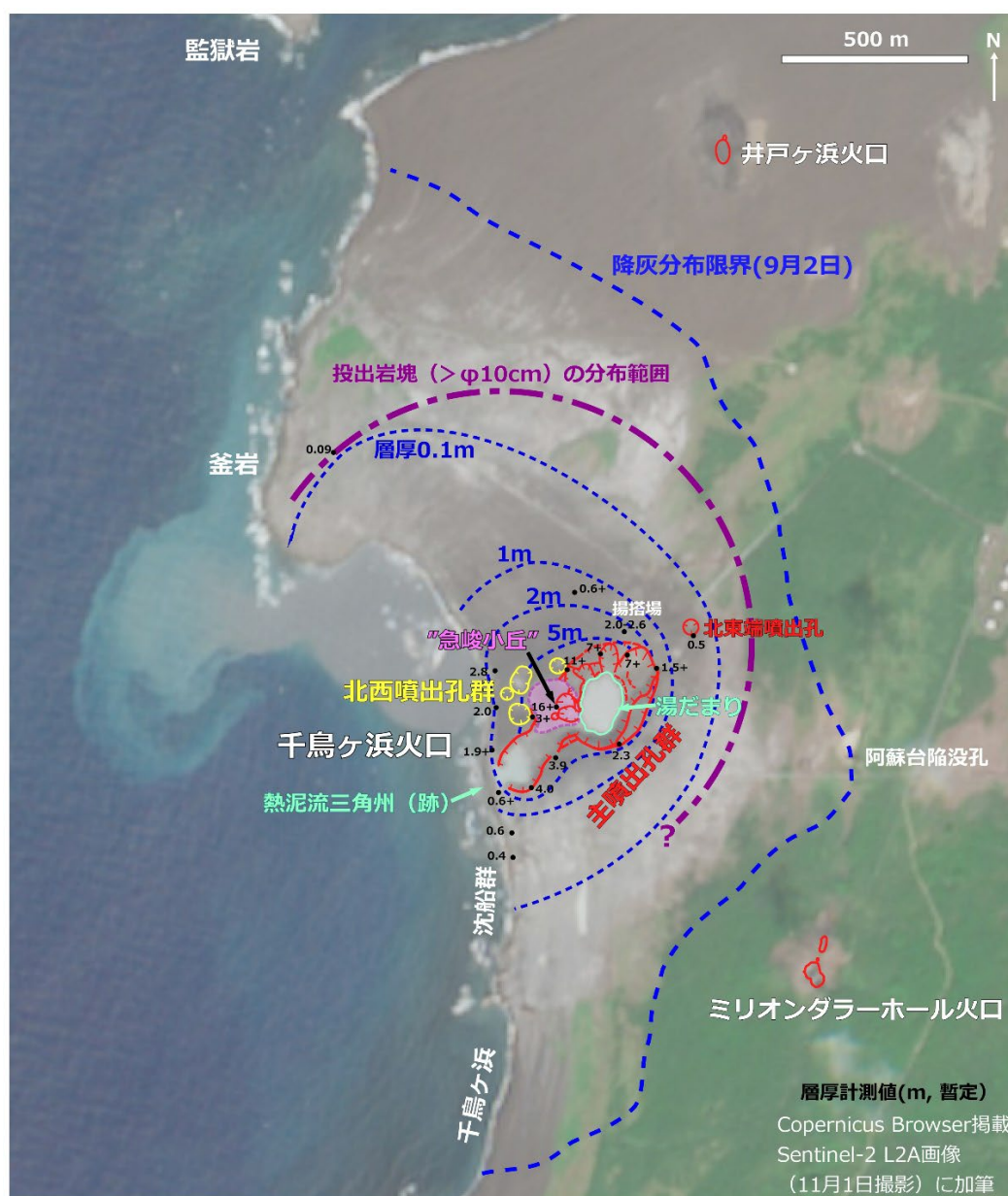


図1 千鳥ヶ浜火口の火口地形と噴出物の分布。噴出物層厚の大部分は遠望写真による計測値。



図2 揚搭場付近の火口縁より撮影した千鳥ヶ浜火口主噴出孔群の主要部分（パノラマ集成写真）。



図3 釜岩より撮影した千鳥ヶ浜火口（パノラマ集成写真）。黄色矢印は北西噴出孔群の噴出孔の位置を表す。噴火前には中央付近にも二隻の沈船が存在したが、埋没もしくは火口形成により破壊されたと考えられる。

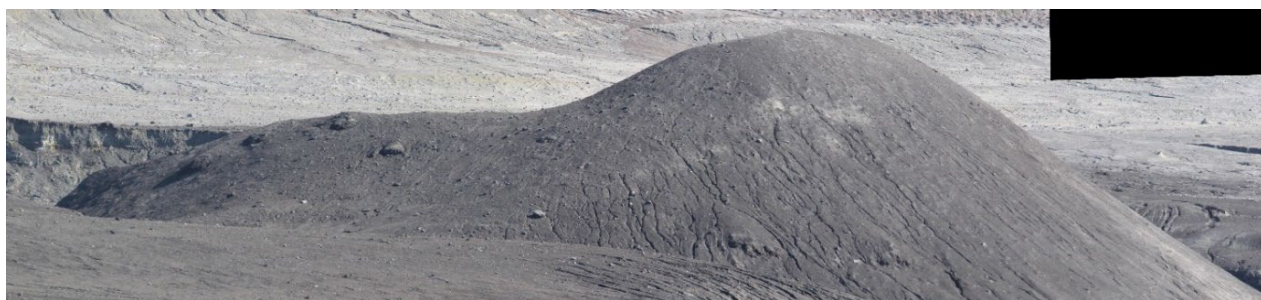


図4 釜岩より撮影した千鳥ヶ浜火口“急峻小丘”（パノラマ集成写真）。左（北東）側に2m程度の大きさの大型火山弾が数個認められる。



図5 阿蘇台陥没孔付近より撮影した千鳥ヶ浜火口。



図6 主噴出孔群北東端噴出孔の近接写真（パノラマ集成写真）。

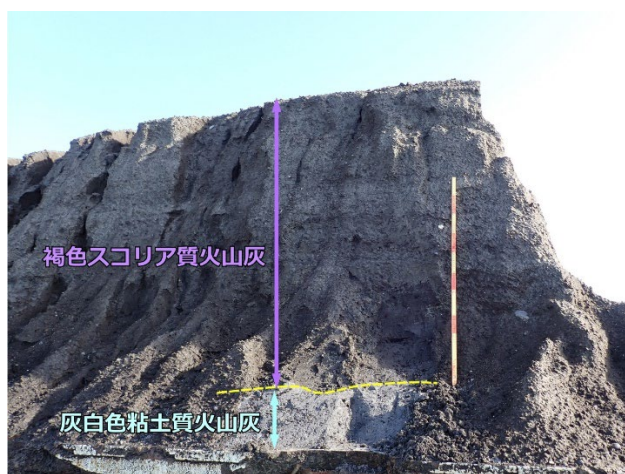


図7 揚搭場付近の構造物上に堆積した噴出物。成層構造の発達した火山灰層からなる。



図8 釜岩付近に堆積した噴出物。



図9 揚搭場付近の牛糞状火山弾。落下時の衝撃で破碎している。

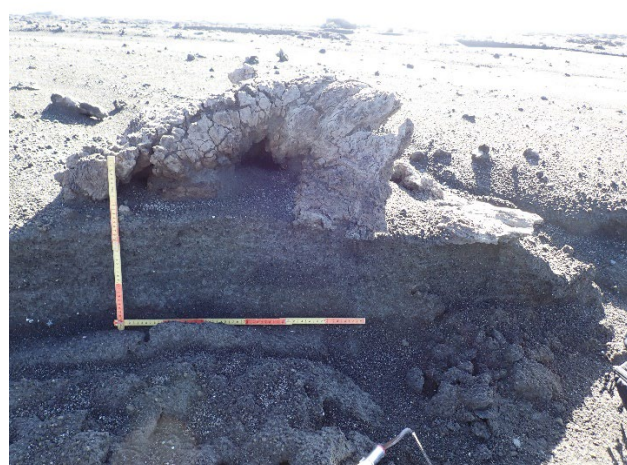


図10 揚搭場付近の牛糞状火山弾。傍のガリー壁面にみえる直下の噴出物に変形していない。

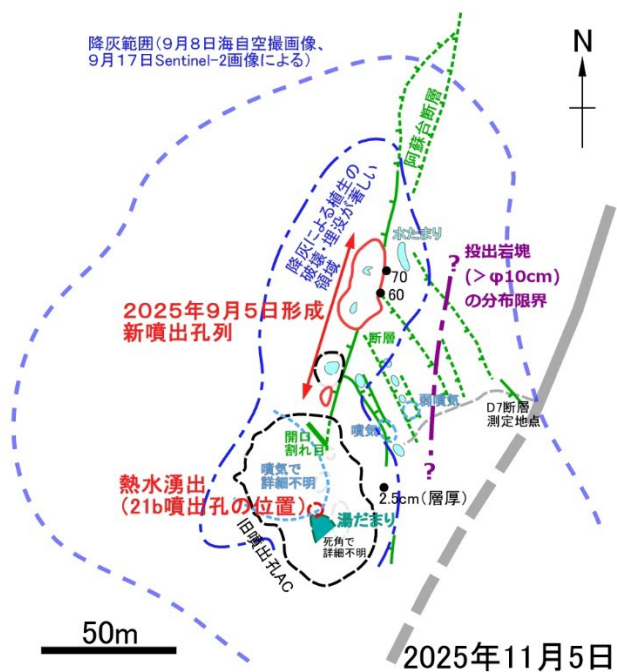


図1-1 ミリオンダラーホール火口の見取り図。



図1-2 D7断層測定地点付近から見たミリオンダラーホール火口（パノラマ集成写真）。新噴出孔は阿蘇台断層の断層崖の陰にあり見えていない。



図1-3 ミリオンダラーホール火口の旧噴出孔AC内遠望。2021年噴火の噴出孔21b付近より熱水を湧出している。

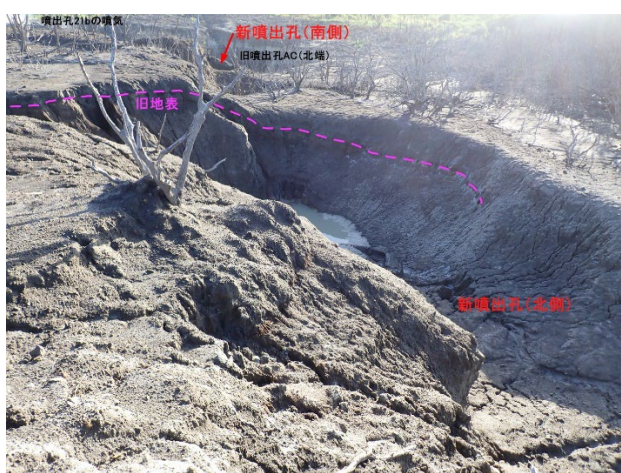


図1-4 ミリオンダラーホール火口の新噴出孔列。



図15 南よりみたミリオンダラーホール火口の北側の新噴出孔。

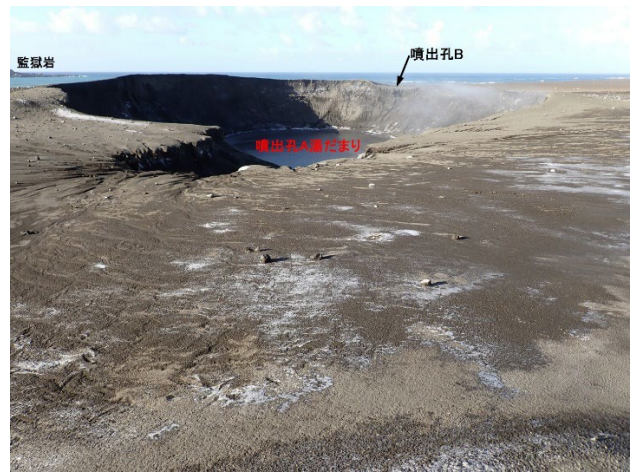


図16 南よりみた井戸ヶ浜火口。



図17 井戸ヶ浜火口の北側斜面。噴出孔Bは埋積が進みごく浅いくぼみになっている。

桜島の火山活動解説資料（令和8年5月）

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方気象台

南岳山頂火口では、噴火¹⁾が11回発生し、このうち爆発²⁾は1回でした。噴煙は最高で火口縁上3,500mまで上がりました。弾道を描いて飛散する大きな噴石は最大で5合目（南岳山頂火口から約1,000m）まで達しました。また8日の爆発では、ごく小規模な火砕流を確認しました。

昭和火口では、ごく小規模なものも含め噴火は発生しませんでした。

広域のGNSS連続観測によると、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部にマグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。また、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は概ね多い状態であることから、今後も噴火活動が継続すると考えられます。

南岳山頂火口及び昭和火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るため注意してください。爆発に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意してください。なお、今後の降灰状況次第では、降雨時に土石流が発生する可能性がありますので留意してください。

令和4年7月27日に火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図1、図3、図5-2-①②③）

南岳山頂火口では、噴火が11回（4月：15回）発生し、このうち爆発は1回（4月：8回）でした。噴煙は最高で火口縁上3,500mまで上がり、弾道を描いて飛散する大きな噴石は最大で5合目（南岳山頂火口から約1,000m）まで達しました。8日16時15分に発生した爆発では、ごく小規模な火砕流が火口より南東側へ約600m流下したことを確認しました。南岳山頂火口で火砕流を観測したのは2018年6月16日以来です。また、同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

昭和火口では、ごく小規模なものも含め噴火は発生しませんでした（4月：噴火、爆発なし）。また、同火口では、火映は観測されませんでした。

- 1) 桜島では噴火活動が活発なため、噴火のうち、爆発もしくは噴煙量が中量以上（概ね噴煙の高さが火口縁上1,000m以上）の噴火の回数を計数しています。資料の噴火回数はこの回数を示します。また、基準に達しない噴火は、ごく小規模な噴火として噴火回数に含めていません。
- 2) 桜島では、火道内の爆発による地震を伴い、爆発音、体を感じる空気の振動、噴石の火口外への飛散、または、気象台や島内の観測点で一定基準以上の空気の振動のいずれかを観測した場合に爆発としています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和8年6月分）は令和8年7月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、九州地方整備局大隅河川国道事務所、京都大学、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、鹿児島県及び公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

・地震や微動の発生状況（図2、図5-2-⑥⑦⑧）

火山性地震は少ない状態で経過しました。火山性地震の月回数は168回で、前月（4月：430回）より減少しました。桜島の南西側（深さ10km以浅）を震源とする火山性地震は観測されませんでした（4月：なし）。

震源が求まった火山性地震は、南岳の深さ0～2km付近に分布しました。

また、火山性微動の月合計継続時間は1時間33分で、前月（4月：2時間35分）と同程度でした。

・降灰の状況（図4、図5-2-④）

鹿児島地方気象台（東郡元）では、月合計30g/m²（降灰日数10日）の降灰³⁾を観測しました。

鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した桜島における火山灰の4月の総噴出量は約6万トンで、3月（約1万トン）と比べて増加しました。

・火山ガスの状況（図5-2-⑤）

期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は2,800トン（4月：2,800トン）でした。火山ガスの放出量は2022年7月以降、概ね多い状態で経過しています。

・地殻変動の状況（図6～8）

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、一部の噴火に伴い、噴火前の山体の膨張（隆起）及び噴火後の収縮（沈降）を観測しました。また、30日頃から、山体の膨張（隆起）を観測しています。

GNSS連続観測では、桜島島内の基線で2024年1月頃から同年10月頃にかけて山体収縮に伴うとみられるわずかな縮みが認められました。その後、火山活動に伴う特段の変化は認められません。また、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では長期にわたり始良カルデラの地下深部の膨張を示す緩やかな伸びがみられています。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。

3) 鹿児島地方気象台（東郡元：南岳の西南西約11km）において、前日09時～当日09時の1日間に降った1m²あたりの降灰量の月合計です。降灰量は0.5 g/m²未満切り捨て、「0」は、0.5 g/m²未満の降灰を観測したことを表します。

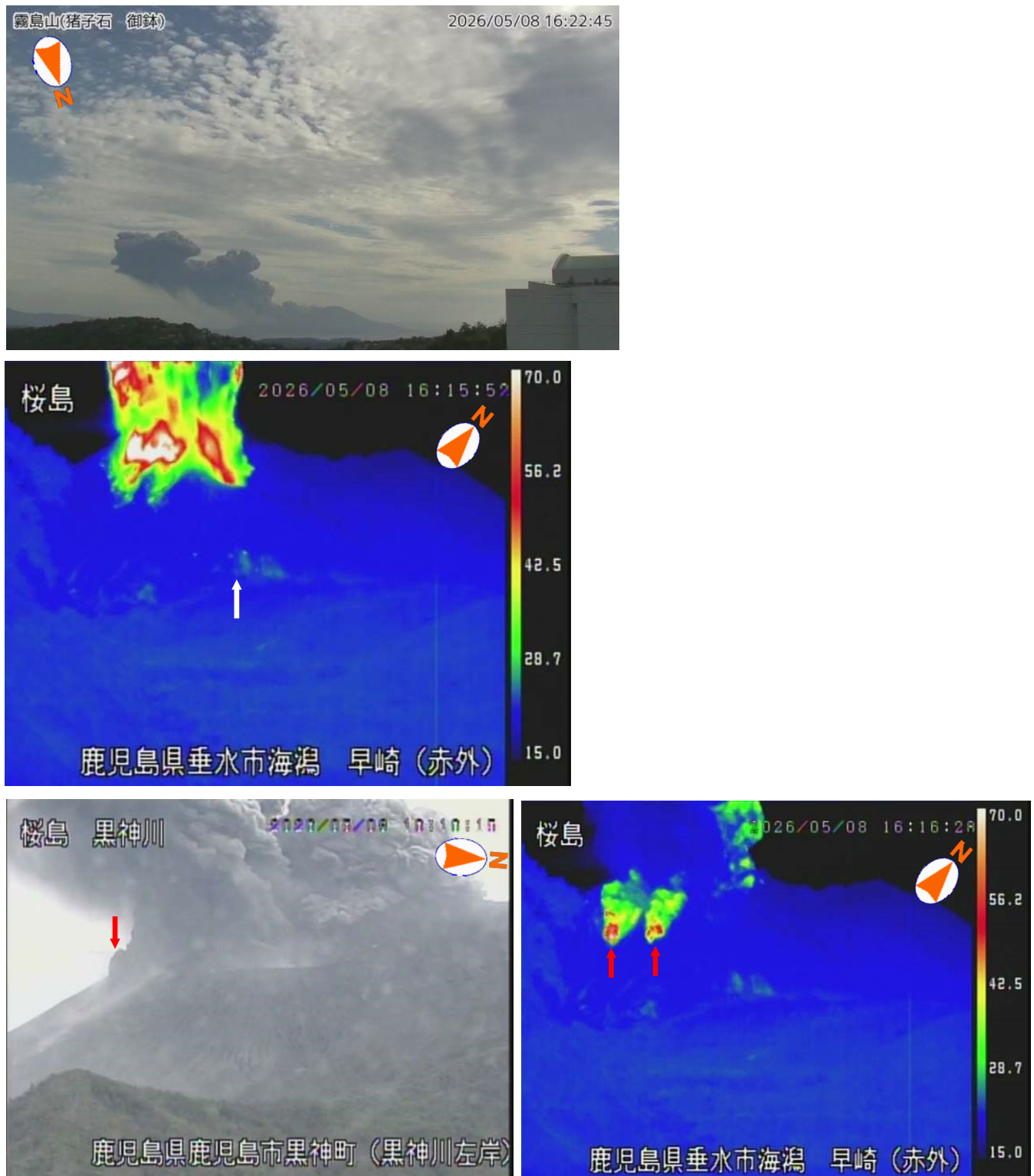


図1 桜島 8日16時15分に発生した南岳山頂火口の爆発の状況
（上段：猪子石監視カメラ、中段及び下段-右：早崎赤外監視カメラ（大隅河川国道事務所設置）、下段-左：黒神川上流左岸監視カメラ（大隅河川国道事務所設置））

- ・噴煙が火口縁上3,500mまで上がりました。
- ・弾道を描いて飛散する大きな噴石は5合目（南岳山頂火口から約1,000m）まで達しました（中段の白矢印）。
- ・爆発に伴い、ごく小規模な火砕流が発生しました（下段の赤矢印）。火砕流は、監視カメラにより火口より南東側へ約600m流下したことを確認しました。南岳山頂火口で火砕流を観測したのは2018年6月16日以来です。

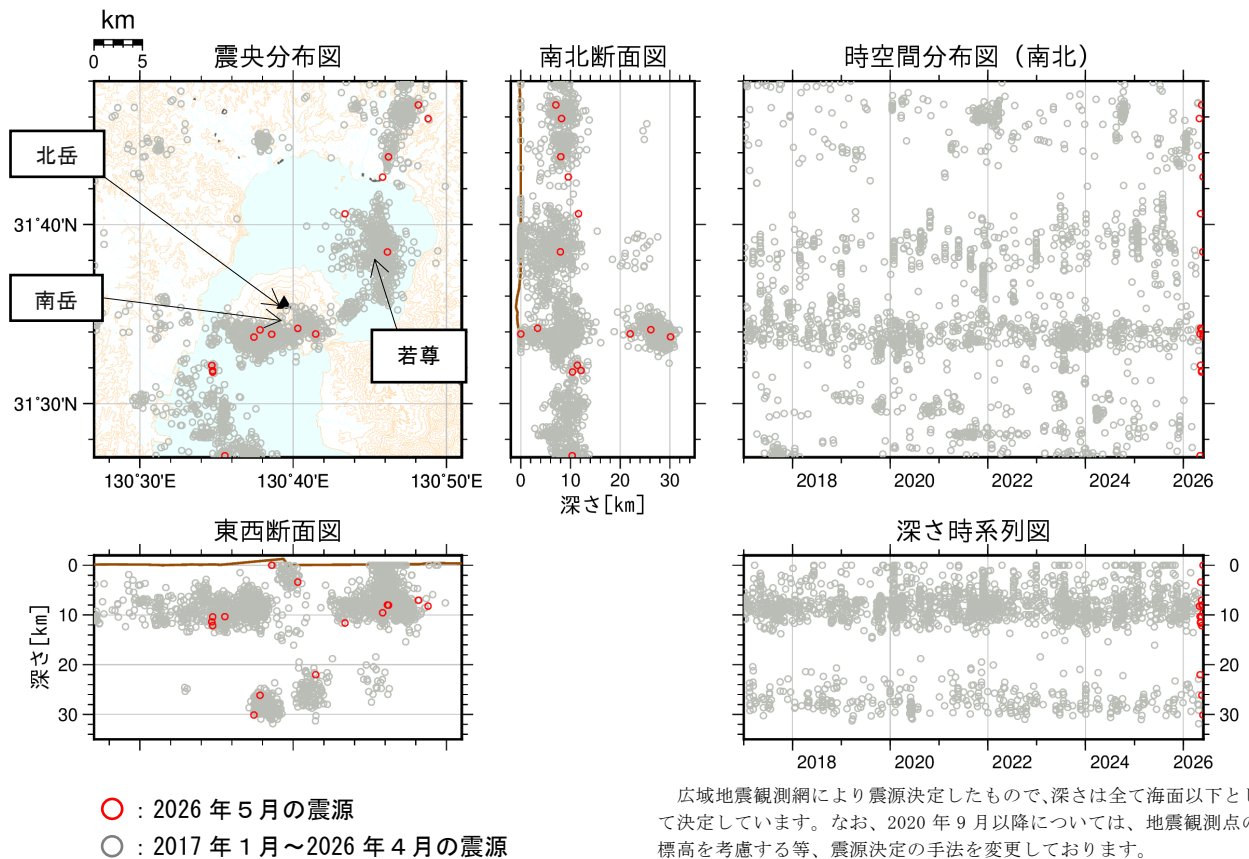


図 2-1 桜島 始良カルデラ周辺の震源分布図（2017 年 1 月～2026 年 5 月）

< 5 月の状況 >

始良カルデラ周辺では、地震は少ない状態で経過しました。

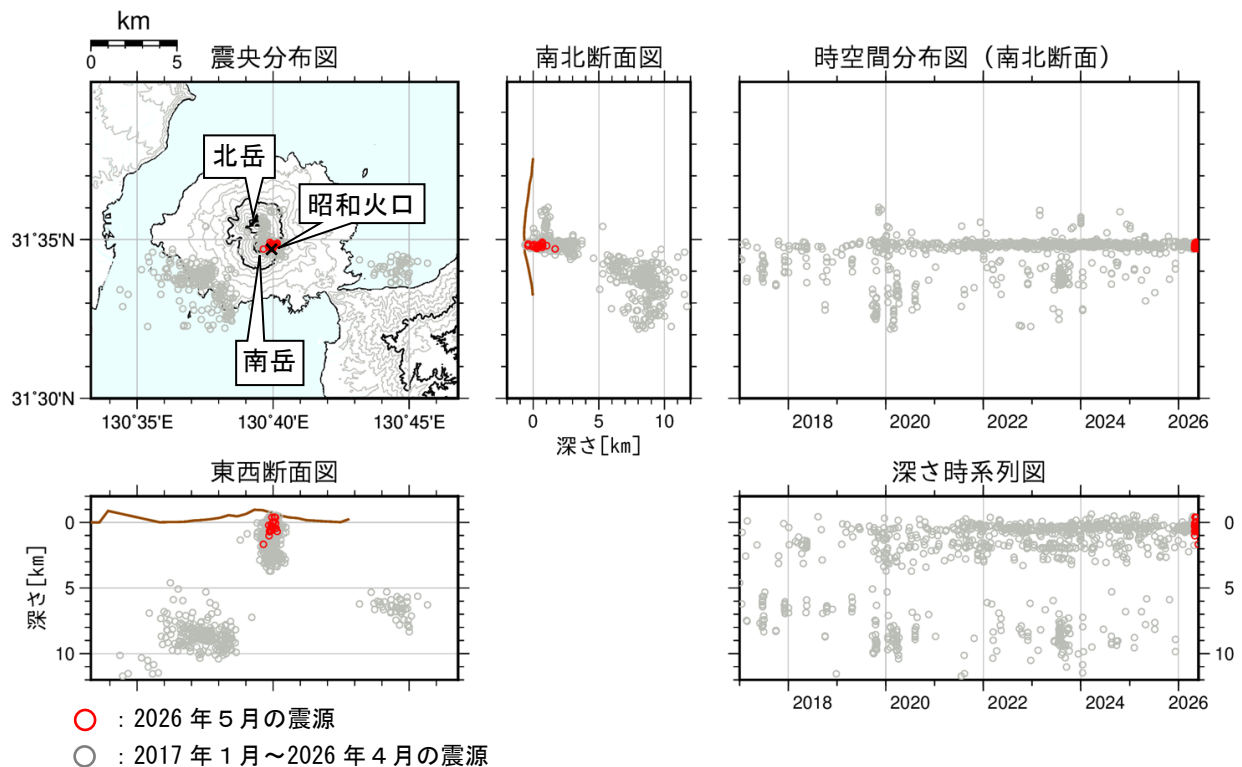
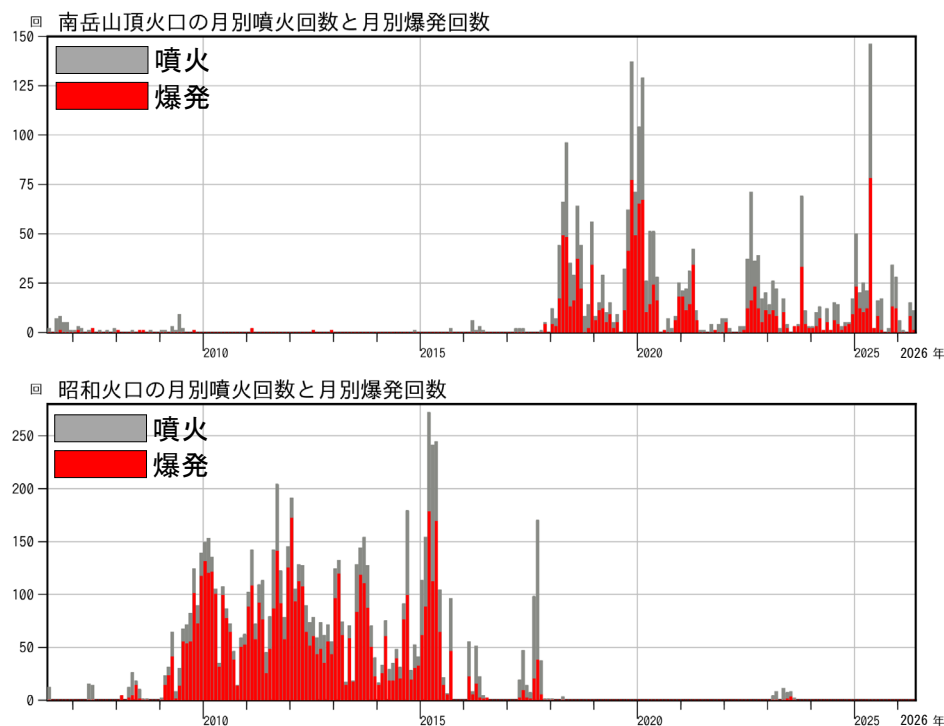


図 2-2 桜島 桜島付近の震源分布図（2017 年 1 月～2026 年 5 月）

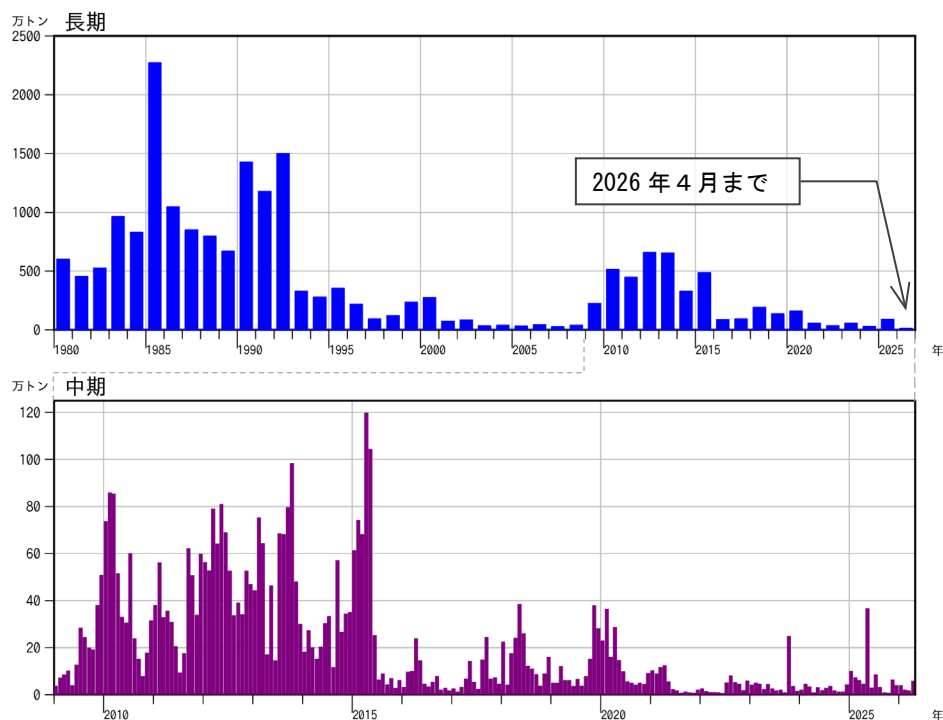
< 5 月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、南岳の深さ 0～2 km 付近に分布しました。



<5月の状況>

- ・南岳山頂火口では、噴火が11回（4月：15回）発生し、このうち爆発は1回（4月：8回）でした。
- ・昭和火口では、ごく小規模なものも含め噴火は発生しませんでした（4月：噴火、爆発なし）。



4月の総噴出量は約6万トンで、3月（約1万トン）と比べて増加しました。

※鹿児島県の降灰観測データをもとに鹿児島地方気象台で解析して作成しました。
※降灰の観測データには、風により巻き上げられた火山灰が含まれている可能性があります。

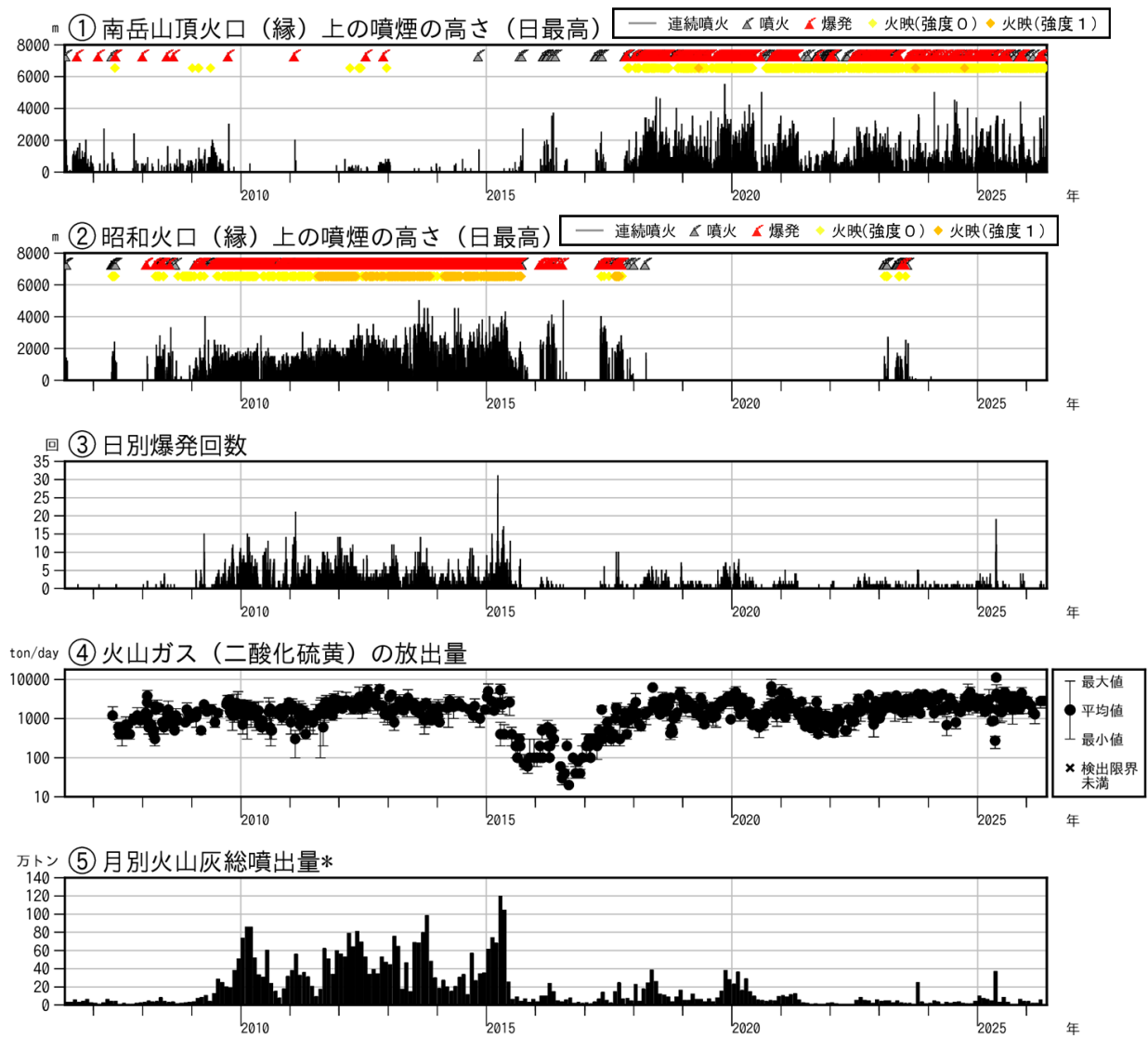


図 5-1 桜島 昭和火口噴火活動再開（2006 年 6 月）以降の活動経過図（2006 年 6 月～2026 年 5 月）

- ・火山ガスの放出量は 2022 年 7 月以降概ね多い状態で経過しています。
- ・2026 年 4 月の火山灰総降灰量は約 6 万トンでした（2026 年 3 月：約 1 万トン）。昭和火口での噴火活動が主であった 2009 年から 2015 年頃に比べて少ない状態で経過しています。

※⑤の総降灰量は 2026 年 4 月までの値を掲載しています。

*鹿児島県の降灰観測データをもとに鹿児島地方気象台で解析して作成しました。降灰の観測データには、桜島で噴火がない場合でも風により巻き上げられた火山灰が含まれている可能性があります。

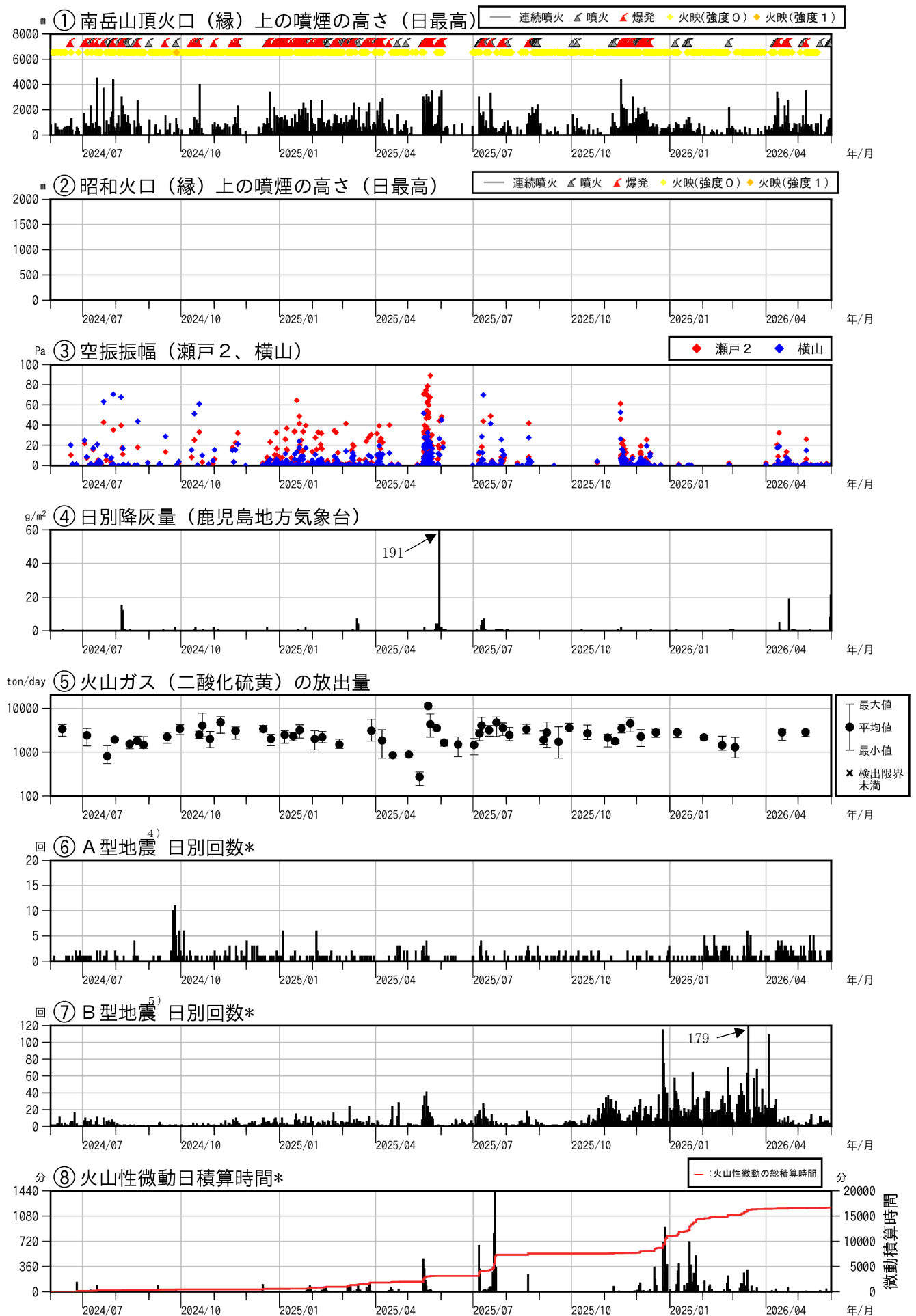


図 5-2（前ページ） 桜島 最近2年間の活動経過図（2024年6月～2026年5月）

<5月の状況>

- ・南岳山頂火口では、噴火が11回発生し、このうち爆発は1回でした。また、同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。
- ・昭和火口では、ごく小規模なものも含め噴火は発生せず、火映も観測されませんでした。
- ・鹿児島地方気象台（東郡元）では、月合計 30g/m²（降灰日数 10 日）の降灰を観測しました。
- ・期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は 2,800 トンでした（4月：2,800 トン）。火山ガスの放出量は 2022 年 7 月以降、概ね多い状態で経過しています。
- ・火山性地震は少ない状態で経過しました。火山性地震の月回数は 168 回で、前月（4月：430 回）より減少しました。桜島の南西側（深さ 10km 以浅）を震源とする火山性地震は観測されませんでした（4月：なし）。
- ・火山性微動の月合計継続時間は 1 時間 33 分で、前月（4月：2 時間 35 分）と同程度でした。

※①②では白色及び色不明の噴煙の高さは除いています。

※①②で高感度の監視カメラでようやく認められる程度の火映（強度 0）を黄色で、現地調査等において肉眼でようやく認められる程度の火映（強度 1）を橙色で示しています。

*「あみだ川及び横山観測点」で計数（計数基準 あみだ川：水平動 2.5 μm/s 以上 横山：水平動 1.0 μm/s 以上）あみだ川観測点地震計の機器障害により、赤生原観測点（水平動 0.5 μm 以上）で計数している期間があります。

4) 火山性地震のうち、A型地震はP波やS波の相が明瞭で比較的周期の短い地震で、一般的に起こる地震と同様、応力集中による地殻の破壊によって発生していると考えられますが、火山活動に直接関係する発生原因として、マグマの貫入に伴う火道周辺の岩石破壊などの例があります。

5) 火山性地震のうち、B型地震は相が不明瞭で比較的周期が長い地震で、火道内のガスの移動やマグマの発泡などにより発生すると考えられています。

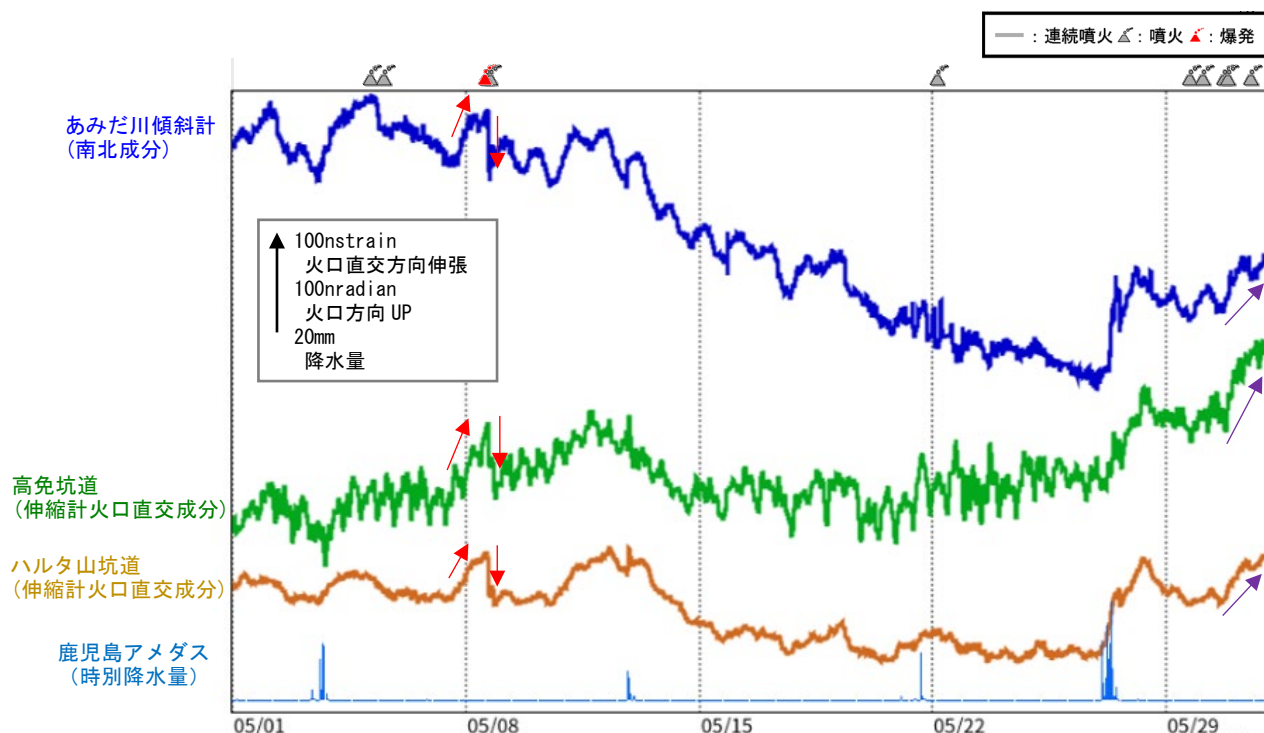


図 6 桜島 傾斜計及び伸縮計による地殻変動の状況（2026年5月1日～5月31日）

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、一部の噴火に伴い、噴火前の山体の膨張（隆起）及び噴火後の収縮（沈降）を観測しました（赤矢印）。また、30日頃から、山体の膨張（隆起）を観測しています（紫矢印）。

※あみだ川観測点は山頂火口域のほぼ北に位置していることから、傾斜計南北成分の南側が上がる傾斜変動を火口側が上がる変動とみなして表示しています。

※各観測点のデータには、潮汐補正を行っています。

※図の作成には、京都大学の高免坑道及びハルタ山坑道の観測データを使用しています。

※地殻データには、まとまった降水による影響が含まれる場合があります。

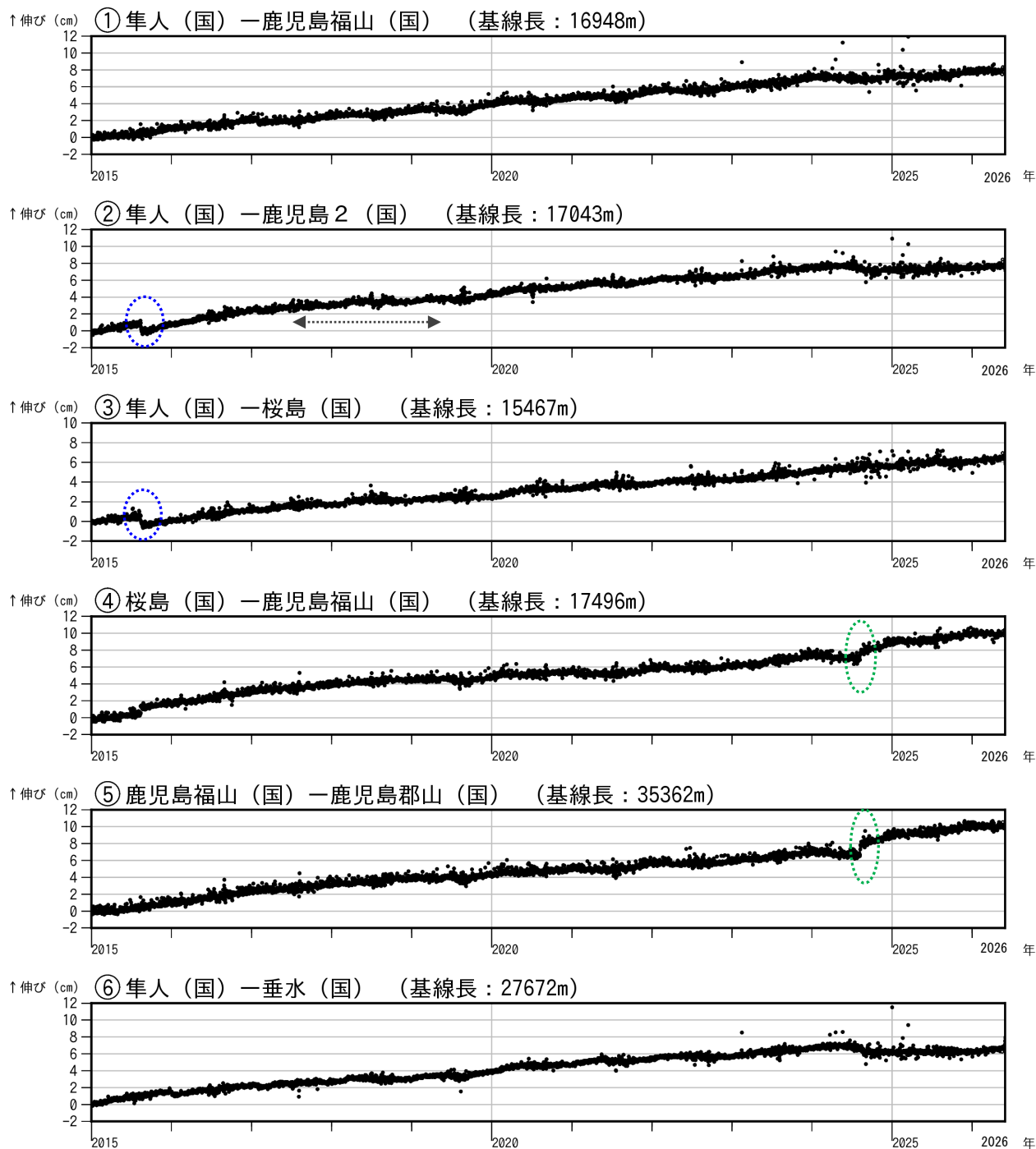


図 7-1 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化（2015 年 1 月～2026 年 5 月）

始良カルデラ（鹿児島湾奥部）を挟む基線では、長期にわたり始良カルデラの地下深部の膨張を示す緩やかな伸びがみられています。始良カルデラの地下深部には、マグマが長期にわたり蓄積した状態と考えられます。

これらの基線は図 8 の①～⑥に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

基線②は霧島山の深い場所での膨張によるとみられる変動の影響を受けている可能性があります（黒破線矢印期間内）。

基線④⑤の緑色の破線内は 2024 年 8 月 8 日の日向灘の地震による変動です。

青色の破線内は 2015 年 8 月の急激な山体膨張による変動です。

（国）：国土地理院

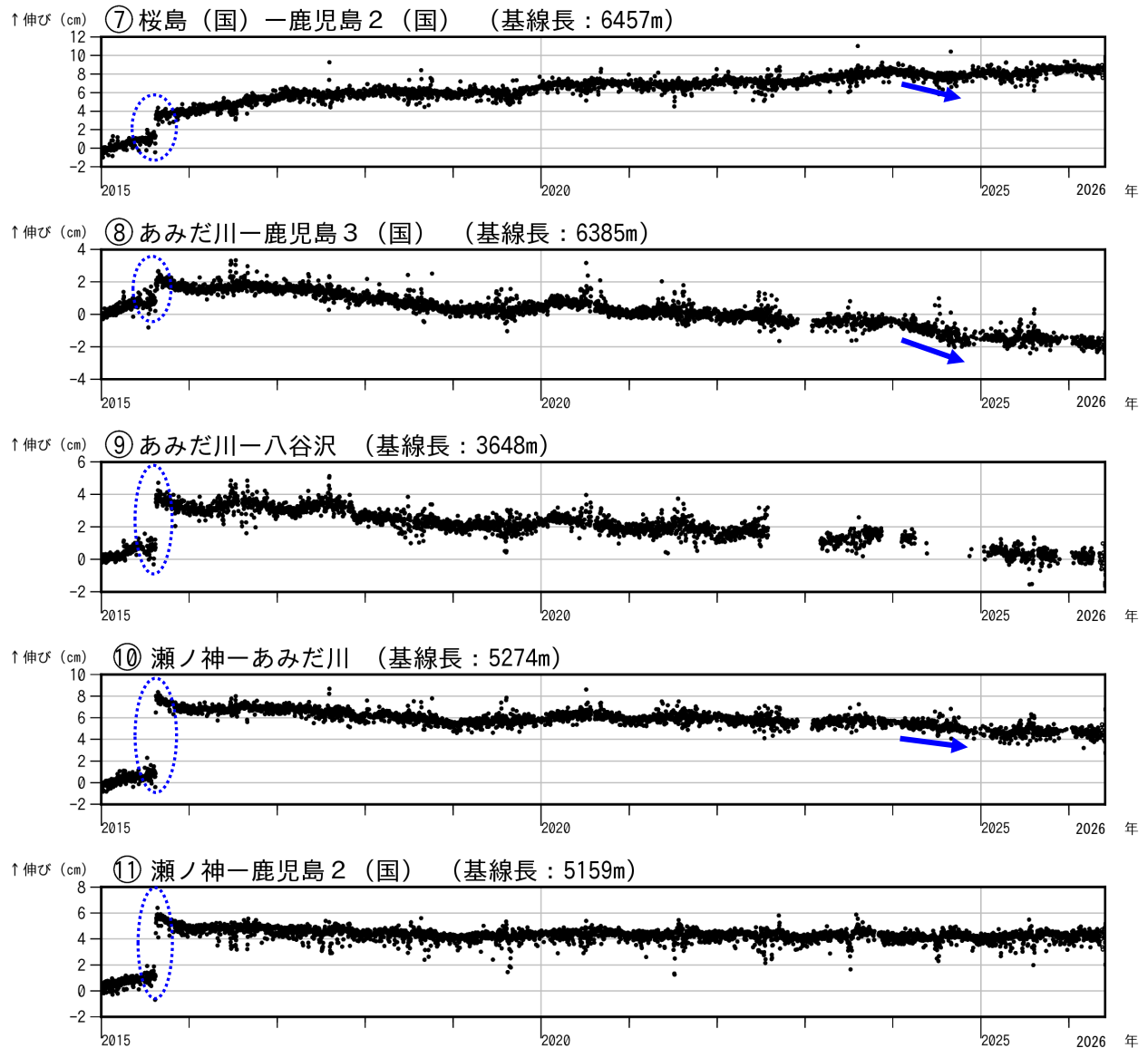


図 7-2 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2015 年 1 月～2026 年 5 月)

GNSS 連続観測では、桜島島内の基線で 2024 年 1 月頃から同年 10 月頃にかけて山体収縮に伴うとみられるわずかな変化が認められました（青矢印）。その後、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

これらの基線は図 8 の⑦～⑪に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

青色の破線円内は 2015 年 8 月の急激な山体膨張による変動です。

(国) : 国土地理院

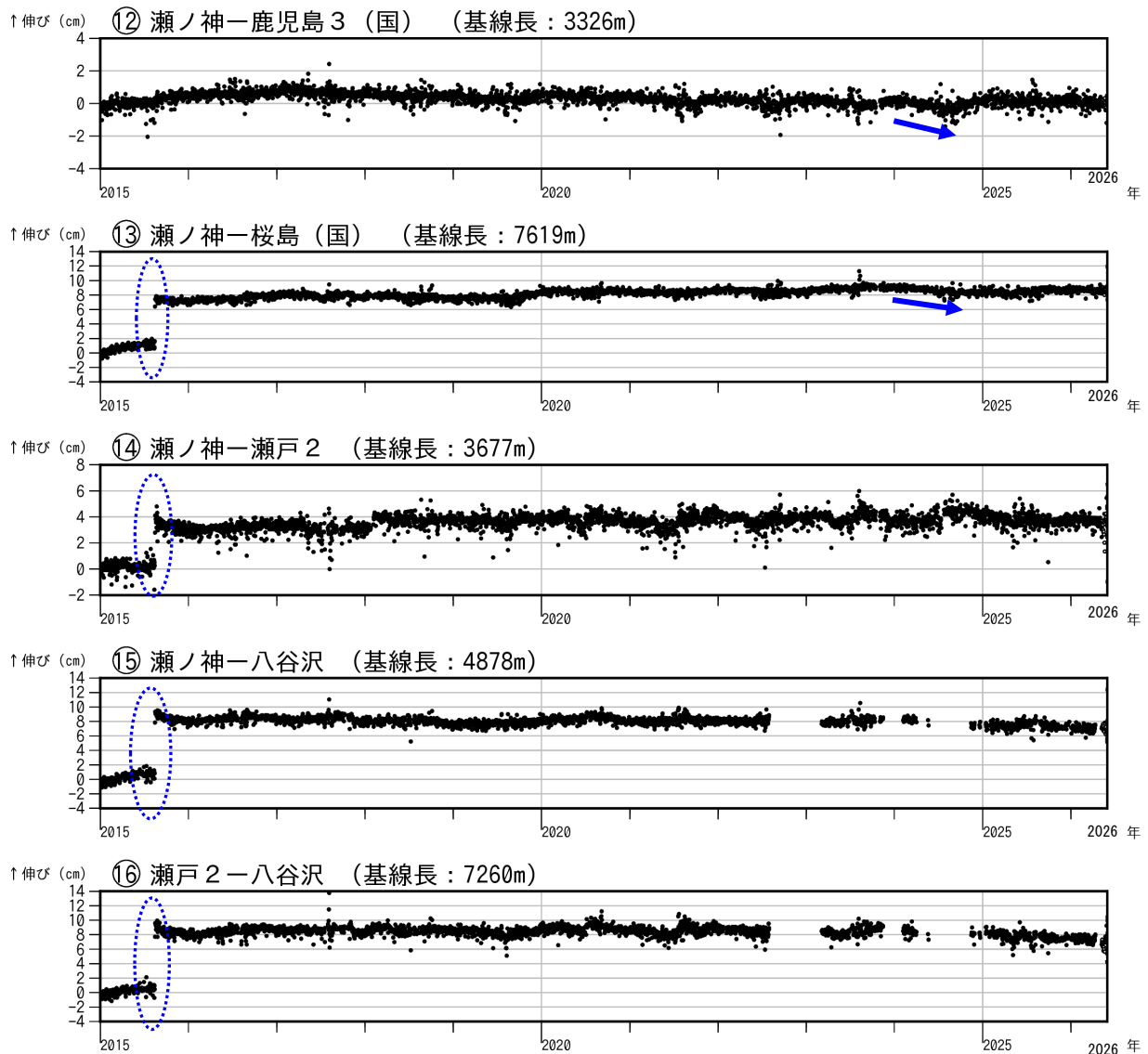


図 7-3 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化（2015 年 1 月～2026 年 5 月）

GNSS 連続観測では、桜島島内の基線で 2024 年 1 月頃から同年 10 月頃にかけて山体収縮に伴うとみられるわずかな縮みが認められました（青矢印）。その後、火山活動に伴う特段の変化は認められません。

これらの基線は図 8 の⑫～⑯に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

青色の破線円内は 2015 年 8 月の急激な山体膨張による変動です。

（国）：国土地理院

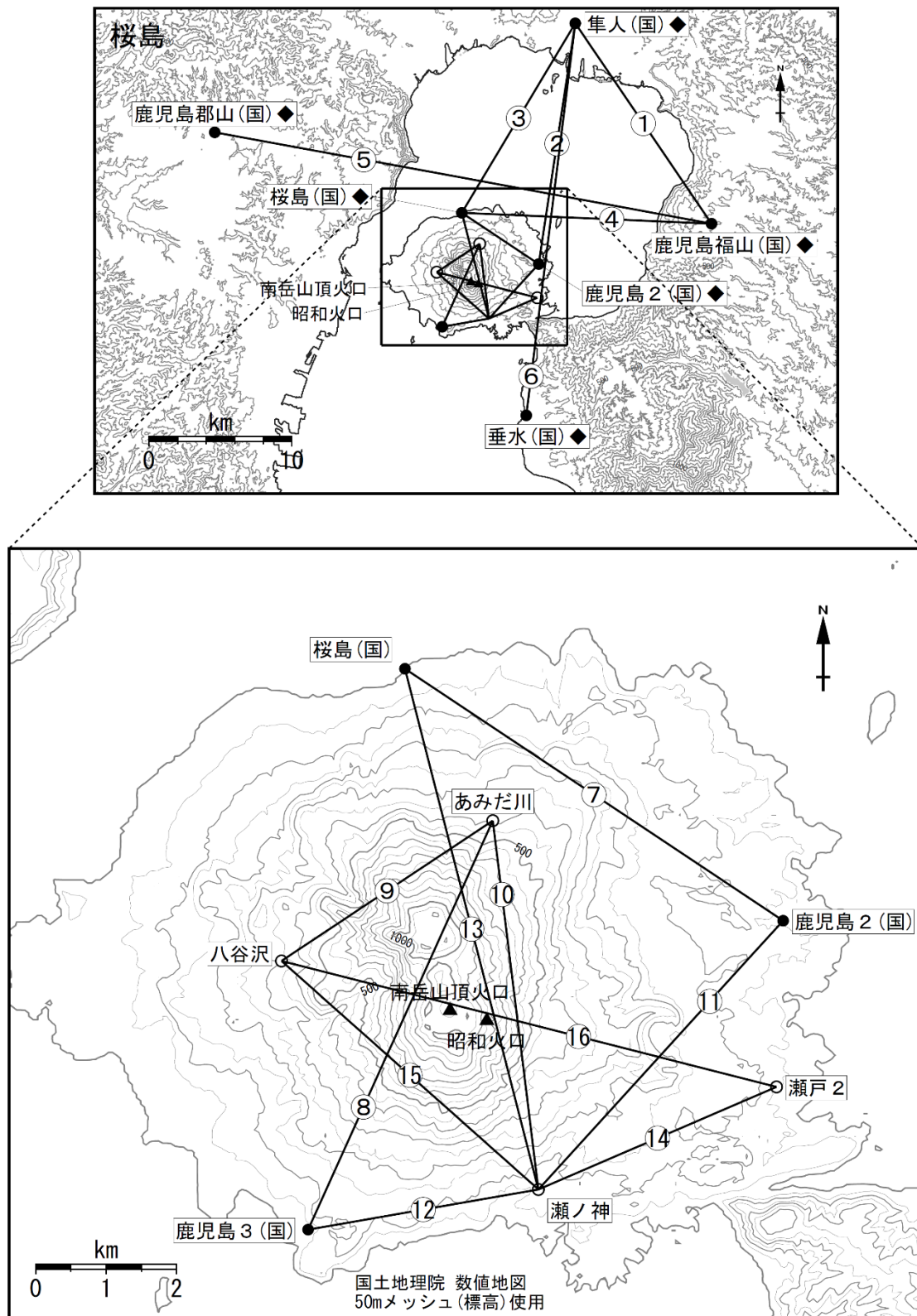
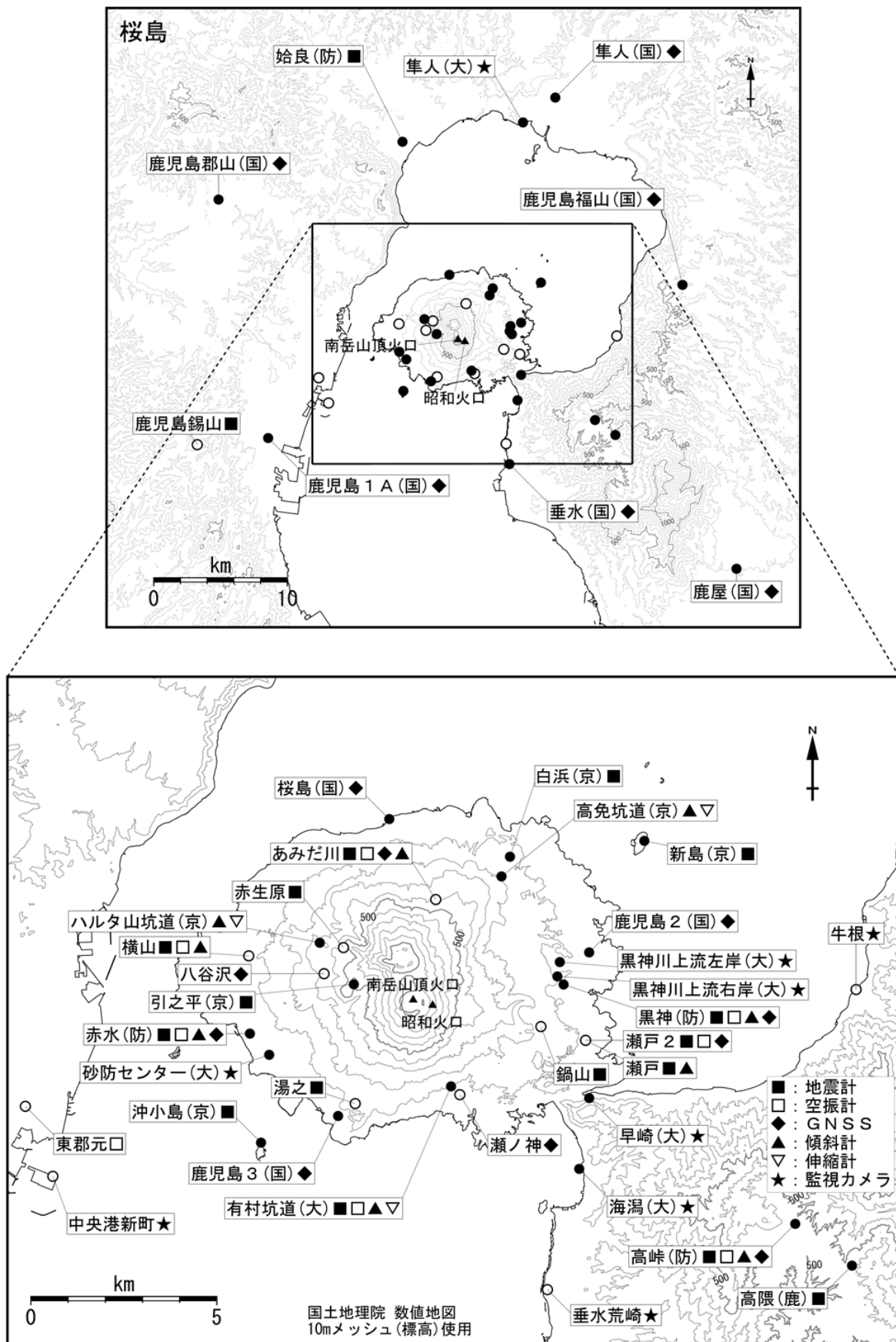


図8 桜島 GNSS 連続観測点と基線番号

白丸(○)は気象庁、黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(大): 大隅河川国道事務所、(京): 京都大学、(鹿): 鹿児島大学、(防): 防災科学技術研究所

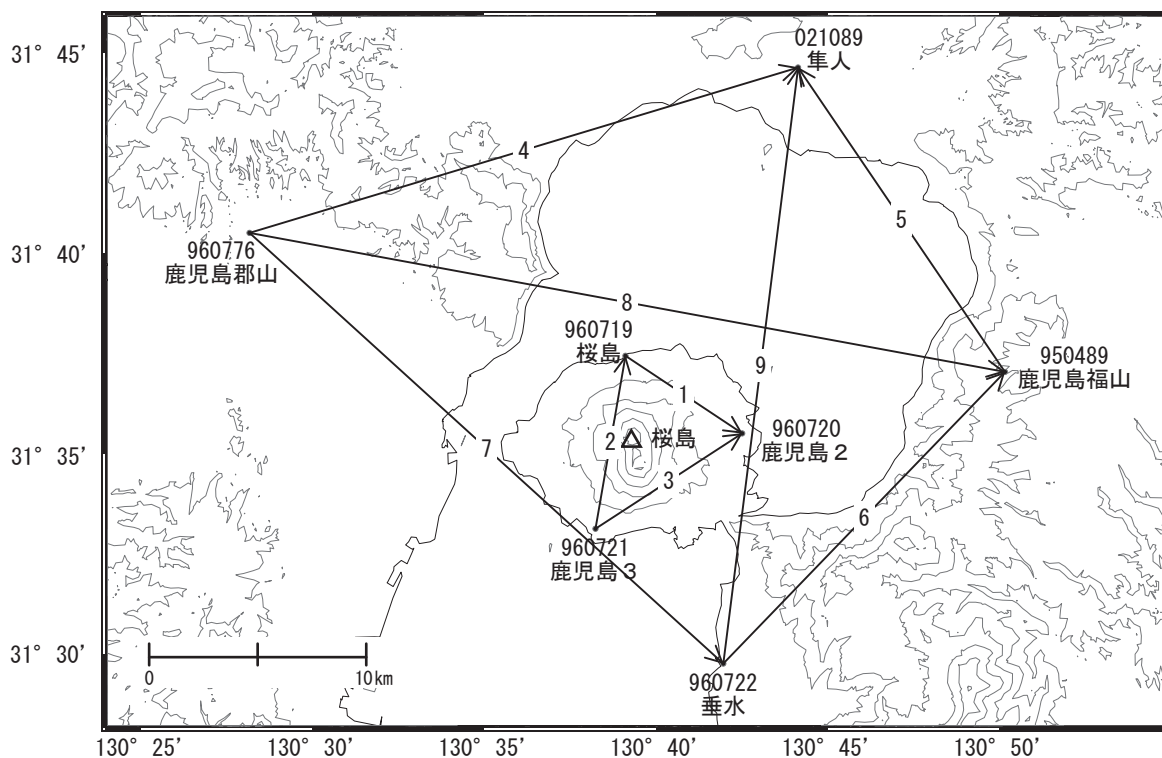
図9 桜島 観測点配置図

桜島周辺の地殻変動

—GEONET(電子基準点等)による連続観測結果—

鹿児島(錦江)湾を挟む「鹿児島郡山」—「鹿児島福山」等の基線で2024年11月頃から見られていたわずかな伸びは、2026年2月頃から停滞しています。

桜島周辺 GNSS連続観測基線図(1)

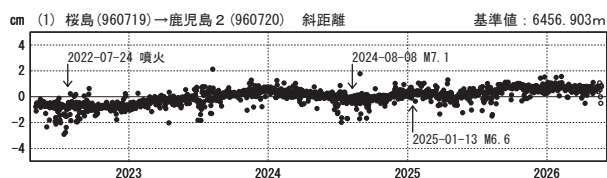
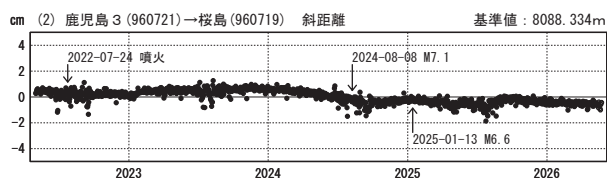
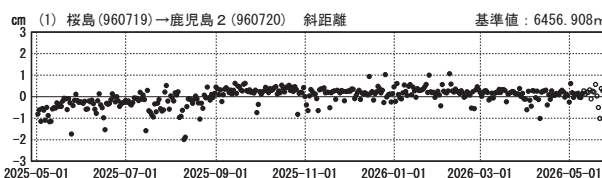
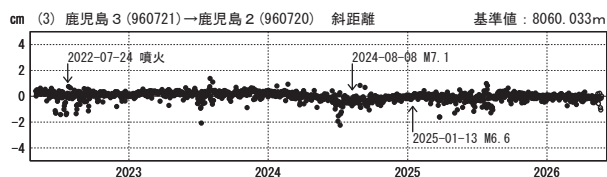
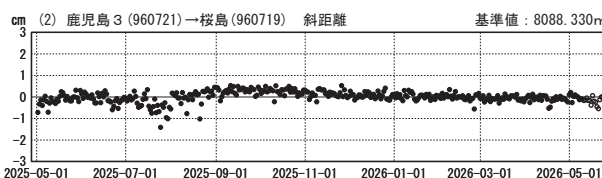
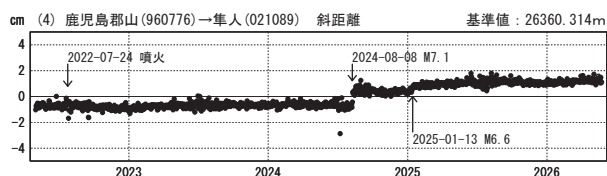
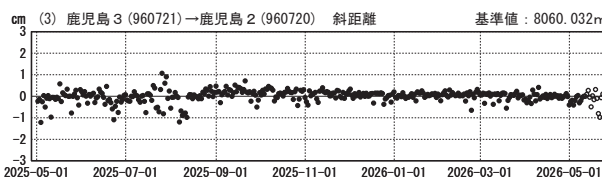
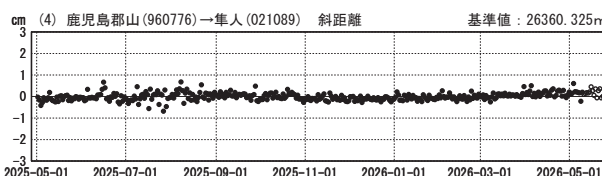


基線変化グラフ

基線変化グラフ

期間: 2022-05-01~2026-05-23 JST

期間: 2025-05-01~2026-05-23 JST

伸び
縮み伸び
縮み伸び
縮み伸び
縮み

●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

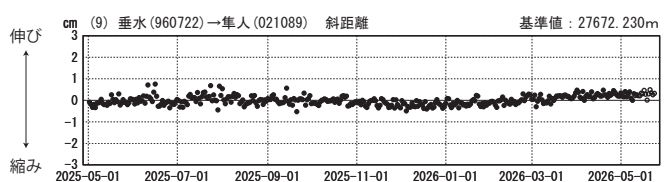
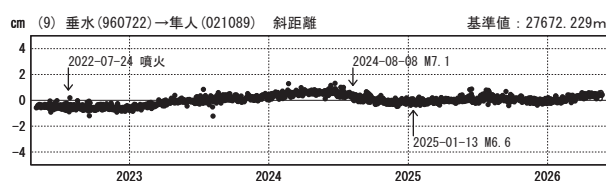
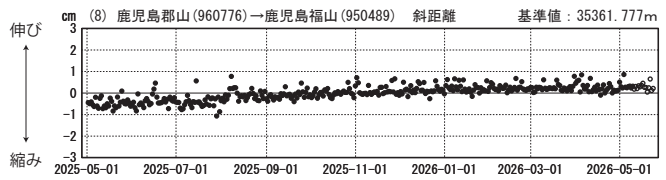
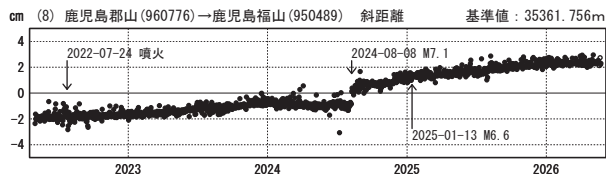
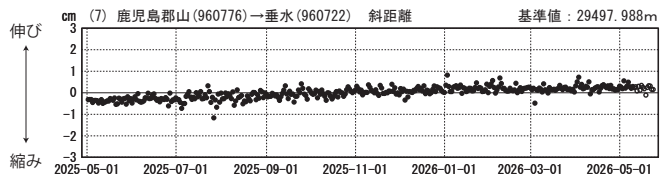
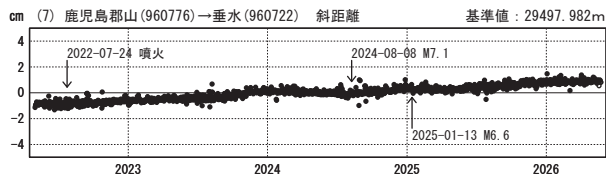
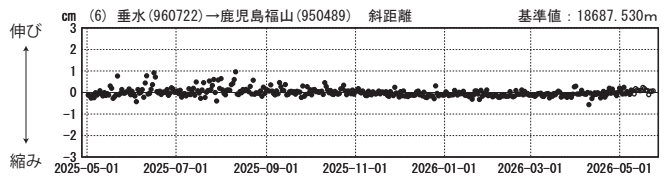
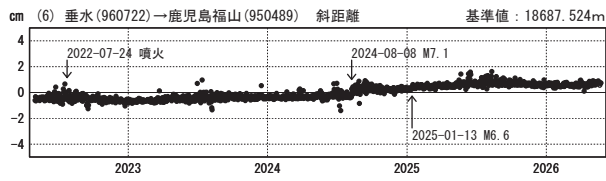
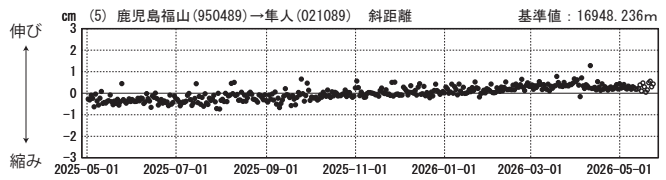
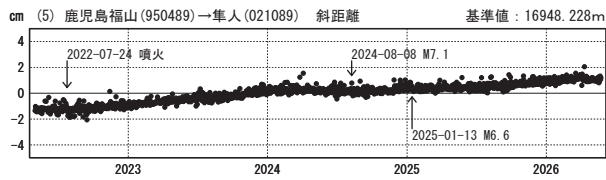
国土地理院

基線変化グラフ

基線変化グラフ

期間：2022-05-01～2026-05-23 JST

期間：2025-05-01～2026-05-23 JST

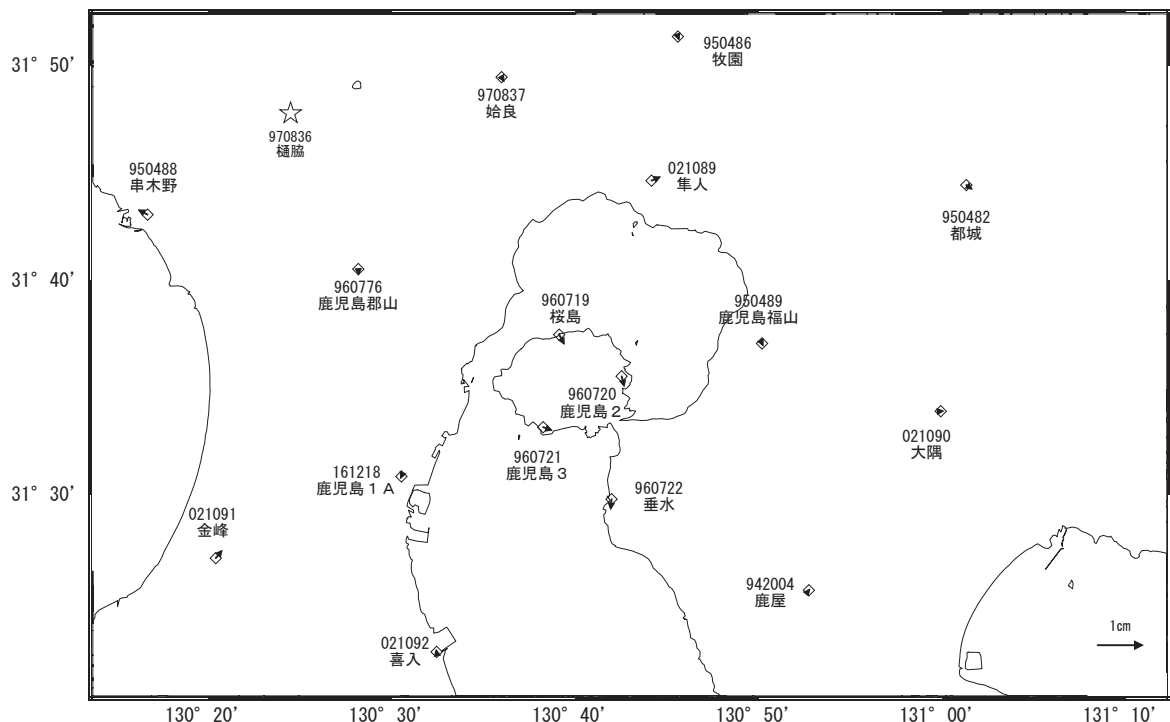


●---[F5.1:最終解] ○---[R5.1:速報解]

国土地理院

地殻変動（水平：3か月）

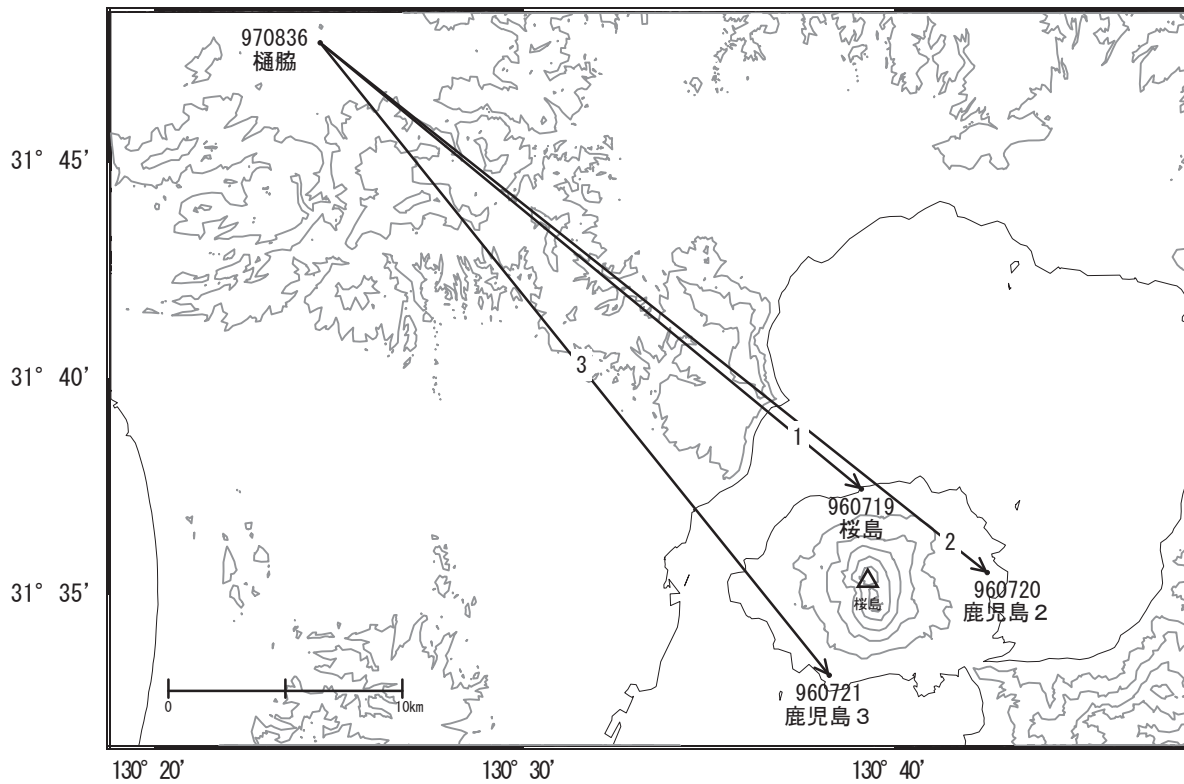
基準期間：2026-02-14～2026-02-23 [F5.1:最終解]
比較期間：2026-05-14～2026-05-23 [R5.1:速報解]



☆ 固定局：樋脇(970836)

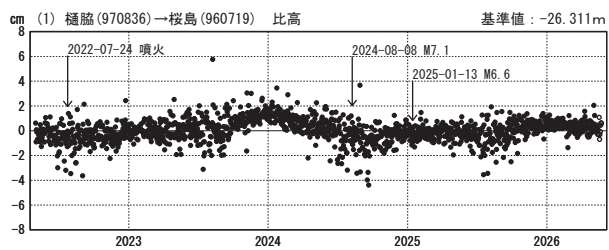
国土地理院

桜島周辺 GNSS連続観測基線図(2)



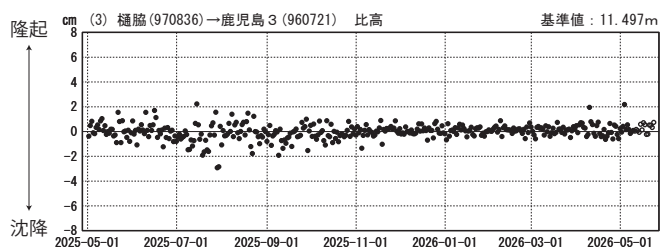
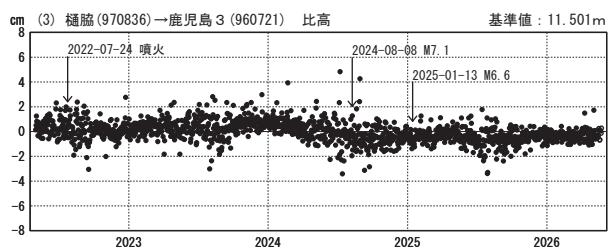
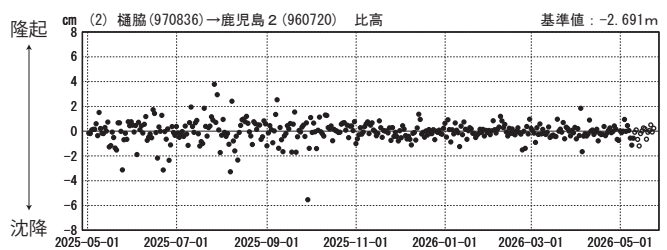
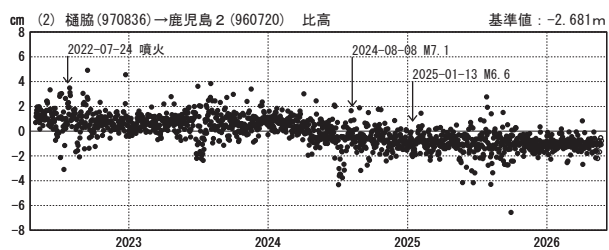
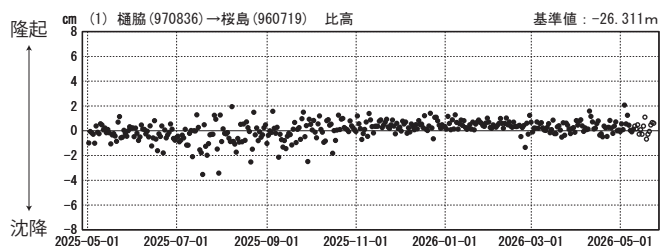
比高変化グラフ

期間：2022-05-01～2026-05-23 JST



比高変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

国土地理院

桜島火山における水準測量の観測結果（京大防災研）

水準測量

図1に桜島火山および始良カルデラ周辺の水準点を示した。2017年以降は、毎年秋季に大学・気象庁の合同測量班により、桜島山腹の水準点を中心とした図中の黒丸の点において水準測量を実施し、図中の灰色丸の点で実施された測量結果（九州電力提供）を統合して解析を行っている。

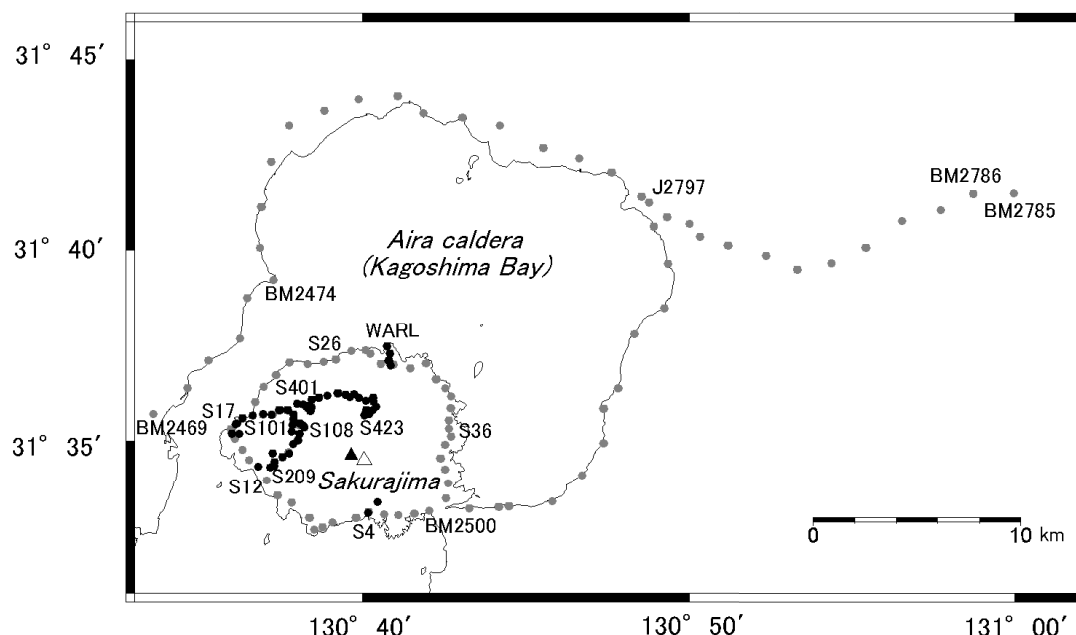


図1 桜島火山および始良カルデラ周辺の水準点。黒丸は、最近の大学・気象庁による測量実施水準点。灰色丸は、九州電力提供の測量結果に係る水準点。黒三角、白三角は、それぞれ南岳、昭和火口の位置を示す。

測量結果

桜島火山および始良カルデラ周辺域においては、1990年代後半の山頂噴火活動静穏化に伴ってマグマの放出量が減り、始良カルデラ中央部直下のマグマ溜りの増圧によって桜島北部の地盤がそれまでの噴火活動活発期における地盤沈降から隆起に転じた。この桜島北部の地盤隆起傾向は、基本的にはこれ以降も現在まで継続している。ここでは、最近2年間の水準測量結果について示す。

図2に、2023年11月～2024年11月の1年間の地盤上下変動量（基準点：BM. 2786）を示す。この期間は、桜島北部において近年の地盤隆起傾向とは異なり地盤沈降が見られた（S. 26で-6.9 mm）。また、鹿児島湾西岸路線（BM. 2469～BM. 2474）においても、始良カルデラ中心部に近づくに従って地盤沈降が見られる（BM. 2469を基準とするとBM. 2474において-3.5 mm）。始良カルデラ地下において減圧が生じたことが示唆される。曾於路線（BM. 2786～

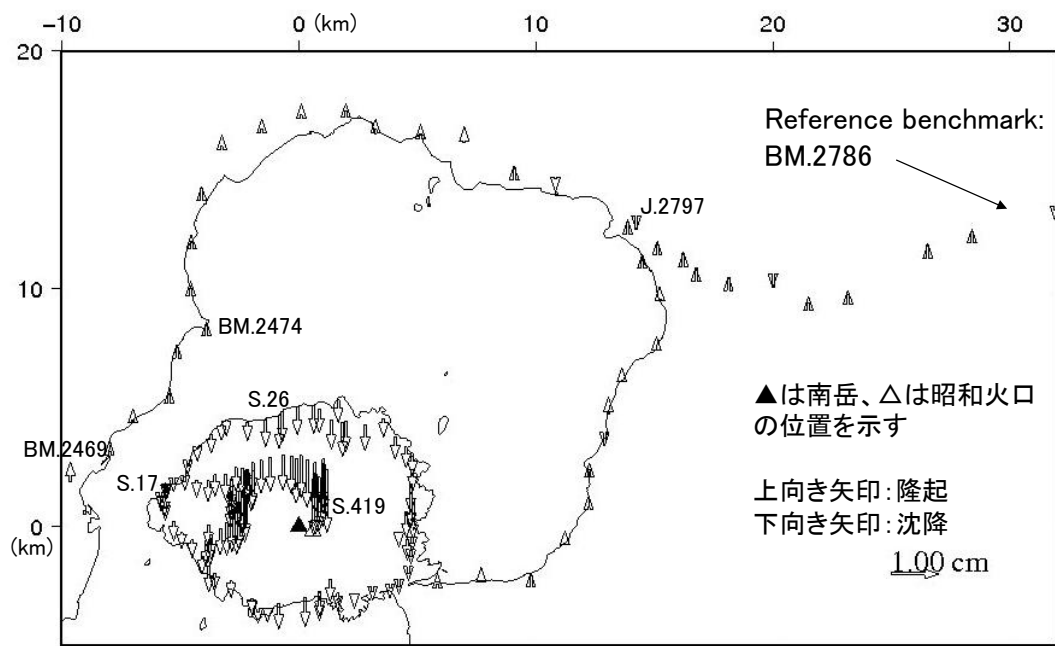


図2 2023年11月～2024年11月の期間における地盤上下変動量（基準点：BM.2786）。

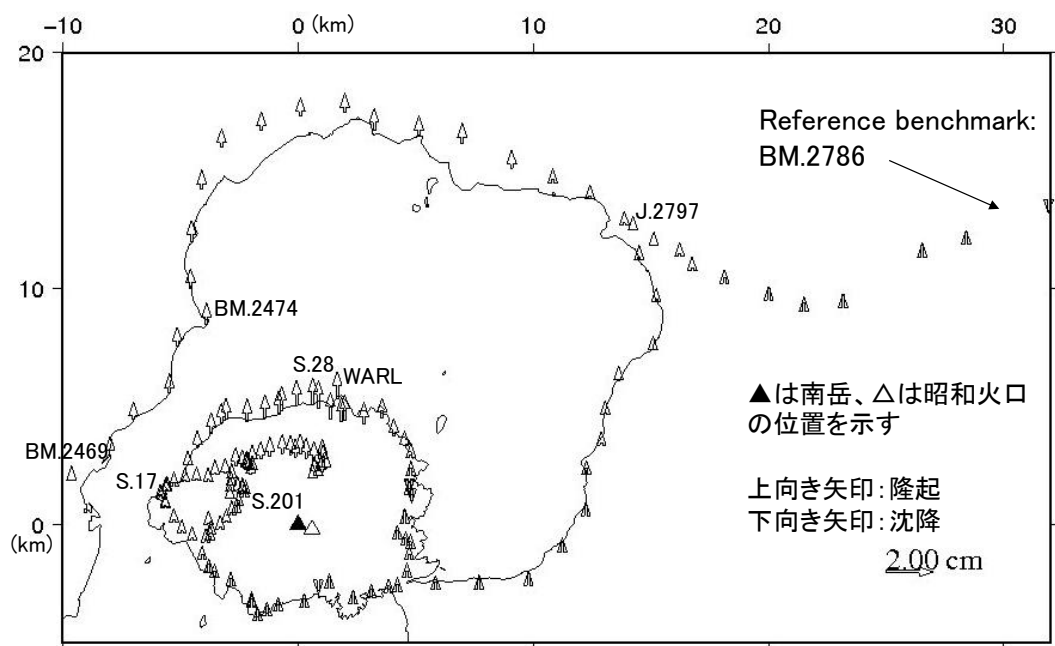


図3 2024年11月～2025年11月の期間における地盤上下変動量（基準点：BM.2786）。

J. 2797) においては、始良カルデラに向かった地盤変動はほとんど見られなかった (BM. 2786 ～J. 2797 間で-0.1 mm)。一方で、桜島中央部付近では顕著な地盤沈降（最大 S. 419 におけ

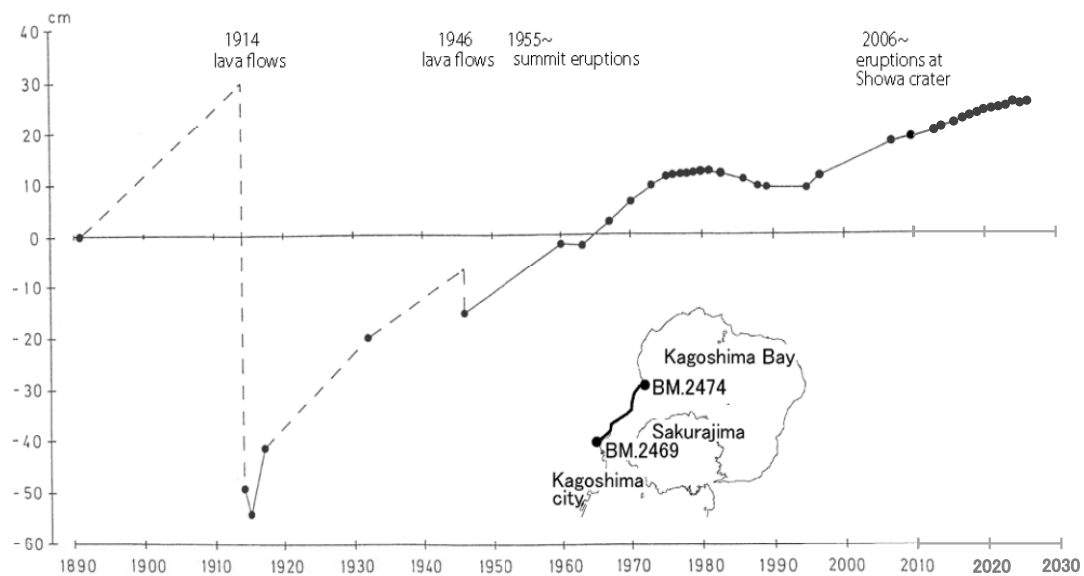


図4 鹿児島市にある水準点 BM. 2469 を基準とした始良カルデラ西岸の大崎鼻にある水準点 BM. 2474 の比高の経年変化。江頭・他(1997)の Fig. 1 に加筆・修正。最新データは 2025 年 11 月の測量データ。

る-13.1 mm) が確認される。

図3に、2024年11月～2025年11月の1年間の地盤上下変動量(基準点: BM. 2786)を示す。この期間は、桜島北部において地盤隆起(最大 S. 28 における 11.7 mm)が確認される。また、曾於路線でも始良カルデラに向かって地盤隆起(J. 2797 において 5.7 mm)、鹿児島湾西岸路線においても、始良カルデラ中心部に近づくに従って地盤隆起(BM. 2469 を基準とすると BM. 2474 において 3.2 mm)が見られる。始良カルデラ地下のマグマ溜りに関しては、マグマの蓄積が進行したことが示唆される。桜島中央部付近も、始良カルデラの増圧の影響で隆起となっているが、相対的に隆起量は大きくない。前期間(2023年11月～2024年11月)において始良カルデラ中心の地盤沈降が見られていたが、1年で地盤隆起傾向に戻ったことが確認された。

鹿児島市 BM. 2469 を基準とした大崎鼻 BM. 2474 の比高の経年変化

図4に、鹿児島市にある水準点 BM. 2469 を基準とした始良カルデラ西岸の大崎鼻にある水準点 BM. 2474 の比高の経年変化を示した。この路線においては、1891年から130年以上の長きに渡り水準測量データが存在しており、途中1914年の桜島大正大噴火を経験している。大正大噴火後の約110年で、始良カルデラ地下のマグマ溜まりにおけるマグマの蓄積に伴った BM. 2474 付近の地盤隆起が進み、大正噴火時に推定されている地盤沈降量をほとんど回復した状態となっている。今後の推移を注意深く見ていく必要がある。

桜島西岸 S. 17 を基準とした桜島中央部付近 BM. OBS の比高の経年変化

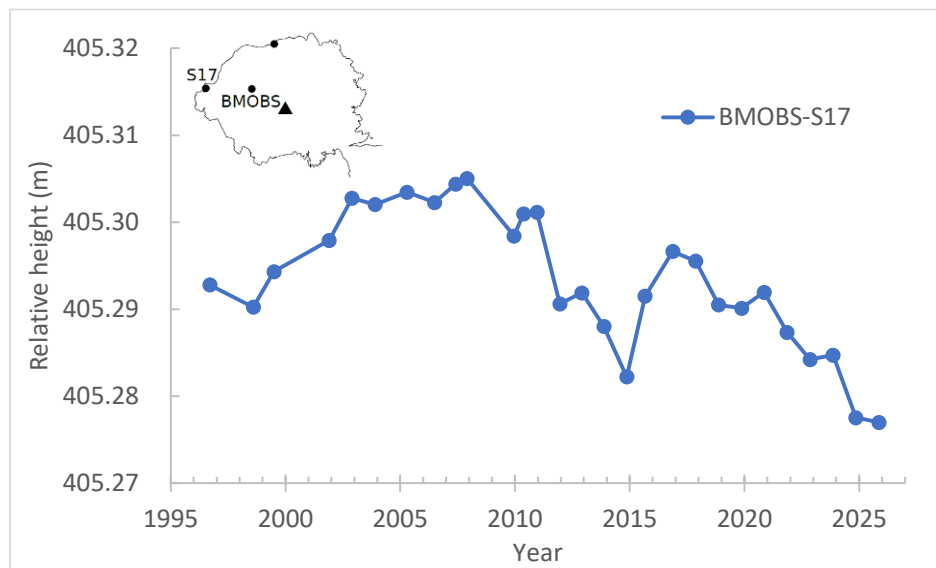


図5 桜島西岸 S. 17 を基準点とした桜島中央部に近いハルタ山観測室 BM. OBS の比高の経年変化（データ期間：1996 年 10 月～2025 年 11 月）

図5に、桜島西岸 S. 17 を基準とした桜島中央部付近 BM. OBS の比高の経年変化を示した。この路線の水準測量は、およそ1年に1回実施。BM. OBS は、始良カルデラ～桜島北部地下におけるマグマ蓄積による増圧や2015年8月15日のダイク貫入の影響を受けて隆起する時期もあるが、2007年頃からおおむね沈降の傾向を示す。図6と図7には、参考にそれぞれ図2と図3に対して基準点を BM. 2786 から S. 17 に変更した図も掲載した。

謝辞：本資料では、国土地理院九州地方測量部公共測量成果（九州電力提供）を利用しました。記して感謝いたします。

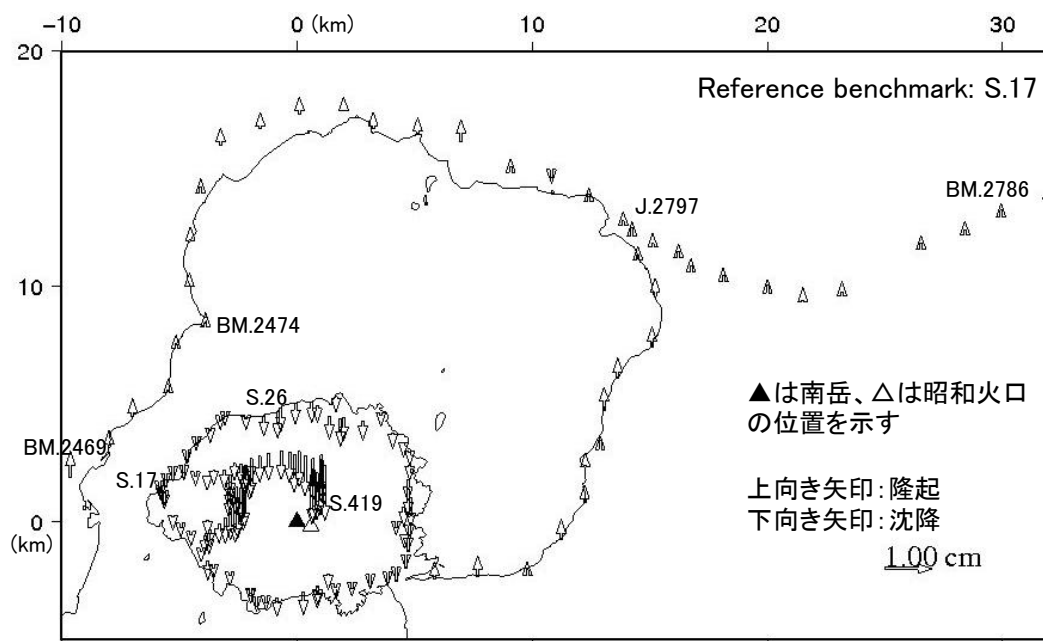


図6 (参考) 2023年11月～2024年11月の期間における地盤上下変動量(基準点: S.17)。

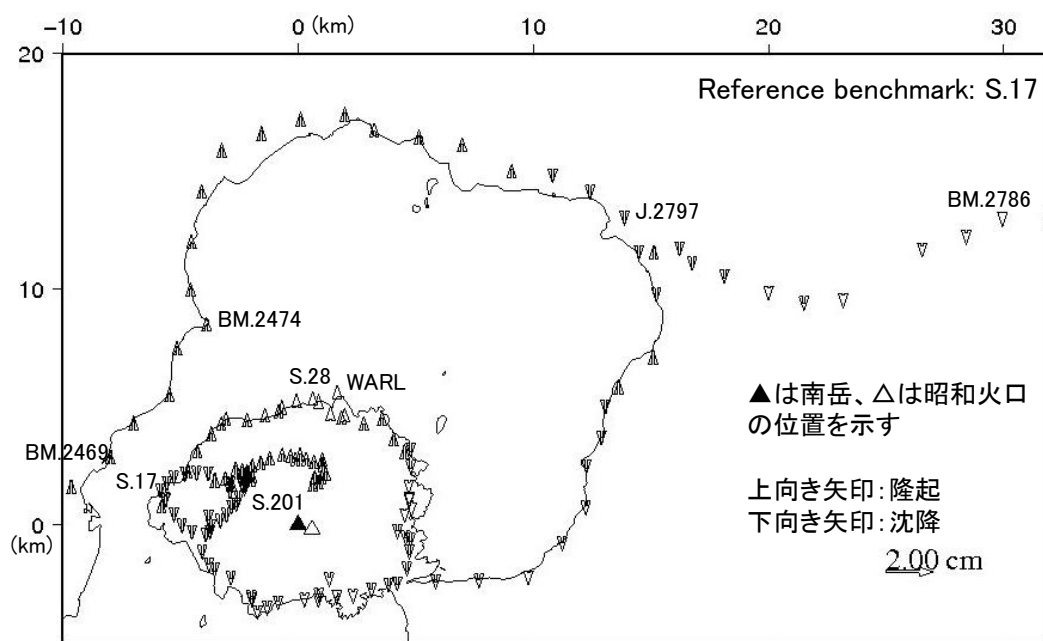


図7 (参考) 2024年11月～2025年11月の期間における地盤上下変動量(基準点: S.17)。

薩摩硫黄島の火山活動解説資料（令和8年5月）

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

硫黄岳火口では、17日02時07分に噴火が発生し、噴煙が火口縁上400mまで上がりました。大きな噴石の飛散や空振は観測されませんでした。噴火が発生したのは、2025年12月29日以来です。なお、噴火の前後で地震活動や地殻変動等に特段の変化はみられていません。

火山性地震や火山性微動の発生状況に特段の変化はありません。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり1,000トン前後の状態が長期的に継続しており、時折噴煙が高くなるほか、夜間に火映を観測しています。長期的には噴煙活動や熱活動が高まった状態が続いていることから、硫黄岳火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生する可能性があります。

硫黄岳火口の中心から概ね0.5kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスにも注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和3年4月8日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図1、図2-①、図3-①）

硫黄岳火口では、17日02時07分に噴火が発生し、噴煙が火口縁上400mまで上がりました。大きな噴石の飛散や空振は観測されませんでした。噴火が発生したのは、2025年12月29日以来です。この噴火以外では、白色の噴煙が最高で火口縁上1,200m（4月：500m）まで上がりました。また、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

・ 地震や微動の発生状況（図2-②③、図3-②～④、図4）

火山性地震の月回数は266回（4月：220回）と少ない状態で経過しました。このうち、高周波地震の月回数は95回（4月：75回）でした。震源が求まった火山性地震はありませんでした。

火山性微動は観測されていません。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和8年6月分）は令和8年7月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、京都大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び三島村のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

・火山ガスの状況（図2-④、図3-⑤）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり800～1,000トン（4月：500～1,600トン）でした。長期的には1日あたり1,000トン前後の状態が継続しています。

・地殻変動の状況（図5、図6）

GNSS 連続観測では、島内の一部の基線で、2026年2月頃から縮みの変化がみられていましたが、4月頃から停滞しています。同基線では、2015年頃から、薩摩硫黄島と竹島間の海域を中心とした膨張性の地殻変動に対応すると考えられる長期的な縮みの傾向がみられています。



図1-1 ①～④ 薩摩硫黄島 噴火の状況（5月17日02時06分～10分、岩ノ上監視カメラ）

硫黄岳火口では、17日02時07分に噴火が発生し、噴煙が火口縁上400mまで上がりました（白矢印）。



図 1-2 薩摩硫黄島 噴煙の状況（5月13日、岩ノ上監視カメラ）

硫黄岳火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上 1,200m（4月：500m）まで上がりました。



図 1-3 薩摩硫黄島 火映の状況（5月13日、岩ノ上監視カメラ）

夜間に高感度の監視カメラで火映（白破線内）を観測しました。

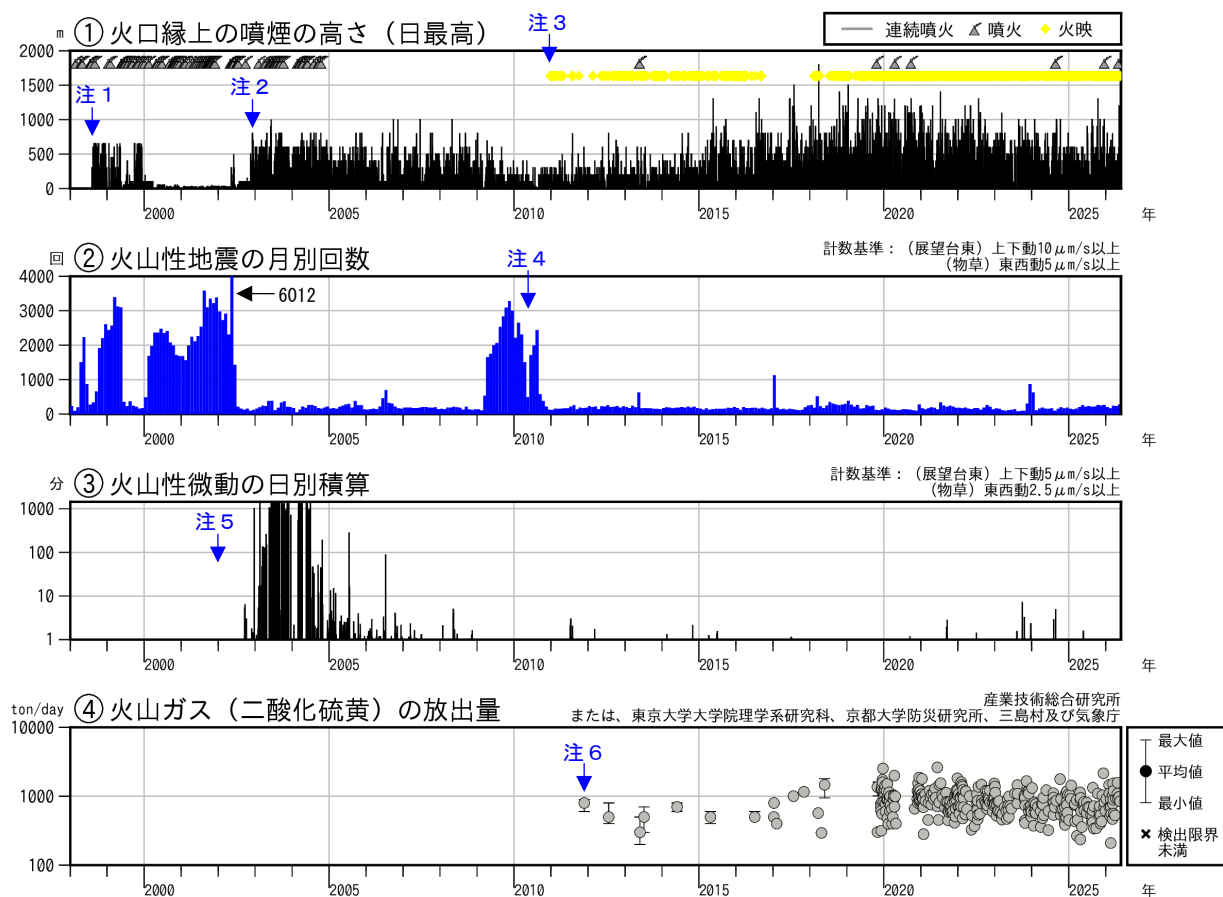


図2 薩摩硫黄島 火山活動経過図（1998年1月～2026年5月）

注1 1998年8月1日：三島村役場硫黄島出張所から気象庁へ通報開始。

注2 2002年11月16日：気象庁が設置した監視カメラによる観測開始。

注3 気象庁が設置した監視カメラの高感度化により火映の観測が可能となりました。

注4 2010年1月から7月にかけて、地震計障害のため火山性地震及び火山性微動の回数が不明の期間があります。

注5 火山性微動の日別積算時間のデータは2002年以降。

注6 2011年11月26日：気象庁による火山ガス（二酸化硫黄）放出量の観測開始。2019年12月から東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁による観測開始。

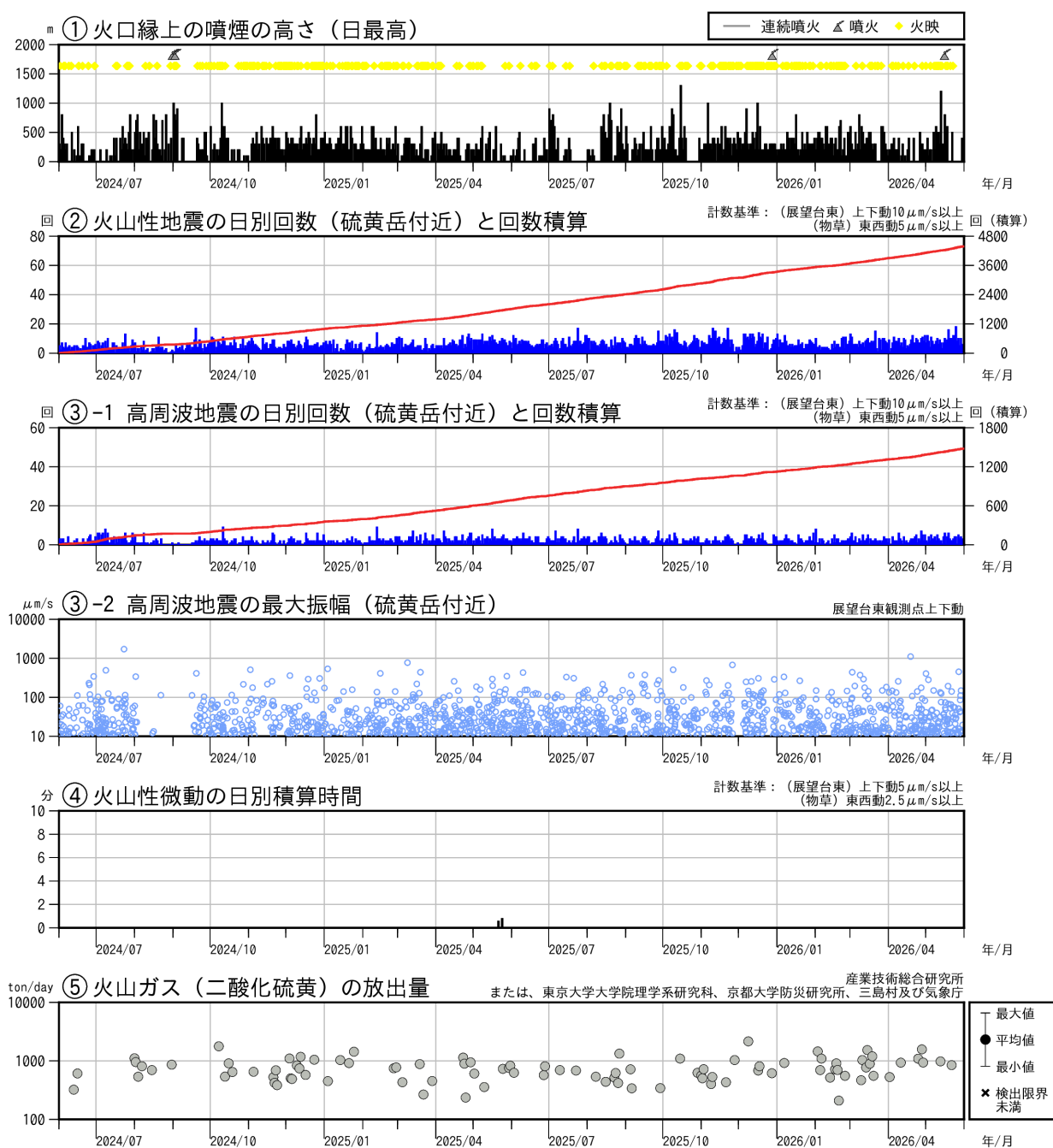


図3 薩摩硫黄島 火山活動経過図（2024年6月～2026年5月）

< 5月の状況 >

- ・硫黄岳火口では、17日02時07分に噴火が発生し、噴煙が火口縁上400mまで上がりました。この噴火以外では、白色の噴煙が最高で火口縁上1,200m（4月：500m）まで上がりました。
- ・硫黄岳火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。
- ・火山性地震の月回数は266回（4月：220回）と少ない状態で経過しました。
- ・高周波地震の月回数は95回（4月：75回）でした。振幅の大きな火山性地震が時々発生しました。
- ・火山性微動は観測されていません。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり800～1,000トン（4月：500～1,600トン）でした。長期的には1日あたり1,000トン前後の状態が継続しています。

火山性微動は、展望台東観測点上下動 $5.0\mu\text{m/s}$ 以上、物草観測点東西動成分 $2.5\mu\text{m/s}$ 以上のいずれかの基準を満たすものを計数しています。

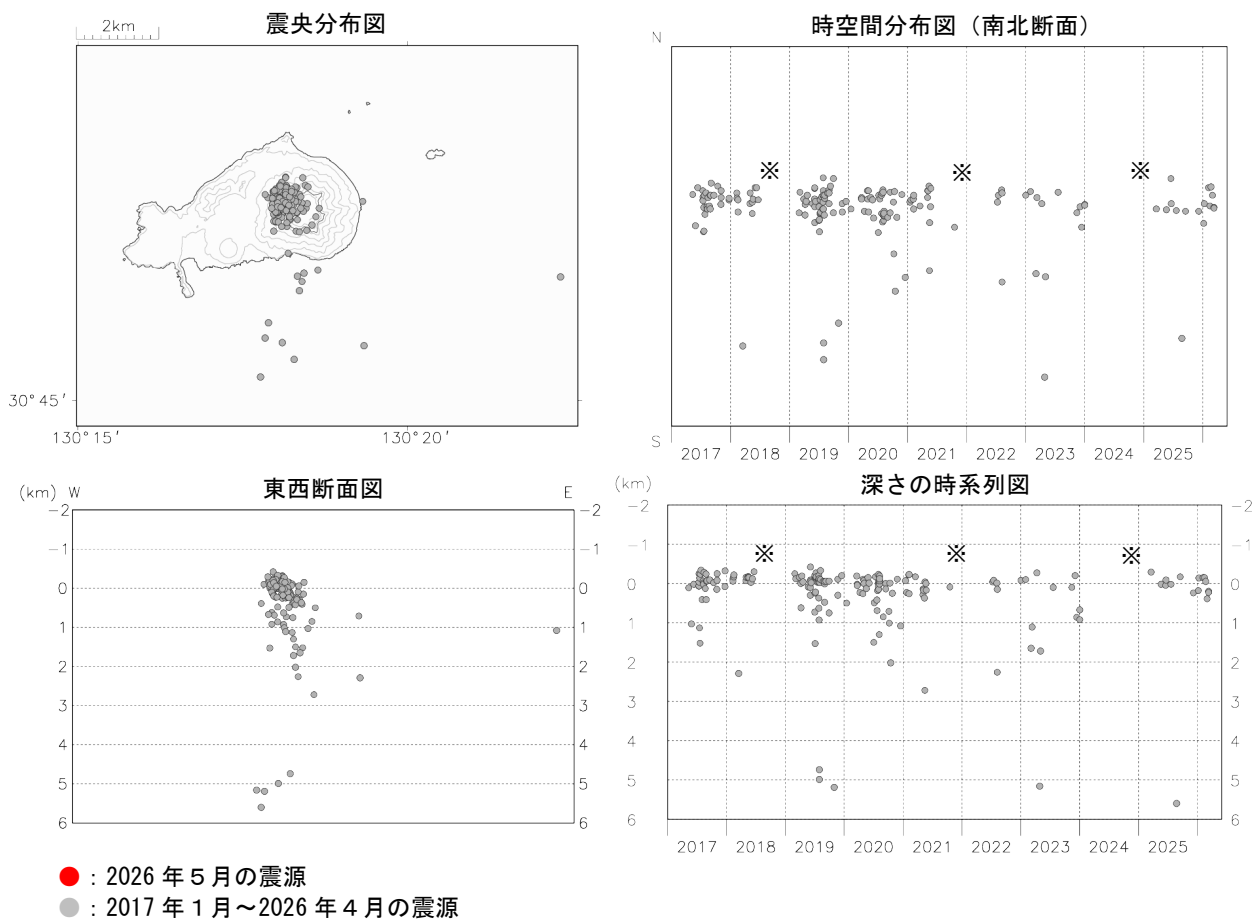


図4 薩摩硫黄島 火山性地震の震源分布図（2017年1月～2026年5月）

< 5月の状況 >

震源が求まった火山性地震はありませんでした。

※地震計障害のため、2018年6月下旬から2019年2月下旬まで、2021年6月中旬から12月中旬まで及び2024年2月下旬以降の期間では、検知力や震源決定の精度が低下しています。

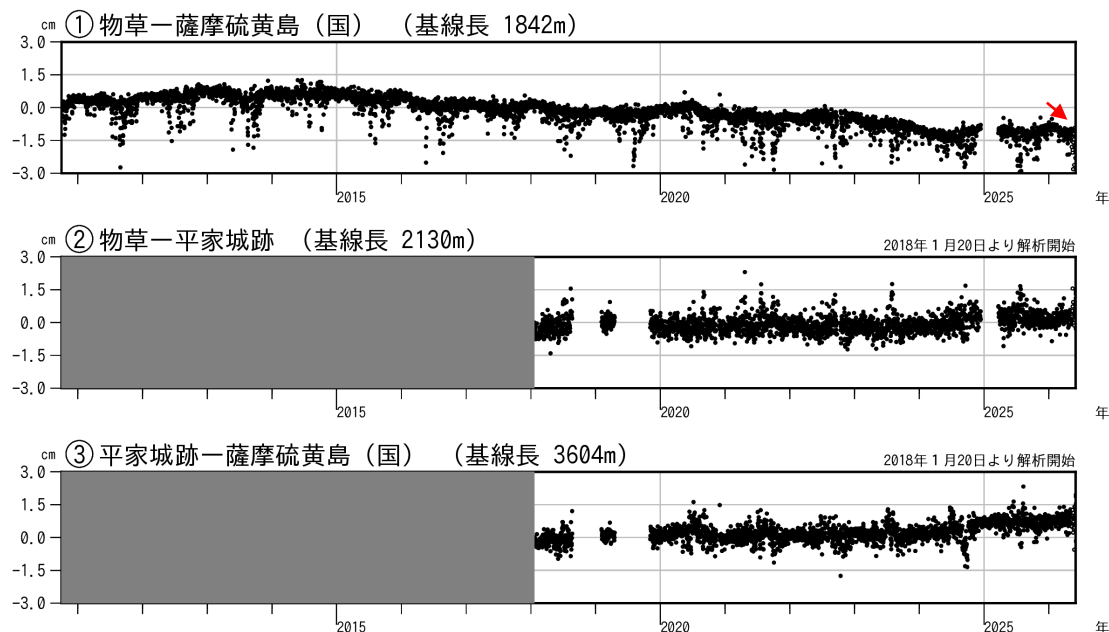


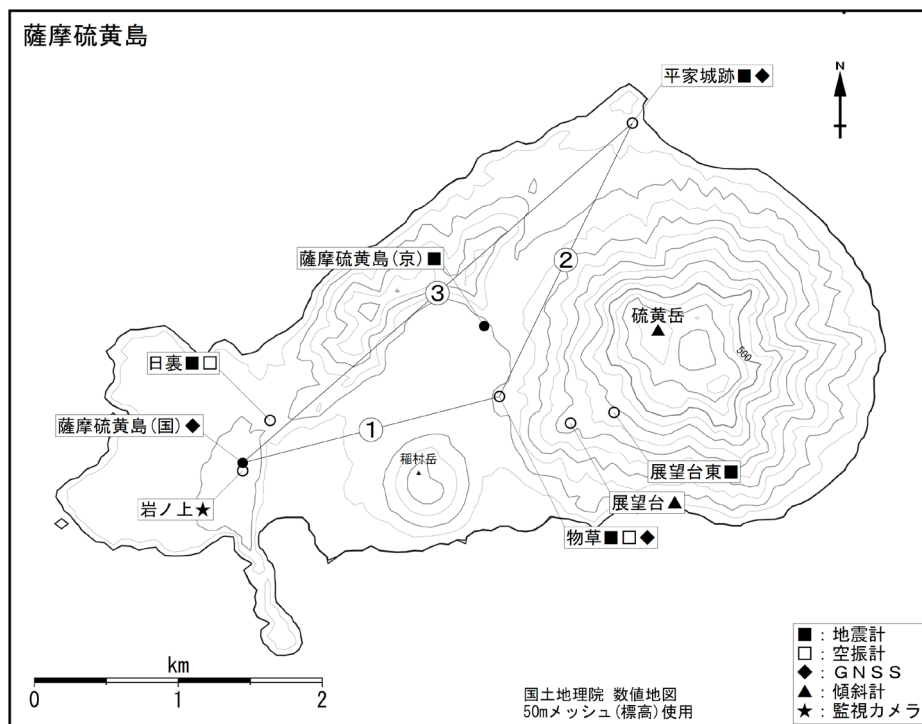
図5 薩摩硫黄島 GNSS連続観測による基線長変化 (2010年10月～2026年5月)

GNSS連続観測では、島内の一部の基線（①）で、2026年2月頃から縮みの変化（赤矢印）がみられていましたが、4月頃から停滞しています。同基線では、2015年頃から、薩摩硫黄島と竹島の間の海域を中心とした膨張性の地殻変動に対応すると考えられる長期的な縮みの傾向がみられています。

この基線は図6の①～③に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

(国) : 国土地理院



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(京): 京都大学

図6 薩摩硫黄島 観測点配置図とGNSS連続観測の基線番号

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

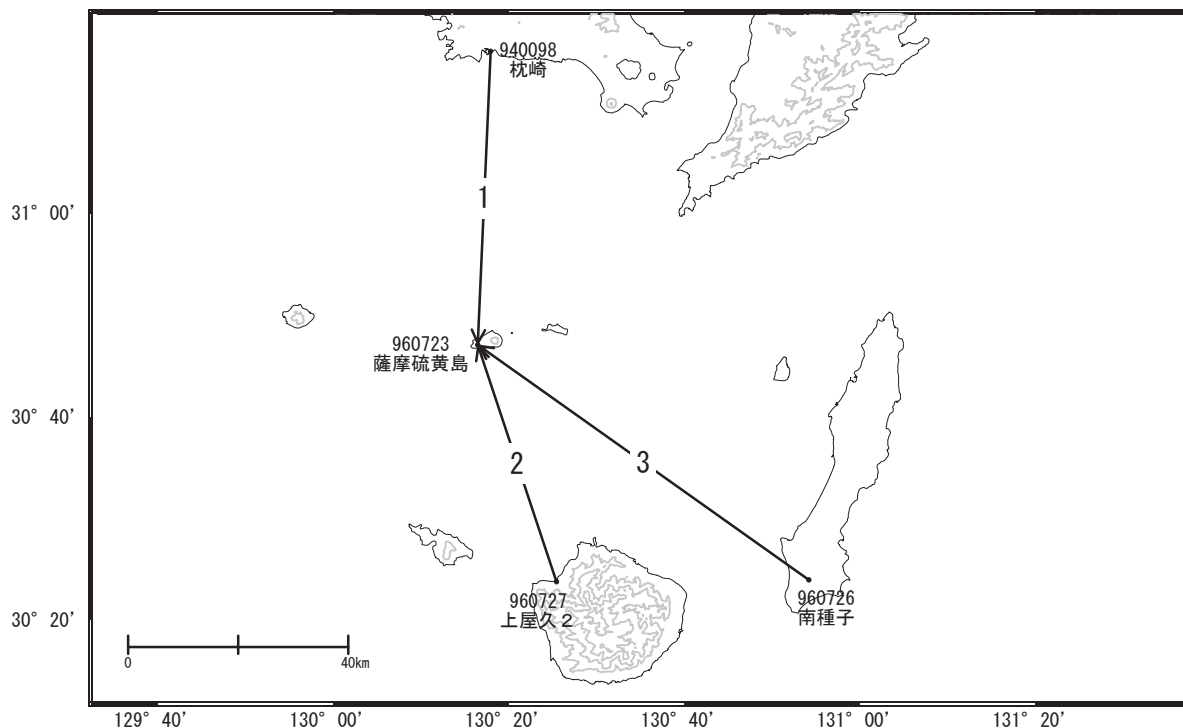
(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学

薩摩硫黄島周辺の地殻変動

—GEONET(電子基準点等)による連続観測結果—

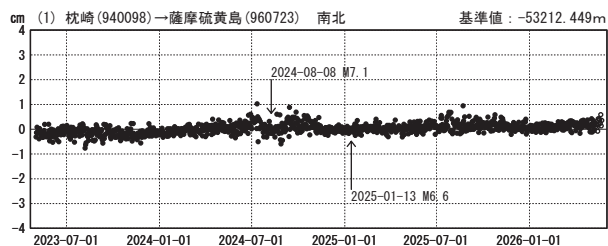
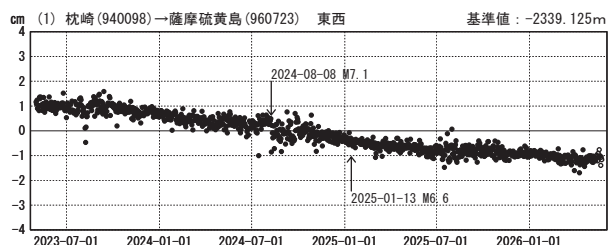
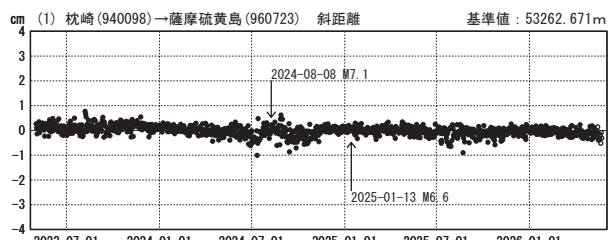
「薩摩硫黄島」で2026年2月頃から見られていた西向きわずかな変動は、
2026年4月頃から停滞しています。

薩摩硫黄島周辺 GNSS連続観測基線図



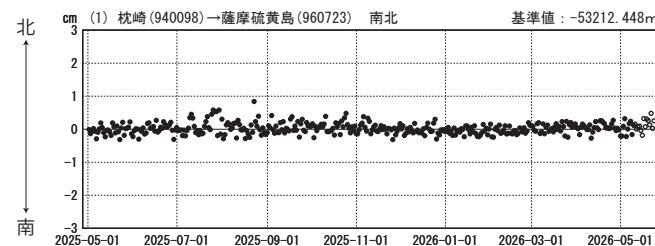
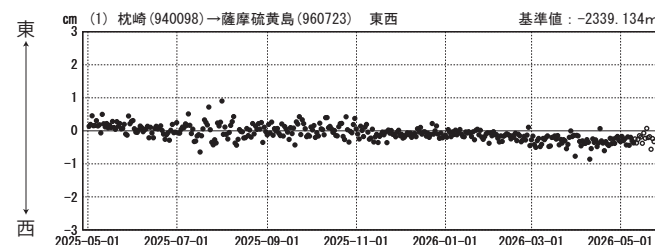
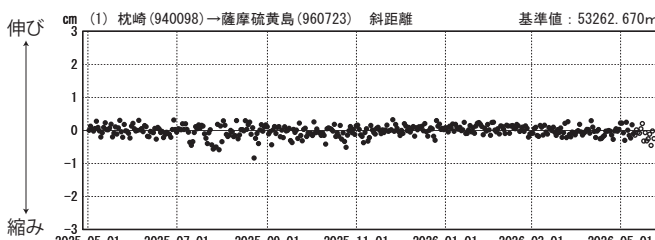
成分変化グラフ

期間：2023-05-01～2026-05-23 JST



成分変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-05-23 JST

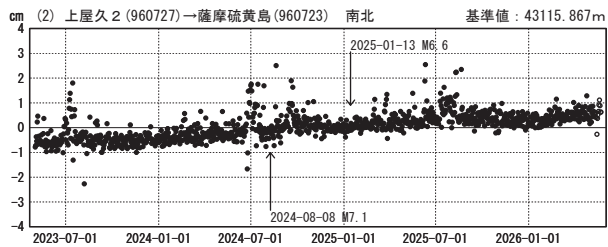
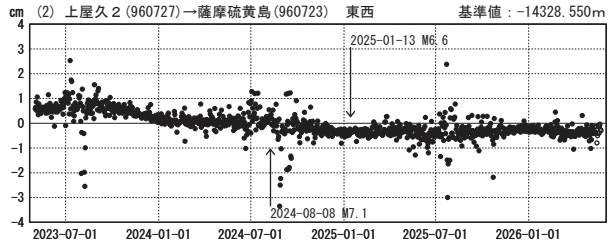
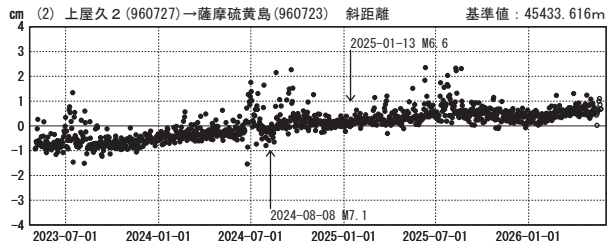


●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

国土地理院

成分変化グラフ

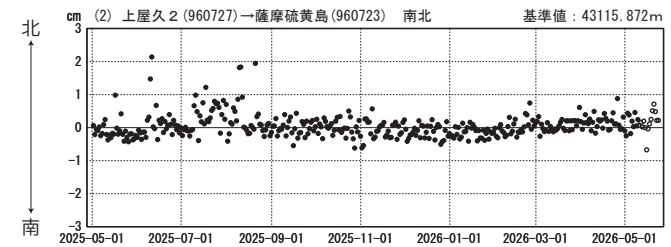
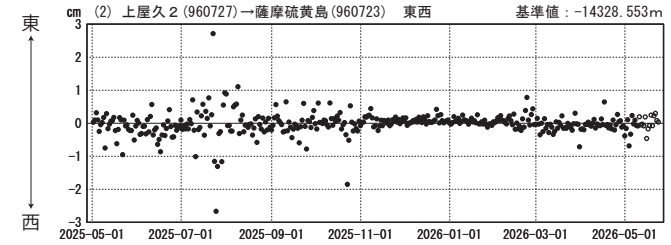
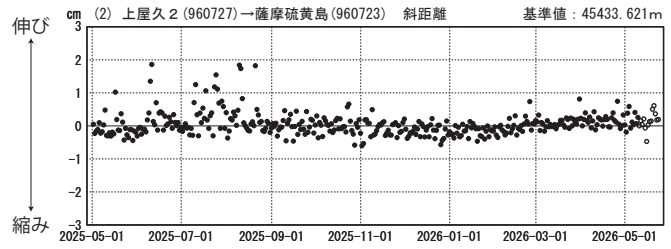
期間：2023-05-01～2026-05-23 JST



●---[F5.1:最終解] ○---[R5.1:速報解]

成分変化グラフ

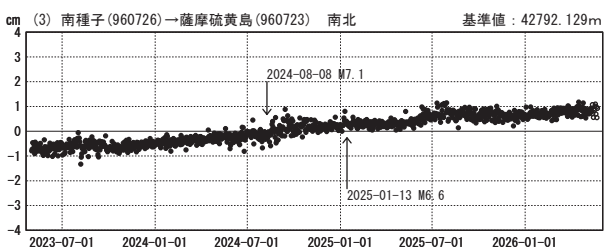
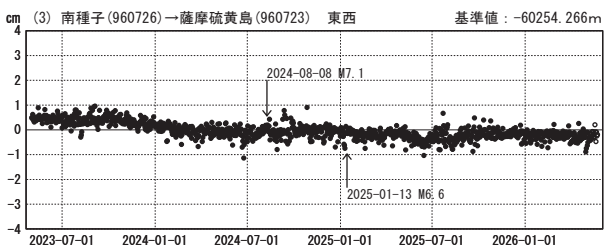
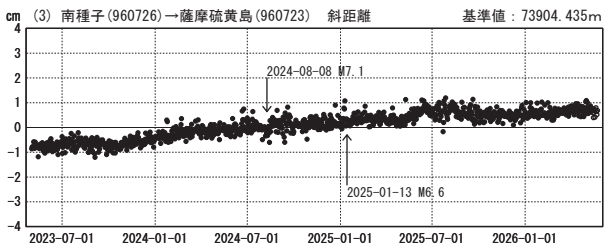
期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



国土地理院

成分変化グラフ

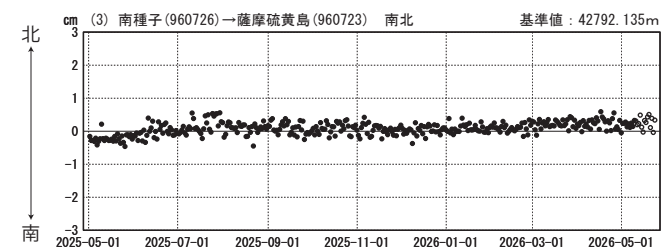
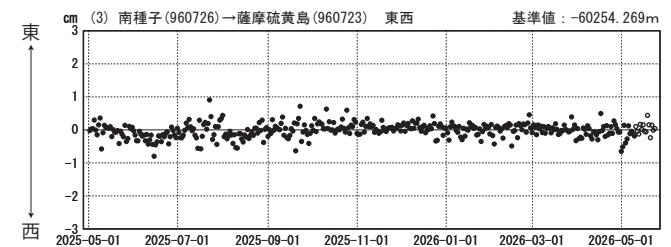
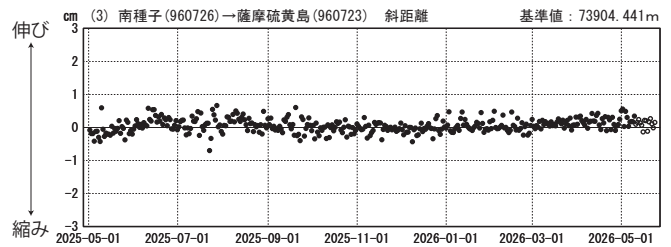
期間：2023-05-01～2026-05-23 JST



●---[F5.1:最終解] ○---[R5.1:速報解]

成分変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



国土地理院

諏訪之瀬島の火山活動解説資料（令和8年5月）

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

御岳^{おたけ}火口では、噴火活動が継続しています。

噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上 900m まで上がりました。弾道を描いて飛散する大きな噴石は、観測されませんでした。

GNSS 連続観測では、2024 年 10 月以降、島の西側におけるマグマの蓄積量の増加を示唆する変動が認められていましたが、2025 年 11 月頃から停滞しています。火山性地震は、少ない状態で経過しています。

御岳火口では長期にわたり噴火活動が継続しており、今後も火口周辺に大きな噴石が飛散する噴火活動が継続すると考えられます。

御岳火口中心から概ね 1.5km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和 6 年 3 月 27 日に火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図 1、図 2-①②、図 3-①～④、図 6-2-③）

御岳^{おたけ}火口では、噴火活動が継続しています。噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上 900m（4 月：700m）まで上がりました。弾道を描いて飛散する大きな噴石は、今期間は観測されませんでした。爆発は発生しませんでした（4 月：0 回）。

御岳火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、集落（御岳火口から南南西約 3.5km）では、13 日に降灰が、23 日に鳴動が確認されました。

・ 地震や微動の発生状況（図 2-③、図 3-⑥～⑧、図 4、図 6-2-②）

諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しており、月回数は 82 回（4 月：100 回）でした。御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震は、月回数は 70 回（4 月：47 回）と少ない状態で経過しました。

震源が求まった火山性地震は、島の西側の深さ 2～4 km 付近に分布しました。

火山性微動は時々発生しました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和 8 年 6 月分）は令和 8 年 7 月 8 日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学及び十島村のデータも利用して作成しています。資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ（標高）』を使用しています。

・地殻変動の状況（図2-④、図5、図6-1、図6-2-①）

GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側におけるマグマの蓄積量の増加を示唆する変動が認められていましたが、2025年11月頃から停滞しています。

ナベタオ傾斜計（御岳火口から南西約2.2km）では、特段の変化は認められません。

・火山ガスの状況（図3-⑤）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり400～1,100トンでした（4月：200～900トン）。



図1 諏訪之瀬島 噴火活動の状況（5月30日 キャンプ場監視カメラ）

- ・御岳火口では、噴火活動が継続しています。
- ・噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上900m（4月：700m）まで上がりました。

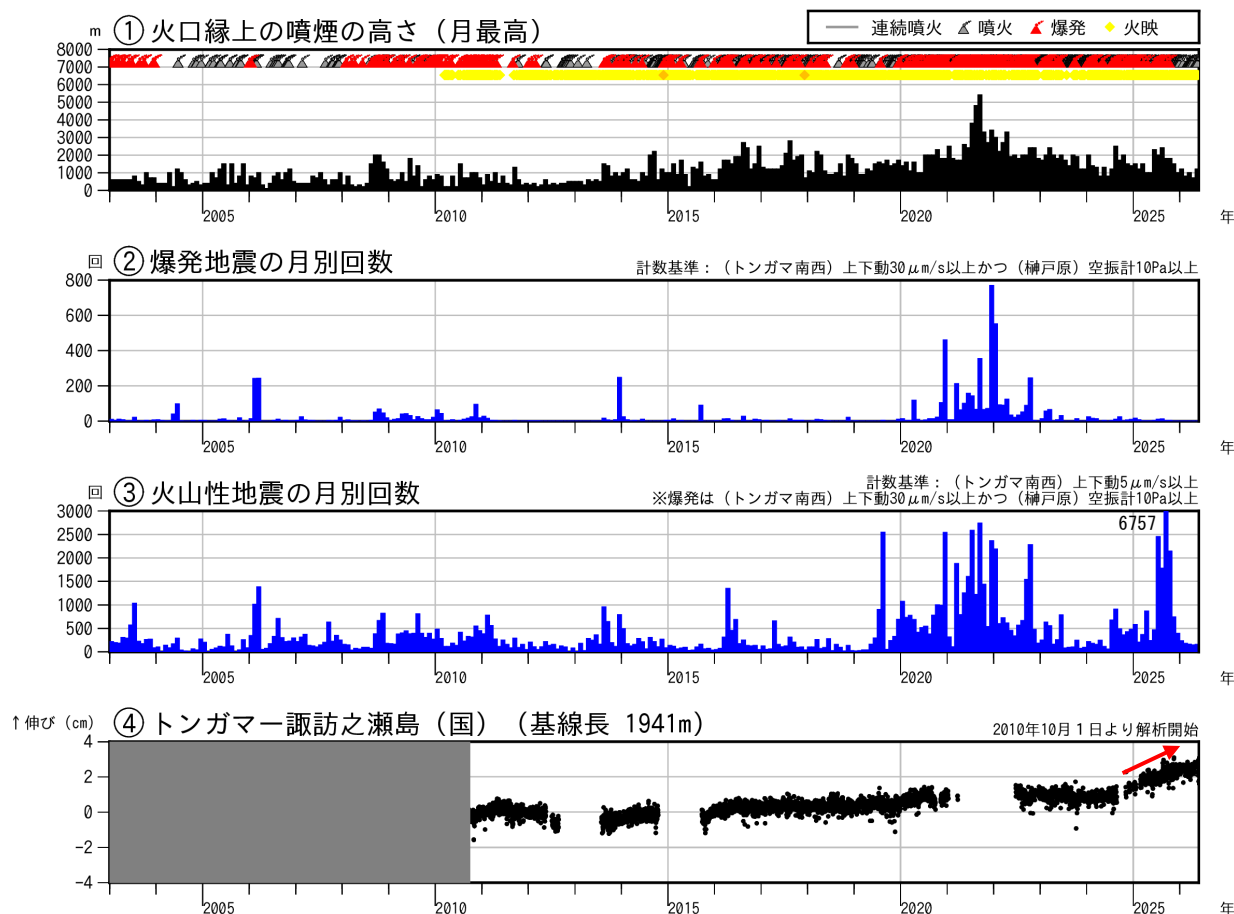


図2 諏訪之瀬島 長期の火山活動経過図（2003年1月～2026年5月）

- ・御岳火口では長期にわたり噴火活動が継続しています。
- ・諏訪之瀬島の周辺で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しています。2024年10月頃から2025年12月頃にかけて、島の周辺において地震活動の高まりが認められました。
- ・GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側におけるマグマの蓄積量の増加を示唆する変動が認められていましたが（赤矢印）、2025年11月頃から停滞しています。

2024年8月29日から12月3日及び2025年9月10日から10月14日は、寄木カメラ障害のため噴煙の最高高度が観測できていない可能性があります。

ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。

④の基線は図7の①に対応しています。④の基線の空白部分は欠測を示しています。

④2024年9月1日の観測点修繕工事（トンガマ観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院

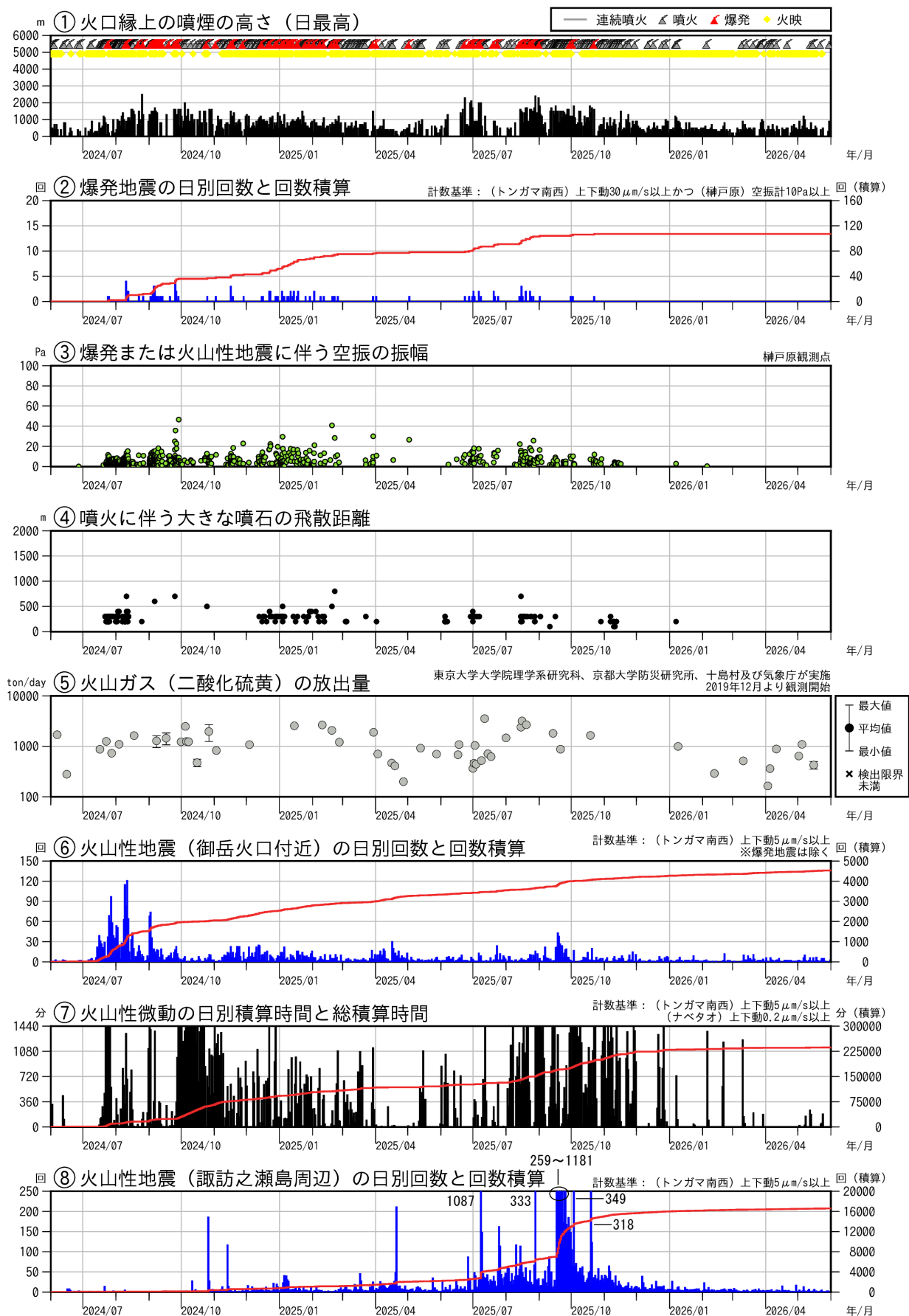


図3（前ページ） 諏訪之瀬島 最近の火山活動経過図（2024年6月～2026年5月）

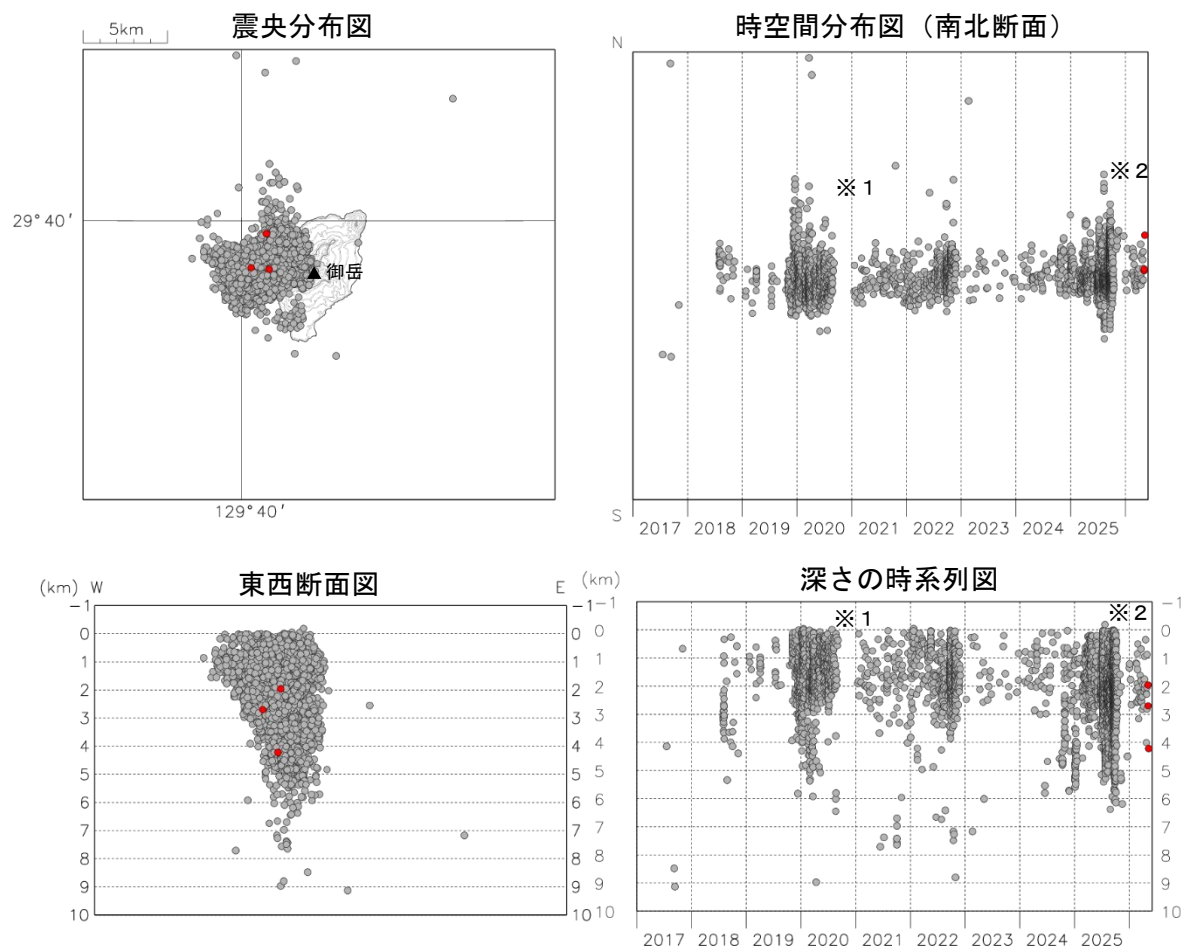
<5月の状況>

- ・噴火に伴う噴煙は、最高で火口縁上 900m（4月：700m）まで上がりました。
- ・爆発は発生しませんでした（4月：0回）。
- ・弾道を描いて飛散する大きな噴石は、今期間は観測されませんでした。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり 400～1,100 トンでした（4月：200～900 トン）。
- ・御岳火口付近の爆発地震を除く火山性地震は、月回数が 70 回（4月：47 回）と少ない状態で経過しました。
- ・火山性微動は時々発生しました。
- ・諏訪之瀬島の西側で発生していると推定される火山性地震は、月回数が 82 回（4月：100 回）と少ない状態で経過しました。

2024年8月29日から12月3日及び2025年9月10日から10月13日は、寄木カメラ障害のため噴煙の最高高度が観測できていない可能性があります。

火山ガス放出量は噴火の直後に計測した場合、値が大きくなり、噴火の発生前に計測した場合には小さくなる傾向があります。

トンガマ南西観測点の地震計の機器障害により、ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。



- : 2026年5月の震源
- : 2017年1月～2026年4月の震源

図4 諏訪之瀬島 震源分布図（2017年1月～2026年5月）

<5月の状況>

震源が求まった火山性地震は、島の西側の深さ 2～4 km 付近に分布しました。

- ※1 2020年9月5日から2021年1月10日まで、一部観測点の障害により検知力や震源の精度が低下しています。
- ※2 2025年10月14日から2026年2月14日まで、一部観測点の障害により検知力や震源の精度が低下しています。

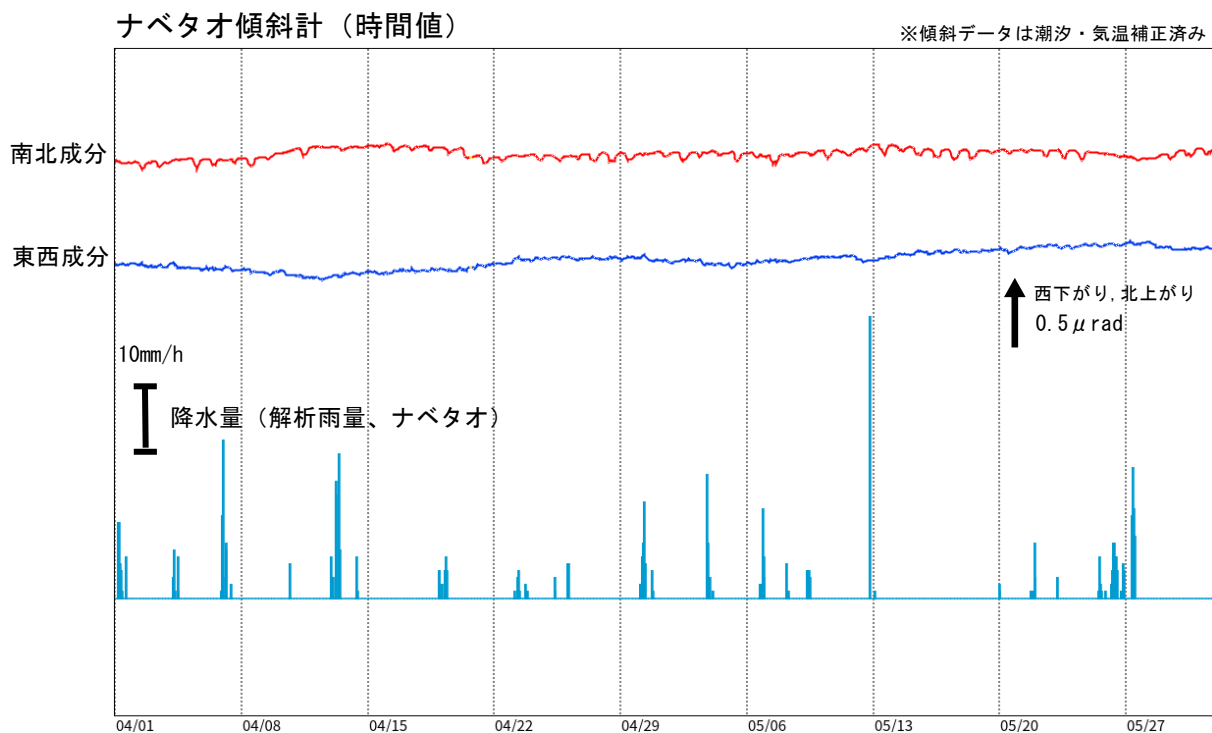


図5 諏訪之瀬島 ナベタオ観測点の傾斜変動（2026年4月～5月）

ナベタオ傾斜計（御岳火口から南西約2.2km）では、特段の変化は認められません。

傾斜データは出水期を中心に降水の影響を受ける場合があります。

降水量は周辺の解析雨量の値から算出しています。

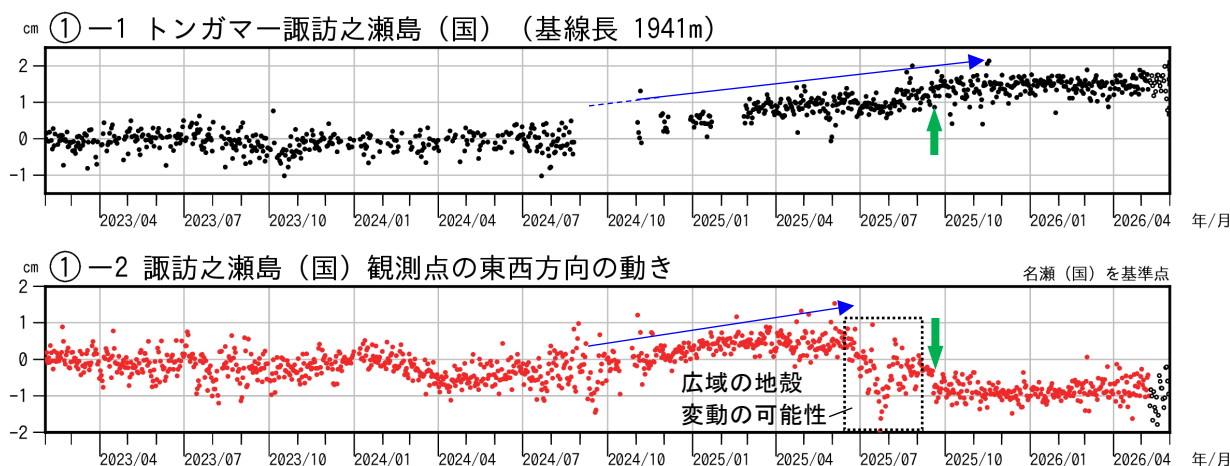


図6-1 諏訪之瀬島 GNSS連続観測（2023年2月～2026年5月）

GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側におけるマグマの蓄積量の増加を示唆する変動（青矢印）が認められていましたが、2025年11月頃から停滞しています。

①-1の基線は図7の①に対応しています。空白部分は欠測を示しています。2024年9月1日の観測点修繕工事（トングマー観測点）に伴うステップを補正しています。

緑色の矢印は2025年9月17日の諏訪之瀬島周辺の地震による変動です。

①-2は島外の観測点（名瀬（国））を固定した観測点の東西の変動を示しています。

直近の白丸は速報的な解析結果であり、再解析により修正されることがあります。

（国）：国土地理院

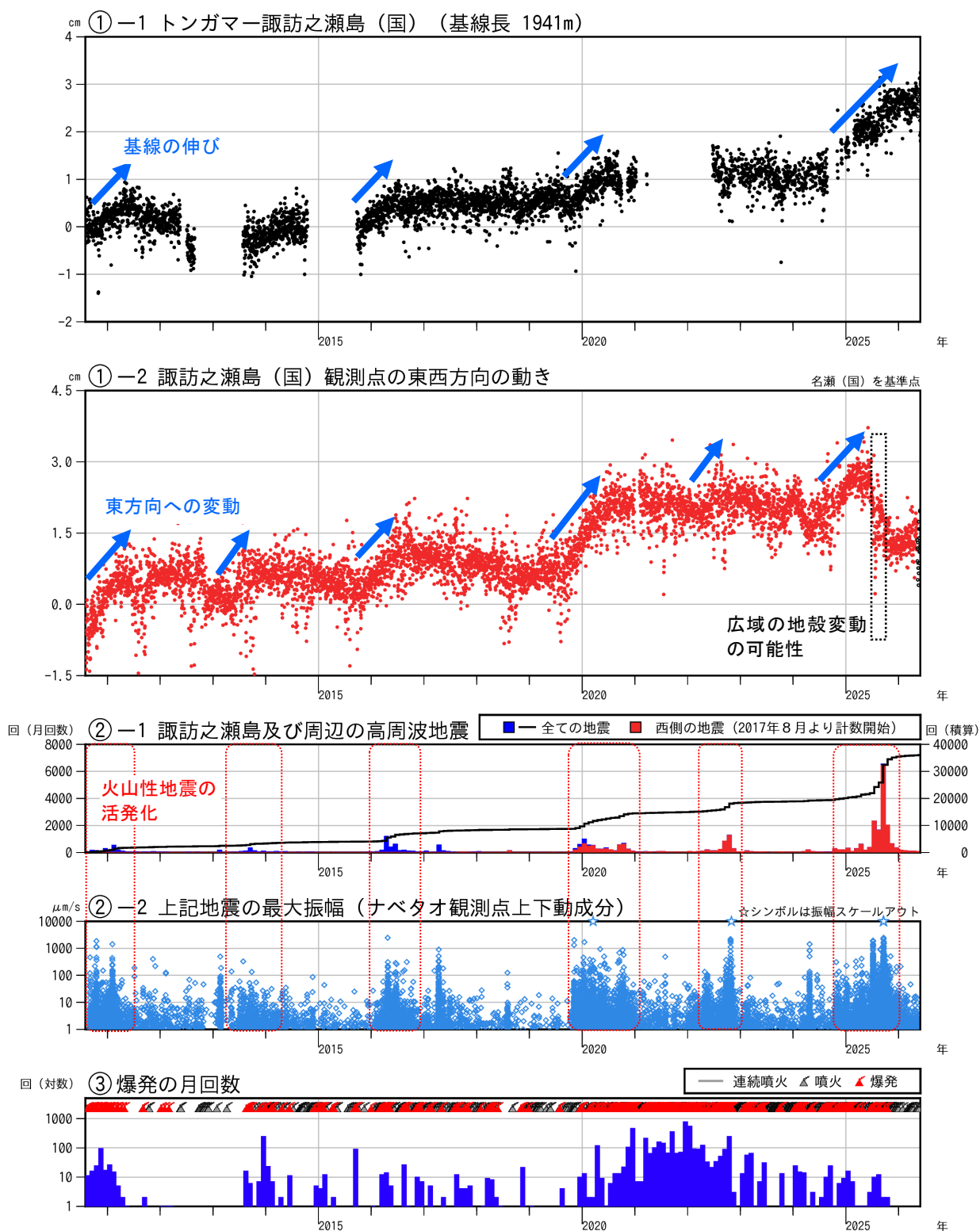


図 6-2 諏訪之瀬島 GNSS連続観測と周辺の火山性地震（2010年8月～2026年5月）

- ・GNSS連続観測では、2024年10月以降、島の西側におけるマグマの蓄積量の増加を示唆する変動が認められていましたが、2025年11月頃から停滞しています。
- ・諏訪之瀬島の周辺で発生していると推定される火山性地震は、少ない状態で経過しています。2024年10月頃から2025年12月頃にかけて、島の周辺において地震活動の高まりが認められました。

①-1の基線は図7の①に対応しています。空白部分は欠測を示しています。2024年9月1日の観測点修繕工事（トンガマー観測点）に伴うステップを補正しています。

①-2は島外の観測点（名瀬（国））を固定した観測点の東西の変動を示しています。直近の白丸は速報的な解析結果であり、再解析により修正されることがあります。

（国）：国土地理院

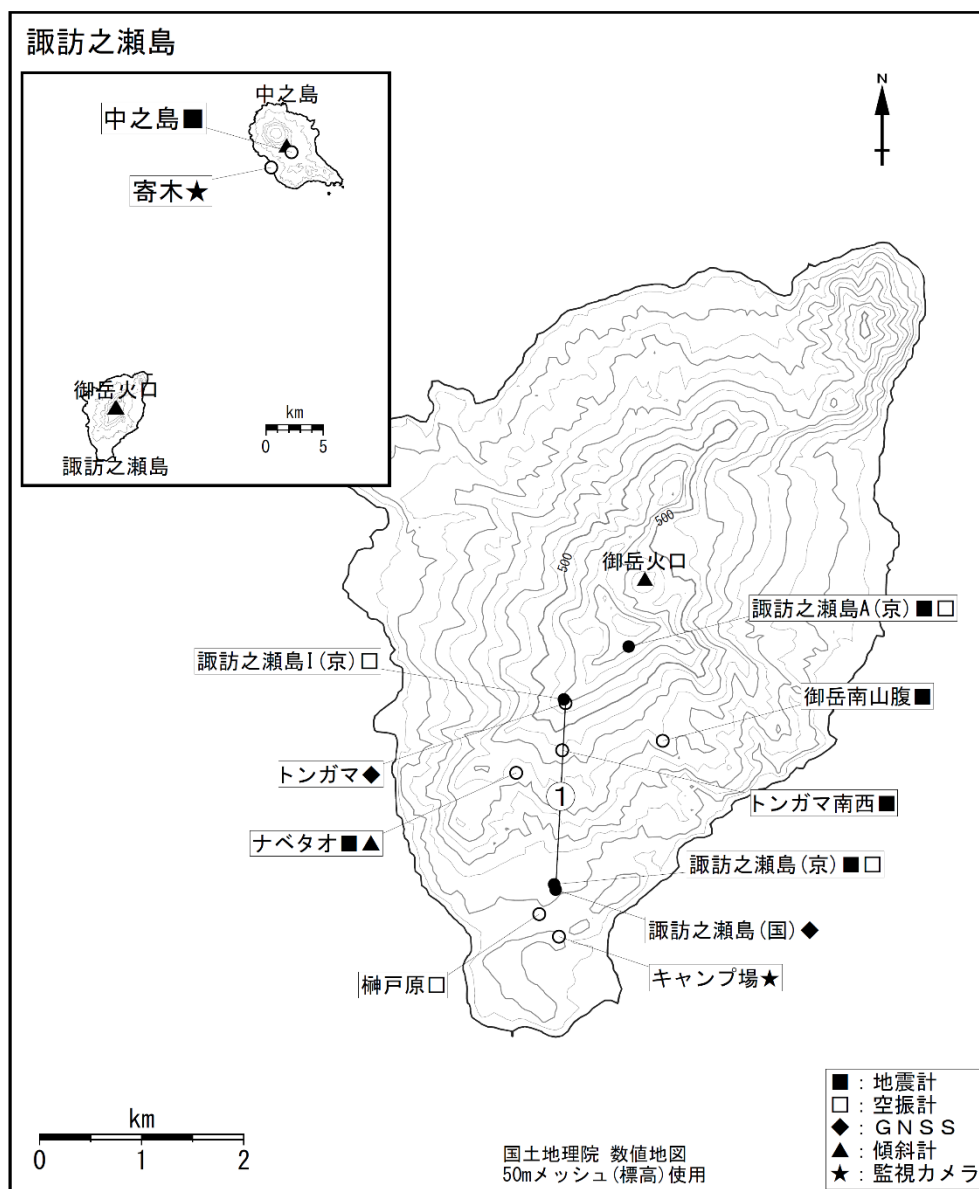


図7 諏訪之瀬島 観測点配置図とGNSS連続観測の基線番号

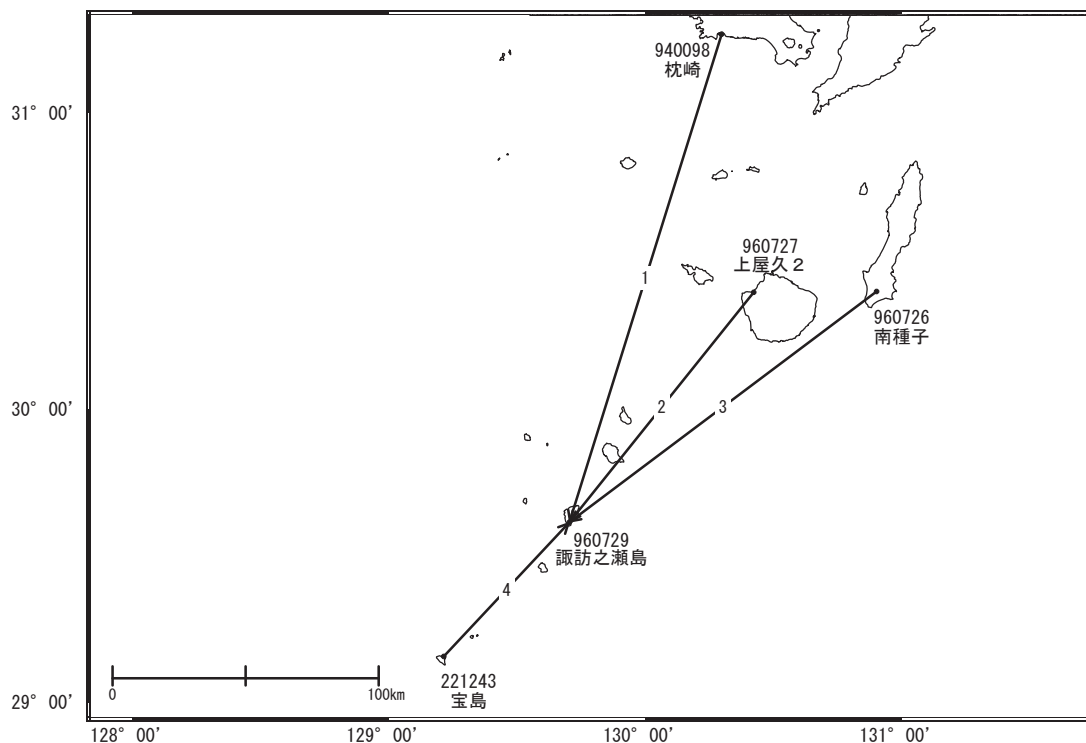
白丸 (○) は気象庁、黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学

諏訪之瀬島周辺の地殻変動

—GEONET(電子基準点等)による連続観測結果—

顕著な地殻変動は観測されていません。

諏訪之瀬島周辺 GNSS連続観測基線図

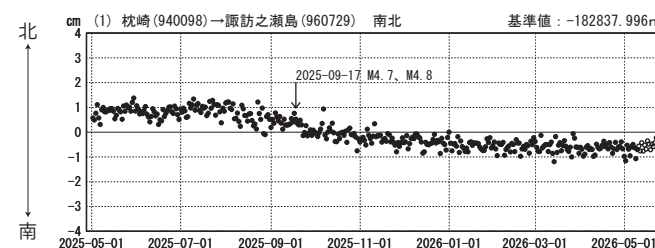
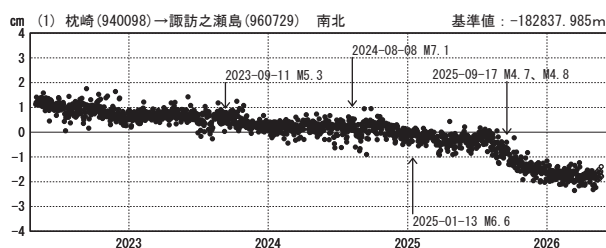
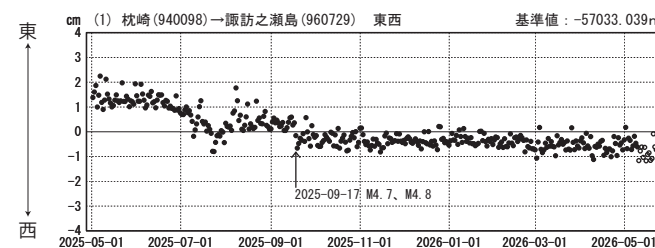
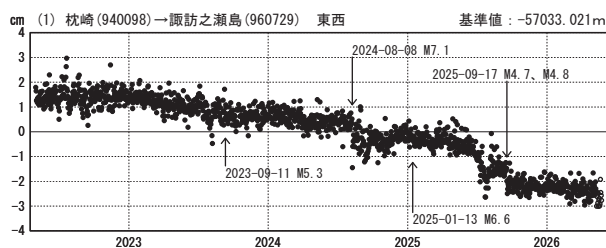
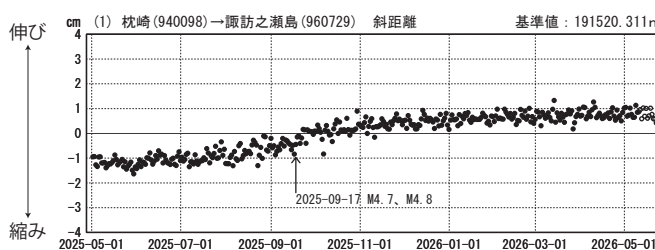
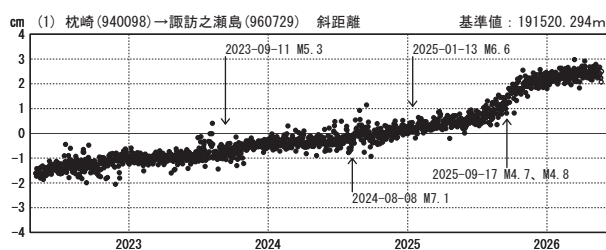


成分変化グラフ

成分変化グラフ

期間: 2022-05-01~2026-05-23 JST

期間: 2025-05-01~2026-05-23 JST

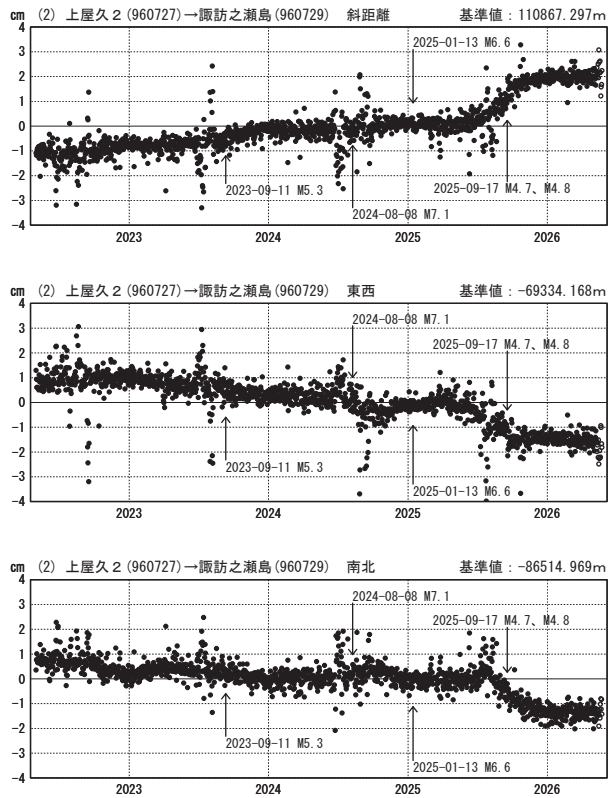


●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

国土地理院

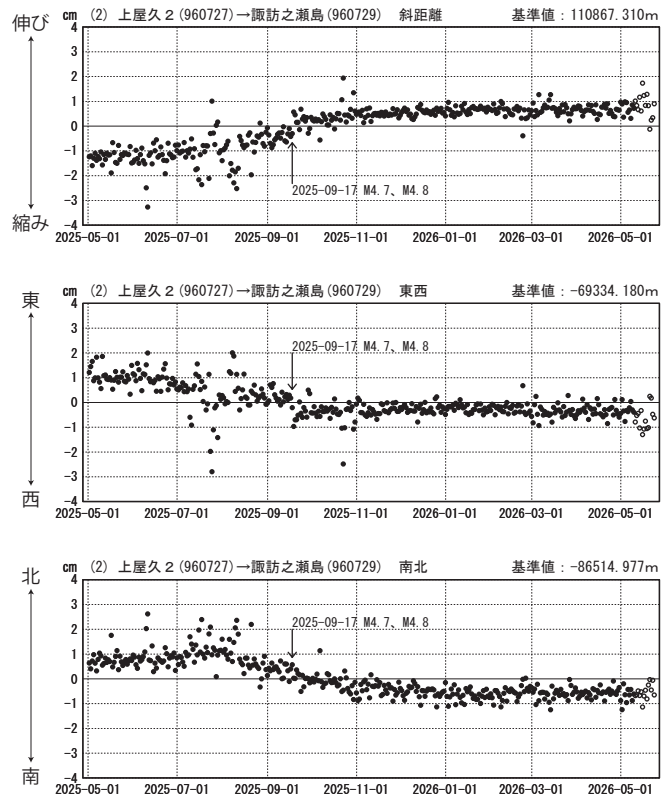
成分変化グラフ

期間：2022-05-01～2026-05-23 JST



成分変化グラフ

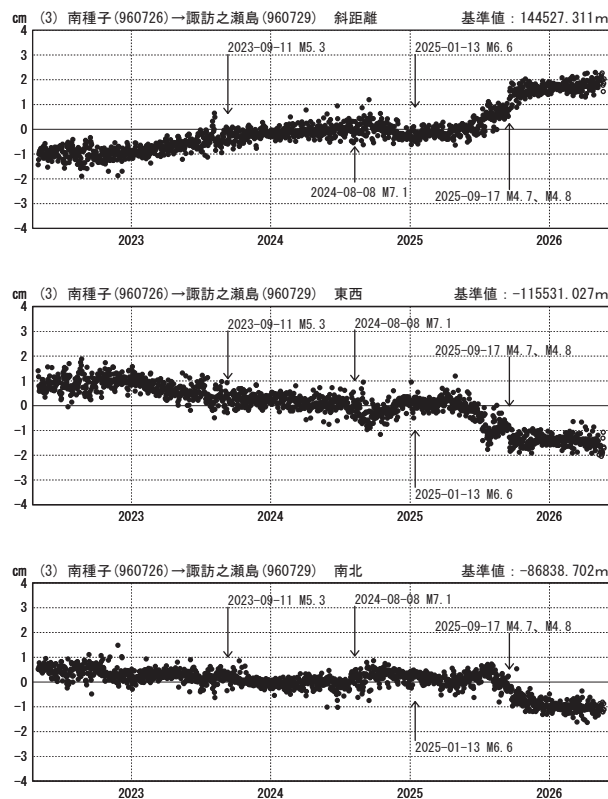
期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



国土地理院

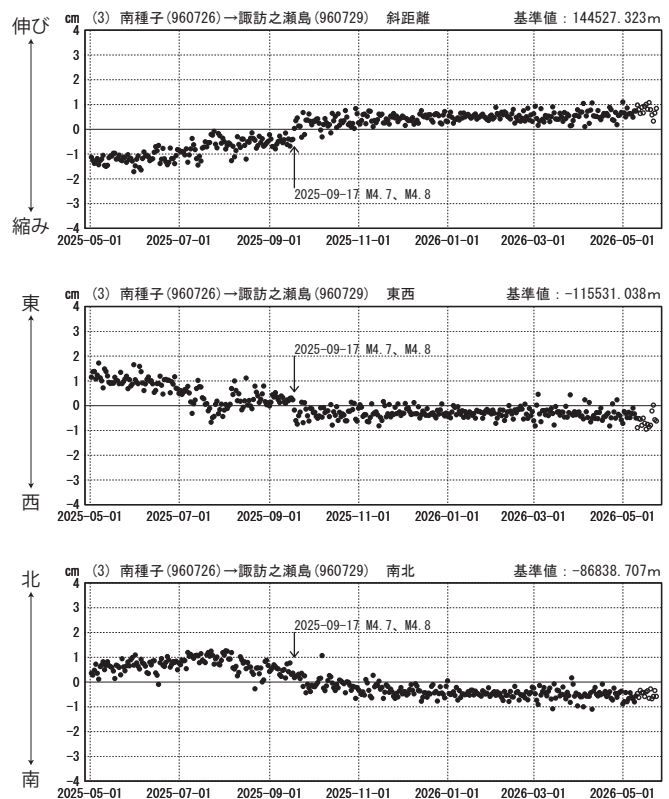
成分変化グラフ

期間：2022-05-01～2026-05-23 JST



成分変化グラフ

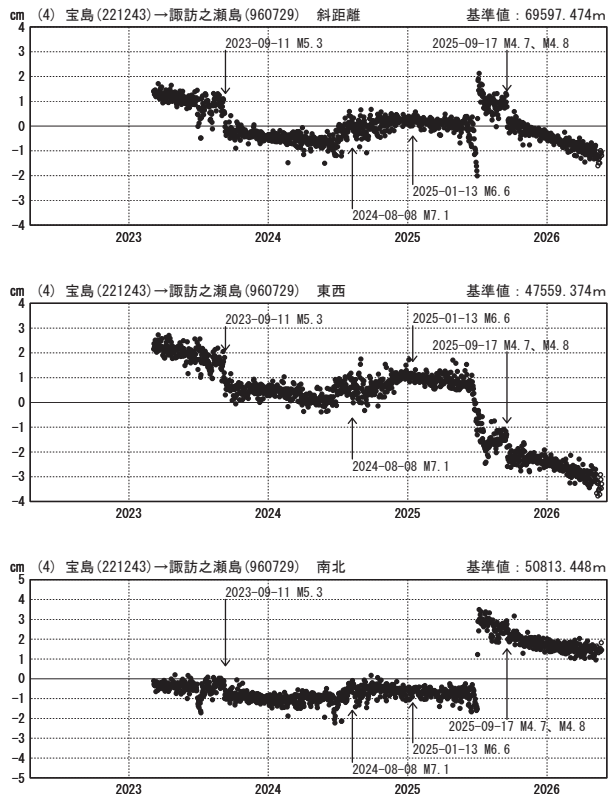
期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



国土地理院

成分変化グラフ

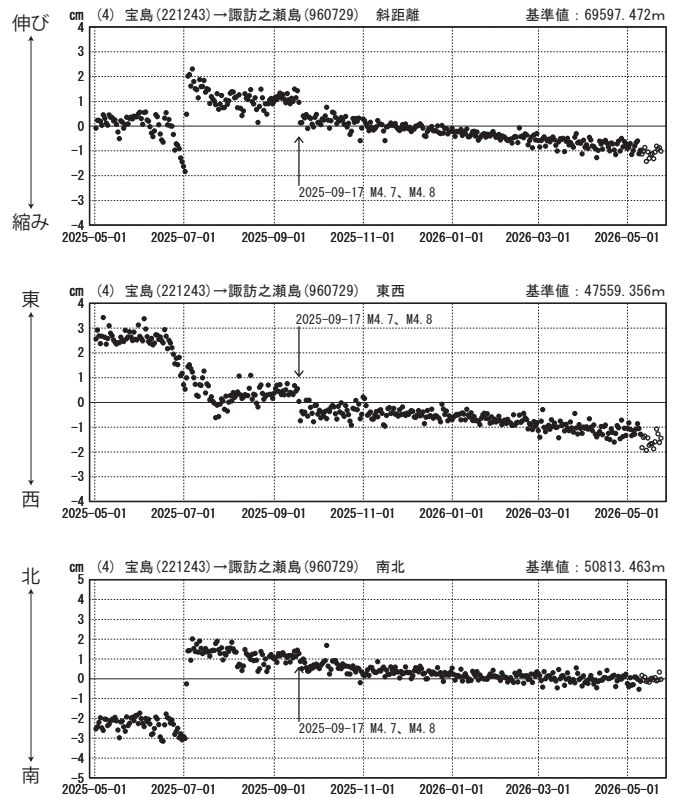
期間：2022-05-01～2026-05-23 JST



●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

成分変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-05-23 JST



国土地理院

阿蘇山の火山活動解説資料

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

＜噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ＞

阿蘇山では、本日（21日）09時頃から火山性微動の振幅が増大し、中岳西山腹観測点南北動成分の1分間平均振幅が1.5 μ m/sを超え、やや大きな状態となりました。また、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が本日実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が1日あたり1,700トンと増加し、やや多い状態でした。

火山活動が高まった状態となっており、中岳第一火口から概ね1kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生するおそれがあることから、16時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項等】

中岳第一火口から概ね1kmの範囲（図1）では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスに注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

阿蘇山では、火山性微動の振幅は小さな状態で推移していましたが、本日（21日）09時頃から振幅が増大しており、中岳西山腹観測点南北動成分の1分間平均振幅が1.5 μ m/sを超え、やや大きな状態となりました。

気象庁機動調査班（JMA-MOT）が本日実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が1日あたり1,700トンと前回（6月16日900トン）に比べ増加し、やや多い状態でした。

これらのことから、火山活動が高まった状態となっており、中岳第一火口から概ね1kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生するおそれがあることから、本日16時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

中岳第一火口では、本日は白色の噴煙が最高で火口縁上500mまで上がりました。

GNSS連続観測では、深部にマグマだまりがあると考えられている草千里を挟む基線において、2024年10月頃から縮みの傾向がみられていましたが、2026年3月頃から停滞しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、九州大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び阿蘇火山博物館のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

●噴火警戒レベルに応じて下記のような防災対応が必要になります。

レベル5（避難）：
危険な居住地域からの避難

レベル4（高齢者等避難）：
警戒が必要な居住地域での高齢者等の要配慮者の避難、住民の避難の準備等。

レベル3（入山規制）：
火口から概ね2km以内立入禁止。
規制範囲は居住地域付近（概ね4km）まで活動状況により変更。
○の範囲内。
・中岳・高岳等への登山道の立入禁止

レベル2（火口周辺規制）：
火口から概ね1km以内立入禁止。○の範囲内。
・阿蘇山公園道路は利用できません

レベル1（活火山であることに留意）：
火口内等常時立入禁止。
○の範囲内。

凡例

- ：一般道
- ：国道
- ：登山道
- ：中岳第一火口
- ：居住地域



- この図は、熊本県による阿蘇山火山防災マップをもとに、熊本県火山防災協議会、阿蘇火山防災会議協議会及び地元自治体と調整して作成しています。
- 各レベルにおける具体的な規制範囲等については、地域防災計画等で定められていますので、詳細については阿蘇市、高森町、南阿蘇村にお問い合わせください。

図1 阿蘇山 警戒が必要な範囲

中岳第一火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスに注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

※居住区域は火口から4km以上離れている。

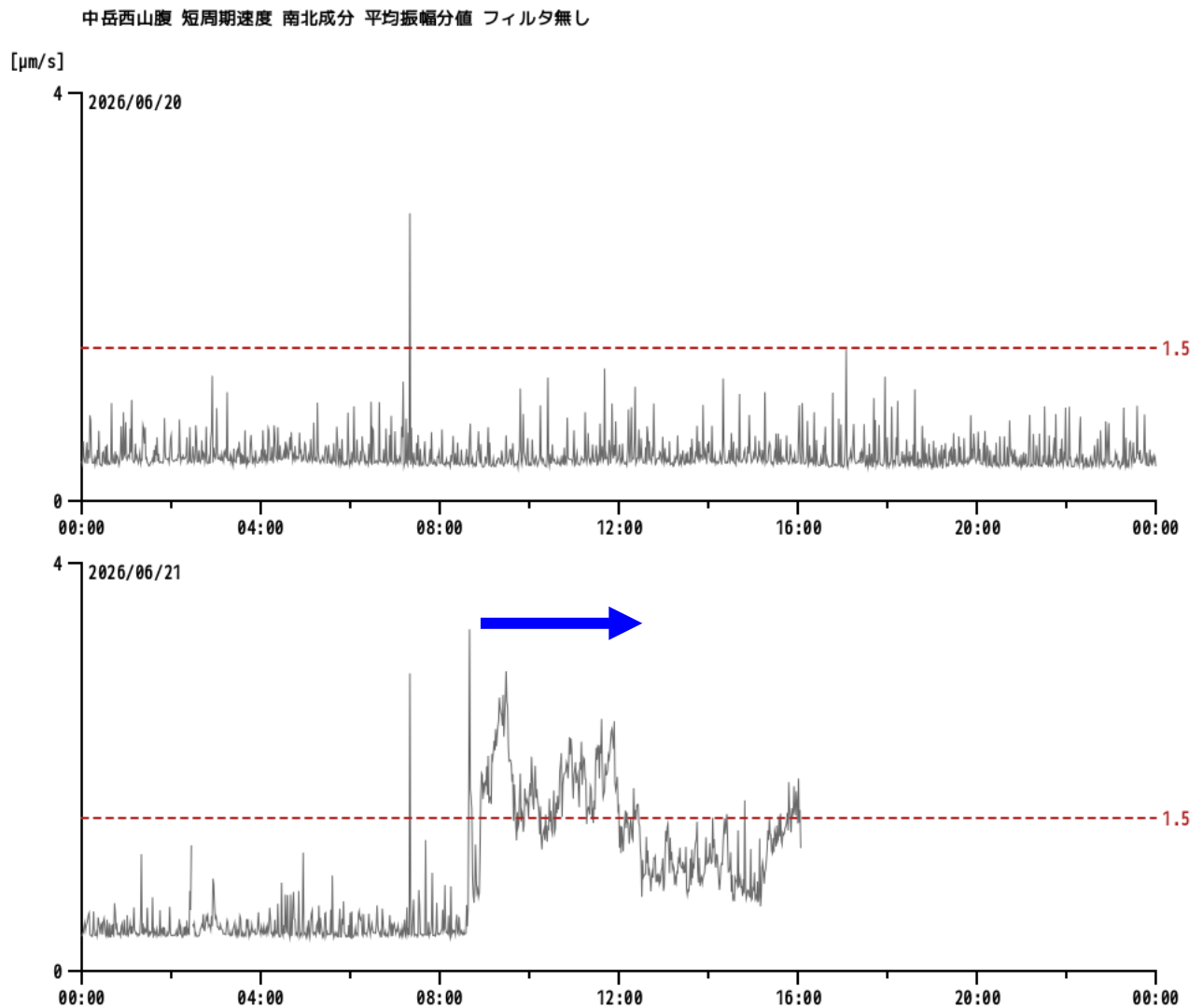


図2 阿蘇山 火山性微動 1分間平均振幅

(中岳西山腹観測点南北動成分、2026年6月20日～6月21日16時頃)

火山性微動の振幅は小さな状態で推移していましたが、本日(21日)09時頃から振幅が増大し、中岳西山腹観測点南北動成分の1分間平均振幅が $1.5\mu\text{m/s}$ を超え、やや大きな状態となりました。

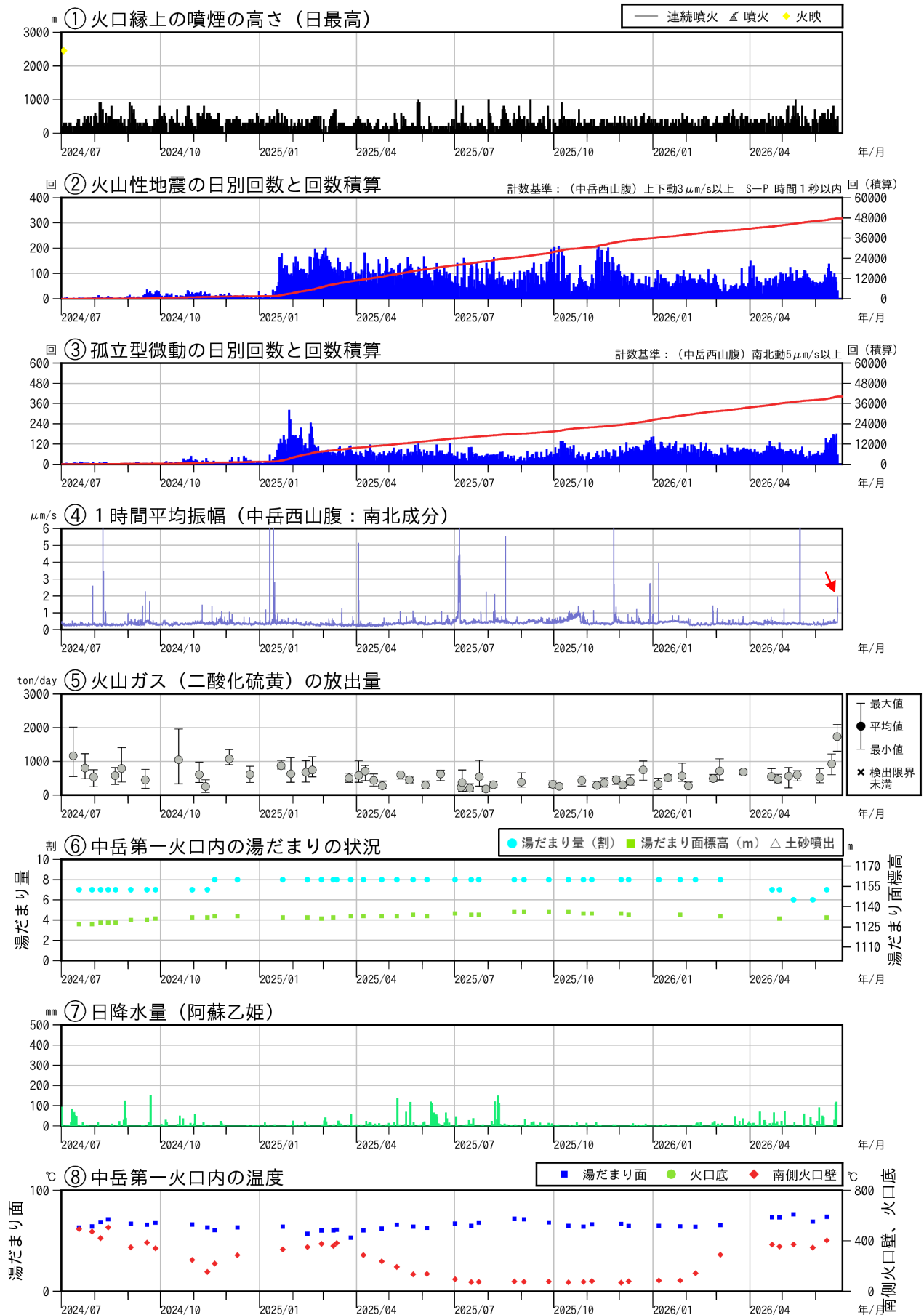


図3 （前ページ）阿蘇山 火山活動経過図（2024年7月～2026年6月21日16時（速報値））

< 6月以降の状況 >

- ・気象庁機動調査班（JMA-MOT）が本日実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり1,700トンと前回（6月16日900トン）に比べ増加し、やや多い状態でした。
- ・中岳第一火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上 800mまで上がりました。本日は白色の噴煙が最高で火口縁上 500mまで上がりました。
- ・2025年1月中旬頃から火山性地震と孤立型微動が増加した状態が続いています。
- ・6月11日に実施した現地調査では、中岳第一火口内に灰白色の湯だまりを確認しました。湯だまり量は約7割と前月（5月：約6割）と同程度でした。南側火口壁の最高温度は403℃（5月：345～371℃）でした。

②と③の赤線は回数の積算を示しています。⑤、⑥および⑧は現地調査の結果を示しています。

⑥の湯だまり量及び湯だまり面標高は、火口縁からの観測で確認しています。

⑦はアメダス阿蘇乙姫（中岳第一火口より北西約8km）の観測値です。

⑧は赤外熱映像装置で計測しています。火口底温度は湯だまり表面と南側火口壁を除く火口内の温度を示しています

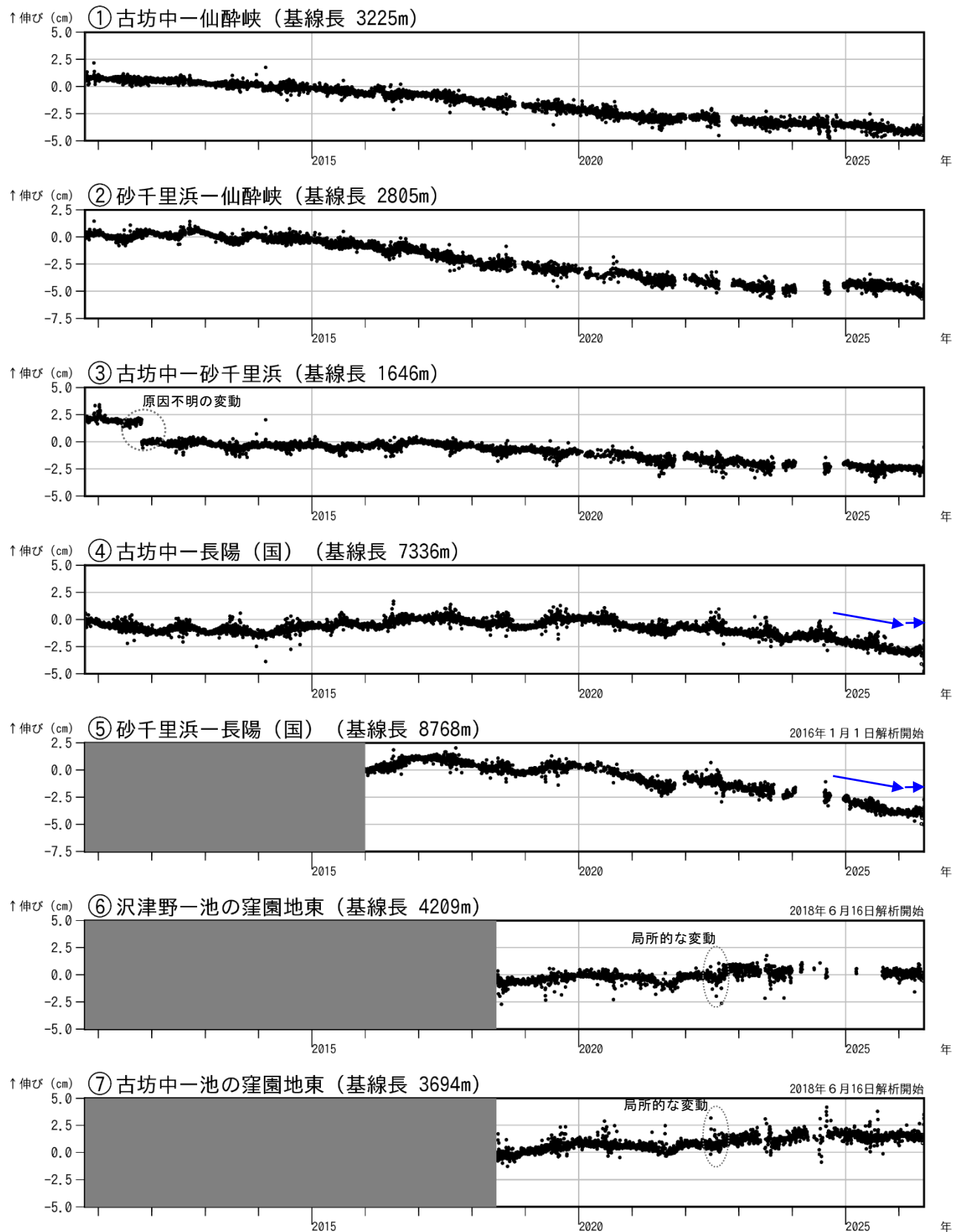


図4 阿蘇山 GNSS 観測による基線長変化 (2010年10月～2026年6月19日)

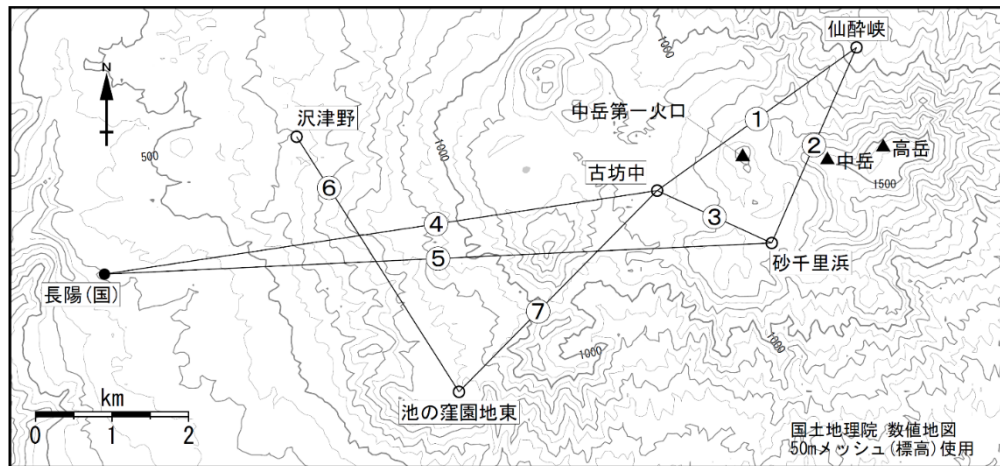
GNSS 連続観測では、深部にマグマだまりがあると考えられている草千里を挟む基線において、2024年10月頃から縮みの傾向がみられていましたが、2026年3月頃から停滞しています（青矢印）。

これらの基線は図5の①～⑦に対応しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年4月16日以降の基線長は、平成28年（2016年）熊本地震の影響による変動が大きかったため、この地震に伴うステップを補正しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

（国）：国土地理院



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院

図5 阿蘇山 GNSS 連続観測点と基線番号

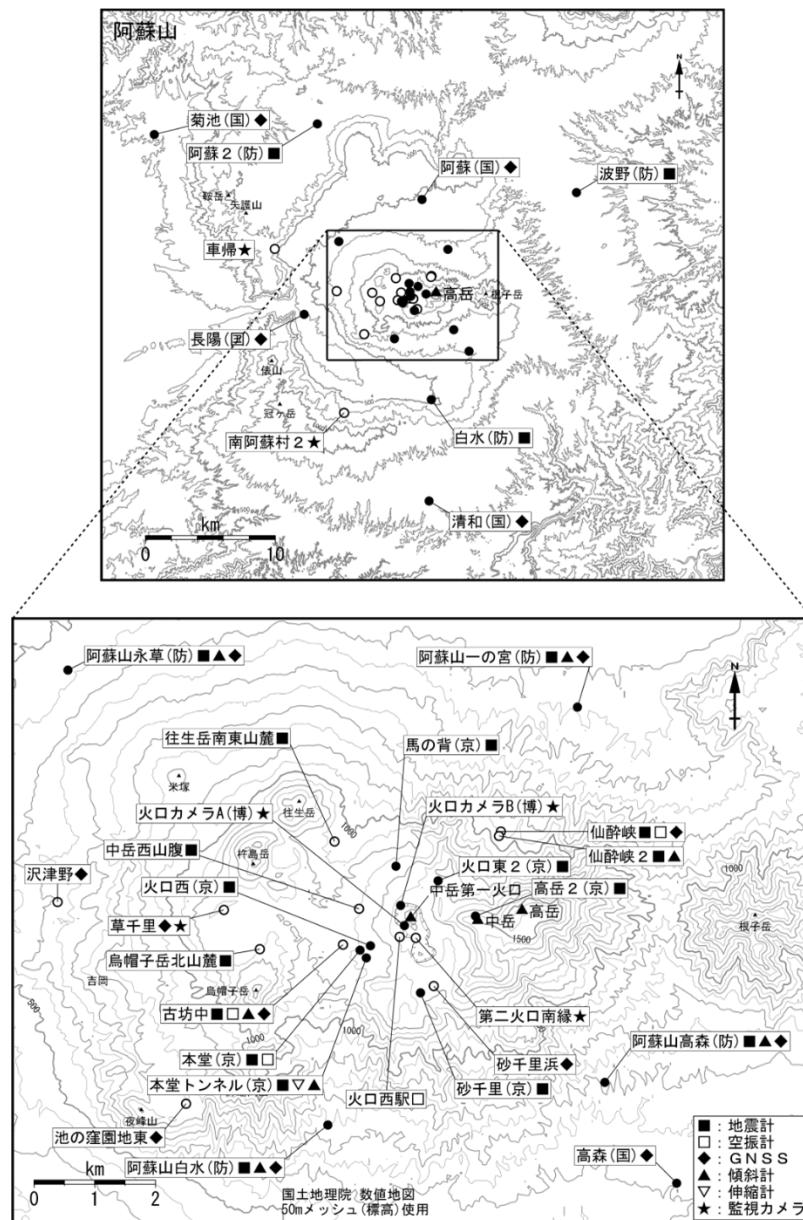


図6 阿蘇山 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所、(博)：阿蘇火山博物館、(国)：国土地理院

令和7年（2025年）の阿蘇山の火山活動

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

阿蘇山では、7月上旬に一時的に火山性微動の振幅が増大し、火山活動に高まりが認められましたが、その他の期間は、活動は低下した状態で経過しました。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり1,000トン未満と少ない状態で経過しました。

また、GNSS連続観測では、深部にマグマだまりがあると考えられている草千里を挟む基線において、2024年10月頃から縮みの傾向が認められています。

○噴火警報・予報及び噴火警戒レベルの状況、2025年の発表履歴

7月4日 13時00分	火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引上げ
7月25日 11時00分	噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、九州大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び阿蘇火山博物館のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

○2025 年の活動状況

・噴煙など表面現象の状況（図1～2、図3-①⑥⑧、図4-①⑤⑥）

中岳第一火口では、2021年10月21日以降噴火は発生していません。

白色の噴煙は最高で火口縁上1,000m（2024年：1,200m）まで上がりました。

湯だまり量は2024年11月に約8割となり、その後特段の変化はみられていません。湯だまり内では噴湯を確認しています。土砂噴出は認められませんでした。赤外熱映像装置による観測では、湯だまりの表面温度は53～72℃で経過しました。南側火口壁の地熱域では4月頃から温度が低下し、7月以降は100℃未満となりました。最高温度は69～383℃でした。

阿蘇火山博物館提供の火口カメラAでは、7月4日の火山性微動の振幅増大時に、それ以前と比べて湯だまり内において噴湯現象の活発化を確認しました。

・地震や微動の発生状況（図3-②～④、図4-②③、図5、図6）

火山性地震は概ね多い状態で経過しました。孤立型微動はやや少ない状態で経過しました。1月中旬頃から火山性地震と孤立型微動が増加した状態が続いています。火山性地震の年回数は37,881回（2024年：3,443回）、孤立型微動の年回数は47,119回（2024年：22,346回）と、前年と比べて増加しました。

震源が求まった火山性地震は、中岳火口付近のごく浅いところから深さ1km付近に分布しました。

7月4日から7月6日にかけて火山性微動の振幅が一時的に増大し、大きな状態になりましたが、その他の期間は概ね小さな状態で経過しました。

・火山ガスの状況（図3-⑤、図4-④）

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり1,000トン未満と少ない状態で経過しました。

・地殻変動の状況（図7、図8）

GNSS 連続観測では、深部にマグマだまりがあると考えられている草千里を挟む基線において、2024年10月頃から縮みの傾向がみられています。

・南阿蘇村吉岡の噴気地帯の状況（図9）

繰り返し実施した現地調査では、噴気地帯の状況に特段の変化はありませんでした。



図 1-1 阿蘇山 噴煙の状況（8月1日、草千里監視カメラ）

＜2025 年の状況＞

白色の噴煙が最高で火口縁上 1,000m まで上がりました。



図 1-2 阿蘇山 中岳第一火口内の噴湯の状況

（上段：7月4日、下段：7月3日、阿蘇火山博物館提供の火口カメラAによる）

＜2025 年の状況＞

阿蘇火山博物館の提供による火口カメラAでは、7月4日の火山性微動の振幅増大時に、それ以前と比べて湯だまり内において噴湯現象が活発化していることを確認しました（黄色破線）。

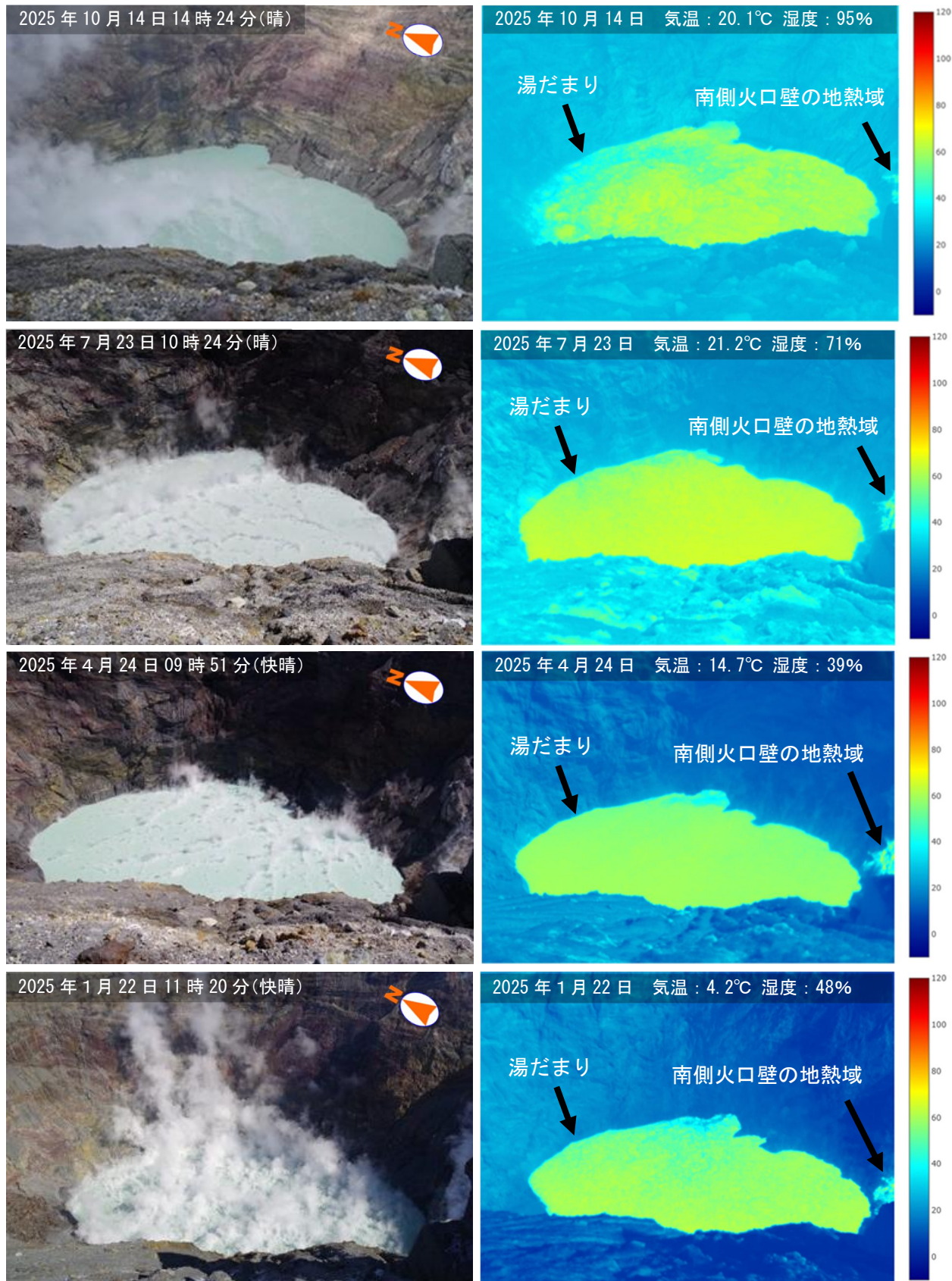


図2-1 阿蘇山 中岳第一火口内の状況（火口南西側観測定点から観測）

繰り返し実施した現地調査では、期間を通して湯だまりを確認しました。湯だまり量は2024年11月に約8割となり、その後特段の変化はみられていません。湯だまり内では噴湯を確認しました。土砂噴出は認められませんでした。湯だまりの表面温度は53～72°Cで経過しました。

※熱映像の画像は、1月22日は11時12分～17分、4月24日は09時46分～52分、7月23日は10時11分～16分、10月14日は13時56分～14時01分の複数の画像を合成し、噴煙の影響を軽減しました。

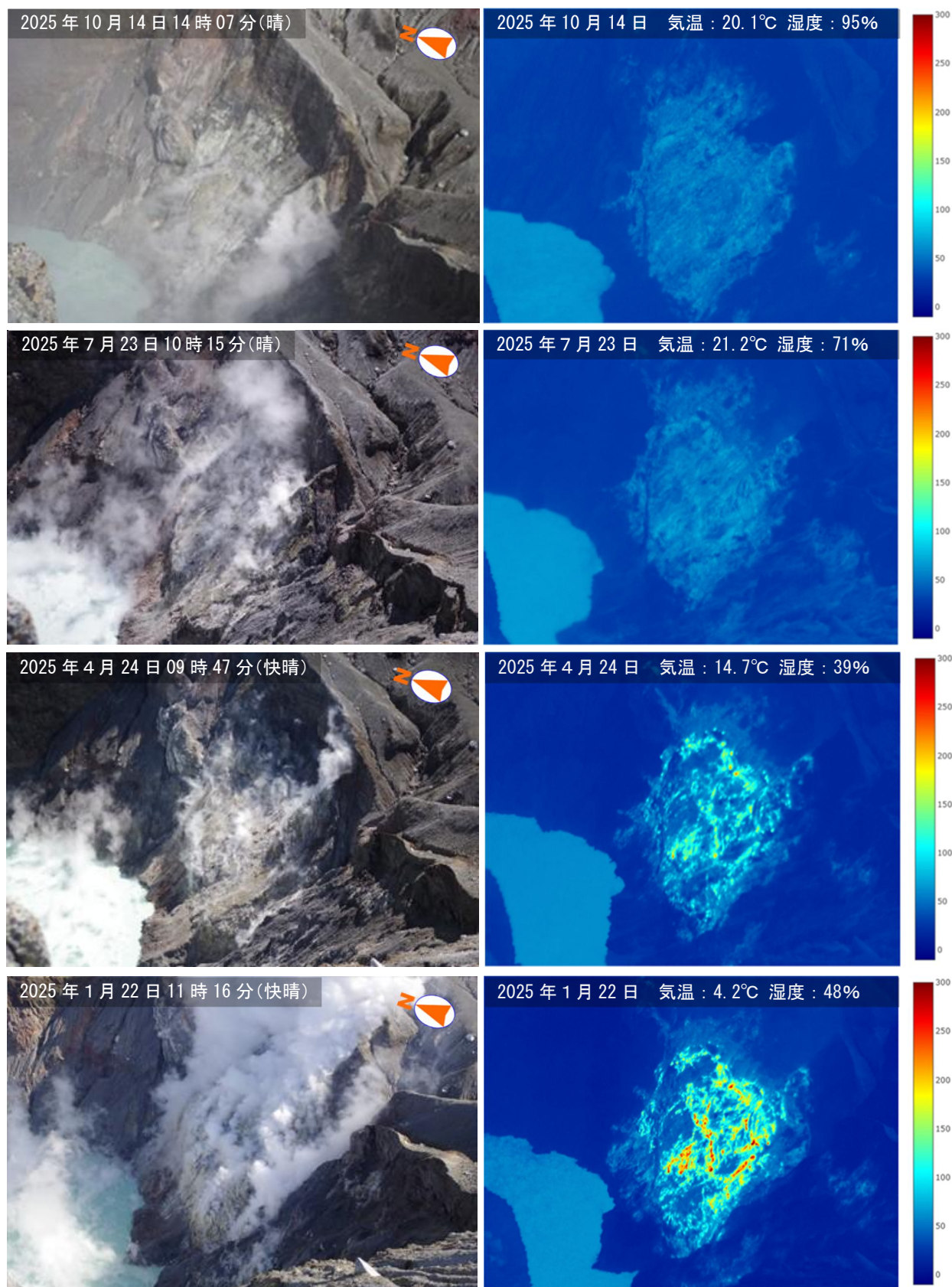


図2-2 阿蘇山 中岳第一火口南側火口壁の状況（火口南西側観測定点から観測）

中岳第一火口南側火口壁の地熱域では4月頃から温度が低下し、7月以降は100°C未満となりました。最高温度は69～383°Cでした。

※熱映像の画像は、1月22日は11時33分～38分、4月24日は10時10分～15分、7月23日は10時32分～37分、10月14日は14時19分～22分の複数の画像を合成し、噴煙の影響を軽減しました。

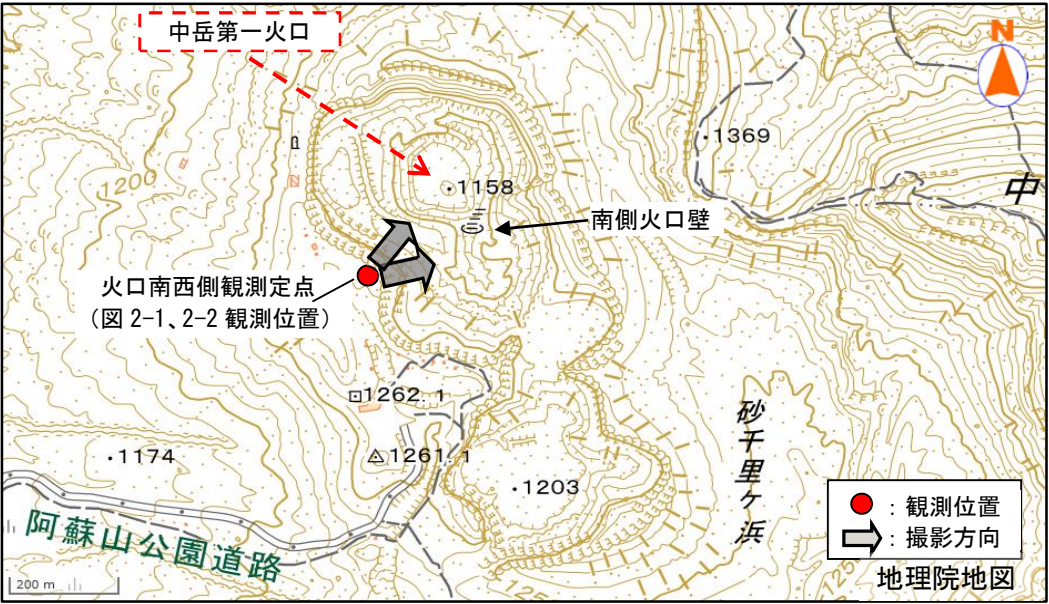


図 2-3 阿蘇山 中岳第一火口の現地調査観測位置図（観測位置及び撮影方向）

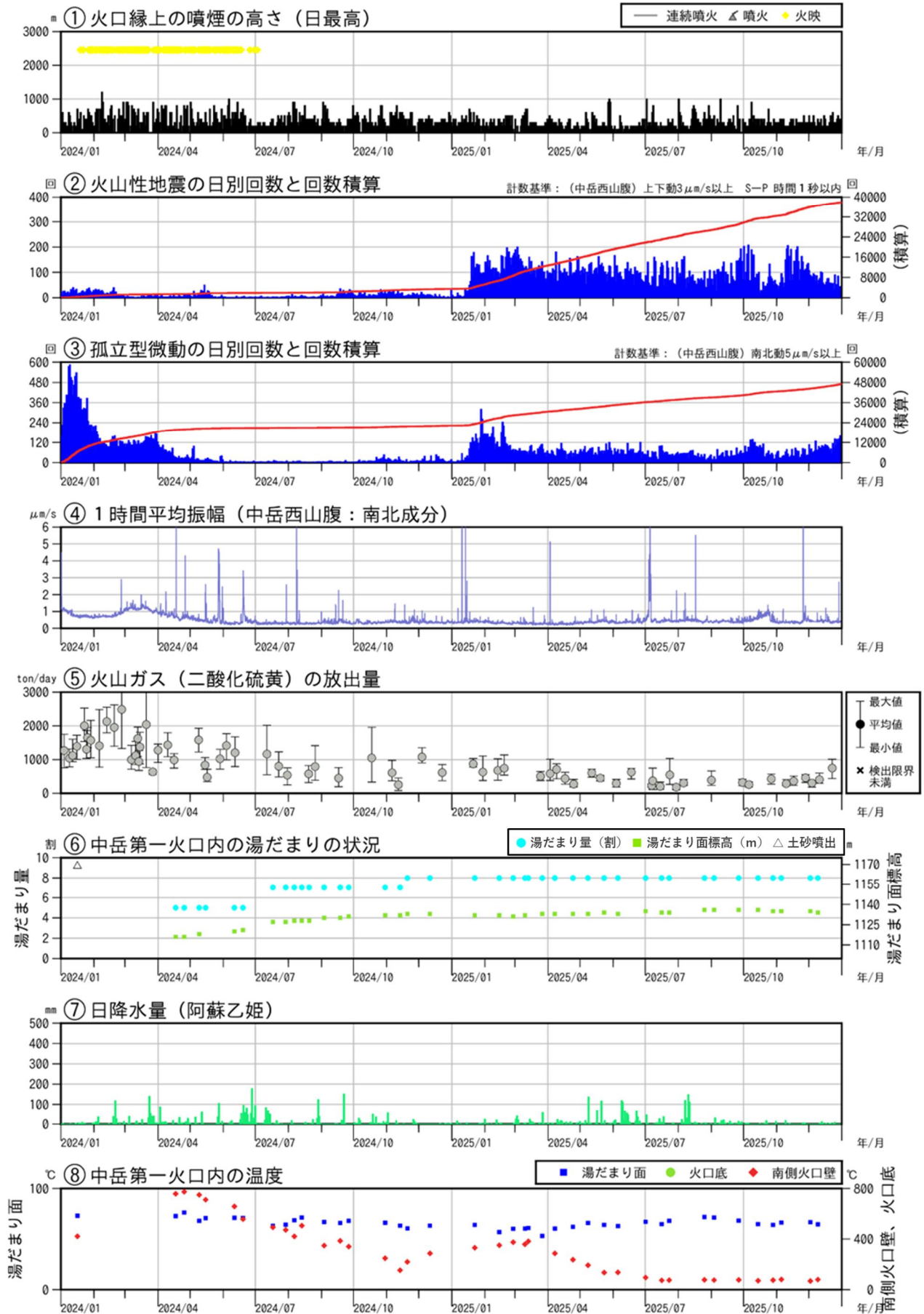


図3 (前ページ) 阿蘇山 火山活動経過図(2024年1月～2025年12月)

<2025年の状況>

- ・白色の噴煙は最高で火口縁上1,000mまで上がりました。
- ・火山性地震は概ね多い状態で経過しました。孤立型微動はやや少ない状態で経過しました。1月中旬頃から火山性地震と孤立型微動が増加した状態が続いています
- ・7月4日から7月6日にかけて火山性微動の振幅が一時的に増大し、大きな状態になりましたが、その他の期間は概ね小さな状態で経過しました。
- ・火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は、1日あたり1,000トン未満と少ない状態で経過しました。
- ・湯だまり量は2024年11月に約8割となり、その後特段の変化はみられていません。
- ・湯だまりの表面温度は53～72℃で経過しました。南側火口壁の地熱域では4月頃から最高温度が低下し、7月以降は100℃未満となりました。最高温度は69～383℃でした。

②と③の赤線は回数の積算を示しています。⑤、⑥および⑧は現地調査の結果を示しています。

⑥の湯だまり量及び湯だまり面標高は、火口縁からの観測で確認しています。湯だまり量は、量を確認できた場合のみ表示し、1割に満たない場合は0割としています。

⑦はアメダス阿蘇乙姫(中岳第一火口より北西約8km)の観測値です。

⑧は赤外熱映像装置で計測しています。火口底温度は湯だまり表面と南側火口壁を除く火口内の温度を示しています。

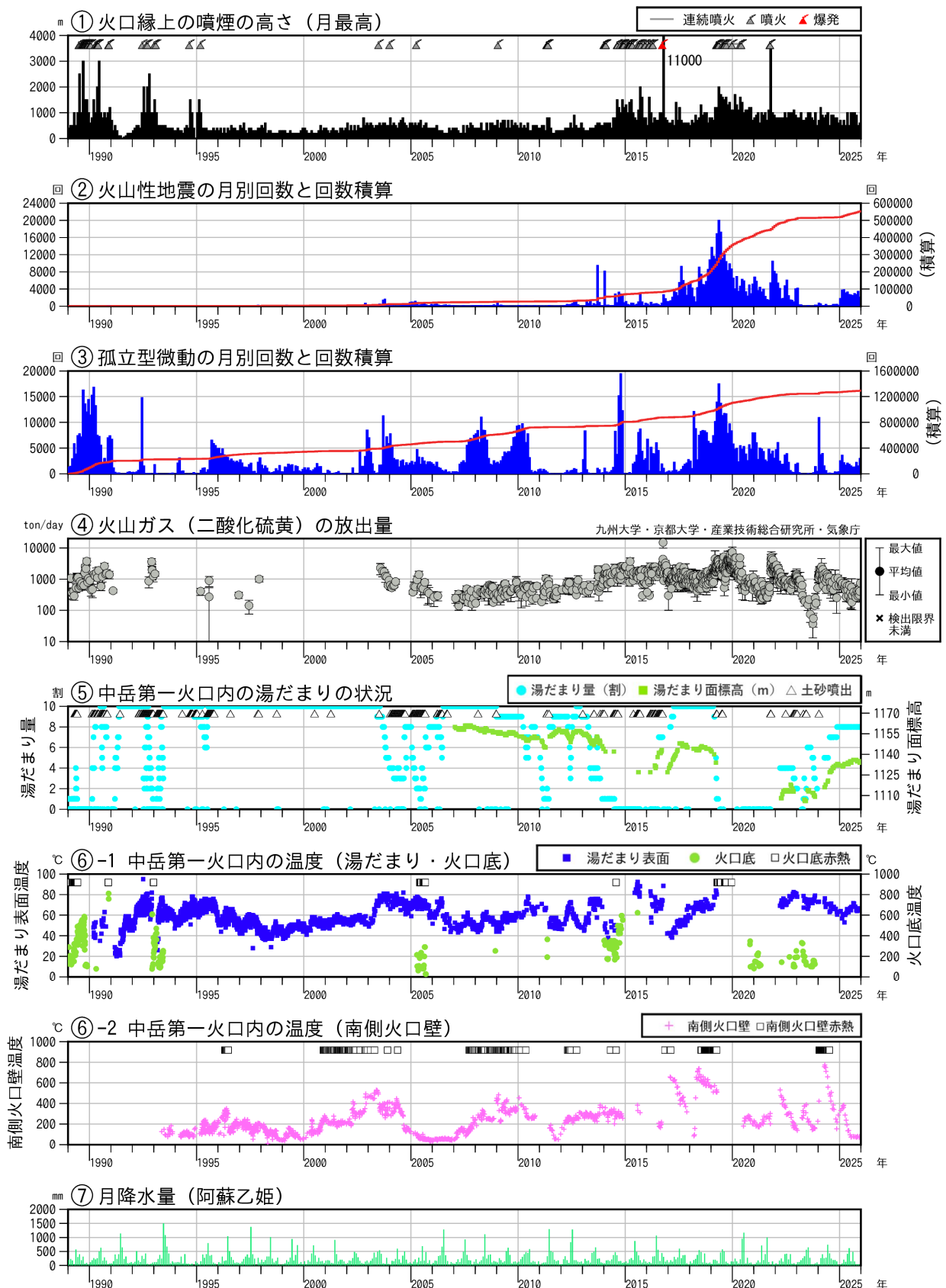


図4 阿蘇山 火山活動経過図（1989年1月～2025年12月）

②と③の計数に用いる震動波形を2002年3月1日に変位波形から速度波形に変更しています。

②と③の赤線は回数の積算を示しています。

⑤の湯だまり量は、量を確認できた場合のみ表示し、1割に満たない場合もしくは不明の場合は0割としています。

⑥の湯だまり温度等は赤外放射温度計で計測していましたが、2015年6月から赤外熱映像装置により計測しています。

⑦はアメダス阿蘇乙姫（中岳第一火口より北西約8km）の観測値です。

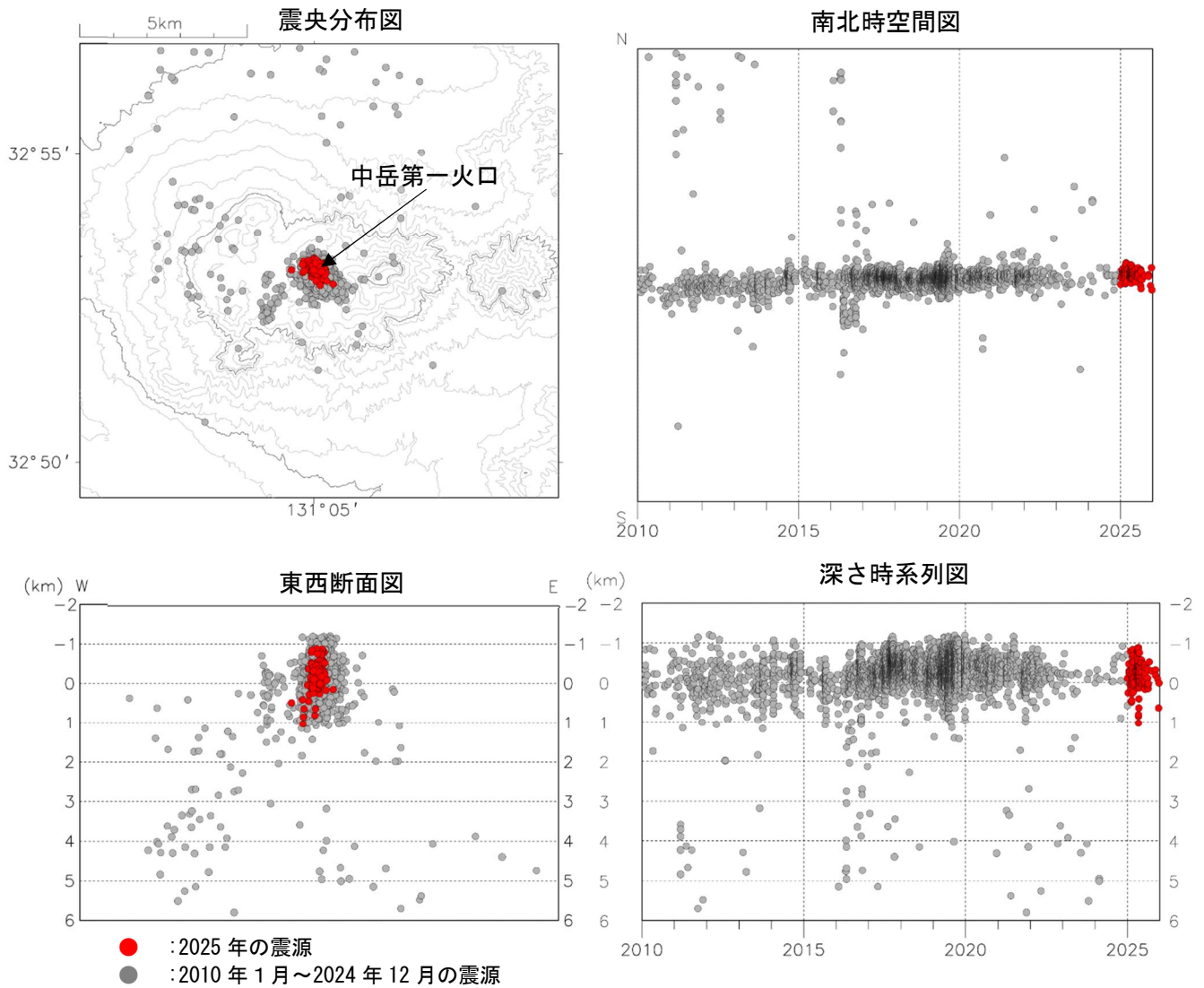


図5 阿蘇山 火山性地震の震源分布図（2010年1月～2025年12月）

<2025年の状況>

震源が求まった火山性地震は、中岳火口付近のごく浅いところから深さ1km付近に分布しました。

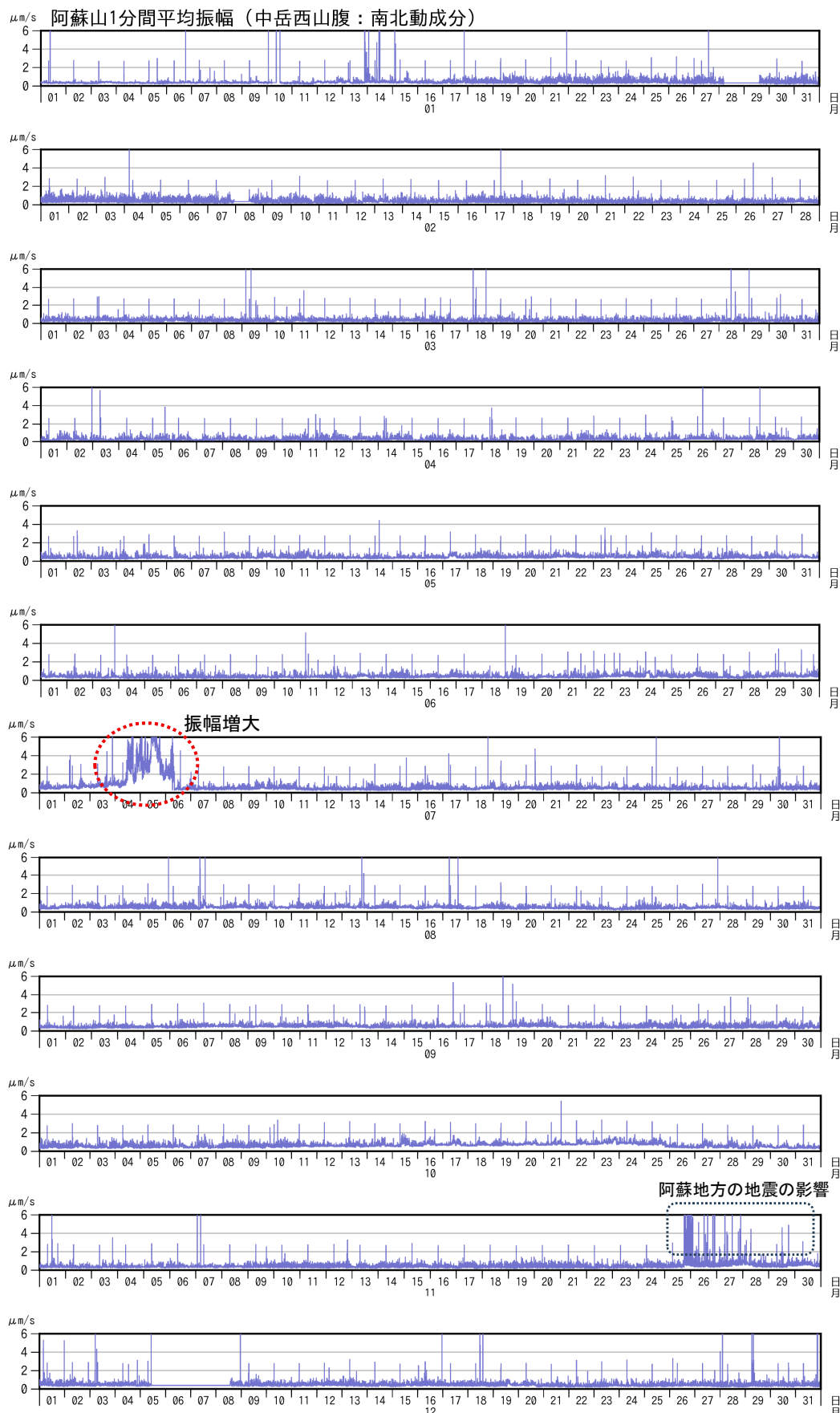


図6 阿蘇山 火山性微動の振幅の時間変化
(中岳西山腹観測点南北動成分の1分間平均振幅、2025年1月～12月)

7月4日から7月6日にかけて火山性微動の振幅が一時的に増大し、大きな状態になりましたが、その他の期間は概ね小さな状態で経過しました。

※毎日 07 時頃にみられるパルスは、地震計の試験のための信号です。
 ※11 月下旬の短期的な振幅の増大は熊本県阿蘇地方の地震の影響です。
 ※図の空白部分はデータの欠測を示しています。

阿蘇山

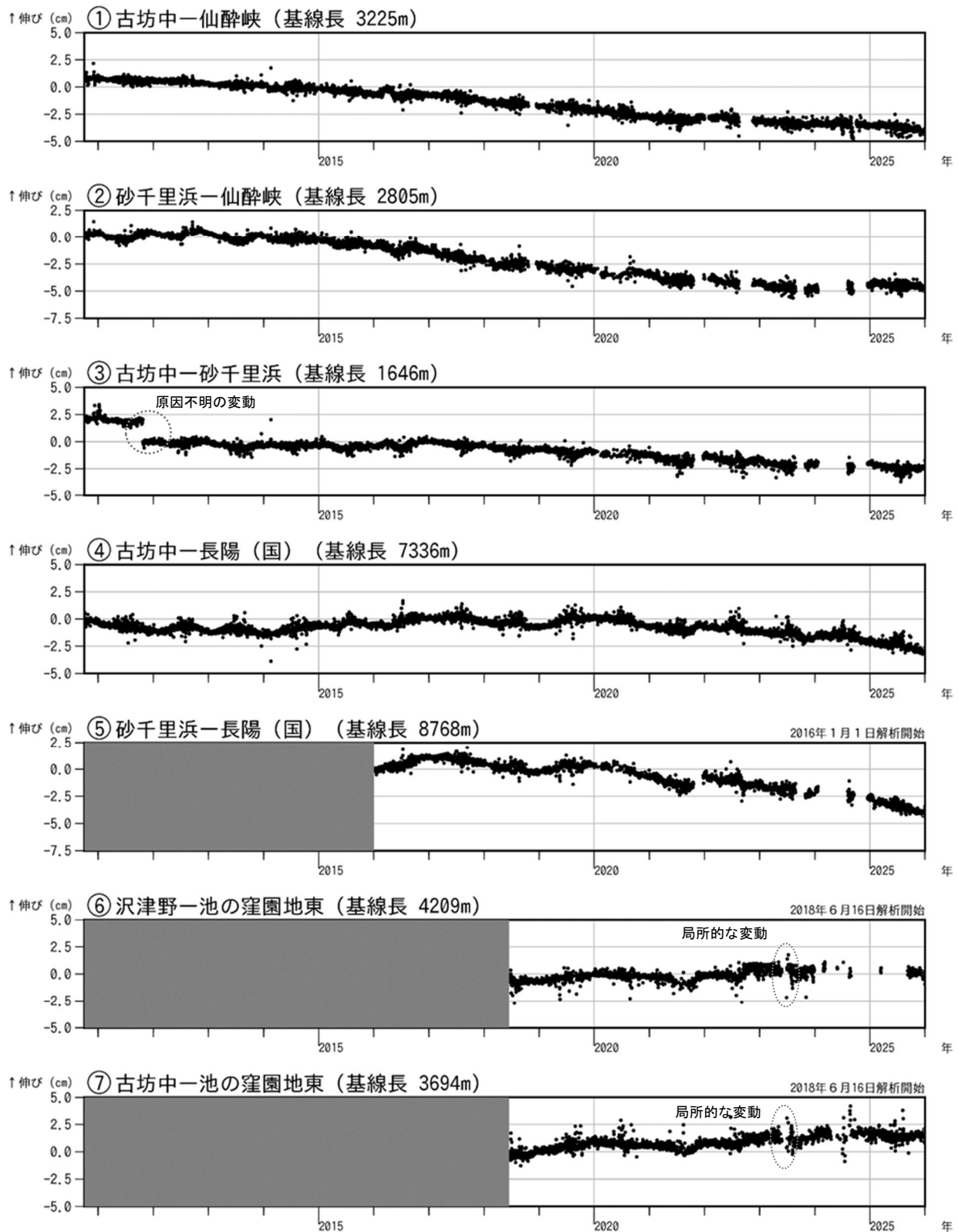


図7 阿蘇山 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010年10月～2025年12月)

GNSS 連続観測では、深部にマグマだまりがあると考えられている草千里を挟む基線において、2024年10月頃から縮みの傾向がみられています。

これらの基線は図8の①～⑦に対応しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年4月16日以降の基線長は、平成28年(2016年)熊本地震の影響による変動が大きかったため、この地震に伴うステップを補正しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

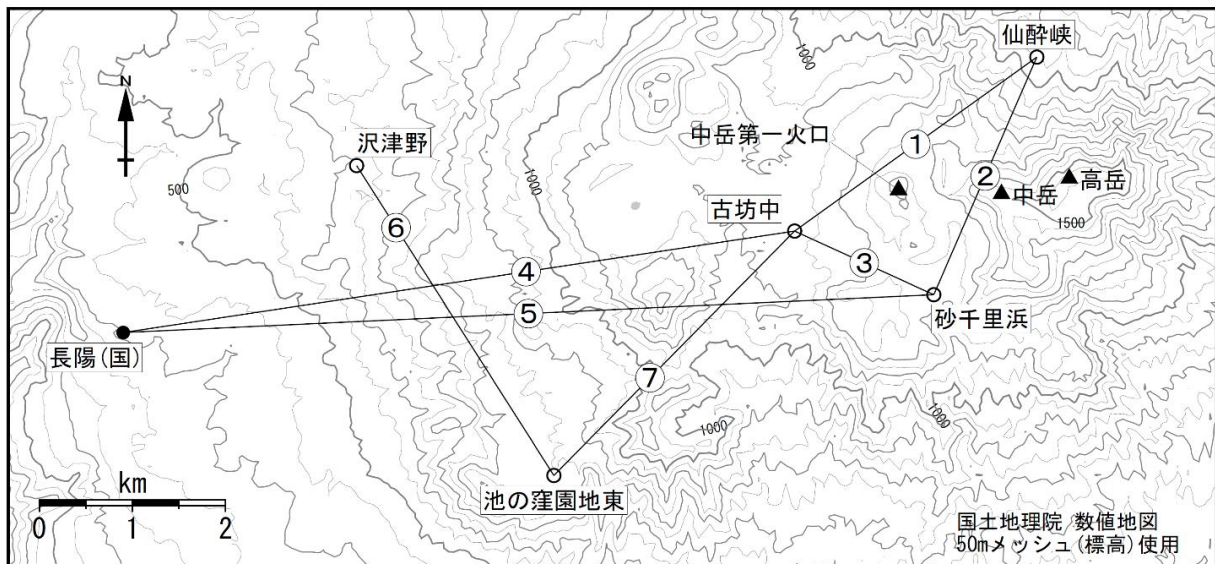


図8 阿蘇山 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所



図9-1 阿蘇山 南阿蘇村吉岡の噴気地帯の状況（噴気地帯を南東側から撮影）

繰り返し実施した現地調査では、噴気地帯の状況に特段の変化はありませんでした。

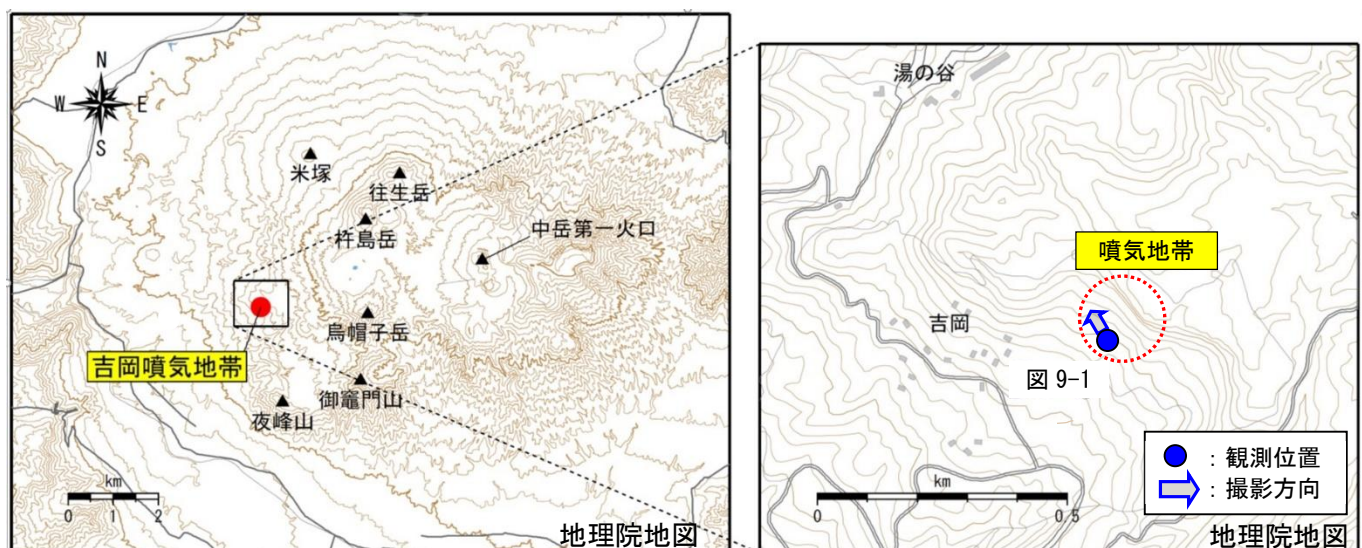


図9-2 阿蘇山 南阿蘇村吉岡の噴気地帯の位置図

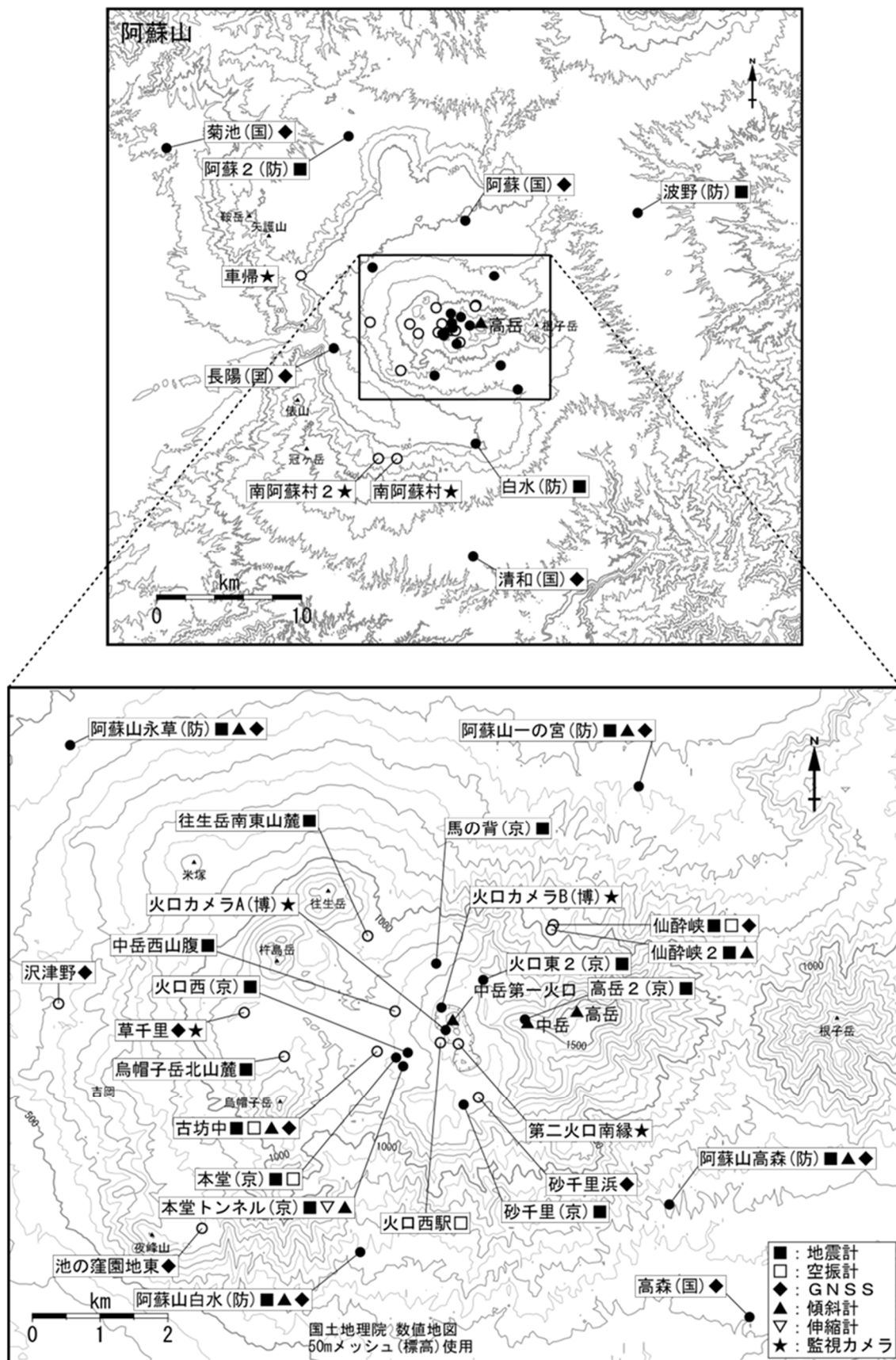


図10 阿蘇山 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (京) : 京都大学、(防) : 防災科学技術研究所、(博) : 阿蘇火山博物館、(国) : 国土地理院

表1 阿蘇山 気象庁（火山）観測点一覧（緯度・経度は世界測地系）

測器種類	観測点名	位置			設置高 (m)	観測開始日	備 考
		緯度 (° ')	経度 (° ')	標高 (m)			
地震計	古坊中	32° 52.83′	131° 04.40′	1,143	-90	1992.4	
	古坊中	32° 52.82′	131° 04.41′	1,143	0	2014.4.1	広帯域地震計
	中岳西山腹	32° 53.15′	131° 04.57′	1,163	-1	1965.1.1	
	烏帽子岳北山麓	32° 52.79′	131° 03.52′	1,157	-3	1965.1.1	
	往生岳南東山麓	32° 53.75′	131° 04.31′	1,020	-2	1965.1.1	
	仙酔峡	32° 53.85′	131° 06.07′	956	-3	1982.1.1	
	仙酔峡2	32° 53.79′	131° 06.05′	977	-3	2016.4.19	
空振計	古坊中	32° 52.82′	131° 04.41′	1,143	2	1996.3.1	
	仙酔峡	32° 53.85′	131° 06.07′	956	2	2001.3.1	
	火口西駅	32° 52.90′	131° 05.00′	1,262	12	2001.3.1	
GNSS	草千里	32° 53.14′	131° 03.14′	1,140	12	2001.3.15	
	古坊中	32° 52.82′	131° 04.40′	1,143	3	2010.10.1	
	砂千里浜	32° 52.47′	131° 05.36′	1,250	2	2001.3.15	
	仙酔峡	32° 53.85′	131° 06.07′	956	2	2001.3.15	
	沢津野	32° 53.38′	131° 01.39′	648	1.5	2018.6.1	臨時観測点
	池の窪園地東	32° 51.42′	131° 02.74′	848	1.5	2018.6.16	臨時観測点
傾斜計	古坊中	32° 52.82′	131° 04.40′	1,143	-90	2001.3	
	仙酔峡2	32° 53.79′	131° 06.05′	977	-10	2016.12.1	
監視カメラ	草千里	32° 53.13′	131° 03.14′	1,140	12	2001.3.1	
	南阿蘇村※	32° 48.12′	131° 02.57′	597	1	2017.2.3	臨時観測点
	南阿蘇村2※	32° 48.13′	131° 01.75′	646	1	2025.10.23	臨時観測点
	第二火口南縁	32° 52.90′	131° 05.20′	1,261	2	2016.12.1	熱映像カメラ
	車帰	32° 54.97′	130° 58.32′	551	7	2019.11.1	

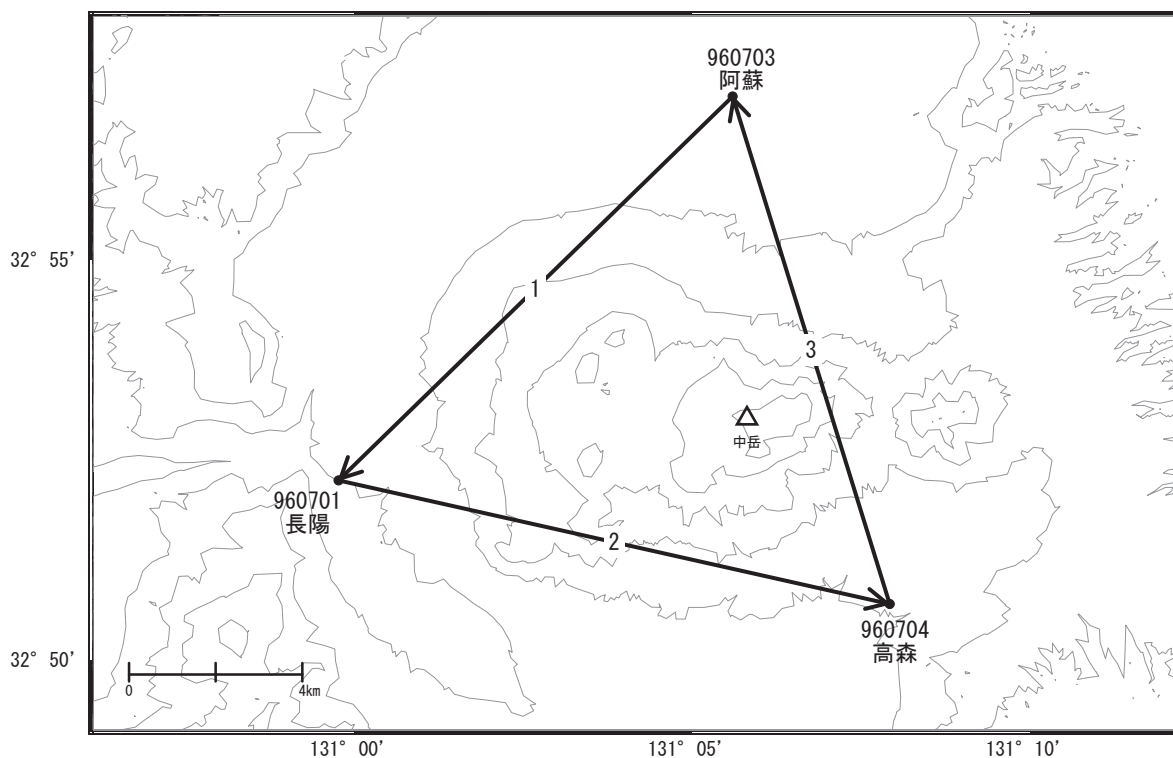
※監視カメラの移設により、「南阿蘇村」での観測を2025年10月22日に終了し、「南阿蘇村2」での観測を2025年10月23日から開始しました。

阿蘇山周辺の地殻変動

—GEONET(電子基準点等)による連続観測結果—

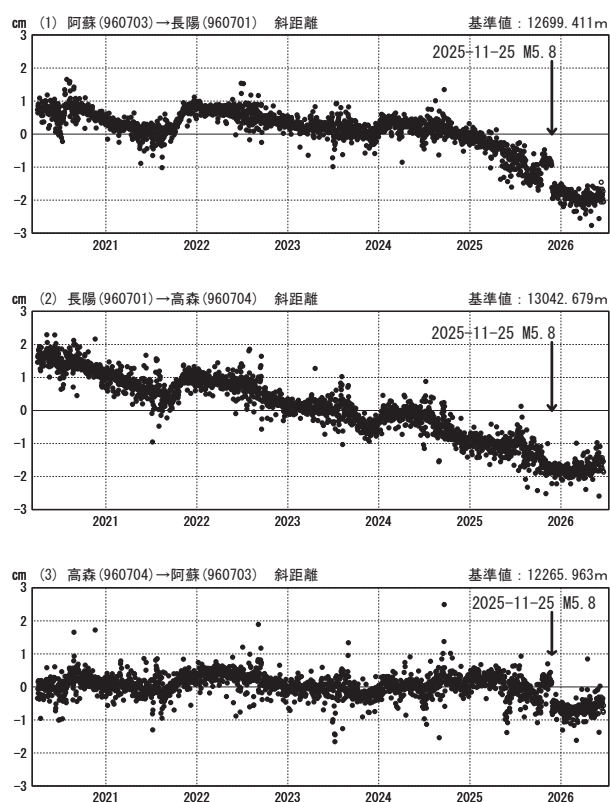
「長陽」—「高森」等の基線で2026年5月頃からわずかな伸びが見られます。

阿蘇山周辺 GNSS連続観測基線図



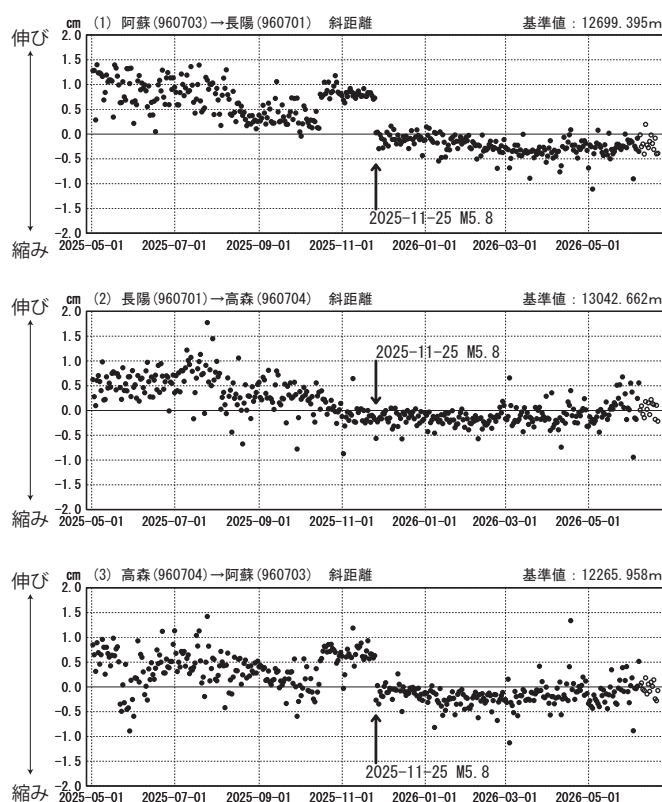
基線変化グラフ

期間：2020-04-01～2026-06-20 JST



基線変化グラフ

期間：2025-05-01～2026-06-20 JST

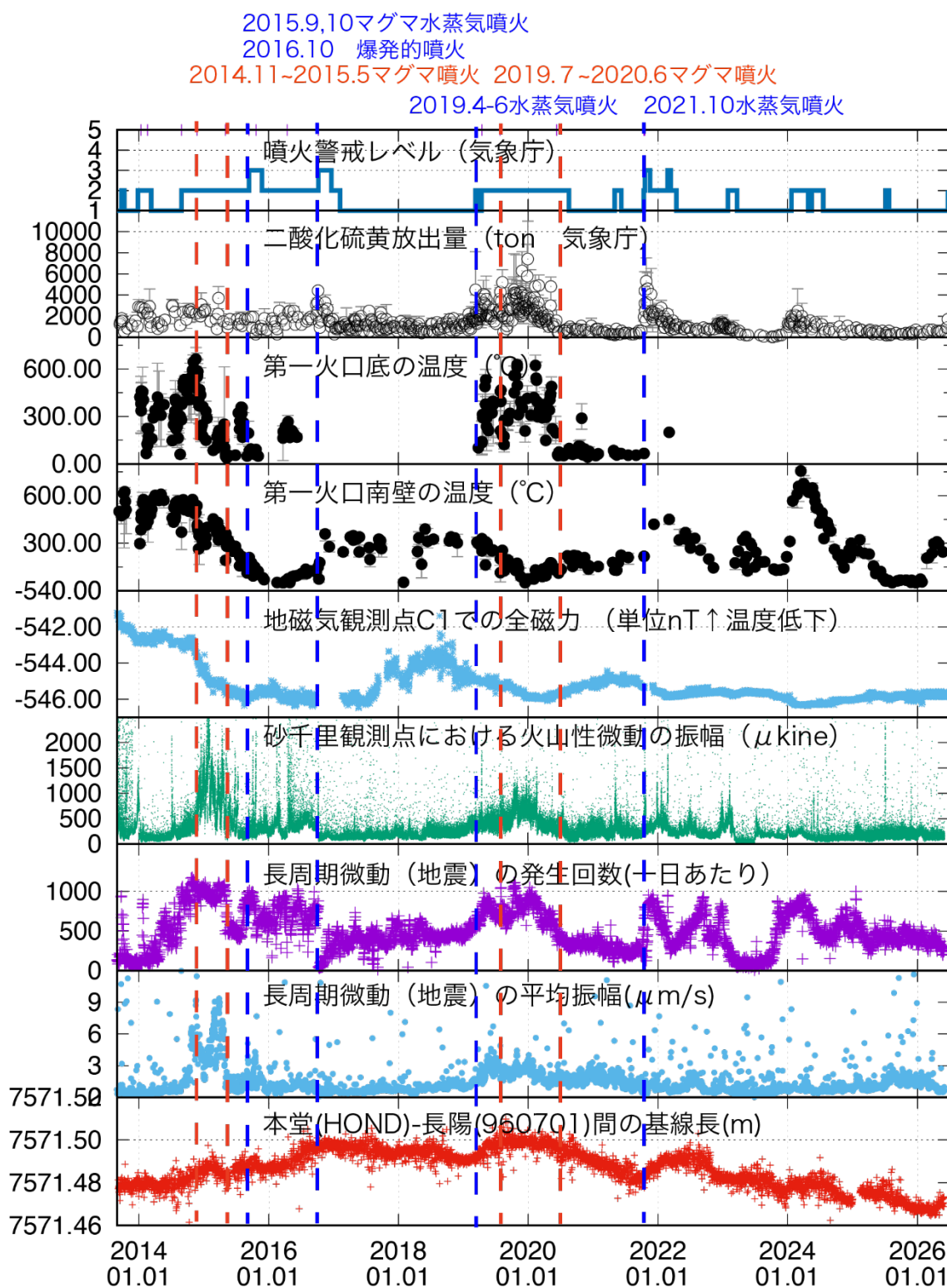


●—[F5.1:最終解] ○—[R5.1:速報解]

国土地理院

阿蘇山

阿蘇山の火山活動状況



※全磁力観測結果は6/19まで、第一火口南壁の温度は6/22まで、それ以外は6/21までのデータを使用。